

悟空は無邪気な冒険者

かもめし

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幻想と真実がサイコロを振り、駒の定めを決める世界。

そこに興味を示した絶対存在・全王は、自分たちもそのサイコロ遊びへ参加する。

まだ幼くて小さな、力の未成熟な頃の親友・孫悟空を駒として……。

※本作は、ゴブリンスレイヤーの原作世界に悟空が乱入したら……という設定となります。

つきましては、原作の事件に悟空が関わることになり、未読の方にはネタバレとなる部分があります。ご了承ください。

目次

プロローグ

絶対神の乱入

辺境の街の冒険者たち編

初陣

間章 サイコロ遊び

万能者

山砦突撃

間章 昇級面接録

其の一

其の二

其の三

其の四

其の五

其の六

其の一

其の二

其の三

其の四

天下分け目の真相

其の一

其の二

其の三

其の四

其の五

1

4

44

46

66

87

89

92

96

100

103

107

112

116

120

125

130

133

138

142

146

151

水の街編

其の一

其の二

其の三

其の一

其の二

其の三

其の四

其の五

其の六

武の天を目指す者

其の一

其の二

其の三

其の四

其の五

其の六

其の一

其の二

其の三

其の四

とある神様の憂鬱

其の一

其の二

収穫祭天下一武道会編

242

238

236

231

227

223

219

214

211

207

203

199

194

191

187

183

179

175

171

166

163

159

155

収穫祭特別企画立案書

其の一

其の二

其の三

『彼』か『あの子』か 『デート』か『司会』か

其の一

其の二

其の三

其の四

其の五

其の一

其の二

其の三

其の四

其の一

其の二

其の三

其の四

其の五

其の六

横槍、再び

其の一

其の二

其の三

十一番目の物語

其の四	462
其の三	458
其の二	454
其の一	449
いっぽうそのころ	445
其の六	439
其の五	434
其の四	428
其の三	422
其の二	418
其の一	414
其の三	410
其の二	406
其の一	402
旅の空でのお話	399
其の九	393
其の八	388
其の七	382
其の六	376
其の五	371
其の四	366
其の三	361
其の二	355
其の一	349

北方の砦編

彼が気が付いてしまった時のおはなし	466
其の一	469
其の二	473
其の三	477
さる技術者の書きなぐり	481
暴猿	483
夜が明けて	493
冒険者の流儀 く黒曜級冒険者・孫悟空く	
奇妙な一党	502
巨人	512
先生の名は「ソングクウ」	527
先生の名は「ソングクウ」	531
先生の名は「ソングクウ」	536
其の二	
其の三	

プロローグ 絶対神の乱入

この世界の頂点には、全王ぜんおうと呼ばれる、唯一絶対の存在がいる。彼の権限は、創造神や対となる破壊神の及ぶところではなく、気に障るようなことがあれば、「宇宙そのもの」を片手で簡単に消せるほどの、恐ろしいものであった。

そんな全王たちが住み暮らしているのは、全部で十二ある宇宙の中心に位置する、「全」の文字を模った宮殿である。

この、なんとも分かりやすい宮殿において、全王は日夜、退屈を消費していた。

「暇だね」
「だね」

宮殿内の中央。一面がガラス張りで出来た床の上で、仰向けに寝転がる二つの小さな影がある。

三頭身の、丸みを帯びた見た目。

ともすると可愛らしく見えるその者こそが、何を隠そう全王であった。

異なことに、世界の頂点に立つ全王は一人ではなく、二人いる。

これは、双子やそっくりさんというわけではない。

一方は、潔癖すぎる正義に酔いしれた愚か者がそもそもの原因となって消滅した「別の時間軸」から連れてこられた全王なのである。つまるところ同一人物というわけだ。

「ねえ」

片方の……これは元の時間軸の全王が、別時間の全王へ向き直り、その丸っこい瞳に輝きを満たしながら話しかけた。

「なあに」

「あのね。第四宇宙の界王神から聞いたんだけどね」

「うん」

「第四宇宙にはね、サイコロで運命を決めてる神がいるんだって」

「うわあ、なにそれ。面白そう」

「でしょ？ だからね、僕たちも混ぜてもらえるようにしてもらったの。でもね。それには駒もいるんだって」

「駒？」

「人間を一人、その世界にやらなくちやいけないんだって」

「誰にしよう？」

「悟空にしよう！」

二人の全王が、別時間軸の己を除いて唯一の友達と呼べる人間の名を口にした時、

「ですが、全王様。件の神が支配する世界において、現段階の孫悟空を放り込んで、あまり面白くはならないかと」

会話を割り込んでくる者が。

全王よりは背丈の高い、しかしそれでも少年のように小柄な男であつた。

青白い肌をした男は、大神官。

全王の側近とも呼べる存在と同時に、十二の宇宙にそれぞれいる天使たちの父親。そして、全王というなんでもありを除けば世界最強の実力を持つ者だ。

二人の全王は、大神官の姿を認めると、

「えー」

「なんでー」

外見に違わず、子供のような抗議の声を上げる。

これを、穏やかな笑みを浮かべた大神官は、

「今の孫悟空は、破壊神より一步劣るとはいえ、神々の領域に踏み込んだ力を持っています。そんな存在が一介の世界に踏み込めば、いとも簡単に流れを持って行ってしまおうでしょう」

と告げる。

「それじゃ面白くないね」

「ね」

表情こそ変えぬが、どこか不満げに頷き合う全王。

すると大神官が、やはりにこやかな表情のまま、

「でしたら、程よい時期の孫悟空を駒としましょうか」

『ほどよい?』

重なる全王の声。

頷いた大神官は、

「聞けば、件の世界では特別な能力を使えこそすれ、回数に制限があるとか。ならばこちらも、まだ力のコントロールが未熟な時期の孫悟空を派遣なされてはいかがでしょう」

これを聞いた全王は、一にも二にもなく、

「そうしよう」

「やって、やって!」

と、はしゃぐ。

「承知しました。しばしお待ちを。ただいま、時の界王神から写しを貰ってます」

そう告げた時、大神官は姿を消した。

二人の全王は顔を見合わせ、

「悟空、どうなるのかなあ」

「かな、かなあ」

かの友人が、異の世界でどのような活躍を果たすのか。そのことに胸を膨らませるのであった。

辺境の街の冒険者たち編 初陣

一

この世は賽子さいしころのごとく四方なり、とは誰が言ったものか。

そんな四方世界は辺境の、とある開拓街における出来事である。

春先。様々な出で立ちをした、様々な種の人々が行き交う街の入り口で、一人の娘が不安げに辺りを見回していた。

彼女は、街の近くにある、地母神を祀った神殿から出てきた神官であつた。

歳は十五。只人社会ヒュームではこれより先を成人として扱う。

そんな彼女は、成人を迎えた暁に、今後の人生についての選択を迫られた。

このままで神に人生のすべてを捧げるか。それとも外の世界で逞しく生き延びるか。

彼女が選んだ道は後者のものであり、そうするために、

(冒険者になろう……！)

この決意を固めたのである。

冒険者。古来より、怪物どもとの戦いにおける戦力の一つ。

国の兵士と違い、彼らは誰かの下に仕えているというわけではない。

自由気ままに世界各地を旅し、依頼者からの依頼を請けて化け物たちを一戦交えたり、はたまた自ら迷宮ダンジョンに潜って金銀財宝を探し当てたり。とまあ、そうして稼ぎを得ている集団なのである。

自由気まま……と言えば聞こえはいいが、その実はただの武装した無頼漢。放っておけば、街で暴れたり、力に物を言わせて庶民を脅したりなどしかねない。

そこで出番となるのが、冒険者ギルドと呼ばれる組織であった。彼らは庶民たちからの依頼を引き受け、それを冒険者たちへと紹介する……いわば仲介人の役割を持っている。

しかし彼らの真の役目は、そうして冒険者たちを管理・統制すること、必要最低限の社会的信頼を彼らへ与えてやることであった。して……。

そんな冒険者ギルドは世界各地に支部を置いているわけだが、共通して街の入り口近くに門を構えている。他方から来る者も、一目で分かるようにするためだ。

この辺境の街だとて、それは例外ではない。

街門を潜り抜けてすぐにある、冒険者ギルドの支部を見た女神官は、思わず感嘆のため息を吐いた。

これまで彼女が住み暮らしてきた神殿もかなりの大きさを誇っていたのだが、冒険者ギルドはそれをさらに少しばかり上回っていたのである。

しばしの間、感動のあまりその場に立ち尽くしていた女神官であったが、やがてギルド入り口の自由扉から、武装した男女の混成集団が出てきたのを見て、

「これから、わたしも……！」

手にした錫杖をしっかりと握りしめ、一步を踏み出した。

と、その時である。

どさり。

背後から、何かが地面に落ちるような音がして、彼女は素早く振り向いた。

見るとそこには、紫色の装束をまとった小柄な只人が地面へ倒れ伏している姿が見えた。

慈悲深い地母神に仕える女神官は、迷わず小柄な只人に駆け寄ると、

「だ、大丈夫ですか……？」

抱き起しつつ、声をかけた。

只人は、少年である。四方八方に伸びきった、奇妙な髪型をしていた。

「め……」

少年の、震える声である。

「め？」

女神官が聞き返すと、

「メシ……腹へった……」

と返事が来たと同時に、まるで竜のおくびのような腹の音が鳴り響いたものである。

これを聞きつけ、なんだなんだと周囲の人々が集りを作り始めた。すると、その中から、

「ちよつとごめんよー！」

快活な声がしたかと思うと、

「わあお。行き倒れってやつだ」

そう言つて女神官たちの前に出てきたのは、只人の姿に獣の耳と手足を足した……いわゆる獣^{パットフット}人の女性であった。

まるでドレスのような給仕服を着こなした彼女は、どこかの飲食店の女給であろうか。

果たして獣人の女給は、未だ腹を鳴らしている少年を見てにんまりと笑うや、

「そら！ 野次馬は散った散った！」

威勢よく周囲の人々を追い払った後で、

「ほら。こっちおいで」

軽々と少年を抱きかかえると、女神官へとウイंकを一つしてみせ、そのままギルド庁舎の裏手へと消えていった。

「……？」

訳の分からぬ女神官であったが、ついてこい、と言われたのを無視するわけにもいかない。そもそも、連れていかれてしまった少年の事も気にかかる。

「……！」

手にした錫杖を再び強く握りしめた彼女は、そのままとてとてと女給の後を追いかけた。

二

「うめえ！」

先ほどの、行き倒れていた少年の声なのである。

ここは、冒険者ギルド内に併設されている酒場で、その中にある従業員たちの休憩室だ。

あれから、獣人の女給は少年と女神官とをここへ引きつれると、

「ちよつと待っててね」

そう声をかけて暫くの後、

「んしょ、つと」

寸胴鍋を一つ、持ってきたのである。

中には、多種の野菜と細切れにしたベーコンとを煮込んだスープが、並々と入っていた。

温かな湯気とともに、食欲を誘う匂いが部屋の中に充満する。

それにつられて、女神官が「くう」と腹の音を鳴らしたのと、

「メシのニオイだー！」

それまで死人のような顔つきだった少年が、勢いよく顔を上げたのが殆ど同時であった。

「よっぽどお腹空いてたんだねえ。ま、行き倒れになってたんだから当たり前か」

女給はそう言って、慣れた手つきで皿にスープをよそり、これを少年と女神官に差し出す。

女神官が、そこは今まで神に仕える生活を送っていただけに、食事を与えてくれた神へと祈りを捧げている間、少年は大口を開けてスープを一気に飲み干してしまうと、

「おかわりー！」

元気よく、女給へと空になった皿を差し出したものであった。

それからものの数分で、少年は鍋に入ったスープを半分ほど食らっ

てしまっていた。

この様子を見ていた女神官の顔が、見る見るうちに青ざめていく。多少であれば、少年の食事代を肩代わりできるだけの持ち合わせはあったのだが、このままでは自分の食費を削ったとしても、とても代金を立て替えるほどの余裕はないように思えたからだ。

そんな彼女の心中を察したのか、

「ああ、いいよ。お金の心配なら」

女給が、けらけらと笑いながらそう言ったものである。

「へ……う？」

「いやあ、実はさ。このスープ、うちの新品としてあたしが作ってみたんだけど……おっちゃん……じゃないや。料理長から駄目だしくらっちゃってさ。捨てるわけにもいかないし、かといってお客に出してお金とるわけにもいかないし、どうしたもんかと思ってたんだよね」

「はあ……」

「だからさ。こうして、お金に余裕なさそうな駆け出しの冒険者さんたちに無料で配給して、お店の宣伝を兼ねた慈善事業してるわけ」
「……あ、あの……ごめんなさい。わたし、まだ冒険者じゃ……」

ただの武装した無頼漢が社会の信頼を売るためには、ギルドで冒険者になるための「登録」を行わなければならない。だからこそ、女神官はこうして辺境の街の冒険者ギルドへと足を運んだのである。

しかし、そのことも女給にとっては織り込み済みだったらしく、

「わかってる、わかってる！　これから冒険者の登録をするところなんでしょ？　服装見れば、だいたいわかるよ」

と豪快に笑ってみせたものだ。

するとここで、今まで飯をくらっているだけであった少年が、

「なあ。そのボウケンシヤってなんだ？」

首を傾げつつ、そんなことを聞いてきた。

これには、さすがに女給も目を見開き、

「君も、冒険者になりたいからこの街に来たんじやないの？」

と問うた。

少年は依然としてきよとんとしたまま、

「オラ、べつにそんなんじやねえ。修業の旅したら、いきなし変な森にいて、そつから歩いてたらここにきてたんだ」

などという。

「修業の旅って……お坊さんかなにか？」

と女給。すると少年は首を振って、

「オラ、武道やってんだ」

「ってことは、武道家？」

女給が問いかけるのへ、

「たぶんそうだ」

少年は曖昧な返事を送る。

「なんだそりゃ」

そのいい加減とも思える態度に、少しばかり肩の力が抜けた女給であつたが、やがて思い直したらしく、

「でもさ。だつたらなおさら冒険者登録した方がいいんじゃない？」

君みたいに修業目的で冒険者になつてる人、結構いるよ？」

「ボウケンシヤつてのやつてると、修業になんのか？」

「なるんじゃないかな？ 初めのうちは無理だけど、実績あげていけ

ば、ドラゴン竜だつたり悪魔だつたりを相手にする依頼も請けられるし」

「ふうん……」

普通、少年ほどの年頃であれば、竜だつたり悪魔だつたりを打ち倒す勇者や冒険者の物語に夢中なはずであるのだが、どうにも彼はそういう類の話に興味がないらしい。

そればかりか、

「アクマつてやつなら、オラこのあいだぶつとばしたばつかだもんな」

などと、さもつまらなそうに言ったものである。

女給も女神官も、言葉を詰まらせた。

少年の態度に、誇張であつたり法螺を吹いている様子が一切感じられないのが、なおさらに質の悪いことである。

二人が驚いている間にも、

「でもなあ」

少年は腕を組んで思案し始め、

「亀仙人のじいちゃんは、広い世界をみてこい、っていつてたしなあ」

などと独り言ち、やがては、

「あいつがたいしたこともなかつただけで、もつとすげえやつがいるかもしれないねえし……」

そういうと、何やら一人で頷いたものである。

かくして最終的に少年が下した結論は、

「じゃ、オラそのボウケンシャってやつになつてみる」

であつた。

三

女給に見送られた女神官と少年の二人は、施設の中でもとりわけ人の群れが出来ている箇所へと赴いていた。

右を見れば、とんがり帽子に櫛の杖を持った森人の魔法使いが。

左を見れば、背中に戦斧を背負つた鋤人が。

その他にも、鈍色の鎧を着こんだ蜥蜴人や、軽装に素足という出で立ちの圃人。もちろん、武装した只人の姿もある。

こここそが、冒険者の拠点。ギルドの受付ロビーなのである。

「へえ。いろんなやつがいるんだな」

多種多様な人種を、少年は物珍しげに見まわしている。

女神官はというと、そんな少年の隣に立ち、がちがちと身を強張らせていた。

いざ冒険者になると決意したはいいものの、歴戦の重みを感じさせる先輩たちの姿を見ると、委縮してしまうのは当然のことといえよう。

そんな女神官の腕をつかんだ少年は、

「なあ。はやくすましちまおうぜ」

そういうや、受付カウンターから伸びる長蛇の列へと歩み寄っていった。

列は、三つあった。

女神官と少年は、それぞれ別の列に並び、順番を待つことにした。その間、女神官は他の冒険者たちが語る冒険譚に耳を傾けていた。やれ、峠のマンティコアがどうか。洞穴に潜む竜の討伐云々。下級の悪魔相手ならばどうとでもなる……とかなんとか。

未知の領域の話に、またしても女神官は驚いたが、それでも冒険者になりたいという気持ちに揺らぎはなかった。

神殿での生活の中、癒しの奇跡を求める冒険者の姿を、女神官は毎日のように見てきた。

彼らの傷ついた姿を見ているうちに、

(より多くの人へ、癒しの奇跡を届けたい……)

女神官はそう思うようになった。

しかし、そのためには自ら危険の中へと飛び込む必要がある。

なればこそ彼女は、周囲の人々が止めるのも聞かず、冒険者として生きる道を選んだのである。

そんなことを振り返っていると、いつの間にか女神官の番が来ていた。

「はい。今日はどうなさいましたか？」

彼女の応対に出たのは、柔らかな笑みを浮かべた女性であった。

ギルド職員共通の制服をきちんと着こなし、茶色がかった髪は三つ編みにして垂らしている。

眩しいほどに大人びた雰囲気を持つ受付の女性へ、少しの間、後退りしそうになった女神官ではあったが、

「あ、あの……冒険者に、なりたいんですけど……」

恐る恐るではあるが、しつかりと目的を告げることが出来た。

すると、一瞬ではあるが、受付嬢の顔が空間に張り付いたのを、女神官は確かに見た。

しかし、直後に彼女は営業的な笑顔を浮かべると、

「それでしたら、アドベンチャーシート冒険記録用紙を製作いたしますね。文字の読み書きはできますか？」

「は、はい。神殿で多少は習いましたので……」

「わかりました。では、こちらの用紙にご記入をお願いします」

そういつて受付嬢が差し出してきたのは、薄茶色の羊皮紙。そこに、名前やら年齢やら、その他には身体的特徴や己が有している技量などを記入する欄が設けられている。

(これだけでいいのかしら……?)

女神官は、なんだか拍子抜けのする思いであった。

そこで余裕が生じたからか。女神官はちらと隣の列へ目を移した。

そこでは今しも、例の少年がやはり冒険者登録をしているところであつた。

彼の対応に出ているのも、やはり女性の職員であつた。その首には、天秤と剣とを組み合わせた装飾品がさげられている。

(あれは……至高神の聖印……?)

至高神。それは、法と正義を司る神である。

女性職員は、時折その聖印をなでるように触っては、鋭い目つきで少年を見据えている。

(まさか……何かやましいところが……?)

そう思うと、何故か我が事のようにそわそわとしだした女神官ではあつたが、

「記入は終わりましたか?」

目の前の受付嬢の言葉を受けて、はつとなつた。

我ながら感心すること、他の事に注意を向けつつも、女神官はきつちりと冒険記録用紙への記載を終えていた。

これを受け取った受付嬢は、カウンターの下から白磁の板を取り出すと、これへ銀色の尖筆を滑らせた。

それが終わると、

「はい。どうぞ」

受付嬢は、小板に紐を通したものを、女神官へと差し出した。

見てみると、その小板には先ほど冒険記録用紙に書いた内容がそのまま記載されている。

「身分証と能力査定兼ねたものになっていきますので、無くさないようにしてくださいね。万が一に何かあつたときは、身元照会にも必要になりますから……」

そこまで言つて、再び受付嬢の顔に陰りが表れる。

一瞬、その言葉が何を意味するか分からなかつた女神官であつたが、

(万が一……身元の照会……)

その言葉をかみ砕いてみて、ようやくに合点がいった。

すなわち、この小板は、自分が一見では人かどうかも分からぬほどに形が歪んでしまった……そんな死に方をした時のためのものなのである。

これを理解した女神官は、ごくりと唾を飲んだ。

重い沈黙。これを少しでも早く払拭しようと、

「で、でも……冒険者の登録って、こんなに簡単にできるんですね。なんだか、思ってたのと違いました……」

「まあ、なるだけなら誰でもなれますからね」

世間話に応じるかのような、柔らかな笑みを以て返答する受付嬢なのだが、どこか暗いものを感じるのは女神官の考えすぎか。

「本当に大変なのは、進級ですよ」

「あつ、それならわかります。冒険者は、十の等級からなるですよね？」

「ええ」

受付嬢が、まるで勤勉な妹をほめるかのように頷く。

「駆け出しのあなたは、今十位の冒険者です。そこから一つ一つ位を上げるためには、様々な経験を積んで、世のため人のための行動を起こして、最後にはギルドの人格査定をクリアしなくてはなりません」

「人格査定、ですか？」

「はい。よく、冒険者はそこらの無頼漢と変わらない、と思われがちなんです。社会からの信頼がなければやっていけない仕事ですからね。あなたも、困っていることを解決してほしいとき、どうせなら評判のいい人をお願いしたいでしょう？」

「……なるほど」

一理あり、と女神官が領いたところで、この話はおしまい。
次いで、

「依頼をぐ所望の際は、あちらに張り出された依頼書をお持ちください」

そういつて受付嬢が指したのは、壁一つに丸々かぶせられるようにして打ち据えられた、大きなコルクボード。

すでに先駆けた冒険者たちが破って持って行ってしまったのだろう。張り出された依頼書は、だいぶ疎らになっている。

「駆け出しのうちは、ドブさらいなんかで経験を積むのがおすすめです」

「えっ？ 冒険者って、怪物と戦うものじゃ……」

女神官の言葉に、受付嬢が三度目の陰りを見せる。

「街の清掃活動だって、立派な社会貢献。ひいては冒険者の仕事ですよ」

その言葉で、冒険者登録のすべては終わった。

かくして、あとは勝手にしろとばかりに冒険者の世界へと放り出された女神官であったが、とりあえず例の少年が登録を済ませるまで待つことにした。

行き倒れを助けた縁だ。もう少しばかり行動を共にしても、罰は当たらないだろう。

果たして少年は、それから少しもしないうちに、

「よう」

と女神官へ声をかけてきた。

彼の首からは、やはり女神官と同じように白磁の認識票がさがっている。

(よかった。無事に登録が済んだんだ……)

至高神に仕える職員から目をつけられたのではないか……と心配していた女神官であったが、どうやらそれは杞憂であつたらしい。

「で、これからどうすんだ？ 受付のねえちゃんが、あの板から紙をちぎってこい、っていつてたけど」

少年が、そういつてコルクボードを指す。

彼も、すっかり女神官と行動を共にするつもりらしい。

「そうですね……」

顎下に、細い人差し指をあてがいながら、女神官は考えた。

このまま依頼を遂行すべきか。はたまた、今日の所はいったん宿をとるべきか。

冒険者ギルドには、酒場の他に初心者向けの宿屋もあるという話だ。

どれほど悩んだことだろうか。

「なあ。君たち、俺たちと一緒に冒険に来てくれないか？」

と、不意に背後から声をかけてきたのは、真新しい胸当てに赤い鉢巻き姿の若者であつた。その腰に長剣を帯びているところを見ると、役職は剣士というところか。

「君、神官職だろ？」

「え、ええ。そうですけど……」

「よかった！ 神官なら、怪我を治したりもできるんだろ？」

「えつと……まあ、一応……」

「よし、いいぞ。俺のパーティー一党にはそういうのがいなくてさ。ちょうど、君みたいな役職の人を探してたんだ」

そういつて、剣士は後方を親指で示す。

見るとそこには、二人の少女の姿があった。

一人は長い髪を後ろにまとめ、道着をまとった勝気そうな娘。もう

一人は、眼鏡の奥から冷たい視線を向ける、杖を持った少女。

おそらくは、武闘家と魔術師という具合か。

そんな二人を、

「俺の一党さ」

と紹介した後で剣士は、

「急ぎの依頼で、もう一人か二人、手が欲しいんだ。来てもらえるかい？」

「急ぎの依頼、といたしますと？」

「もちろん、ゴブリン退治さ！」

ゴブリン。背丈も力も頭も、そこらの子供と変わらぬほど。故に怪物の中でも最弱と言われる存在。

そんな奴らが、とある洞窟の中に巣を構え、近くの村を襲っては、娘をさらったり、収穫物を奪ったりと悪事を重ね始めた。

かくして村人たちは、なけなしの財産を集め、冒険者ギルドへと依頼を持ち込んだのである。

女神官は、逡巡した。

駆け出しの冒険者が、初めての依頼としてゴブリン退治に赴く。この世界ではよくある話だ。

そんな初めての経験に、自分が他者から誘われた。どこか、運命の

導きを感じずにはいられない。

もとより、神官職である自分が単独で怪物を相手どうろうなど、自殺行為もいいところなのだ。

「ん……」

女神官は、またしても顎に指をあてがった後で、

「わたしなんかで、よろしければ」

と答えた。

これに剣士は大喜び。次いで、女神官の横にいた少年へも目を向け、

「どうだい。君も来るか？」

と声をかける。

少年は、

「オラもいつていいの?」

相変わらずきよんとした表情で、剣士に問う。

「もちろんさ。数は多い方がいい。ところで、君の役職は？」

「オラ? オラ、武道家だ」

「へえ。だったら、こっちに同期がいるよ」

剣士の言葉に応じるかのように、後ろに控えていた道着姿の娘が出てくる。

彼女は、まじまじと少年を見たあとで、

「確かに……結構鍛えてる感じはするわね」

うんうんと頷いた。どうやら、及第点には至っているらしい。
これを見た剣士は、

「よし。こいつのお眼鏡にもかなってることだし、さっそく五人でゴ
ブリン退治だ！」

勇んで腕を突き上げる。

「あ、あの……装備は整えなくて大丈夫なのですか……？」

ここにきて、どこか嫌な予感を覚えた女神官が、おずおずと声を発
した。

剣士は首を傾げつつ、

「怪我をしたら、君が治してくれるんだろ？」

「そ、そうですけど……」

「だったら、問題ないじゃないか。どのみち、薬や武器防具を整える時
間もお金もない。こうしている間にも、攫われた女の子たちが助けを
求めてるわけだし」

剣士にそういわれると、もう女神官は反論できなかつた。

四

墨で塗りつぶしたかのような暗闇が支配する洞窟内を、ゆっくり
ゆっくりと進む五人の若者たち。

先頭に行くのは、若い剣士と女武闘家。同じ故郷の出だという彼ら
は、不気味なほど暗く静寂に満ちた洞窟には不釣り合いなほど、楽し
気に言い合いを始めている。

続いて、女魔術師。そして最後尾を、女神官と少年武道家が固める。この陣形を提案したのは、女魔術師。

前衛を剣士と武闘家に任せ、自分と女神官はその援護。そして少年武道家は、

「万が一、敵から挟み撃ちを受けた時の対応役」

ということだ。

女神官も最後尾、としたが、その実はびくついて歩きが遅くなっているだけの事。事実、前衛の二人からは徐々に距離が開きつつあった。

そんな彼女を女魔術師は冷たく睨み、少年は、

「おめえ、顔色わるいぞ。あつ、わかった。しょんべんガマンしてんだろ！」

などと、デリカシーの欠片もない言葉を浴びせる。

紅潮して反論する気力も、今の女神官にはない。その胸中に渦巻いているのは、ただただ大きな不安のみ。

情報も何もない敵の巢へ、新米冒険者のかき集めが飛び込んでしまっているのか。

剣士はどうやら、女神官の癒しの奇跡を頼っているようだが、使えるのは三回が限度なのである。

果たして不安に駆られた女神官は、それまで隣を歩いていた少年の姿がないことに気が付いた。

(まさか……)

知らぬうちに、敵の魔の手が……。そんなことを考えて振り向いて、ほっと胸を撫でおろす。

少年は少し後方で立ち止まり、岩壁をじっと見つめているだけなのだ。

女神官に続いてそのことに気付いた魔術師が、

「ちよつと。遅れてるわよ」

そう声をかけたのだが、

「でもよ。こつちに誰かいるんだもん」

少年はそう言ったものだ。

そんなはずはない。

ここまでは一本道。ゴブリンはおろか他の冒険者にだって出くわしていない。

しかし、少年は飽くまで「誰か」の存在を譲らず、その場にとどまるつもりでいる。

舌を打った女魔術師は、一旦は彼を置いていくことを考えたが取りやめ、先に行く前衛の二人を呼び戻した。

誰かがいるわけなどなく、きつとこの少年の勘違い。そのことを証明して黙らせれば、彼もこの先、一々に足を引っ張るようなことなどしないはずだ。

……そのはずだった。

「ん？ おい、ちよつと待て。これは……」

引き返してきた剣士が、手にした松明を以って、少年の気にする岩壁を観察する。

よく見ると、見上げるほどの一枚岩が、岩壁に据え付けられていることが分かった。

まるで、隠し扉のように。

「よく気が付いたな……」

剣士が、驚きの目を少年へ向ける。

光源は、剣士の持つ松明のみ。少し遅れて後ろを歩いていた少年へは、その明かりは十分に届かないはずだ。すると、

「だって、この先からニオイがしたから」

わけもなく少年が答える。

「におい？」

「うん。いやなニオイだ」

その言葉に、一同は固唾をのんだ。

こんな洞窟で、「いやなニオイ」を放つ存在とさえは……。だが、そんな彼らの心中知らず。

「見てろよ」

少年はそう言うと、

「たあっ！」

洞窟全体に響くほどの気合声と共に、鋭い正拳突きを一枚岩へ当てる。

と……。

岩が、木っ端微塵に砕け散った。

続いて、その向こうに見えたのは、ぽっかりと口を開けた横道と、醜悪な面をした怪物。

緑肌の、尖った鼻と耳を持ったそれは、丁度少年武道家と変わらぬ背丈。

世界最弱の怪物。ゴブリンであった。

剣士たちは共学に目を丸くしたが、それはゴブリンたちも同じで

あつたらしい。

「GYAO!」

などと、口々に驚愕の声を上げている。

その数、九匹。

慌てて武器を取る剣士たちを他所に、

「あつ、こいつらがさらわれたっていうムスメか!」

少年はそう言って、ゴブリンどもへ近づく。

道中、ゴブリンが村娘たちを攫ったことを剣士から聞いていた少年であつたが、どうすれば只人の娘ヒュームとゴブリンとを見間違えるのか。

「ほら、もう大丈夫だ」

にこやかに近づく少年。その顔面へ、ゴブリンは手にした石斧を容赦なく叩きつけた。

女神官は口元を抑え、女魔術師は舌を打つ。剣士と女武闘家は、咄嗟の事に体が動かなかつた。

だが……。

「なにすんだ!」

砕けたのは少年の頭ではなく、ゴブリンの石斧。

敵味方問わず、化け物を見るような視線が、少年に集まつた。

それを一切気にすることはなく、

「そうか。おめえたち、ムスメじゃねえな。なんとかつていう化け物だろ!」

怒りを露わにするや、

「このっ！」

一匹のゴブリンへ殴りかかる。

殴られたゴブリンは、ぐると真後ろへ首を向け、そのまま倒れた。それからもう一匹へ少年が飛びかかったところで、

「え、援護を！」

正気を取り戻した女魔術師の号令をきっかけに、一同が動いた。

少年に続き、剣士と武闘家が前に出る。

魔術師は、いつでも取りこぼしが来ていいように、杖を構えた。

ただ一人、女神官だけは、まだ恐怖ですくみ上っている。

横穴から目を離し、洞窟の奥を見る。

そちらからゴブリンが迫る気配は、今のところなかった。

そんな女神官の耳へ、鈍い音が入ってくる。

見ると、剣士の長剣が岩壁に引っかかった音であった。

隙を見せた剣士に、ゴブリンが殺到する。

その時。

「伸びろ、如意棒!!」

少年が、背中に回していた細長い棒を引き抜き、それをゴブリンへ構えるや叫んだ。

するとどうか。

棒が赤く発光したかと思うや、それがぐんと伸び、今にも剣士へ襲い掛かるうとしていた三匹のゴブリンの足元を掬ったのだ。

青ざめた剣士が、それでも目の前で倒れたゴブリンへ、剣を突き刺していく。

女武闘家も、なんとか二匹のゴブリンを岩壁へ叩きつけたところで

あつた。

それに加え、少年が斃した四匹。なんとか、危難は去ったようだ。

五

緩やかな傾斜となつている横道を歩く、剣士一党。その隊列には、変化が生じていた。

先頭を歩くは、少年武道家。彼は後ろに続く剣士へ、

「どうだ？　こんなせまい場所じゃ、そつちのがいいだろ」

と声をかける。

剣士は、先のゴブリンから奪った石斧を振るいつつ、

「あ、ああ……」

不満こそあるらしいが、しっかりと頷いた。

そんな彼ら……いや、少年を、三番目を歩く女魔術師は鋭く見据え、

「あなた、本当にこれが初仕事なの？」

そう尋ねる。

「こんな仕事ははじめてだ」

あつけらかんとした少年の返答。それもそうだ。ゴブリン退治が初めてではないなら、どうして只人ヒュームとゴブリンを見間違えようか。

果たして、最後を歩くは未だ恐怖の震えが止まぬ女神官と、それを支える女武闘家。

どう見ても足を引っ張りそうな女神官だが、誰も帰れとは言わない。

(この洞窟、どこにゴブリンが潜んでいるか分からない)

というのは建前で、一党の中での回復役が、彼女しかいないから。ここにきて剣士たちは、己の準備不足を自覚したが、それでも勝つのは正義感。

引き返し、準備を万全にしている間、囚われた村娘たちはどうなる。それを思うと、足が奥へ奥へと進むのだ。初陣は、夢物語に出てくる騎士よろしく、怪物に攫われたお姫様を救い出すところからでなければ。

恐怖と、未だ消えぬ依頼成功への意欲。

しかし、一瞬で恐怖がぶり返してきたのは、先陣を切る少年が足を止めたから。

「ど、どうした……?」

まさか、またゴブリンの奇襲か。

不安げな剣士の声に、少年は声を潜めて、

「さっきのバケモンだ。いっぱいいる」

手にした松明で先へ向けつつ、そう答えた。

仄かな明かりが、前方の闇を解く。

そこは、人の手が全く加えられた様子のない、洞窟内で最も大きい洞。

いたのは、七匹のゴブリン。そのうちの一匹は、玉座を模したと思われる椅子に座り、骸骨を被っている。

他には、裸に剥かれ、もはや身動き一つとれぬ女たちが数名。

剣士は背筋の凍る思いがしたが、一党の女性陣の恐怖は、その比ではない。

自分たちも、あのような末路を辿る可能性がある。そのことを自覚

するには、いい機会であったのかもしれない。
そんな中。少年だけは慌てる様子もなく、

「よし、行くぞー！」

松明を剣士に押し付けるや、背にした棒を引き抜き、威勢よく広間へ躍り出た。

突然の奇襲に、広間のゴブリンどもは狼狽する。
だが、それもすぐのこと。

少年が一匹のゴブリンを斃した時、

「GYOGA……GOGAGOGI……」

玉座に座したゴブリンが、なにやら唱え始めたのだ。
これを受けて、女神官と魔術師が目を見開く。

(まさか、呪文……?)

呪文を唱えるゴブリンなど、聞いたことがなかった。
しかし、悪い予感は当たるもの。

玉座のゴブリンが、手にした杖を少年へ翳した時、そこから灼熱の太陽の如く燃え盛る火球が飛び出したのだ。

「火の玉が飛んでくるぞー！」

剣士が叫ぶ。

「えっ!？」

その声に、動きを止めたのがいけなかった。
火球が、もろに少年の体へ命中したのである。

「がつ……」

石斧を受けてビクともしなかった少年の体が、毬のように二、三と床を跳ねた。

常人離れした彼の体も、思いがけぬ呪文の攻撃を不意に食らえば、全くへっちゃらというわけでもないようだ。

そうしているうちに、ゴブリンどもの視線が剣士たちへ向けられた。

最早、隠れることのできる場所などない。

「くそっ！」

広間へ躍り出た剣士。だが、

「きゃあっ！」

背後から響く、女性陣の悲鳴。

振り向くと、腰を抜かした神官を見下ろす、大柄のゴブリン。その背後には通常のゴブリンが一匹。奴の先導で挟み撃ちを執行したのか……。

呪文遣いといい、まるで聞いたことのないタイプの出現に、一党は完全に混乱していた。

それでも、女武道家はなけなしの勇気を振り絞り、女神官を抱えるや、広場に出る。

すでに冷静の仮面が取れた魔術師も、生き延びたい一心でそれに続いた。

大柄のゴブリンは、ゆっくりとその後を追う。

どうせ、奴らの逃げた先は仲間のいる大広間。焦ることはない。捕まえたも同じである、と。

「あちち……」

身を起こした少年は、剣士たちに迫る巨大な敵を認識した。救援に向かおうとするや、再び迫る呪文遣いの火球。

しかし、今度はそれを手にした棒で打ち返す。

流れ弾は、群れの一匹へ見事に命中した。

それを確認することなく、少年は地を蹴って走り出す。

大きな奴は、半ば戦意を失ってへたり込む女魔術師へ、丸太のような腕を振り上げていた。

「やめろっ！」

飛蝗の如く跳躍した少年が、大柄と魔術師の間に割って入る。

結果、その太い腕によって薙ぎ払われたのは少年だった。

すかさず、大柄の背後から飛び出したゴブリンが、彼の体に跨って、粗末な造りの短剣を突き入れる。

ぱきり。

少年の腹に触れた途端、短剣の方が根を上げた。

「いっっ！」

動揺するゴブリンへ、少年の頭突き。

退け反ったゴブリンへ、彼はすかさず蹴りを叩き込んだ。

ゴブリンの首が吹き飛ぶ。

続いて少年は、女魔術師へ迫る大柄を相手にしようとして、地を蹴った。その時である。

すかさずかと、広間へ迫る大きな足音。

誰もがそれを耳にし、動きを止めた。

真っ先に気が付いたのは、大柄である。

足音は、彼の背後からしていたのだ。

振り向いた大柄の首元へ、

「ぴゅっ」

と風を切って飛んできた何かが、深々と刺さった。

「GA……GA……」

口から血を吹き出し、それでも大柄は腕を振り上げたが、

「でりゃっ！」

横から飛んできた少年が、その頭を殴り飛ばす。

首を飛ばされた大柄は、地響きに似た音を立ててその場に倒れた。果たして少年は、広間にやってくる一人の男を見た。

薄汚れた革鎧に鉄兜。左手には円形の盾をくくりつけ、腰に差すは中途半端な長さの剣。その首から下げたるは、銀の認識票。

男は、そのままじろりと広間を見渡すや、腰に差した剣を投げ打った。

六

男が放った剣の先には、まだ玉座から離れていなかったゴブリン。

奴はそのまま、深々と喉元に剣を突き刺され、悲鳴すら許されぬままに絶命した。

「二匹」

再び呟いた男は、ちらりと右手を見やる。

そこには、なんとかゴブリンたちから女神官を守る剣士たちの姿。彼らはなんとか二匹のゴブリンを仕留めていた。

だが、剣士はその戦いの中で反撃を負ったらしく、右の太ももに小

さな鎌が突き刺さっているのが見えた。

実質、女武闘家とゴブリン二匹の戦い。

そこへ。

「二匹」

横から割り入った男が、一匹のゴブリンへ剣を突き入れる。

残る一匹。こやつは、もはや自棄を起こし、男へ飛びかかった。

「三匹」

剣を突き入れた腕はそのままに、男は空いた左腕を振るった。

括り付けられた円盤の盾が、ゴブリンの顔面を捉える。

奴の体は、そのまま岩壁へと叩きつけられた。

これを見届けた後で、男はゴブリンの骸から剣を引き抜き、辺りを見回す。

生き残りの姿は、見えない。

「これで全部か」

男はぶつきらぼうに呟いた後で、

「駆け出しか」

剣士たちの首にぶら下がる白磁の板を見て、独り言のように呟いた。

武闘家は安堵の余りその場に崩れ落ち、剣士はなんとか自身の足から鎌を引き抜く。女神官は、恥じらいと恐怖とが混じったような表情をしつつ、男を見た。

そこへ、

「おめえ、すげえな」

男の手際の良さに感心していた少年が、声をかけてきた。
男はじつくりと少年を見ると、

「お前も、十位か」

その首にかかった白い認識票を見て、問いかける。
少年は近くにいた女魔術師へ、

「なあ、ジユウイってなんだ？」

と尋ねた。

脅威が去り、なんとか冷静の仮面を取り戻した彼女は、

「等級が一番下の冒険者。駆け出し、ってことよ」

呆れたように答えた。

それを聞いた少年は、

「そっか。じゃあ、オラもそのジユウイってやつだな。今日からボウケンシヤってやつになったし」

あっけらかんとして言い放った。

瞬間、ぴくりと男の兜が揺れ、

「駆け出しが、どうして大柄ホブを倒せた」

次なる質問を投げかけてくる。

「どうして、っていわれてもなあ……」

腕を組み、困ったように沈思した少年はやがて、

「めちやくちや修業したからな」

実に簡素な答えを出した。

これを聞いた男は、ふうと呆れたように溜息を一つするや、次に剣士の方を向いた。

その足に刺さっている鎌を見て、

「毒はないな」

淡々と呟く。

「ど、毒!？」

剣士の顔から血の気が引いた。

「奴らは武器に毒を塗りたくっていることもある」

そう言つて、男は一匹のゴブリンの骸から手槍をふんだくると、それを彼らへ見せつけた。

その矛先には、黒くねっとりとした粘液が付着している。

「草木や灰、それから自分たちの糞尿に唾液。それらを適当に混ぜ合わせたものだ」

男は手槍を捨て、呪文遣いのゴブリンに刺さった剣を引き抜きつつ、

「アンチドローテ解毒剤のないままに喰らえば、確実に死ぬ」

と付け加える。

剣士たちは、自分たちの準備不足を今一度痛感した。

「お前たちは、運が良かった」

男のその言葉も、どこか皮肉めいて聞こえた。

果たして男は、もう一度だけ少年へ目を向け、

「もう一度聞く。お前は、本当に駆け出しの十位か」

と問いかけた。

唇を尖らせた少年は、

「しつこいなあ。オラ、ほんとに今日から冒険者になったんだってば」

そう答える。

男は、それでもしばらくは少年のことを見つめていたが、

「まあいい。まだやることがある」

そう言うと、くるりと体を反転させ、呪文遣いのゴブリンが座していた玉座へ向かった。

王座は、多数の人の骨を組んで作られた、悪趣味なものであった。

男は、それを乱暴に蹴飛ばすと、

「やはり、な」

その後ろに隠れていた、腐った木板を見て呟いた。

「なあ、それなんだ？」

足を怪我した剣士を背負いながら、少年が男へ問いかける。
見れば、彼に続いて一党の女性陣もついて来ている。

男は少年の問いには答えず、代わりに板を引きはがし、その奥に広がる空間を見せた。

そこにいたのは、甲高い悲鳴を上げる、子供のゴブリン。

「まさか、子供も……？」

ここにきて漸く、女神官が口を開く。

聖職者の立場にある身しての、最後の確認。

男は、

「当然だ」

と言いつつ、瞬く間に四匹の子供ゴブリンの息の根を止めていく。

「奴らを生かしておいて、得をすることなど一つもない」

慈悲なき言葉。

やがて、最後の一匹を仕留めたところで、

「これで、生き残りはいるまい」

淡々と、言い放った。

七

依頼から戻って来た新米冒険者たちを、受付嬢は安堵と喜びを以って迎えた。

安堵の理由は、冒険者たち全員の生還を確かめたから。

喜びの理由は、

「報告だ」

先頭を歩く、鎧の男だ。

「はい！ お疲れさまでした！」

弾けんばかりの笑顔で、受付嬢は男の報告を聞く。
その間、

「げっ、ゴブリンスレイヤーだ」

と囁くいくつもの声を、少年は耳にした。

「おめえ、こぶりなスレンダーって言うのか」

報告中の男へ、少年の一言。

一瞬の静寂が場を包み、やがて聞こえる忍び笑い。

受付嬢は少しばかり顔を引きつらせ、男……もといゴブリンスレイヤーは、黙って少年を眺めた後で、呆れたような溜め息を一つ吐くや、報告を続けた。

果たして、ゴブリンスレイヤーの報告を聞き終えた受付嬢は、

「今回は、ゴブリンスレイヤーさんが助けてくれたからよかったもの……あなたが来てきたように、ゴブリンは本当はとっても恐ろしい怪物なんです。だから、自分の力を過信しないで、最初のうちは下水道やドブさらいをお勧めします」

子供を窘めるように、アドバイスをしてくる。

『は、はい……』

剣士一党は、ゴブリンの巢で見えてきた凄惨な光景を思い出し、素直に頷いた。

しかし、

「いや……」

受付嬢の言葉を聞いたゴブリンスレイヤーは、少年武道家へと視線を移し、何かを言いかけたのだが、やがてそれも諦めたらしい。踵を返し、ギルドを去ろうとするゴブリンスレイヤーを、

「なあ、こぶりなスレンダー！」

少年が呼び止めた。

ゴブリンスレイヤーは歩を止め、

「……ゴブリンスレイヤー
小鬼を殺す者だ」

と訂正をした後で、

「何の用だ」

ぶつきらぼうに尋ねる。

少年はそれに物怖じせず、

「さつきは、ありがとな！ オラ、おめえにも借りができちまったし、いつか返すつもりだ」

「……好きにしろ」

それだけ言って、ゴブリンスレイヤーは遂に冒険者ギルドを出た。

これを見送った後で、

「おめえたちは、これからどうするんだ？」

少年は、剣士たちへ問う。

剣士と女武闘家は、少し困惑したように、

「お、俺は……やっぱりドブさらいからやってみるよ……ゴブリン退治は、まだ早かったみたいだし」

「あ、あたしも、そうしようかな……」

と答え、女魔術師は、わなわなと拳を震わせつつ、

「私は……私の实力は、こんなもんじゃないわ……」

そう呟いている。

次に少年は女神官を見て、

「おめえはっ！」

同じように尋ねた。

「わ、わたしは……」

わたしも、ドブさらいから……。そう答えようとして、思い出す。迫りくるゴブリンに怯えるだけで、何もできなかった自分の姿を。

なんのために神殿を出たのか。

より多くの、傷ついた人へ奇跡を与えるためではなかったのか。

それが、あの様はなんだ。

これから、簡単な仕事に逃げ込んで、自分は変わることが出来るのだろうか。

恐らく、否。

今の自分を変えるには、戦地へ赴いて恐怖を乗り越えるしかない。少なくとも、彼女はそう考えている。

だが、神官である自分が一人で化け物の巣へ潜り込んでも、それは自殺行為だ。回復と、発光の奇跡を有している彼女だが、戦闘経験はサツパリ。

ならば、誰かについていくしかない。

一瞬、女神官は少年を見た。

彼ならば……。と考えて、

(それは、駄目……)

と否定する。

少年の並外れた強さは、先のゴブリン退治で目にしたばかり。

同じ新米冒険者とは思えないほどに、彼の腕つぶしは頼りになるだろう。

しかし、駄目だ。

女魔術師の危機に、身を挺して飛び込んだほどの少年なのだ。

「あぶねえから、おめえは下がってろ」

危険なことは全て自分一人で引き受けてしまいうに違いない。それは、女神官の成長には繋がらない。

ならば、と。彼女が思い浮かべたのは、先の鎧男。

淡々とした手つきで、敵を排除していくその手際。

ぶつきらぼうな態度から見るに、

「自分の身は自分で守れ」

というタイプ。

望むところであった。彼の傍で支援を行いつつ、自衛の手段も学

ぶ。今の自分を変えるためには、それしかない」と女神官は考えた。
だから。

「わ、わたしは……き、さっきの人から……」

「さっきの人って、ゴブなんとかか」

少年の言葉に、女神官は頷く。

剣士たちは、

「やめといた方がいいんじゃないか？ 助けてもらってなんだけど、あの人……普通じゃないぞ」

と口々に言ったものだが、

「そっか。頑張れよ！」

少年だけは、その背中を押してくれる。

それに勇気をもらった女神官は、

「……はい！」

力強く頷いた。

「困ったことがあったら、いつでも言えよ。オラ、おめえにもまだ恩返ししてねえからさ」

「恩返しって……わたしはなににも……」

「なにいつてんだ。ハラへってたのを、たすけてくれたじゃねえか」

少年はそう言うと、

「じゃあ、おめえたちもがんばれよ！」

剣士たちへと激励を飛ばすや、依頼書の張り付けられたコルクボードへと走ってゆこうとする。
それへ、

「あ、あのー！」

女神官が、声を上げて引き留めた。

「？」

きよとんとして振り向く少年へ、

「そ、そういえば、お名前を伺ってませんでした」

女神官が言葉をかける。

少年は、にんまりと笑って力こぶを作ってみせるや、

「オラは孫悟空だ！」

元気よく名乗り、今度こそコルクボードの方へと走り去っていった。

間章 サイコロ遊び

ころころとサイコロが転がり、それがもたらす結果を見て、神さまたちは一喜一憂。

愛すべき駒たちが勝てば喜び、負ければ悲しみ、なんらかの成功を果たせば笑い、死ねば泣きます。

それは、もつともつと偉い神さまがやって来ても同じ。

ただ、そのもつともつと偉い神さまたちがもつてきた駒を、《真実》と《幻想》は苦手としていました。

その駒は、サイコロこそ振らせてくれますが、どんなに悪い目が出ても、必ずなんとかしてしまおうのです。

むしろサイコロを振らなくても、自分から勝手にどんどん進んでいくのです。

まるで、「彼」のように。

でも、もつともつと偉い神さまたちはそれを見て、

「すごい」

「おもしろい」

と笑いあっています。

《幻想》と《真実》の神さまは、不思議でなりませんでした。

宿命や偶然といったものを一切排して突き進む駒の動きが、どうして面白いのかと。

もつともつと偉い神さまたちが持つて来た駒は、「彼」に似ているように似ていませんでした。

鍛え、行動し、機転を利かせることは出来ても、「彼」のように事前
に策を巡らせ、考えることは苦手なようでした。

尤も、全くできないわけではないのですが……。

とうとう気になった《幻想》と《真実》の神さまは、もつともつと偉い神さまたちへ、何がそんなに面白いのか問いかけました。

果たしてもつともつと偉い神さまたちは、

「悟空は、見るだけでも面白いんだよ」

と言うのです。

もはや、もつともつと偉い神さまたちは、サイコロ遊びというよりも、自分たちが持つて来た駒がどのように動いていくのか、それを楽しみに行っているようでした。

そんな神さまたちだからこそ、

「うわあ。なにあれ」

「かつこいいね」

《幻想》と《真実》の神さまたちが手をこまねく「彼」をも、気に入ってしまいました。

「とつても強いね」

「怪物イチコロだね」

きやつきや、きやつきやとはしやぐ神さま。

《真実》は、ちよつとむつとしました。

このまま一方的じゃ、あんまりに面白くない。

彼は、もつともつと強い怪物をぶつけなければ、と考えました。

そんな考えを巡らせている間にも、「彼」に似た駒はどんどん動いていきます。

もつともつと偉い神さまたちは、もうそれを眺めることに夢中となり、サイコロを振ることすらありません。

あちら。《幻想》は、困ったように笑いつつ、その駒を眺めてみることにしました。

でも、やつぱり面白くありません。

そこへ、もつともつと偉い神さまの一人が、《幻想》と《真実》へ言います。

「でもね。大人になった悟空はもつともつとすごいんだよ」

「もつともつと、強いんだ」

その言葉に、《幻想》と《真実》は少しだけゾクリとしました。

万能者

一

辺境の街において、オールラウンダー万能者なる冒険者の噂が立つようになったのは、十日ほど前からである。

名前だけは大物に聞こえるが、その等級は白磁。すなわち、最下級では、何故にそのような通称が用いられているのかと言えば、

「ドブさらいから、ジャイアント・ラット巨鼠退治。果ては畑仕事や牛乳配達まで、なんでもやってくれる」

ということらしい。

それらの仕事は、新米冒険者が経験を積むには持つてこいなのだが、彼らはもつと派手で刺激にあふれた冒険を期待しているため、好んで引き受けようとする者は皆無に等しい。

そこを行くと、オールラウンダーは二つ返事で了承してくれるというのだから、周囲の村の者たちなどは大歓迎。

朝や夕は冒険者たちでごった返すギルドの受付は、昼下がりになると依頼者たちによって長蛇の列が出来るというわけだ。

牛飼娘も、その中の一人であった。

街の近くの牧場で伯父の仕事を手伝っている彼女は、定期的にギルドへ食材を搬入している。そのついでに、彼女はオールラウンダーへ依頼を託そうと考えていた。

依頼の内容は、牛乳配達である。

ギルド以外にも、牛飼娘のいる牧場を鼻肩にしてくれる人は多い。そう言った人たちへ、牧場でとれた新鮮な牛乳を届けてもらうのだ。

もつとも、彼女の真の目的は別の所にある。

伯父が抱えている、彼への恐怖を、少しでも取り払ってあげたいと思っただからだ。

彼もまた、冒険者である。そして、牛飼娘の幼馴染。

巷では「ゴブリンスレイヤー」などと呼ばれ、冒険者等級は第三位の銀だというのに、雑魚だ初心者向けだと揶揄されるゴブリンばかり

を相手にしている変わり者。

そんな彼を、伯父は恐れている。少なくとも、牛飼娘はそう感じている。しかし、恐怖を感じている理由までは分からない。

三日三晩考え抜いて、遂に彼女は、伯父が冒険者そのものへ偏見を持っているのだ、と解釈した。

所詮冒険者は、ギルドの後ろ盾がなければ無頼漢も同じ。そんな彼らへ、叔父は偏見を持っているのだ、と。

(だったら、同じ冒険者に会わせてあげれば……)

牛飼娘は、そう結論づけた。

(他の人がやらないような依頼を自分からやってくれるんだもん。いい人に決まってる)

そんな冒険者を伯父に引き合わせれば、印象が変わるのではないかと。

「あの……オールラウンダーさんへ、牛乳配達を頼みたいんですけど……」

初めての依頼。緊張のためか小声となってしまう牛飼娘を、受付嬢は意外そうな顔で迎えた。

「あなたは……牧場の……」

「あつ、はい。今日は、食材を仕入れに来たついでで……」

そうやって、牛飼娘は後ろ手にしていた革袋をカウンターへ乗せた。報酬である。

受付嬢は、それを規定の天秤へ乗せて額を測り、

「はい。結構です」

にこやかな笑みとともに、依頼の了承を告げた。
牛飼娘はほっと胸を撫でおろす。だが、

「最近、オールラウンダーさんを指名する依頼が増えてるんですよ」

と、世間話程度に切り出した受付嬢の言葉を聞き、その表情がにわかにかに強張った。

「もしかして、結構先になっちゃいます……?」

恐る恐る尋ねる牛飼娘へ、受付嬢はやはり柔らかな笑みのまま、

「流石に今日は無理ですけど……明日の早朝には、そちらへ向かってくれると思いますよ」

その言葉を聞き、今度こそ牛飼娘は安堵の溜息をもらった。

これで、計画の第一段階はクリア。

依頼の手続きを終えた牛飼娘は、冒険者ギルドを後にする。

その時、

「ねえちゃん！ 依頼おわったぞ！」

と、威勢のいい声と共にギルドへ駆け込んでいく少年とすれ違った。

紫色の、東洋風の衣装に身を包んだ少年だ。背には、赤くて細長い棒を負っている。

(駆け出しの子かな?)

なんて思いつつ、彼女はギルドの裏口に置いていた空の荷車を引いて、牧場へと戻った。

彼が戻って来たのは、その日の夜。

無事に還って来た彼を、隠しきれぬ喜びを以って迎え、その日は伯父を含めて三人での夕餉。

それが終われば、藁のベッドに身を投げ出して、床に就く。

彼が、夜が明けるよりも早くに目を覚ましているから。

彼とゆっくり話が出るのは、それからギルドへ向かうまでの短い間だけ。

冒険者である彼は、いつ命を落とすかも知れたものではない。

だからこそ。短いながらも平穏な時間の中では、出来るだけ彼と触れ合っていきたいと、牛飼娘は考えていた。

二

地平線の彼方より日が昇り始め、鶏が朝を告げた頃。

「おっす！ ……じゃなかった。おはようございます」

牧場に、元気のよい声が響いた。

牛飼娘が応対に出てみると、外にいたのは一人の少年。昨日、冒険者ギルドへ駆け込んでいった、東洋服の少年だ。

その少年が、

「牛乳配達にきたんだけど」

と簡潔に用件を伝えた時、

(この子が、オールラウンダーさんだったんだ……)

牛飼娘は、少しばかり目を丸くした。

あまりに大袈裟な名前なものだから、まさかこんな少年がそのような通名で呼ばれているとは思わなかったのである。

(どうしよう。結構な量をお願いするつもりだったんだけど……)

牛飼娘は、この少年一人で大丈夫かと不安を抱く。そこへ、

「昨日、珍しく金を持って街に出かけたのを見ておかしいとは思っていたが……こういうことか」

家の奥から、伯父が姿を現した。

伯父は一瞬、少年を珍しげに見やったが、

「うちは冒険者に頼るほど切迫してはいないよ。悪いが帰ってくれ。報酬なら、そのまま受け取ってくれて構わないから」

そう言つて、踵を返そうとする。

「待って、伯父さん！」

しかしその腕を、牛飼娘が掴んだ。

「この子、せつかく早起きして来てくれたんだよ!? 伯父さんに黙って依頼しちゃったのは確かに悪いことだと思うけど……今日だけ! 今日だけ、この子に頼んでみてもいいでしょ?」

必死に懇願する牛飼娘を、伯父は困ったように見つめ、やがて、

「はあ……」

降参の溜息を吐いた彼は、

「……今日だけだ」

そう言うや、今度こそ家の奥へと引っ込んでしまった。

「配達してもいいの？」

「えっ、ああ、うん！　お願いできるかな」

牛飼娘に案内されて、少年は家の裏手にある荷車の前まで来た。荷車には、山のように木箱が積まれ、その中にはぎっしりと牛乳瓶が詰め込まれている。

「これを運べばいいんだな」

「うん。あつ、これがお客さんの一覧ね」

牛飼娘が渡した紙片へ目を通した少年は、

「わかった」

頷くと、なんと軽々と荷車を持ち上げてしまったではないか。

これに、驚愕を通り越して少しばかり恐怖を覚えた牛飼娘は、

「に、荷車は曳いていけばいいんじゃないかな……」

と言ってみるが、

「いいんだ。こつちのが修業になるから」

少年はにこやかな笑みを浮かべると、のっしのっしと、荷車を持ち上げたまま歩き始める。

「あたしも付いて行こうか？」

「大丈夫だよ」

「でも、あのメモだけでお客さんの住んでる場所とか分かる？」

「うん。みんな、オラに依頼をくれたおっちゃんやおばちゃんだったから」

じゃ、行ってくる。少年はそう言って再び歩き出したが、牧場の柵を越えようとしたところで、

「あつ」

またしても足を止めた。知っている男の姿を捉えたからだ。

「ゴツチャン！」

今しも、紐結いの緩んでいた柵の修繕作業に取り掛かろうとしていた男へと、少年は歩み寄った。

革鎧に鉄兜。左手に括り付けた盾と、腰に差した半端な長さの剣。

男……ゴブリンスレイヤーは、少年をじつと見据えていたが、やがて何でもないという風に作業へ戻る。

「おい。あいさつされたら返さなきゃいけないんだぞ。亀仙人のじいちゃんが言ってた」

少年が言うのへ、

「……誰だ、それは」

ぶつきらぼうにゴブリンスレイヤーが尋ねる。

「オラに武道をおしえてくれたじいちゃんだ」

「……お前にとっての、先生か」

「ううん……そんなもんかな」

曖昧な少年の返答。

ゴブリンスレイヤーは溜息を一つするや、少年の持ち上げている荷車を見上げ、

「……配達するのか」

と訊いた。

「あつ、いけね。そうだ。配達たのまれてたんだ」

少年は、持ち上げている荷車のことなどすっかり忘れていたらしい。

「はやくしねえと、牛乳がくさっちゃうもんな」

そう言うと、少年は街へと続く道へ歩を進めていく。

途中、

「またな、ゴツチャン！」

そう大声で少年が叫んできたが、ゴブリンスレイヤーはやはり押し黙って作業を進めた。

それから少年が戻って来たのは、柵の修繕作業が終わった頃。それほど時間は経っていない。

住所の分からない家でもあったのか。

まだ朝食の準備に取り掛かっていた牛飼娘が、

「どうしたの？」

と迎えるや、

「配達終わったぞ」

少年は持ち上げていた荷車を下ろし、そう言うではないか。

確かめてみると、木箱の中身はすべて空の瓶に換わっている。これこそ、牛乳配達が終わった証拠だ。

「これでいいんだろ？」

「……お、お疲れ様……」

牛飼娘の労いの言葉。それに呼応するかのように鳴ったのは、少年の腹の虫。

「いっけね。ハラへちまった」

これを見てくすりと笑った牛飼娘は、

「もうすぐ朝ごはん出来るから、食べてくっ。」

少年にそう提案し、すぐに自分の選択を後悔した。

三

「少しは遠慮したらどうだ」

彼がそう言わなかったら、少年は間違いなく牧場にある食料を食べつくしていただろう。

「あつ、そっか」

鉄鍋にたんまりと残ったスープを飲み干した少年は、かじりかけのパンとチーズを口の中へ放り込むや、

「ごちそうさまー！」

元気よく挨拶をする。

牛飼娘とその伯父は、秘かに胸を撫でおろした。

果たして食事が済むと、ゴブリンスレイヤーが徐に席を立った。それを見た伯父は、

「今日も、ギルドへ行くのかね」

苦い顔つきで問う。

「はい」

淡々と頷いた彼は、食器を片付けて外に出た。

「じゃ、オラも一緒に行こうつと。おっちゃん、ねえちゃん！ ごちそうさまー！」

少年もまた、元気よく家を飛び出し、

「あつ、じゃあ見送りを……」

続けて席を立とうとする牛飼娘を、

「待ちなさい」

と伯父が呼び止めた。見れば、少しばかり眉を顰めている。

牛飼娘は、黙って席に戻り、伯父に向き合った。

「……どういふつもりだ」

最初に口を開いたのは、伯父。

「あの少年に依頼を頼んだのは、どういふつもりだと聞いているんだ」

静かであるが、厳かな声。しかし、牛飼娘は物怖じせず、

「だって、伯父さん……彼を怖がってるから。同じ冒険者を見れば、きつと……」

「違う。違うんだ」

牛飼娘の言葉を遮るように、伯父は首を二度三度と横に振りながら、

「冒険者が怖いんじゃない。あれそのものだよ。恐ろしいのは」

絞り出すような声を出す。

「ちつとも怖くないよ」

牛飼娘は、にこやかな笑顔を伯父へ向けてそう言った後、食器を片付けて家を出た。

柵を越え、街へ続く道を駆けていくと、やっと彼らに追いつく。

「あれ。ねえちゃんも街へいくのか」

全力疾走の末に息を切らせる牛飼娘へ、少年が声をかけた。彼もまた、歩を止めて彼女を見つめている。

「……行くぞ」

やがて、彼がそう呟いて歩を進める。牛飼娘の息が、しっかりと整ったことを確認して。

(やっぱり、怖くなんかないよ)

彼の不器用な思いやりをしつかりと受け止めた牛飼娘は、にんまりと笑ってその後続く。

この日の道中は、いつもより賑やかなものだった。

彼と二人きりならば、一方的に牛飼娘が話しかけるだけなのだが、今日は少年がいる。

少年は、これまで自身が体験してきた、摩訶不思議な冒険の話を牛飼娘へ聞かせてやった。

曰く、ドラゴンボールなる宝石を求めて旅に出たこと。

曰く、亀仙人と呼ばれる人物に師事し、拳法の修業をしたこと。

曰く、天下第一武道会なる大会に参加し、惜しくも優勝を逃したこと。その他にも、めちゃんこ強い女の子と出会ったことや、世界一の殺し屋と闘ったこと。ケイサツとやらが手を焼く軍隊を相手に一人で奮闘したこと。

そして、

「こないださ。死んだじいちゃんにあったんだ。これが形見のドラゴンボールなんだけどさ」

話の途中、少年は腰に吊るした小袋から一つの石を取り出し、これを牛飼娘へ見せた。

「綺麗な真ん丸だね」

「今はただの石っころだけだよ。一年すると元にもどるんだ」

「へえ」

そうこうしているうちに、一行は街へと辿り着いた。

「もう見送りはしなくていいんだぞ」

彼はそう言ったが、

「ううん。今日は、もうちよつといる」

牛飼娘は、そう言って壁際にある小椅子へ腰かけた。

その近くへ、彼もどかつと座り込み、

「オラも、ここでまっつてようつと」

少年が続いた。

両名ともに、冒険者の間では人気のない依頼を引き受けている。故に、仕事が増えることはない。じっくりと受付が空くのを待っていていいのだ。

果たして、依頼所が掲示板に張り出され、それに冒険者たちが殺到し始めた時。こちらへ近づいてくる一人の少女を、牛飼娘は見た。華奢な体を神官衣で包み、手に持つは地母神の聖印が下がった錫杖。

「おっすー！」

少年が、威勢よく挨拶をかけると、

「あつ、おつ、おっす………？」

少しばかり戸惑った様子で、女神官もまた挨拶を返した。

次に彼女は、牛飼娘を不思議そうに見つめ、それでも、

「おはようございます」

と礼儀正しく一礼。

最後に彼を見ると、

「……どうも」

どこか不服そうに一礼し、

「ほら。ここに座れよ」

少年が促した席へ、すごすごと腰かけた。

そう言えばと、牛飼娘は思い出す。

一か月ほど前に、彼がとある冒険者の一党を助け出したこと。その中の一人が、彼と共に冒険し始めたことを。

(パーティを組むって言うより、面倒見てあげてるんだなあ)

この時、初めて女神官を見た牛飼娘はそう思わざるを得なかった。

尤も、彼がそんなことを言うわけもないが。

しかし、まさか同行者が女であったとは、牛飼娘も予想がつかなかった。

「そっか。おめえ、こいつと一緒にいきたいっていったもんな」

少年が、女神官と彼とを交互に見ながら言う。

「え、ええ。なんとか、同行を許してもらえました」

「許したも何もない。お前が勝手に付いてきただけだ」

「人聞きの悪いことを言わないでください！」

「事実だろう」

そう言われ、女神官は「むう」と唸る。どうやら凶星らしい。何気ない会話のやり取り。だが、牛飼娘はそこに居心地の悪さを感じていた。

幼馴染である自分との会話にはない、別の雰囲気。それが、どうにも胸の中へもやもやとしたものを生み出していく。

この時、掲示板に依頼書が張り出され、それへ冒険者たちが殺到し始めた。

暫くすると、受付を済ませた冒険者たちが各々の仕事へと散っていく。

「よう」

彼はこの時になって、ようやく腰を上げた。

女神官と少年が、それに続く。

やがて依頼を請けた彼は、

「気を付けて帰れ」

それだけ言って、女神官と共にギルドを出て行った。

四

牛飼娘は、とぼとぼと帰路についた。

その横には、例の少年がついている。

彼はこれから牧場近くの農家を訪れ、雑草の駆除や整枝・誘引の手伝いに行くのだという。

夏を控えた今、農家ではそうした管理作業が主なのだとか。

少年はもはや、冒険者というより農業従事者である。

「君は、ゴブリン退治とかはやらないの？」

道中、牛飼娘がなんとなしに少年へ聞いてみた。
すると少年は、

「受付のねえちゃんがさ。はじめはドブさらいとかからにしとけ、っていうから」

と答えた。

律儀に言いつけを守っている当たり、少年は底なしの素直さを秘めているようだ。

少年は続けて、

「んで気がついたら、いろんなところから依頼がくるようになった」

あつけらかんとして言う。

「でも、退屈じゃない？ 畑仕事とか下水道掃除とかって。冒険者になつたら、もつとこう……悪い怪物を退治したりさ」

「それでもないよ。亀仙人のじいちゃんのとこで修業してた時みたいだし」

「……そう言えば、牛乳配達の時も修業になる、とか言ってたよね」

「ああ。亀仙人のじいちゃんに、毎朝牛乳配達やらされたから」

「へ、へえ……」

亀仙人という人物が、少年へ拳法を教えているということは往きの道で教えてもらったことだ。だが、

(拳法の修業って、牛乳配達とかもするんだ……)

牛飼娘は、俄には信じられないといった様子で、目をぱちくりとさ

せた。

そんな彼女へ、

「それにしてもき。なんでゴツチャンは、弱っちい化け物退治ばかりしてるんだろうな」

今度は少年が訊いてくる。

「えっ?」

「他のやつらがいつてたんだ。ゴツチャンはめちやくちやつええのに、ゴブなんとかばかりしか相手にしないって」

ここにきて牛飼娘は、少年のいう「ゴツチャン」が「彼」のことなのだと知った。

「さあ……なんでだろうね」

曖昧に答える牛飼娘。その脳裏に、先の彼の姿が思い浮かんだ。

少し前から冒険を共にしている女神官と、彼とのやりとり。それを思い起こすと、また胸のもよもやが湧いてくる。

そんな彼女の表情を見た少年は、

「ハラでもいたいのか」

などと尋ねたものだ。

これを受けた牛飼娘は、ぷつと吹き出す。

胸のもよもやが、どこかへ飛んで行ってしまったような気がした。この少年を見ていると、悩むこと自体が馬鹿馬鹿しく思えてくる。牛飼娘の笑みを見て、少年もまた笑う。

「ははっ。ヘンなやつ」

やがて、二人は牧場まで戻って来た。

「今日は、ありがとね」

牛飼娘が頭を下げると、

「オラだって。朝メシごちそうになったし」

言うや、踵を返し、

「おじさんにもいっといてくれよ！ メシうまかった、って！」

そう言いながら、はち切れんばかりに手を振って、彼方へと駆けて行った。

「そうだ。そうだよね」

少年の姿が消えるまで手を振り返していた牛飼娘は、独りでに呟いた。

冒険者ギルドで見た、少女と彼のやり取り。それはどこことなく、自分と話している時よりも饒舌に見えて。

「でも、関係ないよね」

自分に言い聞かせるような、牛飼娘の声。

誰と話していようが、普段よりも喋っていようが、関係ない。

そうだ。彼が帰ってきたら、また冒険の話聞かせてもらおう。仕事に悪影響が出ない程度に、夜更かしをしながら。

きつとまた、ゴブリンの話ばかりだけど。でも、その方が彼はいっぱい喋ってくれる。

「そしたら、ごめんなさいも、言えるかなあ」

思い起こすは、十年前の事。

まだ、彼女の両親がいた頃の記憶。

故郷の村から、伯父のいる牧場へ、牛のお産の手伝いへ行くことになった。

彼女は幼馴染へ、そのことを自慢したものだ。

それがどういうわけか、喧嘩へと発展してしまった。

牧場へと向かう馬車の中で、彼女は村を振り返った。

見送りに出てきたのは、彼女の両親のみ。幼馴染の彼は、とうとう来なかった。

本当は、

「一緒に行こう」

と言いたかっただけだったのに。

だから彼女は、揺れる馬車の中で、

(帰ったら、謝ろう)

と思ったのだ。

しかし今もまだ、彼女は彼に謝れずにいる。

彼が帰って来たのは、翌日の夕暮れになってから。

そして次の日は、南の森に巣食っている別のゴブリンを討伐する……予定だったらしいが、

「必要なくなった」

彼は言った。

別の冒険者が、ゴブリンを退治したかららしい。

その冒険者は、彼が女神官を伴って西の山にいるゴブリンたちを相

手にしている間、単身で南の森に乗り込み、先に向かっていた新米の冒険者三名を連れて戻って来たそうなの。

ゴブリンを侮りきっていた新米たちは、今回のことを反省し、あるいは初心者向けの依頼に従事したり、あるいは田舎へ引っ込んでしまったらしい。

依頼から帰って来た彼が、ぽつりぽつりと語るのへ、牛飼娘はひたすらに耳を傾けていた。

山岩突撃

一

新米冒険者たちの間では今、ドブさらいや巨大鼠退治といった依頼が大変な人気となっている。

その要因となったのは、ある日の冒険者ギルドでの一幕だ。

昼間から、二人の冒険者が酒の飲み比べを行っていた。

一人は、冒険者等級七位の青玉。もう一人は、それよりもさらに位が一つ高い翠玉。

周囲はどちらの冒険者が勝つかで金銭をかけあい、大いに盛り上がった。

果たして勝負は、翠玉が勝った。

しかし、事態はこれで収まらない。

熱の入った観客が、

「今度は俺も」

と腕相撲の勝負を始め、それが終わると大食いの勝負が展開する。これがいけなかった。

「俺が負けたら、メシの代金を奢ってやる!!」

威勢良く言い放った銅等級（等級四位）冒険者の言葉を、

「タダでメシが食い放題なのか!」

と勘違いした者がいた。

白磁等級冒険者の、オールラウンダーである。

今まさに野良仕事の依頼を終えて戻って来た彼は、ぎゅると腹の虫を鳴らせて銅等級冒険者へ詰め寄った。

当の銅等級は、これを挑発と受け取った。

「もう俺に勝った気でいるのか」

このことである。

こうして、勝負は始まった。

銅等級は、不安がるギャラリーたちの顔を見て、

(ガキを相手に、少し大人げなかったかな)

などと思っていた。

そして、三十分後。

「おかわり！」

五十人前の料理を平らげたオールラウンダーが、更なる追加を頼む横で、

「も、もう勘弁してくれ……」

十人前の食事をやっどこさ食べ終えた銅等級が、いい年をして目に涙を浮かべて訴える。

勝敗は、もはや誰の目から見ても明らかであった。

約束通り、銅等級はオールラウンダーの分も金を払うことになった。だが、合わせて六十人前の食事代をすぐに支払えるわけもなく。

結局彼は、白磁等級向けの依頼を請けることを強制され、その報酬を全額ギルドへ収め、その金高がツケに達するまでは勝手な冒険者活動を禁じられてしまった。

熟練の冒険者たちがオールラウンダーへ恐怖を抱く中、白磁等級の

新米冒険者たちは希望を見出していた。

「オールラウンダーみたいになれば、銅等級にだって勝てる！」

このことである。

そこで彼らは、まず形から入ることに決めた。

すなわち、ドブさらいや野良仕事などの依頼を積極的に請けるようになり、現在に至るのである。

しかし、あまりに駆け出しがそういった類の依頼に殺到するため、他に残る白磁向けの仕事と言えば、ゴブリン退治くらいしかなくなっ
てしまった。

「じゃあ、オラそれやる」

この日、珍しく遅れてギルドへ来たオールラウンダーは、受付嬢が
苦渋の末に提示したゴブリン退治の依頼をあつさりと請け負ってし
まった。

今日の彼は、山吹色の袖なし道着に身を包んでいる。

実のところ、街の服屋にこの道着の仕立てをしてもらっていたの
で、そちらに時間をとられてしまっていたのだ。

「北の山の奥でいいんだよね」

依頼書へまじまじと目を通しながら、オールラウンダーは受付嬢へ
確認する。

「え、ええ……」

まさか、一人で？ そんな疑問をぶつける暇もなく、

「じゃ、行ってくるー！」

オールラウンダーは、冒険者ギルドを飛び出していった。
受付嬢は、溜息を一つ。

前にも、彼は一人でゴブリン退治へ向かったことがあった。

南の森の小規模なゴブリンの巣。そこへ単身で突撃した彼は、先行していた三名の新米冒険者を連れて戻って来た。

受付嬢は、安堵と不安とを以ってこれを迎えた。

冒険者たちが無事に戻って来たことは嬉しい。しかし同時に、一人でゴブリンの巣へ潜り込み生還を果たし、人命救助まで成し遂げたことで、オールラウンダーが妙な自信をつけるのでは……と彼女は心配していたのだ。

今回はたまたま運が良かっただけ。所謂ビギナーズラック。少なくとも受付嬢はそう考えている。

そして今日。彼は再び、単身でゴブリンの巣へ向かってしまった。

北の山の村近くにある古い山城。そこに住み着いたゴブリンどもが、村娘たちを攫ってしまったという。

依頼者は、攫われた村娘の兄。話によれば、通りすがりの冒険者たちも救出に向かつてくれたらしいが、それでも不安でギルドを訪れたという。

聞けば、その冒険者は女ばかりの四人パーティだとか。只人はもちろん、森人^{エルフ}や圃人^{レイア}もいるらしい。

等級は鋼鉄。中堅……とまではいかないが、それでも駆け出しの冒険者が及ぶところではない。

だが、それでも受付嬢の胸中で不安が渦巻いているのは、ゴブリンによる被害をいくつも見てきたからか。

(どうか、今回も無事に依頼が果たされますように)

彼女は祈りつつ、彼がギルドを訪れてくれるのを待つことを密かに期待していた。

少なくとも、自分たちの行動の中には油断も慢心もなかった。

ゴブリンどもが根城とする山砦の広間。今にも小鬼どもの宴が始まろうとする中で、彼女はそんなことを思った。

その傍では、他に三名の女が肩を震わせ、身を寄せ合うようにしている。

ゴブリンによって裸に剥かれた彼女たちは、鋼鉄級冒険者の一党であった。

彼女たちがここへ赴いたのは、

「妹が小鬼に攫われた！」

たまたま通りかかった近くの村で、そのような悲痛の声を聞いたからだ。

殊に一党の頭目は、さる貴族の令嬢として生まれ、法と正義を担う至高神に仕える遍歴の自由騎士。攫われた村娘や、それを嘆く村人たちの姿を見て、義憤に駆られたのも当然のことと言えよう。

果たして彼女たちは、村で出来得る限りの準備を整えて山砦へ挑んだ。

昔々に森人が遺していったその砦には、侵入者を迎えるための罠が無数に設置されている。

ゴブリンどもは、これをそっくりそのまま利用していた。

前衛に行く圃人の野伏が一つ一つ罠を解除していったが、そのためには尋常ではないほどの集中力を要する。

どれほどの時間が経過した頃だろう。じりじりと慎重に奥へ進む一党の前に、横たわる女性が現れた。

囚われた村娘が、命からがら逃げ出したものか。

一党は、足早に女性へと歩み寄る。これが一つ目の失敗であった。

立て続けに罠を解除していたため、疲労が極限まで達していた圃人は、それが警報の罠であるということに遅れて気が付いた。

頭目である貴族令嬢が、倒れ伏した女を抱き起こした時、鳴子の音が砦の中へ響いた。

たちまち、ゴブリンどもが押し寄せてくる。

一党は陣形を組んで迎え撃ったが、多勢に無勢。

神経をすり減らして山砦を進んだことよって、すでにかかりの消耗をしていた彼女たちは、たちまちゴブリンどもに引き倒され、奥の広間へと運ばれた。

そこには、村から攫ってきたであろう村娘たちの屍が山のように積まれており、吐き気を催すほどの血臭で満たされていた。

(いざとなったら、私が先だって辱めを受けなければ……)

その考えが貴族令嬢の脳裏をかすめた時である。

天井を突き破って何かが落ちてきたのだ。

冒険者一党もゴブリンどもも、一様に目を丸くする。

果たしてそれは、砦の見張り役として防壁に駆り出されていたゴブリンだった。

落下の衝撃か、首があらぬ方向へ向いている。

して、その直後。またしても広間に降りてくる者が。

只人の少年だ。

山吹色の袖なし道着に身を包んだ少年は、

「おっ」

身を寄せ合う貴族令嬢たちを見やるや、

「おめえたち、そんなカッコしているとカゼ引くぞ」

呆れたように言ったものである。

もとより好きで裸になったわけではない。

反論したかった彼女たちだが、今はそれどころではなかった。

仲間を殺され、宴の場に水を差されたゴブリンたちは、怒り狂って少年へ飛びかかった。

これに少しも動じる気配を見せない少年は、背にした赤い棒を引き抜くと、

「のびろ、如意棒！」

と号令を発する。

瞬間。赤い棒はぐんぐんと身を伸ばし、迫りくるゴブリンどもを薙ぎ払った。

これに異常を見たゴブリンどもは、もはや貴族令嬢たちのことなど後に回し、目の前の少年の排除へ全力を注いでいく。

しかし、それでも少年の快進撃は止むことがない。

伸縮自在の赤き棒を振り回し、猿のように縦横無尽に飛び回る彼は、一匹また一匹とゴブリンを仕留めていく。

いつのまにやら後方に控えていた小鬼の射撃部隊が、拙い出来の矢を飛ばしてきた。

動きを止めた少年は、これを一気に掴み取ると、

「おかえしだー！」

それを小鬼どもへと投げ返した。

弦を放れた時よりも鋭い音を立てた矢は、たちまちゴブリンたちの脳天へ突き刺さる。

遂には逃げ出すゴブリンも出た。

しかし少年は、

「にがすもんか！」

電光石火の速さで奴らの目の前に回り込むと、殴り、蹴り飛ばし、確実に息の根を止めていく。

もはや得体の知れぬ恐怖に襲われていた小鬼どもは、貴族令嬢たちが広間の隅に放置されていた装備を取り戻したことにまで気が回らなかつた。

まず圃人の弓矢が放たれ、たちまち三匹のゴブリンを仕留めた。これに気付いた他のゴブリンたちが、

(まだ、あっちの方が勝ち目がある)

と踏んだものか、彼女たちへ殺到する。

だが、

「だりやつー！」

背を向けた敵の隙を見逃すわけもなく。それを追いかけた少年が、たちまち小鬼どもに追いついた。

広間における激闘は、一時間もなかつたであろう。終わってみれば、広間に夥しい数のゴブリンの骸。

それら一匹一匹の死を確認した後で、貴族令嬢たちは山積みとなつた村娘たちの屍を、沈痛な面持ちで見つめていた。そんな彼女たちへ、

「ひでえことするよな」

少年が言葉をかけてくる。

貴族令嬢が、

「……あなた、いったい何者ですか……？」

問うと、

「オラ？ オラは孫悟空だ」

実に素直な少年の返答。

その首にかかる白磁の小板を見て、貴族令嬢たちは信じられぬといった顔つきとなった。

三

激闘を終えた貴族令嬢一党と少年は、山砦を出て村へと下つていった。

村民へ、村娘たちの悲惨な末路を伝えるためである。報告を聞いた村の男たちは、

「ありがとうございますだ……」

拝むようにして貴族令嬢たちへ手を合わせたが、そのすぐ後で、堰を切ったように泣き始めた。

貴族令嬢は、なんとも居たたまれない気持ちとなる。

悲しみに暮れる彼らの姿が、故郷にいる両親と重なったからだ。

(一歩間違えれば、私もこうなっていた……)

貴族令嬢は、改めて自分がどういった状況に身を置いて旅を続けているのか……それを自覚する。

かくして一行は、重苦しい空気をまとったまま村を出た。

次に向かうは、辺境の街である。

例の少年が、そこを拠点していると話したからだ。

現在地から辺境の街へは、どんなに急いでも二日ほどは要する。ともなれば、道中に何が起きるか分からない。

気高き騎士である貴族令嬢は、そんな危険の潜む帰り道を少年一人に歩かせるほど淡白な人間ではなかったのだ。

尤も、少年が単身で山砦でまで出向いたことを考えれば、それは杞憂だと分かるものだが。

現に少年も、

「いいよ。オラ、一人で帰れるし」

口を尖らせて言ったものだ。

だが、なにも貴族令嬢の目的は少年の付き添いというだけではない。

山砦で無数のゴブリンを相手に、一騎当千の力を見せつけたこの少年の素性を、少しでも知りたいという思惑もあったのだ。

果たして少年は、

「どうか、街まで送らせてください。私たちを助けてくれたお返しもしたいのです」

という貴族令嬢の言葉に反応し、

「ううん……じゃあさ、帰ったらメシを食わせてくれよ」

食事を奢る約束を取り付けたことで、同行を承諾したのであった。そして、帰りの道中。

貴族令嬢一党は、少年の健脚ぶりに目を見張った。

長らく冒険をしてきた彼女たちも、決して足が遅い方ではないのだが、少年は疾風のごとくに歩を進めていくのだ。

「おい。はやくしないと夜になっちゃうよ」

先に行く少年が、夕焼けのかかる空を指さしながらそんなことを言

う。

山砦において溜め込んでいた疲労が一気に出たのだろう。貴族令嬢一党は、

「ちよ、ちよつと待って……」

息も絶え絶えという様子で、遂にその場へへたり込んでしまった。少年は、呆れたように彼女たちへ歩み寄ると、

「今日はここで寝るか」

と持ち掛けた。

(あの村で休んでから出立すればよかった)

貴族令嬢が後悔している間にも、

「そこでまってる。薪ひろってきてやる」

少年はそう言って、木々の中へと飛び込んでいってしまった。

「……元気ですね、彼」

そう言ったのは、只人の僧侶であった。

「いや、元気とかそういう次元の話じゃない気がするけど……」

圃人の野伏が、げんなりとして言うのへ、

「しかし、あの実力で白磁とはな」

全く信じられない、といった様子で森人魔術師が呟いた。

「オルグの大群を単身で打ち倒す白磁など、聞いたことがない」
「まさか勇者様だったりするのかな？」

圃人が言うのへ、

「……でも、勇者様って聖剣に選ばれる方なんですよね？ あの方、そんなもの持つてるようには見えませんでした……」

僧侶が首をかしげる。

それから、やんややんやと少年に纏わる考察がなされていき、

「ねえ。頭はどう思う？」

圃人に呼びかけられた貴族令嬢は、

「そうですね……」

呟きながら、その唇へ人差し指を当て、暫しの熟考。

しかし、いくら考えてみても答えは出なかった。

少年が薪を抱えて戻って来たのは、それから一時間後のこと。

彼は、客を引き連れていた。

「なんだ。おめえたちもこっちに来てたのか」

そう言つて少年が伴つたのは、古びた神官衣に身を包んだ少女と、薄汚い革鎧と鉄兜で武装した男。

貴族令嬢は、男と面識こそなかったが、その見た目と首にかかる銀の小板を見て、いつぞや水の街で聴いた、吟遊詩人の歌を思い出した。銀等級に属していながら、ゴブリン退治のみを引き受ける冒険者。

依頼者からは白金の勇者が如く思われているが、同業者からは格下ばかりを相手にする腰抜けと揶揄される存在。

「ゴブリン、スレイヤー……」

貴族令嬢が、ぼつりと呟いた。

四

焚火を囲んで夕餉を共にする七人の男女。しかし、その場の空気は重かった。

貴族令嬢一党は訝し気にゴブリンスレイヤーを見やっており、それに気づいた女神官は居心地が悪そうに俯く。

その中でひとり、少年だけは、

「なあ。なんでおめえたちはこっちに來たんだ？」

串焼きにした川魚を頬張りつつ、ゴブリンスレイヤーへ尋ねた。

すると彼は、女神官自前の葡萄酒を飲んだ後で、

「ゴブリン退治だ」

淡々と告げる。

「おめえ、ほんとにあのナメクジのフンみたいな色したやつらのことが好きなんだな」

「……好きではない」

依然として嚴かなゴブリンスレイヤーの声であったが、その中にふ

と殺気が込められたことを、貴族令嬢たちや女神官は知覚する。
しかし少年は、

「そっか」

相も変わらず能天気な反応であった。

編に凝り固まってしまった空気をなんとか変えようと、女神官は少年へ問いかける。

「あ、あの……ソ、ソンさんはどうしてこちらへ……？」

「オラ？ オラもあいつらをやっつけに来たんだ」

これを聞き、

(まさか……？)

微かな予感を抱いた女神官が、

「因みに、どこの？」

訊くと、

「ほれ。この先に村があつてさ」

魚の跡形もなくなった串をもつて北の方角を指した少年は、

「そこに、でつけえ城みたいなのがあつてさ。そこにいるやつらをやっつけてきたんだ」

これを聞いた女神官は、隣に座るゴブリンスレイヤーをそろそろと見上げる。

「……ほう」

彼は、少しばかり顔を上げたかと思いきや、次には矢継ぎ早に、

「その城とやらはどの程度の規模だ？」

「ゴブリンは何匹いた？」

「呪文遣いや田舎者ホブはいたか？」

など、詳細な情報を求めてきた。

これが終わった時には、すでに夜も更けようかという頃合い。

「……これだけいけば、火の番は問題なからう」

ぐるりと各々を見回した彼は、手短に就寝間の焚火の見張り役についてを説明した。

果たして、食事を終えた一行は、眠りに向けての支度を始める。

最初の火の番は、かの少年であった。

「起きてられっかな」

などと、初っ端から不安を匂わせる少年へ、

「あの……」

身を横たえていた貴族令嬢が、ゆっくりと起き上がって声をかけた。

「なんだ？」

「あなたは、彼のお知り合いなんですか？」

声を潜めた貴族令嬢は、向かい側で俯き座っているゴブリンスレイヤーを顎で指す。

「ああ」

少年はしつかりと頷き、

「初めてボウケンシヤになったときにさ、助けてもらったんだ」

にこやかにそう返した。

(この子が、誰かに助けられるような状況があるのかしら……)

山砦における少年の身のこなしを思い出し、貴族令嬢は少しばかり首を傾げた。

だが、この少年が嘘を言っているとも思えない。

次いで彼女は、

「彼の事、どう思います?」

「……ゴツチャンのことか?」

無骨な見た目のゴブリンスレイヤーに似つかわしくない渾名に、貴族令嬢は思わず吹き出しそうになる。

必死にこらえた後で、

「え、ええ」

貴族令嬢が頷くのへ、

「くらいけど、いいやつだぞ」

少年が朗らかに答えた。

「あいつのことも、きたえてやってるみたいだし」

少年は、ゴブリンスレイヤーの近くで眠る女神官を指さす。

貴族令嬢は、意外に思った。

先ほども述べたことだが、冒険者間でのゴブリンスレイヤーの評判というのは、あまりよろしくはない。

冒険者等級の三位に属していながら、低級の化け物であるゴブリンばかりを相手にする臆病者。それが同業者からの評価だ。

かくいう貴族令嬢も、実物を目にしたことはなかったが、

(銀等級であるならば、より強い怪物たちへと立ち向かうべきだ)

と、常々思っていた。

確かに、ゴブリンによつてもたらされる被害も看過できぬところがある。しかし、世界における敵は奴らだけではない。

魔神だの悪魔だのに比べれば、ゴブリンなどはわざわざ銀等級が自ら出向く相手でもないではないか。

(まあ、そんな相手に犯されかけ、殺されかけたけど……)

貴族令嬢の脳裏を、苦い記憶が過ぎ去っていく。

ま、それは今はいいとして、だ。

ゴブリン退治が人気のない依頼だということは、冒険者である彼女自身がよく知っていることだ。

ともすると、それだけゴブリンの被害で苦しむ者たちが蔑ろにされている、という見方もできる。

そう考えた時、ゴブリン退治を優先して引き受けているということとは、悪い事になるのだろうか。

確かに、混沌の勢力と戦うためには少しでも戦力がある。

奴らとの戦いには、世界の命運がかかっている。
だが、それ以前に。

(依頼の本質は、依頼者の平穏だ)

この考えに立ち寄った時、貴族令嬢は自身を恥じた。

冒険者としての考え方に固執するあまり、依頼者のことを深く考えたことがなかったからだ。

そこを行くと、ゴブリンスレイヤーは立派に依頼者の平穏を守っていると言えるのではないだろうか。

(他人の評判を聞いただけでは、物事の本質は見えてこない……)

このことである。

一方で、その実力を目にしてなお、未だ本質を掴みかねない少年の存在もあるわけだが……。

(世の中というのは、なんと広いのだろうか……)

貴族令嬢は改めて、そんなこと思いながら眠りに就いた。

……して、翌朝。

空が白みがかろうかという時刻に目を覚ました一同であったが、

「あれ？ おめえたちは街へいかねえのか」

かの山砦がある方角へと向かおうとするゴブリンスレイヤーと女神官を見て、少年が声をかけた。

僅かに振り向いたゴブリンスレイヤーは、

「その砦とやらに討ち漏らしがないか確認に行く。尤も、生き残りがいたとして、その場に留まっているとは考えづらいが」

それだけ言うと、

「行くぞ」

女神官を伴って、ずかずかと歩き去って行ってしまった。信用が無いというべきか、徹底しているというべきか。

「にげたやつはいなかったけどなあ」

少年はどこか不満げに言ったものだが、

「まあ、いつか。あいつらもそのうちもどつてくるだろ」

あつけらかんと言い放った。

五

怪我一つなく冒険者ギルドを訪れた少年を見て、受付嬢は安堵のため息を漏らした。

安心が行き渡ると、次には余裕が生まれ、余裕が生じると、今度は思い人の動向が気になってくる。

「あの……途中でゴブリンスレイヤーさんに会いませんでしたか？」

この受付嬢の問いに答えたのは、貴族令嬢である。

「彼なら、北方の山砦に向かいました。討ち漏らしがないか確認するそうです」

そう言われて、

「失礼ですが……？」

受付嬢は小首を傾げ、少年に視線を向けて説明を求めた。
彼はあっさりと、

「向こうで会ったんだ」

とだけ説明した。

なるほど。依頼者が言っていた、先行した冒険者たちだったか。
得心のいった受付嬢は、少年から冒険の報告を聞き納め、これを書類にまとめた。

「城の中のバケモンたちを、このねえちゃんたちといっしょにやっつけたんだ」

少年がそう言ったのへ、後方に控えていた女性冒険者たちがどこか申し訳なさそうにしている様子が気にはなったが……。

(でもまあ、皆さんが生きて帰ってきて、本当に良かった)

嬉しさ故にあまり深く考えないことにした受付嬢は、用意した依頼の報酬を少年へ渡した後で、

「オールラウンダーさんも、そろそろ昇級の頃合いですかね」

と切り出した。

「シヨウキュウ？」

硬貨の入った革袋を受け取った少年が首を傾げるのへ、

「君の場合だと、白磁から黒曜等級になれるんだよ」

一党の圍人が教えてやったが、

「そうなるよ、なにがいいんだ？」

少年は再び頭に疑問符を浮かべる。

「位が上がれば、請けられる依頼の種類が増える」

森人の魔術師が付け加えたものの、

「ふうん……」

少年はあまり興味がないらしかったが、

「よくわかんねえけど、くれるもんならもらおうぞ」

いつもの如く、あまり物事を深く考えない笑顔を以て応じた。

間章 昇級面接録

おつす！ オラ、孫悟空！

……で、メンセツつてのはなにすりやいいんだ？

……どつからきたか？ そう言われてもなあ。

オラ、占いババの家から、修業するってんで飛び出したんだけど、したら、なんかいつのまにか森の中にいてさ。よくわかんねえところだったから、筋斗雲つかおうかとおもったんだけど、亀仙人のじいちゃんにはつかうなって言われてるから……。

……筋斗雲みたいの？ いいけど……。

筋斗雲よーい！！

……ほら、こいつが筋斗雲。のるとフカフカして気持ちいいんだ。心がきれいなやつじゃなきやダメだけど。

で、なんだつけ？

……生まれたところ？ どうだろうなあ。オラ、パオズ山でじいちゃんに拾われたから。

ううん。亀仙人のじいちゃんじゃねえ。孫悟飯っていう、オラのじいちゃん。

あつ、そうだ。こないだ、占いババの家に行ったとき、死んだじいちゃんと試合したんだ。

……ウソじゃねえって。

ま、いいや。んでさ、これがじいちゃんの形見。

ドラゴンボールっていつてさ。七つ集めると、どんな願いもかなえてくれるんだ。今は石コロになってるけど、一年すると元にもどるんだ。

……へ？ いや、もうボールさがしはやってねえ。三年後にさ、天下一武道会があつてさ。

……それも知らねえの？ 南の島でやってる武道大会。人がいっぱいくるんだぜ？ ま、オラも亀仙人のじいちゃんのとこで修業するまで知らなかつたけど。

んでさ、オラ今、そのために修業してるんだ。亀仙人のじいちゃん

が、広い世界をみてこいって言うから。

でも、やつぱ世界つて広いんだな。オラ、あんなバケモノとか見るのはじめてだ。

へえ。世の中には、もつとすげえバケモノがいるのか。マジンにアクマ……。

あつ、アクマならオラこないだ闘った。ほら、さつき言った、死んだじいちゃんと闘った時。

占いババはさ、カネはらうか、ばあちゃんのとこにいるやつら五人と闘うかで占いしてくれてさ。オラたち、あと一つのドラゴンボールさがして、ばあちゃんのとこにいったんだ。

なんのため、つて……。ウパって言うやつ、殺された父ちゃんを生きかえらせてやろうつてさ。

いったろ。ドラゴンボールあつめれば、どんな願いもかなえてくれる、つて。

うん。もちろん生きかえった。

……なんの話だっけ。あ、そうそう。アクマのはなしだ。

んでさ、四人目のやつがアクマだったんだ。あんまたいしたことないやつだったけど。オラのじいちゃんのほうがうんと強かったもん。へへっ。

……へ？ オラ、人間だとおもうけど……。

あつ、シツポはえてるから人間じゃねえのかも。

ん？ ああ、いまははえてねえ。じいちゃんと闘ったときにちぎれちゃった。

そうだ。シツポもきたえとけ、つてじいちゃんにいわれてたや。またはえたら、きたえなきやな。

うん。はえてくるぞ。こないだは、天下一武道会するときにはえてきた。こんどはえたら見せてやらあ。

其の一

「面白い子だったね」

監察官は、たったいま昇級審査の面接を終えて応接間を後にした少年について、簡素な感想を述べた。

その横では、

「じよ、情報が多すぎる……」

頭から蒸気を吹き出しながら、それでもなんとか面接録を作成している受付嬢の姿があり、

「ふふ……」

更に横では、銀等級冒険者の魔女が、妖しい笑みを浮かべていた。昇級審査においては、上位の冒険者が「立会人」として同席するのが常なのである。尤も、魔女が選出された理由は、また別のことであったが……。

「……まあ、年齢詐称はよくないよね」

同僚の指摘を受け、

「うっ」

と受付嬢は筆を止める。

ちらりと横目に監督官を見ると、彼女は胸元にある、天秤と剣とを組み合わせた、至高神の聖印へ指を触れながら、

「下限より、彼は三歳も若い。まるっきりの子供だよ」

そう言った後で、

「まあ、積み重ねてきた経験は、子供どころか、上級の冒険者にだって肩を並べるほどだけだよ」

と、柔和な笑みを浮かべた。

これを受けた受付嬢は、

「その……本当にごめんなさい……」

まるで子供のように頭を下げる。

監督官は、やはり温厚な笑みをたたえたまま、

「はいよ、はいよ」

と宥め、

「聞けば彼、何度かゴブリンの巢に潜っては、その度に生きて帰って来たそうじゃない」

彼みたいに。その言葉を聞き、受付嬢は思わず顔を紅潮させる。それに気付いたか、気付かぬままか。監督官は更に続けた。

「生き残りの冒険者って、かなり貴重だからね。まあ、さっきの話からすれば、当たり前ではあるんだけどさ。初めてだよ。強がりとかじゃなくて、悪魔を『たいしたことない』って評価する冒険者」

しかも、最下級の白磁なのに。監督官は、今一度聖印をなぞった。

「……その……《センス・ライ看破》の結果って、やっぱり……」

恐る恐る受付嬢が尋ねると、

「どれもこれも、嘘じゃないね」

きっぱりとした返答が戻ってくる。

監督官の言葉を聞いてなお、受付嬢は面接で聴いた少年の話が、にわかには信じられなかった。

死者の蘇生すら叶えてくれる宝玉に、人を乗せて空を飛ぶ雲。悪魔や死人を使役する占い師。そして、只人に生える尻尾。この中で雲の存在だけは目にする事ができたが、それをもって一気に全てを信じろというのは、土台無理な話であった。

彼女の《センス・ライ看破》を疑っているというわけでもないのだが……。

果たして、未だ混乱消えぬ受付嬢を他所に、監督官は魔女へと視線を移し、

「彼に、十五歳だと偽るように仕向けたのは、あなたでしたっけ？」

と問う。

魔女は、

「ええ、そう」

躊躇うことなく答えた。

「規定違反を促すのもまた、規定違反行為ですよ」

監督官が言うと、

「ええ」

魔女はしっかりと頷いた後で、

「でも、あの子は、歳のわりに、過ぎた力が、あるわ」

「……下手に無頼漢として動かれるより、ギルドで動向を把握した方がいい、と？」

「素直で、真面目は、いいけれど、それが過ぎると、危険、だもの」「ふうん……」

監督官は、少しばかり俯いて逡巡した後、

「まあ、組合としても喜ばしいことなんですけどね。彼のおかげで、初心者たちは堅実に経験を積んでくれてる」

「それだけ、彼らがここへ戻って来てくれる確率が高くなる、ってことですからね」

そう呟いた受付嬢の表情は、どこか物悲しげ。

途端に場の空気は静まり返り、それを打ち破ったのは魔女であった。

「で、も……いい、の？ あの子に、あんな、依頼」

「依頼じゃなくて、特例を認めるための最終試験みたいなものですよ。それが達成出来たら、まあ年齢については黙認してあげる、ってだけ」

「もつと、固い、人かと、思ってた」

魔女に言われた監督官は、にこりと微笑むや、

「ただ法を守るのではなく、何故にそういう法や秩序があるのか。そこから考えるのが大事ですから」

そう言つて、つかつかと窓際へ歩み寄り、

「それに、もう何人かは例外が出ちゃってるみたいですし」

と、窓ガラスから外を見下ろした。

ギルド裏手の広場で、重戦士が新米の冒険者に稽古をつけてやっているのが見えた。

其の二

面接室からロビーに戻って来た少年は、白磁の小板をかけたまま、受付へ行くでもなく、

「あつ、いたいた」

と、壁側に設けられた小さなスペースに腰かけていた貴族令嬢一党を見て、走り寄って来た。

「おつ、面接はどうだった？」

圍人の斥候が問い、

「よくわかんねえけど、もういっぺん、あの緑のバケモノ退治してきたら、つよいのにしてやるってさ」

少年が答えた。

「……つまり、もう一度ゴブリン退治の依頼を遂行すれば、黒曜級に昇級できるわけか……」

少年の発言をかみ砕いた森人魔術師は、ついで頭目である貴族令嬢を見て、

「ギルドは何故に、そんな試すようなことを……？」

と言ったが、

「さあ……」

貴族令嬢に分かるわけもなかった。

「……それで、これからゴブリン退治に？」

只人の僧侶が尋ねると、

「そうなんだけどさ。一人でいくのはダメなんだって。ほかのやつといっしょじゃないと」

だから、おめえたちをさがしてたんだ。

少年がにこやかな笑みを浮かべたのへ、

(統率ある行動を取れるかどうかを見たい……ということなのかしら？)

などと推察を巡らせる。

少年が面接へ向かっている間、一党はギルドの中で、彼に纏わる噂を山ほど耳にしていた。

上位の冒険者はおろか、駆け出しですら見向きもしないような依頼を率先してこなしていること。

故に、「オールラウンダー」などと呼ばれ、殊に依頼者たちから崇拝されていること。

詳細は不明だが、銅等級の冒険者を打ち負かしたことがあり、それをきっかけに新米冒険者たちの憧れとなっていること。

彼に食事を奢ることだけはやめておいた方がいいというのが、冒険者と依頼者の共通認識であるということ。

そして、

「他の冒険者たちは信じてくれないけどさ。南の森に、ゴブリン退治へ行ったことがあるんだ。そこで、俺たち殺されかけたんだけど……そこを助けてくれたのがオールラウンダーだったんだ。あいつ、一人でゴブリンたちを倒しちまってさ。その時だけは、ゴブリンよりもあいつの方が化け物に見えたよ」

然る新米冒険者が、そのようなことを口にしていた。

山砦での経験がある貴族令嬢たちは、その話が真実であると確信している。

単独で敵陣の懐に潜り込み、怪物を相手に無双の力を発揮する冒険者というのは、確かに頼りとなる面がある。

しかし一方で、

「俺は強い」

と自惚れたり、好き勝手をする者がいないとも限らない。

(彼に限って、それは無いと思うけど……)

貴族令嬢は、少年……もといオールラウンダーをそう評価しているが、ギルドとしては、

「あの人が悪いことをするわけがない」

と無根拠に断定するわけにもいかないのだろう。

だから一党を組ませて、その中できちんとした行動を取ることが出来る……という実績が欲しいわけだ。

貞操や命の危機を救われた身としては、その恩返しとして、彼の昇級のために一党を組むなどは、わけもないことである。

……うまくすれば、食事を奢らなくても済むし。
貴族令嬢の考えを、他の面々も持っていたらしい。

彼女たちは一様に、力強く頭目へ頷いた。

こうして、話はまとまった。

オールラウンダーを新たに迎えた一党は、ひとまず宿をとることにし、朝日が昇るのともに出立することになった。

「オラ、べつにいまからでもかまわねえけど」

「君が良くて、こつちがくたくたなの」

山砦から辺境の街に辿り着いて、すぐに少年の面接という、異例の駆け足日程だったのだ。

ここまで野宿ばかりであった貴族令嬢たちは、宿の暖かなベッドに身を投げ出したい欲求を抑えきれなかった。

それを知ってか知らずか、

「そっか。わかった」

少年は不満を口にするでもなく、あっさりと彼女たちの欲求を承諾し、

「まだ日も暮れてねえから、オラはもうちよつと野良仕事やってくる。

じゃ、明日の朝なー!」

元気よく言うや、冒険者でこつた返す掲示板へと潜っていった。

「元気ですね、彼……」

一党の中で最も疲労の色が激しい只人の僧侶が、げんなりとして咳くのへ、

「でも、あの元気を見れば、こないだの活躍は納得だよ」

小さな机に体を伏した圃人が、呆れたような表情で答える。

「しかし、あの時のあの動きは……只人の領域を超えているようにも思えたが……」

森人は、ちらりと貴族令嬢を見やり、

「只人も、鍛錬を積みあげたような……電光石火の動きが出来るものなのだろうか?」

と尋ねる。

「私は……自信ないですね……」

貴族令嬢は引きつった笑みを浮かべ、そう答えた。

其の三

辺境の街から南西へ歩くこと二日。鬱蒼とした森の中を更に進むと、ぽつかりと口を開けた洞窟が冒険者たちを待ち構えている。

オールラウンダーと貴族令嬢の一派がそこへ踏み込んだのは、ちょうど昼時であった。

先頭を歩くは、オールラウンダーと圃人。その後を魔術師と僧侶が行き、最後尾を貴族令嬢が守る。

道中、いくつもの罠が彼女たちを待ち受けていたが、先の山砦に設置されたものに比べれば、数も質も落ちるというもの。

それも当たり前で、砦の罠は、先住民である森人たちが対小鬼用に施したものであり、後から住み着いた小鬼どもがそれをそっくり利用したに過ぎないのだ。

しかし、圃人に油断も慢心もない。

一つでも罠を見落とせば、たちまちゴブリンどもの雪崩が押し寄せてくる。そうなれば、自分たちの辿る末路は……。

裸に剥かれ、死を目の前にしたあの時のことを思うと、いかに不出来なゴブリンの罠とはいえ、それを侮る気にはなれなかった。

さて、それからどれほど奥へ進んだ時であろうか。

「これは……」

圃人は、手にした松明を前方へ向けて唸った。

道が、右に左に真っ直ぐに……と、三方へ分かれているのだ。

すると、

「どれ」

前へ出てきたのは、森人魔術師。

彼女は、鋭い耳を澄ませるや、三方それぞれから聞こえる微かな音を、しっかりと掴んだ。

果たして得られた情報は、

「左手に、二匹の小鬼。恐らくは巡回役。真ん中は、多数。右手の道からは、何も聞こえない」

ということ。

「おめえ、耳いいんだな」

感心したようにオールラウンダーが言うのへ、

「これは飾りではないのでな」

どこか誇らしげに、森人は指で耳を弾いた。

かくして、道は決まった。

「では、まず右手の道を行って、安全を確認。次いで左手を制圧。そして真ん中を叩きましょう」

こういて右手の道を行った一党を待ち受けていたのは、見るも無残な光景。

叩かれ斬られの傷が残る鎧をはぎ取られ、裸体を晒された女の冒険者……だったものが地べたに転がされ、そのすぐ傍には、肉塊の山が積みまれている。

小鬼どもの、食糧庫と言うべきか。

腐りかけの肉と、血とが混じり合った臭いに、一同は顔を顰める。

鋼鉄級冒険者として、こういった光景を何度も見てきた貴族令嬢たちであったが、それを見て無表情を突き通せるのでは別の話だ。

僧侶が、吐き気を必死に我慢して、亡き冒険者の魂が神の元へ召されることを祈る。

その横で、

「あいつら、ほんとにひでえことするな」

両手で鼻を抑えたオールラウンダーが、げんなりとした顔で呟いた。

かくして、次に一党は左手の道へ進む。

森人によれば、こちらには二匹のゴ布林しかいないというので、分岐点にオールラウンダーと僧侶を残していく。万が一、中央の道からゴ布林が来てもいいように、である。

暫く進むと、

「……こつちに一匹、向かってくる」

森人が耳を張り、声を潜めてそう言った。

圃人は矢をつがえ、貴族令嬢は剣を引き抜く。

果たして、暗がりから出てきたゴ布林が、警告の声を上げるより

早く、

「GYA……！」

圍人の放った矢により、喉元を射抜かれたゴブリンは、ぱたりと斃れた。

「これで、後一匹……」

一息つく貴族令嬢へ、

「もう片方は、安堵して眠っていると思うが……油断はしないほうがいい」

森人が冷静に告げる。

「勿論ですとも」

そして、道を行った果てに待つ小部屋……のような空間。

そこでは森人の言うように、一匹のゴブリンが眠っていた。

貴族令嬢は容赦なく、その奴の口を塞ぎ、喉元へ剣を突き立てる。

くぐもった悲鳴は、洞穴の中に木霊することはない。

血を拭った貴族令嬢は、いまいちど小部屋の中を一巡し、他に何もいないことを確認してから、圍人と森人をもなつて分岐点へ戻った。

「いよいよよ、この道ですわね……」

不安げな、僧侶の声。

一同は中央の道を鋭く見据え、やがて進んでいく。

陣形は、来た時と変わりはない。

巡回役のゴブリンを片付けた以上、挟み撃ちは考えにくいだが、それでも用心に越したことはないのである。

やがて、先頭を行く圍人とオールラウンダーが足を止めた。

『いた……』

二人が同時に囁き、松明を前方へ突き付ける。

露わになったのは、吹き抜けの広間。

そこに雑魚寝する、無数のゴブリン。

「いや……なんだ、あいつは……」

広間奥を見やって、森人が戸惑いの声を上げた。

竜の鳴き声と聞き違えるほどの、低く悍ましい軀をかいているそれ

は、恐らくゴブリンだ。

緑色の肌に、不快を催す醜悪な面は、まぎれもなく奴らと同種。

だが、その体は貴族令嬢たちの倍ほどはある。

「田舎者……!?!」

圃人の驚愕の声へ、

「いや、どこか違う……」

森人が、やはり目を見張りながらも呟いた。

「ど、どうしましょう……」

僅かに戦意を失いつつある僧侶が尋ねるのへ、

「そんなのきまってるあ」

返答したのは、オールラウンダー。

「あのでっかいのは、オラがやっつける」

言うや、

「これ、かりるよ」

貴族令嬢から松明をひったくると、

「やいやいやいやいやいー」

威勢のいい掛け声とともに、広間へ躍り出たのである。

其の四

けたたましいオールラウンダーの叫びによって、一斉に跳ね起きたゴブリンどもは、罵声と共に彼へと殺到する。

「ああ、もう……！」

覚悟を決めた貴族令嬢は、腰元から剣を引き抜きつつ、

「《ホリライイト聖光》で光源を確保！ 呪文と奇跡で援護してください！」

僧侶と魔術師へ呼びかける。

「あたしは、弓矢でってね！」

圍人が矢をつがえるのへ、貴族令嬢は力強く頷いた。

果たして、遅れて広間に飛び出した貴族令嬢は、なるべく声を出さず、少年へ夢中となっているゴブリンどもの不意を突いていった。

しかし、斃す数が多くなると、それだけ血脂で剣が鈍る。

無論、拭っている暇などない。

手早く長剣を鞘へ納めると、傍らの骸から棍棒をひったくり、これを振るう。

二匹の頭蓋を砕いたところで、棍棒も限界を迎える。

ならば、今度は石斧で……。

次々に得物を変えていく貴族令嬢。その僅かな隙を補うのは、後方からの支援。

只人僧侶が灯した明かりを頼りに、圍人斥候が矢を放ち、それでも貴族令嬢へ襲い掛かる影があるなら、森人魔術師が術を放つ。

ゴブリンどもとて、その三名を無視するわけがないが、それへ向かうとすると、今度は貴族令嬢が襲い掛かってくる。

だが、数で押しきれば……。

ちっぽけな頭でそんなことを思考していたゴブリンどもへ、櫛を飛ばす存在が。

広間の奥で眠っていた、大柄のゴブリン……奴らの中での白金級チャンピオン英雄である。

頭の叱咤を受け、ゴブリンどもは死に物狂いで迫ってくる。

さすがに息を切らせた貴族令嬢へ、後方の支援をも掻い潜ったゴブ

リンが飛びついてきた。

「ぐっ……」

一匹に手間取ると、あとは一気に迫ってくる。

殴りつけられ、装備を剥がされようとする貴族令嬢だったが、

「こんにやるー！」

割り込んできたオールラウンダーが、群がるゴブリンどもを蹴散らしていく。

「おい。だいじょうぶか」

差し出されたオールラウンダーの手を、

「あなたが突然飛び出したりするから……」

愚痴をこぼしながら、貴族令嬢は掴む。

その間にも、未だ数の上で有利を誇るゴブリンどもが殺到する。

すると、何を思ったかオールラウンダーが、

「こっちだー！」

貴族令嬢の手を引き、圍人たちのいる方へと駆けだした。

(確かに、今は撤退した方がいい……)

無数のゴブリンがいることは覚悟していたが、あの大柄種はいかな
オールラウンダーといえども手に負えそうにない。

洞窟を出て、一旦立て直しを……。

そのうち、圍人たちをも連れて、オールラウンダーは先の三方の分
岐点まで引き返し、

「よしー！」

頷くや、くるりと後方を見た。

せつかくの獲物を、取り逃がすゴブリンどもではない。

それに、オールラウンダーが背を向け走り出したのを、自分たちに
恐れをなしたと勘違いしているのである。

「に、逃げるなら早くしようよー！」

焦る圍人には答えず、オールラウンダーは徐に両手を前に突き出
し、

「か……」

小さく呟く。

(何かの呪文……?)

貴族令嬢が訝しんでいる間に、オールラウンダーは突き出した両手を重ねるようにして、腰元へ引き寄せつつ、

「め……」

またもや呟く。

瞬転。彼の掌に、青白い炎が灯った。

(なんだ……この力は……?)

見たこともない術に戸惑う森人を他所に、

「は……」

少年が力を込めて呟くと、青い炎は更に激しきを増していく。

僧侶は、生命力あふれるその炎に見惚れ、ゴブリンが迫るのも忘れていた。

「め……」

果たして、ゴブリンどもが眼前に迫ったところで、

「波あ!!」

少年が勢いよく腕を突き出した。

それと同時に、青い炎が尾を引いてゴブリンどもへ向かって行く。

激しい生命力の波が、瞬く間にゴブリンどもを呑み込み、骨すら残すことなく、消し去ってしまった。

「どうだっ! これだけでっこうやつけただろ」

得意げになった少年は、再び背中 of 棒を引き抜き、

「よしっ! 突撃だ!」

一党へ発破をかけると、またしても奥の広間へと向かって行く。

「……わ、私たちも行きましょう、か……」

貴族令嬢が呟くのへ、かろうじて頷いた三名もまた、洞穴の奥へと進んでいった。

其の五

広間へ戻って来た冒険者を見て、小鬼英雄はいやらしく顔をゆがめた。

やはり、奴らは馬鹿だ。

小鬼程度をやつつけたところで、自分は強いと思っている。

確かに、先の青い炎は妙な術であった。だが、それが有効であるかは全くの別問題。

小鬼どもを呑み込み、焼き尽くしたそれを、英雄は片腕払って弾き飛ばしていた。それが証拠に、広間天井には大きく穴が開けられ、太陽の光が差し込んでいる。

しかし、オールラウンダーは飽くまでも落ち着き払い、

「やっぱはじかれてたか」

そう言うのみ。

矢をつがえた圍人は、それを英雄へ向けたまま、

「どうする、頭。ここは逃げるが吉だと思っけど……」

その言葉へ、貴族令嬢が頷きかけたのへ、

「だいじょうぶ。オラにまかせとけ」

オールラウンダーが、胸を張った。

「しかし……」

森人は不安げに、

「お前の……先の妙な術も、あいつには通用しなかったようだが……」
と声をかけたが、

「うん。おもいつきりやったら、ここがくずれちまうからな」

素直に答えたオールラウンダーは、続けて、

「でも、ここなら力をちよつとばつか出してもへつちやらそうだから、だいじょうぶ！」

言うなり、小鬼英雄目掛けて突進を仕掛けた。

その動きを理解できたのは、オールラウンダー本人以外にいない。

貴族令嬢一党も、小鬼英雄でさえ、彼の姿が瞬間的に消えたものだ

と錯覚した。

果たして次にその姿が現れたのは、小鬼英雄の眼前。

「でりゃっー！」

掛声と共に、オールラウンダーは英雄の顔めがけて蹴りを入れる。

英雄の体は直線を描き、やがて岩壁に激突した。

それでもなお、数秒の間において何とか起き上がることが出来たのは、さすが「英雄」といったところか。

だが、オールラウンダーは容赦なく、

「でっけえわりに、あんま強そうじゃねえな」

思ったままのことを口にした。

その言葉を理解したものか……。

「GYAOGAROO!!」

怒声を上げた英雄が、オールラウンダー目掛けて突進を仕掛けてくる。

やがて距離を詰めた英雄が、丸太のような右腕を突き出してきた。

オールラウンダーはそれを見て、恐怖を覚えるでも、怯むでもなく。

「じゃん拳……」

不思議な掛け声の後に、

「グーー！」

同じく、拳を突き出した。

ぶつかり合う両者の拳。だが、それも一瞬の事。

競り勝った（そもそも競るほどの勝負ですらない）オールラウン

ダーの拳が、またしても小鬼英雄の体を吹き飛ばす。

二度目の、岩壁への激突。

こんな、小鬼と変わらぬ背丈の奴に！

限界を超えた憤怒を以て立ち上がった小鬼英雄は、懲りずにまたも

やオールラウンダーへ向かう。

そして、渾身の右殴打を……。

そこで、彼は違和感を覚えた。

腕が上がらぬ。

見てみると、右手の指という指はあらぬ方向へ曲がり、だらだらと

鮮血を垂らしている。

怒りによつて、我だけでなく痛みすら忘れていたらしい。果たしてそれが、小鬼英雄が見た最期の光景であった。

「だりやつー！」

闘いにおける、大きすぎる隙をオールラウンダーが逃すわけもない。

飛び上がり、先よりも足に力を込めて放った蹴撃は、小鬼英雄の首を真後ろへ捻じ曲げてしまうほどに強烈だった。

地響きを立てて、小鬼英雄は斃れる。

なんとも呆気ない幕切れであった。

さて、それから三日後の昼下がり。

昼下がりを迎えた辺境の街に、珍妙な集団がやって来た。

集団は、全部で五人。

只人が三人に、圃人と森人がそれぞれ一人ずつ。

そのうちの只人少年は、自分よりもずっと巨軀である大柄な小鬼の骸を持ち上げていた。

かくして一党が辿り着いたのは、冒険者ギルド。

すでに冒険者たちは依頼書を手にし、各々の冒険へと向かっている。

すなわち、今この時、ギルドを利用しているのは依頼者である一般人たちが殆ど。

彼らは、大柄小鬼の骸を持ち上げている少年を見るや、

「あれは……オールラウンダーじゃないか……」

口々に、その名を呟いた。

つい先日、野良仕事やドブさらいを依頼した可愛らしい冒険者が、醜悪で大柄な小鬼の骸を、訳もなく持ち上げている。

その光景に、依頼者たちは戦慄を覚えた。

しかし、それも気にせず少年……オールラウンダーが、

「ねえちゃん。いわれたとおりに、あの緑のやつらをやつつけてきたんだけど……どうすればいい？」

言うのへ、応対に出たのはギルドの支部長。

証拠……ともいえる小鬼英雄の骸とオールラウンダーとを見て、困惑と恐怖が胸の内で緋い交ぜとなった彼は、それでもギルドの支部長としての誇りを思い、やっとのことで一言。

「ともかく、応接間へ」

こうして、オールラウンダーと貴族令嬢一党は、冒険者ギルド二階にある応接間へと案内される。

……小鬼英雄の骸は、ともかく臭いが敵わぬというので、早急に処分されることとなった。

其の六

「さ、お掛けになってください」

おっかなびつくりといった態度の支部長に促され、オールラウンダーと貴族令嬢は、あかがね色の布が張られた椅子に腰を下ろした。

対面には支部長と、先の監督官が座る。

因みに言うと、圃人をはじめとする他の三人は、

「全員が座れそうにはないから」

と、一階のロビーで待っていることになった。

「それで、彼の昇級の件ですが……」

最初に話を切り出したのは、貴族令嬢。まるで息子の行く末を案じる母親のように、どこか不安げにギルド職員たちへ視線を送ると、

「あつ、いや……あれを持ってこられたのでは、昇級を認めないわけにもいきませう。無論、白磁から黒曜への昇級を認めましょう」

むしろ申し訳なさそうに、支部長がそう答えてくれた。

（あの大柄種を斃したのは、この子一人なのに……それでも一段上がるだけなのか……）

内心、貴族令嬢はそのことに不満を感じたが、さすがにオールラウンダーは白金等級のようにはいかないようだ。

当の本人も、

「ふうん」

と、さして興味もない様子。

果たして、話は次へと進んだ。

「で、ここからが本題なのですが……」

何やら重々しい表情となった支部長は、横に座る監督官へと視線を送り、言葉の続きを促した。

「こほん」

咳払いを一つした監督官は、

「面接を通して、オールラウンダーさんに関する話は大方把握できました。ただ……」

言葉を詰まらせ、オールラウンダーを見る。

彼は、ちよこなんと椅子に腰かけたまま、首を傾げて監督官を見返した。

その様子を見た監督官は、肩を竦め、どこか諦めたように笑うと、「信じるか否かはそちらに任せますけど……どうも彼は、この地から走つても泳いでも、まして空を飛んでも決して辿り着くことのない……そんな彼方の世界からやってきた……そうとしか思えないのです」

などと言ったものである。

あまりに荒唐無稽な発言に、貴族令嬢は言葉を失う。

一方でオールラウンダーは、

「筋斗雲でもいけねえのか」

彼女の言葉が真実であると前提して話を進めている。

監督官は先の質問に、

「いけないだろうね」

きつぱりと言った後で、

「さつきも言ったけど、どうやら君の住み暮らしている地と、こことでは空も陸も海も続いてないんだ」

「……よくわかんねえけど、いけねえ、ってことか」

「そゆこと」

「まいったな」

困惑気味だったオールラウンダーだが、

「ま、いっか」

あつけらかんとして言い放ったことに対して、その場にいる全員が脱力した。

「まあいいって……元居た場所に帰りたくないんですか?」

呆れたように問う貴族令嬢へ、

「そりゃ、帰りたいけどさ」

オールラウンダーは一言置いて、

「でも、帰りがたがわかんねえなら、しょうがないじゃん。それにさ、ここにこれたつてことは、帰りがただつてあるはずだ」

要するに、この地へ飛ばされた方法があるのだから、元の世界へ戻

る手立てもきつとある。そういうことだ。

一番大変な状況にある本人が、そのように割り切っているのだから、貴族令嬢が口を挟む余地はなかった。

と、そこへ。

「まあ、確かとは言えないけど……君を元の場所へ戻すことができるかもしれない方法が、一つだけあるよ」

監督官が人差し指を立てつつ、

「《^{ゲート}転移》が記された^{スクロール}巻物なら、あるいは……」

その言葉を聞き、貴族令嬢は目を見張る。

失われた呪文である《^{ゲート}転移の記された巻物。空間と空間とを繋ぎ、彼方へと通じる門を形成する古代の代物。

冒険者にとっては喉から手が出るほど欲しいもので、故に市場に出回ることはない。

入手するには、実際に遺跡へ潜って探索をしなければならない。

無論、全ての遺跡に巻物があるとは限らない。

余程の幸運がなければ……それこそ白金等級の冒険者でもない限り、手にすることなど不可能である。

しかしオールラウンダーは、

「わかった！」

はつきりと頷き、

「その紙きれを探せばいいんだな？」

「……大変、なんてもんじゃないよ？ それに競争率だって高い。今こうしている間にも、他の冒険者が手にしてるかもしれないし」

「へっちゃらさ。探し物はなれっこだから」

元氣よく椅子から立ち上がったオールラウンダーへ、それまで沈黙していた支部長が、

「……こちらとしても支援はしていきたい形ですが……冒険暦の長い方が傍にいれば、それだけ目ぼしい遺跡の情報は入りますでしょう？」

そう言つて、貴族令嬢を見やった。

「へ？ わ、私……たちですか？」

「戦いの才能は秀でていられるかもしれませんが、彼はこの地に関する情報をあまり持ち合わせてはいない。一方で、鋼鉄級の冒険者であり、自由騎士として旅するあなたなら、彼の知らない地理に関する情報を提供できる」

支部長の横で、監督官が胸元の聖印を撫でている。

なるほど。看破されていたか。

「……ですが、私たちは鋼鉄級です」

序列八位の鋼鉄級は、冒険者として慣れてきた時期ではあるが、中堅と呼べるほどの技量でもない。

もっと等級が上の冒険者であれば、それだけ経験が豊富だし、遺跡に関する情報だって持ち合わせているだろう。

そこまで考えたところで、

(いや、でも……?)

貴族令嬢は踏みとどまった。

思い起こす、山砦や洞窟での戦い。

規格外の強さを誇る少年に、自分たちは助けられてばかりだった。そのうち、胸の中で悔しさが湧いてくる。

彼が白磁だったからとか、そういうことに拘っているのではない。なによりも、力のない自分に対する悔しさだった。

(自分も、強くなりたい)

誇り高き貴族令嬢は、ちらりと横目にオールラウンダーを見る。

(それに……私はまだこの子に何のお礼もしていない……)

小鬼英雄退治に洞窟へ向かった時も、結局は彼のおまけに終わってしまった。

(だったら……せめて……)

こうして、決心がついた。

貴族令嬢は椅子から立ち上がり、

「正直、貴方に比べれば私は力不足かもしれませんが……でも、どうしても何かお礼がしたいのです。どうか、冒険を一緒に緒させてくれませんか?」

差し伸べられた手を、

「いよいよ」

オールラウンダーは、屈託ない笑顔で握り返した。

其の一

「ああ、もう！　今回もハズレかあ……」

広々とした空間に、圃人斥候無念の声が響く。

彼女の目の前には、錆びた金貨の詰まった宝箱。

何かと物入りの冒険者にとって、これほど心強いものもないのだが、いま彼女たちが欲しているのは金ではない。

「まあ、そう簡単に《転移^{ゲート}》の巻物は見つからない、ということさ」

圃人斥候の肩へ手をかけた森人魔術師が、励ましの言葉を贈る。

そのすぐ後ろでは、

「しっかし、こうしているとブルマたちとドラゴンボール探ししてた時を思い出すなあ」

などと、手を頭の後ろで組んで呑気に呟く少年……オールラウンダーと、

「本人がこの様子ですからねえ」

只人僧侶が、呆れたように笑った。

圃人斥候は、背にした革袋へ金貨を詰めつつ、

「自分のことなのに危機感がないって、どういうことよ」

口を尖らせ、

「ねえ、頭？」

次いで一党の頭目である貴族令嬢へ、同意を求めた。

「そうですねえ……」

果たして貴族令嬢は、ぐるりと周囲を見回し、空返事。

ここは、辺境の街から北西へ歩いて三日ほどの所にある古代の遺跡。その最奥。

内装からして、恐らく礼拝堂。

左右の壁には、健やかな顔をした女神の彫刻が飾られているが、それへ蔭が絡みつき、文明の痕跡と自然の浸食とが、得も言われぬ美しさを表現している。

暫くそれに見とれていた貴族令嬢は、

「ねえ、聞いてる？」

袋へ金貨を詰め終えた圃人が、ぐいと顔を近づけたのに驚いて、「うえっ!？」

いつにもなく情けない、そしてどこか幼い声を上げた。それを見た一党が、からからと笑う。

紅潮した貴族令嬢だったが、やがて彼女の中でもおかしさが湧き、仲間の笑いに続いた。

さて、それから三日後の昼下がりである。

遺跡探索の結果をギルドへ報告していた一党であったが、どこか受付嬢の顔に翳りがある。

本人は、営業用の笑顔を張り付けているつもりであったが、傍から見て無理をしていることが在り在りとしていた。

そんな彼女へ、

「どうしたんだ？　くらいカオして」

オールラウンダーが、直球をぶつける。

受付嬢は、どきりと目を丸くしたが、やがて負けを認めたとように情けなく笑うと、

「実は……」

と切り出した。

それは、二日前の事。

例によってゴブリン退治に出向いていたゴブリンスレイヤーが、酷い有様で帰って来たのだ。

薄汚い革鎧はひしゃげて壊れ、常備している中途半端な長さの剣は折れかけていたそうなの。

聞けば、潜入した遺跡の中で、ゴブリンスレイヤーとその一党は、オーガと交戦したのだという。

「おおが、ってなんだ？」

オールラウンダーが尋ねるのへ、

「強固な盾を持つ騎士ならば、その盾ごと叩き潰し……数多くの術を会得した魔術師ならば、それを凌駕する数の術を以て焼き殺す。その実力は、冒険者等級第三位の銀等級ですら、立ち向かうことに恐れをなす強敵。それがオーガだ」

森人魔術師が答える。

「すげえ強い、つてことか」

「そんな言葉では表現できないほどに、な」

「へえ」

話を聞いたオールラウンダーは、

「そんなつええ奴がいるのか……」

と、どこか嬉しそうに呟いた後で、

「でも、スツチャンは勝ったんだろ？」

受付嬢へ問うた。

因みに、ゴ布林スレイヤーのことを「ゴツチャン」から「スツチャン」と呼び改めているのは、

「その、ゴツチャンというのはやめろ」

とゴ布林スレイヤー本人から、以前に言われたからである。

「じゃあ、スツチャンならいいか？」

オールラウンダーの問いかけに、ゴ布林スレイヤーは頷くでも首を振るでもなかった。

オールラウンダーは、これを肯定と解釈したのだ。

さて、話を戻そう。

オールラウンダーの問いかけに、

「ええ。斃したことは斃したのですが……酷いケガを負ったらしくて……」

それでも、彼はしっかりとした歩調で受付まで歩き、いつものように依頼完了の報告を行った。

どうやら女神官の他に、彼は三名の仲間を引き連れていたようで、そのうちの一人が授けた《治療リフレッシュ》によって、身体の傷はとうに癒えていたのだという。

しかし、彼に押し掛かった疲労はすさまじく、帰還してから今日までの二日間、彼は近くの牧場に籠ったまま、街にも姿を見せていないそうなの。

これを聞いたオールラウンダーは、

「なあ。スツチャンの見舞いに行ってもいいか？」

頭目の貴族令嬢へ尋ねた。

これを断る理由を、彼女は持ち合わせていない。

「勿論、いいですけど……」

彼女が言い終えるか否かというところで、

「サンキューー！」

風のようにギルドを駆け出していった。

其の二

「あつ、やっぱりスツチャンだ。ニオイでわかったぞ」

牧場へと辿り着いたオールラウンダーは、ぐるぐると周囲の柵を点検している青年の姿を捉え、声をかけた。

「……」

青年は、オールラウンダーを一瞥したものの、やがて再び柵へと目を移す。

「あいかわらず、むくちなやつだな」

さして不快の表情も見せず、むしろどこか面白がるように笑ったオールラウンダーは、ぴつたりと青年の後につく。

「聞いたぞ。おめえ、シヨーガにやられたんだって？」

「……オーガ、だそうだ」

「ふうん……なあ、強かったか？」

オールラウンダーの問いかけに、青年はふと空を見上げ、考えた。透き通るような、雲一つない青空である。

「いや」

青年は一言の間を置き、

「ゴブリンの方が、よっぽど手強い」

淡々と告げた。

すると、

「あの緑のちっこいのより、弱っちいってこと？」

オールラウンダーが、聞き返してくる。

青年は、亀裂の入った柵を見つけ、屈みこんで詳しく検めながら、

「……腕力だの、魔術だのであれば……奴はゴブリンよりも遥かに強い」

「でも、弱いのか」

「所詮、目の前の獲物を力で捻じ伏せるだけのやつだからな」

言うや、青年は立ち上がり、ずかずかと牧場の蔵へと歩を進めた。

やはり後続くオールラウンダーへ、

「ゴブリンどもは、違う」

青年は言葉を繋ぐ。

「自分たちの罅を襲って荒らし、仲間を殺していった奴らへ、報復を思い至って鍛え、考え、成長する。時には失敗することもある。ならば、次はどのような方法で殺そうかと、更に考える。それが繰り返されていくうちに……楽しくなるわけだ」

歩を止めた青年は、オールラウンダーへと向き直ると、

「冒険者としての戦いは、騎士道精神溢れる『ご立派』なものではない」
そして、更に続ける。

「所詮は、ただの殺し合い。殺すためには、当然力も必要になってくるが……それが届くための策を練らねばなるまい」

そう言った点では、ゴブリンは優れている。

奴らは、いかに残酷に獲物を屠るか……そのことに情念を注ぎ、考える。

その時に発揮される知能は、冒険者の及ぶところではない。

倫理や道徳など糞喰らえの考えなど、『お優しい』冒険者どもは想像できるわけもないのだから。

「よくわかんねえや」

淡々と続いた青年の語りを、しかしオールラウンダーはあっさりと打ち破った。

オールラウンダーは、後ろ手に頭を抱えつつ、

「ワナには気を付けろ、ってことだろう？」

合っているような、合っていないような。

オールラウンダーの言葉に、青年は深い溜息を一つするや、

「まあ、罫に引っかけたかとして、意に介さないような奴もいそうだがな」

楽観的な態度への皮肉と、どこか不思議な雰囲気を放つ少年への、ある種の称賛を込めて、青年は呟いた。

果たして青年は、歳より横木を持ち出すと、柵の修理に取り掛かる。

そこへ、

「あつ、オールラウンダーさん！」

豊かな胸を揺らしながら、こちらへ駆け寄ってくる人物。

牧場主の姪にあたる、牛飼娘だ。

「おっす！」

オールラウンダーの挨拶に、

「おっす！」

牛飼娘もまた、元気よく返答した後で、

「久しぶりだね！ 農家のおじさんとか、街の人たちが寂しがってたよ？ 『オールラウンダーさんは、冒険が楽しくなったから、私たちの依頼なんかどうでもよくなったんだ』って」

「へへっ。オラ、巻物ってやつを探しててさ。だから、あっちこっちの遺跡に潜ってたんだ」

「へえ。どう？ お目当てのものは見つかった？」

「ううん。その巻物、なかなか見つからないんだって。……なんて言っちゃつけない。でえと、とか……言っちゃ気がするけど……」

そこへ、

「《ゲート転移》の巻物、か」

青年が言葉を挟んだ。

「なんだ。スツチャン知ってるのか」

「……先のオーガとの戦いで、使った」

「へえっ!? スツチャン、巻物もってたのか」

目を丸くしたオールラウンダーは、

「それだったら、スツチャンからゆずってもらえばよかった」といふが、

「それは無理な相談だ」

青年は、

「早い者勝ち、というやつだ」

手早く柵の修繕を終えて、そう言い放った。

オールラウンダーはこれに、

「そっか。じゃ、次は負けねえからな」

実に素直に応える。

「やっぱり、冒険者同士だと話が弾むんだねえ」
横から、牛飼娘が声をかけてきた。

それは嫉妬からくる皮肉というわけではなく、饒舌な彼を見ての安堵からくるもの。

「別に、弾んでいるわけじゃない」

「そう？ あたしに冒険の話をしてくれてる時より、よっぽど口数多いと思うけど」

「……」

黙りこくってしまふ青年へ、悪戯っぽく笑った牛飼娘は、

「悪いと思うなら、もうちよつとあたしに話す時も、楽しそうにしてくれるといいんだけどなあ」

「……楽しんでるわけではない」

そんな二人のやり取りと見て、オールラウンダーは、

「ははっ」

軽快に笑うと、

「まあ、死んでねえならよかった。なあ、オラはこれから街へ戻るけど、おめえはどうする？」

青年へ問うた。

青年は首を振り、

「装備一式の修理が、明日終わる。向かうとしたら、その時だ」

「そつか！ まあ、達者でよかった。じゃ、また明日な！」

ぶんぶんと手を振りながら、オールラウンダーは牧場を去っていく。

「また明日、か……」

去り行く少年へ、手を振る牛飼娘が寂しそうに呟き、

「冒険者って、さ。明日をも知れぬ、つて奴じゃない？ でも、なんか不思議。あの子は、ほんとに明日も元気で会えそうな気がする」

「……そうか」

青年は、小さくなっていく少年の背を見つめながら、ぽつりと言葉を吐いた。

其の三

空に、じんわりと夕焼けがかかってきた。

ベルを鳴らし、辺境の街の冒険者ギルドへオールラウンダーが入った時、

「あつ、ソンさん！」

二階へと続く階段から、とたとたと駆け下りて来る者がいた。

女神官である。

「ひさしぶりだな！」

「はい」

ペこりと礼儀正しく頭を下げた女神官の首から、黒曜の小板がかかっているのを見たオールラウンダーは、

「あつ！ おめえも黒くなつたんだな！」

彼女の認識票を指さして言った。

「はいっ！」

顔を上げた女神官が、少しばかり頬を染めながら頷く。

して、彼女もまた、オールラウンダーの首に下がった黒曜の認識票を見るや、

「ソンさんも、黒曜になられていたんですね」

「ん？ ああ、これか。へへっ。でっかい緑のバケモノやつつけたらさ、これになつたんだ」

久方ぶりの再会と、互いの昇級に喜びを分かち合っている二人の元へ、

「お友達？」

凜とした声音が割り込んできた。

見ると、そこには三者三様の冒険者が。

一人は、長身痩躯、容姿端麗な森人^{エルフ}……いや、他の森人よりも長い耳を持ち合わせた彼女は、上の森人^{ハイエルフ}である。その背には、大きな弓を負っている。

比べて、その横にいる老爺は、オールラウンダーと頭一つ分しか違わぬ背丈をしている。恐らくは鉞人^{ドワーフ}なのだろう。

かくして二人の背後には、巖のような巨軀を誇る蜥蜴人^{リザードマン}が、シユルシユルと舌を鳴らしていた。

「はい。ソングクウさんといって、同じ日に冒険者になった人なんです」

女神官の紹介を聞いた妖精弓手は、まじまじとオールラウンダーを見つめた後で、

「へえ。こんな小さな子がねえ……」

そう言くと、隣の鉋人へと悪戯っぽい視線を送る。

これへ、

「ふん」

と鼻を鳴らした鉋人は、

「これだから長耳は……見た目だけで相手を判断するなど……よくもそれで銀等級までいけたもんだわえ」

そう言ってから、やはりオールラウンダーを見やった後で、

『『のっぽ』とは思えぬほどに鍛えてあるわ』

「本当かしら？ 鉋人の目は、宝石しか鑑定できないと思ったけど」

「なにおうつ!？」

妖精弓手に食って掛かる鉋人。

すると、背後にいた蜥蜴人がぎよろりと目を向け、

「双方、喧嘩をするなら外で」

静かに言った後で、

「騒がしくしてしまい、申し訳ない。許されよ」

奇妙な合掌を以て、オールラウンダーへと頭を垂れた。

「なあ。おめえの仲間か？」

騒がしく奇妙な取り合わせの三名を指し、オールラウンダーが女神

官へ問う。

「ええ。つい最近、ですけど……」

「へえ。おもしろいやつらだな」

ああだこうだと言い争う妖精弓手と鉋人。それを呆れたように見つめる蜥蜴人。

彼らの様子を暫く見ていた後で、

「そうだ。スツチャンにあつてきたぞ」

オールラウンダーのその言葉に、女神官はぴくりと反応する。

彼女は、「スツチャン」が誰を指しているのかを理解していた。

「どう、でした?」

「げんきだった。あしたには街にくるつてさ」

これを聞き、女神官は安堵の溜息をもらす。

すると、これを聞いていた妖精弓手が、

「ねえ。スツチャンつて?」

と尋ねて来る。

答えたのは、女神官だった。

「ゴブリンスレイヤーさんのことです。『スレイヤー』の『ス』をとつ

て、スツチャン」

「ああ、なるほど」

妖精弓手は二度、三度を頷いた後で、

「あいつが、『スツチャン』ねえ」

呟くと、堪らず吹き出した。

「随分と、可愛らしい渾名ですな」

蜥蜴人も、にんまりと顔を綻ばせている。

「しかし、かみきり丸もよくそんな渾名を許したのう」

鉾人が、白く長い顎鬚を扱きながら呟くのへ、

「はじめはさ。ゴツチャンつてよんでたんだ。そしたら、それはやめ

ろ、つてあいつがいうから。だから、スツチャンにした」

真面目なオールラウンダーの説明が、更におかしかったのだろう。

妖精弓手はとうとう声を上げて笑い始める。

「野伏殿」

そこへ、ぴしやりと蜥蜴人が諫めの声を放った。

果たして彼は、ぎよろりとオールラウンダーへ目を向けると、

「武術家殿は、単独で冒険をしておられるのか?」

問うたものだが、

「そろ、つてなんだ?」

横文字が苦手なオールラウンダーは首を傾げるばかり。

これへ、

「一人で冒険している人のことですよ」

女神官が耳打ちで教えてやると、

「そういうことか！ だったら、他にも友達がいるぞ！」

オールラウンダーはそう言った後で、

「一人は、ねえちゃんみたいに耳が長いな」

妖精弓手を指さす。

これへ、

「おい。小僧。こいつはな、見た目の割に歳を喰ってる。敬ったほうがいいぞ」

鉱人が、にやにやと笑いながら囁いた。

「へえ。何歳なんだ？」

「優に二千は越えているんだったよなあ？」

鉱人が言うので、

「そうだけど……」

彼の考えが読めぬ妖精弓手は、曖昧に頷く。

すると……

「ひゃあつ！ おめえ、すげえばあちゃんなんだな！」

目を見開いたオールラウンダーが、思わず大声を上げた。

これを聞いた周囲の冒険者たちが、一斉に視線を向けてくる。

「ばつ、ばあちゃん……!?!」

この言葉に、顔を茹蛸のように真っ赤にした妖精弓手は、

「失礼ね！ 只人から見れば、まだまだ少女の年齢なんだから！」

そこへ、

「ほうほう。ならば、いつしかわしと歳の比べをして自慢げになっていたあの態度を、改めねばなるまいなあ」

鉱人が、したり顔で追撃してくる。

「生きてる年数はこっちの方が上、ってだけよ！」

そこは譲らぬ妖精弓手だったが、

「やっぱりばあちゃんじゃねえか」

オールラウンダーの言葉に、

「ああっ!! あんたは黙ってて!!」
妖精弓手が、またもや怒鳴った。

其の四

さて、翌日も朝早くのことであるが……。

「やあっ！」

「どっ！どっ！」

冒険者ギルド裏手にある広場から、二つの気合声上がる。それは、白みがかった空へと響いて、やがて消えていった。

声の主は、貴族令嬢とオールラウンダー。

貴族令嬢が長剣で斬りかかるのを、軽い身のこなしで躲したオールラウンダーは、次いで彼女の背後へ回り、

「でやっ！」

拳を叩き込もうとする。

そこへ……。

「隙ありっ！」

と乱入してきたのは、圍人の斥候。

彼女は、腰に差した短剣を突き入れたが、

「あぶねっ！」

オールラウンダーの反応速度は凄まじく、瞬時に跳び退ってこれを回避してしまう。

「ちえっ。行けたと思っただけだなあ」

舌を打つ圍人へ、

「ほら。油断するな」

「まだまだこれからですよ」

と、広場の境に設けられた柵から、森人と僧侶が声をかけてくる。

彼女たちが使用する魔術や奇跡には回数制限があるため、こうした練習戦で実際に発動するわけにはいかない。

その代わり、三人の戦いを見学する中で、

(ここで魔術を発動させれば……)

とか、

(奇跡のタイミングは、ここかな……)

と、常に脳内で模擬を行っているのだ。

どこかで、鶏が鳴いた。

これをきつかけに、一同は動きを止める。

オールラウンダーがけろりとしているのに対して、貴族令嬢と圃人は息を切らせ、じんわりと汗ばんでいた。

「今日こそは一発入れられると思っただけどなあ……」

悔しがる圃人へ、

「でも、あの時の突きはちよつとヤバかった」

オールラウンダーが言ったものだが、

「当たらないと意味ないよ」

圃人の悔しきは晴れなかった。

辺境の街で宿をとった翌朝は、こうやって組手を行うのが貴族令嬢一党の習慣となっていた。

これは、冒険においてオールラウンダーばかりに頼ることがないようにするためである。

果たして訓練の成果は、少しずつだが着実に実を結んでいる。

それが証拠に、ついこの間までオールラウンダーの動きを認識することすら難しかった彼女たちが、なんとかその動きを視界の端に捉えられるところまで漕ぎつけているのだ。

……尤も、数多く組手を重ねていくうちに、オールラウンダーの動きのパターンを、貴族令嬢たちが覚えてしまったといった面もあるだろうが。

ふと、腹の虫が鳴り響いた。

オールラウンダーと、圃人に貴族令嬢のものである。

「かあつー！ 動いたらお腹空いちやったよ」

「オラも！」

そう言つて笑い合う二人に対し、やはり高貴なる家の出だからか、貴族令嬢は恥ずかしさに頬を染めている。

そんな彼女へ、

「ハラのムシくらい気にするなよ」

と、オールラウンダーは彼なりの気遣いを見せたものだが、

「お前は少し黙っている……」

森人魔術師は、呆れ果てたように呟いた。

かくして一行は、酒場で朝食を囲みながら、今日の段取りを話し合う。

「今回は、どこに行こうか」

パンをかじりながら圃人が言うのへ、

「東の荒野を抜けたところに、まだ他の冒険者が手をつけていない遺跡があるという話ですが……」

葡萄酒を喉へ通した貴族令嬢が持ち掛ける。

「この間のように、オルクの巢になっていなければいいが、な……」
神妙な顔つきで森人魔術師が言うのと、

「万が一にも、彼らに巻物が渡って……使われでもしたら……」

自身の発言に背筋が凍った僧侶は、思わず食事の手を止めてしまった。

そこへ、

「だったら、そのまえに巻物みつけなとな」

楽観的と言うべきか、余裕綽々と言うべきか。両頬に食べ物詰めたんだオールラウンダーがそう言ったのを見て、一党は溜息と共に笑みをこぼした。

「全く。お前を見ていると、考えを巡らせているのが馬鹿らしく思えてくる」

森人魔術師の言葉に、一同はうんうんと頷く。

一方で当の本人は、不思議そうに首を傾げるばかり。

そうこうしているうちに、冒険者たちがギルドへ次々とやってきて、やんややんやと騒がしくなる。

「それでは、私たちは行きましようか」

貴族令嬢の言葉を合図に、一同は席を立つ。

ギルドに集う冒険者の誰しもが、巻物を巡って、手ごわい競争相手となり得るのだ。なるべく早く行動するに越したことはない。

外へ出てみると、思った以上に太陽の光が眩しかった。

「もうすぐ、夏ですね」

貴族令嬢が言うのへ、

「わたし、暑いのは苦手だなあ」

げんなりとして圃人が言う。

「そうか？ 私は、夏に聞く蝉の鳴き声が好きなのだが……」
森人魔術師がそう言うのと、

「わたしも、夏は好きです。『あいすくりん』が美味しい季節ですから」
僧侶が笑みを漏らす。

「なあ、その『あいすくりん』ってなんだ？」

食べ物話題となると、やはりオールラウンダーが食いついてくる。

「冷たくて、甘い氷菓子ですよ」

「へえ。うまそうだな」

「とつても美味しいですよ」

「じゃあ、夏になったらみんなでおうぜ」

晴れ渡った青空の下、愉快な話題を繰り広げながら旅路を行く冒険者たち。

結局その後、彼らはお目当てのものをを見つけることは出来なかった。

だが、それでもいい。

また『次』があるのだから。

冒険者として身を置く以上、必ず『次』がくるとは限らない。だが、彼女たちは『次』を迎えられると信じている。

それは決して、慢心ではない。

一人の少年が醸し出す、「どんな窮地をもなんとかしてしまおう」という雰囲気。それが根拠なのだ。

だが、いつまでもそればかりに頼るわけにもいかない。

少しずつでも、力をつけて行かねば。

かくして彼女たちは、少しでも少年に追いつこうと励んでいく。そうして、瞬く間に一か月が経っていった。

その間に、人間と魔神軍との戦いに終止符がついたそうなの。

魔神王を打ち倒したのは、聖剣に選ばれた新人冒険者。

年若い少女であるその冒険者は、史上で十人目となる白金級の冒険

者になったそうなの。

辺境の街でも、ささやかな祭りが催された。

無論、貴族令嬢一党もこれを楽しむことが出来た。

ゆったりとした、実に居心地の良い時間の流れであった。

しかし、それは唐突に終わりを告げるようになってしまったのである。

天下分け目の真相

オラオラオラ！ 魔人ブウ！ 俺たちも出てきて……ってあれ！？
なんだ、ここ！？

ちつくしよー！！ また別の時間に来ちまったのかよ！ 今度はどの時代だ！？

「い、いや……これは時間軸がどうのこうのというのではないのでは……こんな化け物、神としての記憶にも無いぞ……」

えっ、そうなの？ ううん……じゃあ、もつともつと未来なのかも……。

待てよ。そんな未来に人間がいるってことは、俺たちがブウに勝つたも決まったようなもんじゃん！ いやーん！ やっぱり強いってこわーい！

……なんだよ。お前？ 知らねえよ。こっちは魔人ブウを追いかけてきたんだから。

へ？ マジンオウ？ なんだそれ！ 結構カッコいいじゃねえか……。

ん？ あれ。こっちには女の子たち。ははーん……。これは、化け物に襲われてるカワイ子ちゃんを助ける勇者ってところだな。

「襲われている、というよりも……何か大事な戦いの場に俺たちが乱入したような雰囲気だぞ……」

もう！ ピッコロさんはそうやってフンイキを壊すようなことを……って、あれ。君。うん、そう、君。君が持つてるのって……。

せ、聖剣!? なんだそれ、かけえ！

いいなあ！ 俺も、一度でいいからそういう剣を持って、悪い奴をズバつと……。

なんか勇者！ って感じだよなあ！ ……あつ、でも正義の死神としてのもいいなあ……。

ううん……。

だあ、もう！ お前はさつきから何なんだよ！ マジンオウって名前はカッコいいけどさ。こっちには元大魔王がいるんだぞ！ しか

も神さまだったんだ！ まっ、そんな元大魔王で神さまだったピッコロさんより、俺の方がメチャ凄くて強いけどな！

「……………くっ……………クソガキどもめ……………」

へへん。その顔は信じてねえな。いいぜ！ 魔人ブウの前に、お前でこのウルトラ超^{スーパー}サイヤ人のウオーミングアップをしてやるぜ！

喰らえ！ ビクトリーキャノン！

……………つて、あれ？ もう終わり？ 嘘だろ！ メチャ手加減したのに！ 女の子の前で、俺様のすっげえカッコいい戦いを見せてやろうと思っただのに……………」

「……………お前、その性格だけはどうかしないと、本当に魔人ブウに足元を掬われかねんぞ……………」

うるさいよ、ピッコロさん……………」

……………そう言えば、五分たつてるのにフュージョンが解ける感じしないなあ。なんでだろう。

「俺が知るわけないだろうが。まあ、考えられるとすれば……………悟空があの世にいた時と同じ原理が働いている……………のではないか？」

それって、俺たちも死んじゃった、ってこと？

「そうではない。この世界の時間や空間が、俺たちのいる世界と完全に別物なんだ。だから、フュージョンの時間ルールが通用しないのではないか？」

じゃあ、ウルトラ超サイヤ人になったのに全然へっちゃらなの？

「そこまでは知らん。ただ……………無理やり次元の壁に穴をあけたから、その弊害として、一時的にあの世にいるのと同じ状態になっているのかも……………」

なんだ。やっぱり死んでるみたいなものじゃん。

ま、いいや。要するに、ここにずっといても、俺ってばガキのままっでことですよ。それは嫌だなあ。それに、魔人ブウだって放って置きっぱなしだし。

よし！ また次元に穴をあけて、今度こそ俺たちの世界に帰ろ

う、つと！

すううう……

だあああつつつ!!!

……さてと。今度こそ元の世界に戻らなきゃな。みんながブウに殺されちゃうかもしれないし。

ほら。ピッコロさんも早くしないと穴が塞がっちゃうよ！

「……い、いや……今、確かに悟空の気を感じたのだが……」

え？ お父さんの？ そんなわけないじゃん。あの世に帰っちゃったんだから。世の中には三人くらい同じ気を持った奴だっているさ。ほら、早く！

「う、うむ……」

待ってろよ、魔人ブウ！ 今すぐこのウルトラ超サイヤ人になったゴテンクス様の恐ろしさを思い知らせてやるぜ！

其の一

「すまん。聞いてくれ」

薄汚れた鉄兜に革鎧。左手に括り付けた円形の盾。腰に差した中途半端な長さの剣。

ここしばらく姿を見せなかったゴブリンスレイヤーが、冒険者ギルドにやって来たと思ったら、その中央で低く静かな声を響かせた。

各々談笑していた冒険者たちは、これをしつかりと耳にし、一気に視線を彼へと向ける。

「頼みがある」

彼の二言目を聞き、冒険者たちの間にざわめきが生じた。

彼の声を、初めて聴いた。

まして、彼が冒険者に頼みごとをする姿など、その場にいた全員が想像したこともなかった。

しかし、ゴブリンスレイヤーは周囲の反応を気にすることなく、淡々と事情を説明していく。

街外れの牧場に、ゴブリンの斥候スカウトと思わしき足跡が数多くあった。それから察するに、王率ロイドいるゴブリンの群れが、今夜あたりに牧場を襲撃するだろう。

その数、百匹はくだらない。

冒険者たちのざわめきが、一気に止まった。

ここへ、『生きて還って来た者』ならば、ゴブリンの厄介さは充分すぎるほどに経験している。

それが、ロードという統率力に優れた変異種を頭とし、雪崩れてくる。

もはやそれは群れではなく、軍だ。

誰が、好き好んでそんな奴らの相手をしようか。

「時間がない。洞窟内であれば、なんとかかなろうが……野戦となれば、俺だけでは手が足りない」

果たして、好き好んで相手をしそうなゴブリンスレイヤーでさえ、こうして単独での戦闘を避け、協力を要請しているのだ。

「手伝ってほしい。頼む」

頭を下げた彼を見て、他の冒険者がひそひそと何やら囁き合った。しかし、それをゴブリンスレイヤーへ直接言うことはない。

やがて、一人の冒険者がつかつかとゴブリンスレイヤーへ歩み寄った。

いつも彼を目の敵にしている、槍遣いだ。

「おい」

槍遣いが、ゴブリンスレイヤーへ声をかけようとした、まさにその時である。

「よし、やろうぜ」

あっけらかんとした、了承の声。

一同がギルド入口へと目を向けると、そこにいたのは一人の少年。泥にまみれた山吹色の道着を身に纏い、その背中には朱色の細棒。四方八方に伸びた独特な髪型と、純粹無垢なる水晶のような瞳。

首から黒曜の認識票を下げたその者は、オールラウンダーであった。

彼は、

「牧場って、あのねえちゃんとおっちゃんがいるところだろ？」

そう言って、ゴブリンスレイヤーへと歩み寄る。

ゴブリンスレイヤーは、鉄兜の中から少年を一瞥し、

「ああ」

淡々と頷いた。

その返事を聞いたオールラウンダーは、

「朝メシ食わせてもらった分のおかえし、まだしてなかったもんな」
後ろ手に頭を抱え、にんまりと笑った。

「……何故だ」

ゴブリンスレイヤーが、問うた。

「何故、手伝いを申し出た」

「なぜ、って……おめえが手伝ってくれていったからだろ」

「……そうではない。お前は、冒険者だ」

「ああ」

「ならば、何故手伝いを申し出てくれた。俺は、まだお前たちに報酬の提示すらしていないんだぞ」

すると、オールラウンダーは気抜けしたようにゴブリンスレイヤーを見つめ、

「メシ食わせてくれたから、そのおかえしだ、っていったら？」

さも当たり前のように言うのだ。

ゴブリンスレイヤーには、理解できなかった。

ここにいる者は、冒険者という括りにこそ当てはまるが、仲間や友達というわけではないのだ。

彼らへ協力を申し出るなら、『依頼』という形で申し込むのが、筋というもの。

だが目の前の少年は、そんなことなど眼中になく、一食の恩返しのために、ゴブリンの軍隊を迎え撃つための協力を引き受けてくれた。

そこが、分からなかったのだ。

果たして、その疑問に答える声が、ギルドへと入ってくる。

「不思議でしょう？ この子、こういう子なんですよ」

オールラウンダーと同じように、各々の装備を泥に汚した四名の女冒険者たち。

朝の下水道掃除を終えた貴族令嬢一党は、呆れたように、それでいて笑いながらオールラウンダーの傍によると、

「冒険者なのに、報酬とか危険度とか、そういったことを気にしないんです。世のため人のため……っていうのもまた違う気がしますけど……」

貴族令嬢の言葉へ、

「だって。オラ、カネのつかいかたよくわかんねえもん」

オールラウンダー言うと、

「やれやれ。そのおかげで、私たちもタダ働きに付き合わされるわけだ」

肩を竦め、溜息を吐いた森人魔術師が、やはり口角を上げて言うものだ。

これを見たゴブリンスレイヤーは、

「お前たちも、手伝うつもりか」

貴族令嬢一党を見る。

答えたのは、圍人の斥候と、只人の僧侶。

「前のわたしだったら、絶対にやらなかったけどね。ゴブリン相手に、報酬なしの戦いなんて」

「……彼に、おかしくされてしまったのかも、しれませんね」

一党を見たゴブリンスレイヤーは、深い溜息を一つ。

そして、改めて周囲を見回すと、

「報酬は、俺の持つ全てだ。金、装備、能力、時間……これら全てを支払う」

言い放った。

すると、

「なんでもくれるのか！　じゃあ、腹いっぱいメシを食わせてくれよ！」

先ほどの頼もしきはどこへやら。

腹を鳴らしたオールラウンダーが、目を輝かせてゴブリンスレイヤーへ迫る。

ここにきて、周囲の冒険者が動き出した。

「あいつの飯だけで、報酬が消える！」

辺境の街へオールラウンダーが来てから、数か月の時が経っている。

彼の恐るべき食欲を、冒険者たちはまざまざと目にしていた。

一人はオールラウンダーの口を塞ぎ、もう一人がその体を抱えてギルドの外へと出る。

その隙に、

「なあ。早い者勝ちじゃねえよな!？」

「ゴブリンを斃した数で、報酬の量を決めようや！」

などと、ゴブリンスレイヤーへ詰め寄る。

しかし、彼らの中では報酬が全てではなかった。

冒険者となった以上、彼らの中には夢があり、人の役に立ちたいという思いがある。

だが、一步踏み出す勇気が無かった。

その勇気へ発破をかけたのは、オールラウンダーその人であったのだ。

「お前なあ……」

外に飛び出した冒険者の一人……槍遣いは、抱えていたオールラウンダーを降ろすや、

「状況を察しろよ、全く……あそこは、俺があいつへ『金はいらねえ。その代わり、一杯奢れ……』って言うところだろうがよ」

呆れ顔となる。

「しらねえよ、そんなの」

唇を尖らせたオールラウンダーへ、

「しらねえ、で済まされるか。第一、お前が飯をたかると、それだけで報酬が消えちまうだろうが」

そう言ったのは、いつしか彼と食べ比べをして、泣く泣く食事代を全額支払うことになった、銅等級の冒険者だ。

因みに、彼の借金はまだ続いている。

果たして槍遣いは、またもや深い溜息を吐くと、

「あーあ。あそこでかつこよく決まれば、お嬢さんが俺に惚れたかもしれないのになあ……」

そうぼやくのへ、

「ははっ。おめえ、なんだかヤムチャみたいなやつだな」

オールラウンダーが、懐かしそうに笑ったものである。

「……誰だよ、それ」

「オラのともだち。んで、にいちやんみたいなやつだ」

「……お前の友達で兄貴って……よっぼどの変人じゃねえのか？」

其の二

「本音を言うとき。実はまだ怖い部分もあるんだよね」

ギルドに併設された宿の一室において。

弓矢を検めていた傭人斥候が突然呟いたのへ、貴族令嬢が、森人魔術師が、只人僧侶が、ぴたりと動きを止め、一斉に視線を向けた。

傭人は、気にすることなく続ける。

「あの山の砦でさ。ゴブリンに囲まれて、殺されそうに……うん。もつと酷いことをされるかもしれないかった時のことを思うとき。よくもまあ、今でも冒険者続けてるよなあって、自分で感心しちゃうよ」おどけたように言う傭人だが、弓に触れるその手は小刻みに震えている。

オールラウンダーと初めての出会いを果たした、山の砦。そこで繰り広げられていた凄惨な光景は、今もなお貴族令嬢一党の記憶の中に深く刻み込まれている。

死してなお尊厳と貞操を汚された哀れな村娘たち。

装備を剥がされ、裸体を晒された時、自分たちも同じような末路を辿るのだと自覚した。

ゴブリン退治など、今までも何度か経験したはずであったのに。

奴らが、攫った娘たちをどのように扱うのかも、知っていたはずなのに。

自分たちに危急が迫った時になって、初めて貴族令嬢たちは、あの醜悪な化け物たちの恐ろしさを思い知ったのだ。

幸いだったのは、あの時の小鬼どもは宴気分酔いしれていたことだった。

奴らは『お楽しみ』を砦奥の広間で堪能するべく、捕縛したその場においては、必要以上の暴行を貴族令嬢たちに行わなかったのだ。

小鬼にしては、辛抱強いことである。

それから先の結果については、既に述べたことだ。

オールラウンダーの乱入によって、貴族令嬢たちは九死に一生を得た。

しかし、小鬼どもの醜い欲望を目の当たりにした時の恐怖と絶望感
は、未だ癒えることがないのだ。

それでも、彼女たちは今もなお冒険者として活動している。

殆ど成り行きとはいえ、一人の冒険者を元の地へ帰すために、協力
している。

それは、正しき道に行く冒険者の心底にある、「人の役に立ちたい」
という思いから来るものかもしれない。

だが、本当のところは彼女たちにさえ分からぬことであった。

「……あんな風には、なりたくないなあ」

圃人が、ぼつりと呟いた。

それは、女の冒険者が胸に秘めつつも、決して口にはしないような
言葉。

冒険者として身を立てた以上、自身に降りかかる災難には、全て自
己責任が伴う。

ギルドで認識票を受け取った時から、それは分かっていたはず……
いや、自覚すべきものであった。

果たして、貴族令嬢の口から出たのは、

「嫌なら、止めてしまえばいい」

という突き放した言葉ではなく、

「ならないように、頑張るしかありませんよ」

激励を込めつつ、逃げ道を作るような言葉。

しかし、圃人も森人も僧侶も、背を向けるようなことはしない。

「ま、そうだよね。なりたくないなら、頑張るしかないよね」

諦めたように圃人が笑うと、

「魔術を極めるために、この広い世界へ身を投げたんだ。オルクども
の慰み物になる定めなら、私はその程度だったということだな」

森人魔術師が、両腕を組み、静かに目を瞑りながら覚悟を改める。
すると僧侶が、

「そっ、そうならないように援護するのが……わ、わたしの役目ですか
ら……」

そう言つて、愛用の杖を手繰り寄せ、力強く抱きしめる。

恐怖があるのは事実だ。

しかし、それ以上に冒険へと身を投じるだけの理由が、各々の胸の中に秘められている。

彼女たちとて、例外ではなかったようだ。

「よしっ！ やるぞー！」

意気込んだ團人が腕を上げて叫ぶのへ、

『おおっ！』

他の三名が続く。

と、そこへ。

「スツチャンが、そろそろあつまれだってさ」

オールラウンダーが、室内へと入って来た。

ゴブリンの大軍と一戦交えようという中、今の今まで地下水道の巨大鼠退治の依頼を請けていたオールラウンダーなのである。

貴族令嬢一同の体に、緊張が走る。

しかしそれは、恐怖と、それを上回る闘志とが混在した、程よい緊張感であった。

領き合った彼女たちは、オールラウンダーの後につき、ギルドのロビーへと向かう。

そこには、ゴブリンスレイヤーを中心として、殆どの冒険者たちが集結していた。

やがて、二組三組と冒険者の一党がやって来て、これ以上の追加がないことを確認したゴブリンスレイヤーが冒険者たちへ伝えたのは、小鬼相手に徹底した『戦術』であった。

新米は勿論の事、熟練した冒険者たちですら、彼の提唱する戦術には舌を巻いた。

ただ一人。オールラウンダーだけは、

「分かるような。分からないような……」

といった様子。

これを見たゴブリンスレイヤーは、

「……盾にされた者たちを救った後ならば、好きに暴れる」
「わかった！」

オールラウンダーは、実に素直に頷いた。

其の三

広々とした草原の中を、ゴブリンの大軍が進んでいく。

彼らの視線の先には、牧場の灯りが見える。更にその先には、街の煌きも。

王ローグの算段は、こうだ。

まず、牧場を襲う。

偵察によつて、あそこに若い女がいることは判明している。

それを孕み袋として利用し、数を増やすのだ。

そうしてから、次に街を襲う。

街には、冒険者どもがわんさかいる。

王たる彼の住処を襲い、子供だからと荒野にその身を放り出した……あの時の憎き敵と同種の奴らが。

奴らを殺し、女であれば犯し、更に数を増やすのだ。

そうしてから、最後には人族の都を……。

夢物語のような、しかし王にとつては現実的であるその計画を、下々のゴブリンどもは理解できない。ただ、冒険者を殺し、女を犯すという未来に舌なめずりをするばかり。

準備は上々。

戦闘に行くゴブリン十匹ほどに、それぞれ盾を持たせてある。

捕らえた女子供を木板に張り付けた、肉盾と呼ばれるそれを掲げれば、冒険者共は攻撃を躊躇う。

『お優しい』冒険者どもの間抜けな姿を想像し、王が卑下た笑いを浮かべた時であった。

ふいに、先頭に行く盾の部隊を、甘ったるい霧が包み込んだのである。

霧に包まれたゴブリンの盾部隊が、一匹、また一匹と倒れていく。

(魔術！)

王が下々へ、警戒の強化を指示する。

直後、

「やいやいやいやいやいやー」

牧場の柵の陰に潜んでいた『何か』が、勇ましい気合声とともに飛び出してきた。

空に浮かぶ月が照らすそれは……冒険者だ！

「GYAGYAO！」

これを見たゴ布林ロードが、甲高く喚く。

すると、ゴ布林シャーマンが何やら叫び、杖を振るった。

途端に杖の先端から稲妻が放たれ、冒険者を打つ。

「ぎゃっ！」

悲鳴を上げて倒れる冒険者を見て、ゴ布林どもはにやりと笑う。

……が。

「いちちち……やっぱカミナリはよけられねえか……」

倒れたはずの冒険者は、何事もなかったように立ち上がり、再び大軍へと迫ってくるのだ。

「GYAO!？」

驚愕に顔をゆがめたゴ布林ロードが、それでもシャーマンたちへ呪文を命じたのと、突然に飛来してきた枝矢がシャーマンどもの首を貫いたのが、殆ど同時であった。

夜目の利くゴ布林どもは、すぐさま矢の飛んできた方へと目を向ける。

牧場に生えた木の枝に乗り、こちらへと矢を向けている二人の射手。一人は森人。もう一人は圍人だ。

慌てたゴブリンの弓手どもが、直ちに迎撃を開始しようとするところへ、

「だりゃっ！」

今度は、先の稲妻に打たれた冒険者が迫り、殴り飛ばしていく。

大軍がすっかり大混乱に陥ったところで、またしても牧場の柵の陰から、数多くの冒険者たちが飛び出してきた。

彼らは、甘ったるい霧……《眠雲》^{スリープ}によって眠らされたゴ布林どもから肉盾を奪い返すや、これを担いでそそくさと退散していく。

これを黙って見過ごすゴ布林ではないが、遠距離からの弓矢と、単身で大軍に突っ込んできた冒険者の化け物染みた力の前に、手も足

も出ない。

果たして、人質を無事に救い出した冒険者たちが柵を越えて牧場へと戻ると、入れ替わるようにして、武装した冒険者たちがこちらへ猛進してくる。

「くそつ、オールラウンダーめ！ 抜け駆けしやがつて！」

「奴にばっか手柄を立たせるな！」

ゴブリンよりも、先に単身で軍へと突撃した冒険者……オールラウンダーに怒りの矛先を向けた武装集団が、八つ当たりとばかりに、一匹、また一匹とゴブリンどもを斃していく。

槍遣いが槍を振り回せば、周囲の草と共にゴブリンどもの足が切断される。

蜥蜴僧侶が、獣の牙を研いで作り上げた刀を振るえば、たちまち小鬼どもの首が切り裂かれ、鮮血が噴出する。

それでもなんとか応戦しようとゴブリンたちが放った矢の軌道を、ディフレクト・ミサイル魔女の《矢 避》が無慈悲にも逸らしていく。

果たしてその横で、スリング投石紐を振り回していた鋤人が、何かに気付いて目を細めた。

「ライダーが来るぞー！」

その声に呼応するかのように、月下の戦場に獣の咆哮が響いた。

灰色の体毛に包まれた山犬に跨って、ゴブリンたちが剣を振り回して迫ってくるのだ。

「射かけるわー！」

「おうよー！」

妖精弓手の言葉に、槍遣いが頷いたところへ、

「オラがやるー！」

山吹色の道着に身を纏い、その右手に朱色の細棒を掴んだオールラウンダーが飛び出してきた。

「あつ、てめえー！」

槍遣いが言い終える間に、オールラウンダーは山犬に跨ったゴブリン……ライダーたちへと突進する。

「あの馬鹿……！」

舌を打った妖精弓手が、矢をつがえた。

……と。

「だあああつつっ！」

鬼気迫る形相で迫るオールラウンダーを見た山犬どもが、徐々に減速し、やがてぴたりと動きを止めたではないか。

小鬼に飼われていても、野生の勘は失われてはいない。

山犬どもには、迫るオールラウンダーの姿が、何十倍にも巨大で獰猛な猿の化け物に見えたのだ。

相手の力量をきちんと測ることが出来る分、山犬たちはゴブリンよりも賢い。だが、腹をすかせたまま尻尾を巻いて逃げるのも味気ない。

やがて山犬たちは、自身の背に跨る小鬼どもを振るい落とし、その肉を噛み千切り始めた。

不味いし臭いが、何も喰わぬよりはマシというもの。

槍遣いや妖精弓手たちがこれを啞然として見つめている……その脇を通り抜け、

「私たちも行きませすよ！」

と先陣を切る貴族令嬢が、いつしかの若い剣士や女武闘家といった駆け出しの冒険者たちを導きつつ、小鬼の群れへと飛び込んでいった。

其の四

戦況は、冒険者側へと大きく傾いていた。

元々、冒険者とゴブリンとが正面から戦えば、よほどに不幸ではない限り、冒険者が負ける要素などない。

加えて、冒険者側には奇襲のアドバンテージもあつた。ゴブリンとて奇襲を好むが、自分たちが奇襲されるなどは露ほどにも思っていない。

果たして、このまま勝負は優勢に続くかと思われたが……。

「む……う？」

後方支援に徹していた森人魔術師が、月の灯りを背負って、戦場の奥側から伸びた三つの影を認めた。

「あいつは……」

彼女は、そ奴らに見覚えがあつた。

いつか、オールラウンダーを黒曜級の冒険者へと昇級させるために対峙した、大柄のゴブリン。

田舎者などは、全く比べ物にならないほどの戦闘力を誇る強大な敵。ゴブリンチャンピオン小鬼英雄だ。

一匹だけでも戦の勝敗を左右しかねないという強敵へ、臆することなく迫る四人の冒険者。

不敵な笑みを浮かべ、大剣を背負った重戦士。そのすぐ後ろには、面倒くさそうに盾を掲げる女騎士の姿もある。

それから少し距離を置いた所では、青鎧の槍遣いが、単身で英雄へと斬り込もうとしている。

そして、最後の一人。

四人の中では最も等級が低い、黒曜の冒険者……オールラウンダーは、すでに英雄の一匹へと勝負を仕掛けており、

「ほらー！ こっちだー！」

目まぐるしく英雄の周囲を跳んで、駆ける。

小鬼英雄の周囲には、いくつものオールラウンダーが出現していた。

草原を駆け、あちらこちらから小鬼どもへ矢を射っていた妖精弓手は、

「何……？ あいつの術……」

驚愕の余り手を止める。

人間のレベルを遥かに凌駕した身体能力。それから繰り出される技は、奇々怪々な魔術のようにも見える。

しかし、仕組みは簡単。

オールラウンダーは、超高速で英雄の周りを動き回り、残像を生み出しているだけなのだ。

……尤も、簡単なのは字面で表現することに限るが。

かくして、無数の残像へ戸惑っている小鬼英雄の顎元へ、

「こつちでしたー！」

突然に実体を見せたオールラウンダーが、渾身の蹴り上げを入れる。

骨が砕かれ、白目を剥いて倒れた英雄の足を持ったオールラウンダーは、

「そりゃっー！」

自身の何倍もある巨体を軽々と持ち上げ、これを投げ飛ばした。

その先には、槍遣いと交戦している別の個体。

「うおっー！」

突如飛来した英雄の骸を、しかし槍遣いは直前で飛び退いて躲す。

同胞の骸に圧された英雄は、怒り狂ってこれを跳ね除け、槍遣いを睨む。

舌を打った槍遣いは、

「野郎！ ややこしくしやがってー！」

今まさにこちらへ駆け寄って来るオールラウンダーを、恨めし気に見やった。

「手をかそうか？」

駆けつけるなり、そんなことを口にするオールラウンダーへ、

「必要ねえよー！」

ぶるんと槍を一振りし、彼は叫ぶ。

獯猛な小鬼英雄が、棍棒を叩き下ろしてくるのへ、

「ちっ！」

むしろ前方……つまりは英雄の懐へと飛び込んだ槍遣いは、武器を構えて屈みこみ、足の発条を利用して一気に飛び上がった。

放たれた矢の如き速度で、槍遣いは英雄の喉元へと迫り、得物で突き刺す。

ぐらり。白目を剥いて後方へと斃れる英雄。

槍遣いは、既のところで英雄の首から槍を引き抜き、華麗に地面へと着地する。

「てめえ！ 今、俺ごこの化け物をやろうとしたろ！」

激昂し、二匹の英雄の骸を指す槍遣いへ、

「わざとじゃねえよ」

オールラウンダーが弁解する。

一方、その頃。

戦場に投入されたのは、小鬼英雄だけではなかった。

奴らよりは戦闘技術が劣るとはいえ、それでも大柄な体つきを誇る個体。田舎者^ホ。

これを相手にするのは、貴族令嬢を先頭に、若き剣士と女の武闘家。自分より遙かに小さい獲物を見た田舎者は、にたにたといやらしい笑みを浮かべている。

片や貴族令嬢たちは、自分たちの倍ほどの巨体を誇る田舎者を、しかし鋭く睨み据えていた。

「よ、よっ！ いくぞー！」

最初に攻撃を仕掛けたのは、若き剣士。

赤い鉢巻を強く締めなおした彼は、長剣を引き抜き田舎者へと猛進する。

これを、余裕の笑みで迎えた田舎者は、徐にその巨腕を剣士へと伸ばした。

その五指が掴みかかってくる寸前、

「今ですっ！」

貴族令嬢の合図に合わせ、剣士は後方へと飛び退る。

田舎者の手は空を掴み、次いで剣士の背後から飛び現れた貴族令嬢が、

「それっ！」

一党である圃人斥候から借り受けた短刀を、正確に田舎者の目玉へと投げ打った。

右目を潰された田舎者は、残った左目を血走らせ、貴族令嬢へと向ける。

しかし、それがいけなかった。

ただでさえ視野が狭まった今、複数人を相手にする中で、一人だけに注意を向けるのは賢い事ではない。

事実、隙だらけとなった田舎者の股座へと女武闘家は飛び込んでおり、そこを容赦なく蹴り上げた。

ただの蹴りではない。亡き父より授かった格闘技の真髄。それを、日々の依頼……時にはゴブリンどもを相手にし、磨きをかけてきたものなのだ。

それこそ、女神官やオールラウンダーとともに初めての依頼を請けた時とは、技のキレも威力も比べ物にならない。

ゴブリンに雌は存在せず、故に共通して股間への攻撃は致命傷に繋がりがねない。

やがて田舎者は、股間を庇うようにしてみつともなく蹲り、それによって露わになった延髄へと、貴族令嬢が長剣を突き刺す。

「か、勝った……のか……」

ピクリともしない田舎者を見て、剣士が呟く。

女武闘家は、額の汗を拭いつつ、確かに頷いた。

貴族令嬢は、田舎者から引き抜いた剣へ拭いをかけつつ、

「まだまだ……これからですよ……」

乱れた息を整えつつ、草原の彼方を見やる。

黒く盛り上がる、無数の影。

ゴブリンの増援だ。

それへ、無謀にも一人で迫っていく一人の冒険者を、貴族令嬢は見た。

どういふわけか、彼女の胸の中には絶対的な安堵が広がっていた。

其の五

「かめはめ……波あ!!!」

この叫び声が、戦の終焉を告げる合図であった。

瞬間。青白く光る生命力の波が、雪崩のように群がってくるゴブリンどもへと放たれ、奴らを包み込み、跡形もなく消し去ってしまったのである。

戦場にいた誰もが、強者の存在を自覚し、一点へと視線を向けた。その先にいたのは、月明かりを背負って立つ、一人の冒険者。

山吹色の道着と、朱色の細棒。首から下げるは黒曜の認識票。オールラウンダーである。

彼は、背負った朱色の棒を引き抜き、これを地面へと突き刺し、掴むと、

「のびろ、如意棒!」

と号令をかけた。

棒はそれに従い、ぐんぐんと背を伸ばし、雲を突き抜けるかと思われるほどまで上昇していく。

棒の先端に掴まっていたオールラウンダーは、ぐるりと下方を見渡した。

闇夜に慣れた彼の目には、啞然として自分のことを見上げている同業者の姿しか見えない。どうやら、ゴブリンどもは一匹残らず殲滅できたようだ。

「おっ?」

オールラウンダーの視線に、ふと映り込む二つの人影があった。

草原の左手に広がる森から出てきたその者たちを、彼はよく知っている。

「スツチャンたちだ!」

そう言うや、オールラウンダーは棒から手を離し、巨人の巨軀トロルより何倍もある高度から平然として飛び降り、

「よう!」

何事もなかったかのように着地するや、ゴブリンスレイヤーと、そ

れを支えるようにして歩く女神官へと声をかけた。

「うひゃっ!？」

上空からの突然の飛来者に驚いた女神官は、あわやバランスを崩し、ゴブリンスレイヤーともども倒れそうになる。

これを、背後に回って支えてやったオールラウンダーは、

「おめえたち、どこいってたんだけ？」

その問いかけに答えたのはゴブリンスレイヤーで、

「……薄汚いゴブリンの一匹を、殺してきただけだ」

淡々と告げる。

「ふうん」

オールラウンダーもオールラウンダーで、あっさりとその言葉を呑み込む。

しかし、女神官は知っていた。

彼のいう「薄汚いゴブリンの一匹」が、大軍を率いた王であったことを。

それとの戦いにより、一ヶ月の空白期のあった体へ、深手を負ってしまったことを。

だが、女神官は遂に黙っていた。

それをいちいち口にして誰かに告げることが、何やらゴブリンスレイヤーへの冒涇のように感じたからだ。

無論、彼はそんなこと、露ほどにも思っていないだろうが……。

かくして、戦いは終わった。

王をはじめとするゴブリンの大軍は、一匹残らず全滅。対して冒険者側は、負傷者が何名もいたが、奇跡的に死者は無かった。

小鬼側の呪文遣いが早々に消えたこと、駆け出しの冒険者たちもすでに十分な経験を積んでおり、それらが徒党を組んで戦っていたこと、ゴブリンライダーの跨る山犬どもが冒険者側へと寝返ったこと、そして何より、とある一名の快進撃によって、無限とも思えるゴブリンどもが瞬く間に数を減らしたことが、無死者達成の要因であった。

返り血に塗れた冒険者たちを迎えたギルド職員たちは、この報告を聞いて大層驚いたらしい。

……果たして。

「それじゃあ、かんぱーい！」

ギルド内の設けられた酒場。その中央にある丸机の上にて。行儀悪く乗りあがった妖精弓手が、酒の入った杯を掲げ、音頭をとる。

しかし、それはすぐに怒号へと変わる。

「あつ、おい！ てめえばつかガツガツ食うんじゃねえよ！」

「そうだ、そうだ！ 一瞬で食い物が無くなるだろうが！」

そう言つて冒険者が詰め寄つたのは、オールラウンダーだ。

彼のゴブリン討伐数が、冒険者の中で群を抜いて一番であることは、ギルド内の誰もが目撃し、承知していること。

故に、報酬である「ゴブリンスレイヤーの全て」を一番多く使役できるのは、彼というわけ。

果たしてオールラウンダーが望んだのは、

「腹いっぱい、メシがくいいたい」

であった。

こうしてオールラウンダーは、今二十人前の霜降り肉を堪能しているところなのである。

「なんだよ。スツチャンがくれる、つていったんだぞ」

両頬を肉で満たしながら、文字通り「膨れた」オールラウンダーは、壁際の長椅子を指さす。

そこには、いつものようにゴブリンスレイヤーが座っていた。

違う点があるとすれば、その左腕を肩から吊るしていることぐらいであろうか。

その横では、彼の肩に頭を寄せて眠っている女神官と、その髪を撫でている牛飼娘の姿もある。

すると、今度は血相を変えた冒険者たちが、ゴブリンスレイヤーへ報酬のつり上げを交渉に行く。

しかし、

「報酬は、報酬だ。依頼の達成後に変更することなど無い」

きつぱりと言われ、彼らは悔し涙を飲んだ。

その騒動を耳にし、疲れ切っていた女神官は慌てたように目覚め、そんな彼女とゴブリンスレイヤーへ、

「今日はぐっゆっくり」

牛飼娘は茶目つ気を込めて声をかけて立ち上がる。

次に彼女が来たのは、オールラウンダーの座る大きなテーブルであつた。

「今日は、本当にありがとうね」

牛飼娘に声をかけられ、オールラウンダーは食の手を止める。

「ん？」

「彼の依頼を請けてくれて」

「オラだけじゃねえぞ」

「……そうだけどさ。君が、一番最初に引き受けてくれたんでしょ？」

「おう」

「だから、ありがとう、なの」

にこやかに、そして瞳から歓喜の涙を流した牛飼娘へ、口の中の肉を一気に呑み込んだオールラウンダーは一言。

「あたりまえだ。スッチャンもねえちゃんも、ともだちだもんな」

水の街編

其の一

「つまりは……あれか。亀甲の盾を作れ、ってことか」

老爺の言葉に、オールラウンダーは「ううん」とどこか躊躇いながらも頷いた。

彼は今、ギルドの武器屋を訪れ、店主兼鍛冶職人の老爺へ注文をしていたところなのである。

求めるは、どつしりとした重量のある亀甲の盾。

これはなにも、防御を整えるためではない。

成人男性一人分の重さをした亀の甲羅を常日頃から背負い、それによる負荷を以て体を鍛えようというのだ。

「つくれるか？」

オールラウンダーが尋ねるのへ、

「今までそんな注文受けたことがねえんだ。分かるわけねえだろうよ」

「そっか。じゃ、できたらおしえてくれよ。ほら。カネならここにおくから」

老爺の厳めしい態度にも物怖じせず、オールラウンダーは腰から吊るした革袋を工房の長机に置くと、

「よろしくな」

言いおいて、武器屋を後にしてしまった。

「……つたく」

その姿を見送った老爺は、太った革袋の中身を検める。

銀と銅の硬貨が混じり、合わせて金貨二十枚に相当する額。日頃から請けている依頼の報酬に加え、最近では遺跡の探索に精を出しているオールラウンダーは、実のところ結構な貯えがあるのだ。

彼一人ならば、その貯えは食費で潰えていただろう。それを阻止してきたのは、仲間である貴族令嬢一党による厳しい金銭管理だった。

して、その努力の結晶ともいえる金を手にした老爺は、一つ舌打ち

をするや、

「これじゃ安上がりだ」

文句を言いつつ、槌を振るって鉄を打った。

視点は、オールラウンダーへと戻る。

武器屋を後にした彼は、とある冒険者一党に声をかけられた。

「やあ」

「あつ、おめえたちは……」

額に赤い鉢巻を締めた彼は、いつかの若い剣士。

あれから装備をまともに買いそろえたららしい剣士は、胸当ての上に革鎧を纏い、籠手や具足なども揃えていた。

その後ろでは、髪を束ねた女武闘家と、相も変わらず眼鏡の奥から冷たい視線を向ける女魔術師の姿もある。

彼らの首元から、一様に黒曜の認識票が下げられている。

先にあつた、牧場を守るためのゴブリン軍との戦いにおいて、彼らもそれぞれに活躍を見せ、それが認められて昇級が叶ったのだ。

「どうしたんだ？」

オールラウンダーが尋ねるのへ、返答を向けたのは女武闘家。

「今日は、ちよつと動きを見てほしくてさ」

彼女の言葉を補うように、

「組手の相手をしてほしいんだ」

剣士が続く。

これを、

「わかった」

二つ返事で了承したオールラウンダーは、次いで女魔術師を見て、

「おめえはどうする？」

「模擬戦で魔術を消費するわけにはいかないわ。見物してる」

「そっか」

かくして、ギルド裏手の広場へ移った彼らは、対峙と同時に構えをとる。

オールラウンダーと女武闘家は、勿論徒手空拳。剣士は、その名に恥じぬ長剣が得物だ。

「それじゃ……はじめっ」

少し離れた場所にある柵にもたれ、女魔術師が合図をしたのと同じに、女武闘家が距離を詰める。

「ていつっ！」

横払いの蹴りを、屈んで躲したオールラウンダーは、

「それっ！」

そのまま足の発条を使って飛び上がった。

放たれた矢の如き速度で顔面に迫る彼を、

「うわっ」

冷や汗掻きつつ、後方へ倒れるようにして避けた女武闘家。

突進を回避され、宙へ体の浮いたオールラウンダーはまさに隙だらけ。

そこへ、

「それっ」

剣士が飛びかからんとする。

「やべっ」

さすがに慌てたオールラウンダーが、何かを閃いた。

「そうだ。ジャツキーのじいちゃんがやってた……」

と、何やら呟いた後で、彼はくるりと剣士に背を向けると、

「かめはめ波！」

加減を加えた得意技を放つ。

青白い生命の脈動が尾を引いて流れ、その反動によって、オールラウンダーの体は、向かい来る剣士へと一直線に飛んだ。

「えっ!?!」

慌てふためいた剣士は、回避もままならず、もろにオールラウンダーの突進を喰らってダウン。

一人になった女武闘家は、舌打ちを一つするや、それでも感心なことに自棄にならず、じりじりとオールラウンダーとの距離を狭め、隙を見極めようとする。

だが、

「こっちだよ」

前方にいるはずのオールラウンダーの音が、背後から聞こえる。
驚いた女武闘家が、つい振り返ってしまったのへ、

「ほいっ」

オールラウンダーは足払いをかけ、彼女のバランスを崩した。

どさり。女武闘家が尻餅をついたところで、

「そこまで」

組手の終わりを告げる女魔術師の掛声。

「いててて……」

尻を擦りながら立ち上がった女武闘家は、目を丸くしてオールラウンダーを見やり、

「び、びっくりしたあ。前に姿があると思ったら、後ろにいるんだもん」

「へへ。残像拳(ぎんぞうけん)ってんだ。あとでやりかた教えてやるよ」

「……私にあんなの、出来るかなあ……」

女武闘家は、どこか自信なさそうに呟いた。

其の二

剣士たちとの組手を終え、ギルドのロビーへと入って来たオールラウンダーを呼び止めたのは受付嬢であった。

彼女は一枚の羊皮紙を差し出すと、

「水の街の方から、直々に名指しで依頼が来てますよ。凄いじゃないですか！ 有名人ですね」

嬉しそうに言葉を弾ませる。

実年齢十二歳である少年を冒険者にしてしまった罪悪感が消えぬではないが、このところの受付嬢は、オールラウンダーのことを辺境の街を代表する冒険者の一人として、誇らしく思っていた。

常識の範疇を超えた力量に加え、底抜けに明るく素直な性格は、間違ひなく他の冒険者たち……殊に駆け出しの者たちへと良い変化をもたらしている。

現に彼らは、あれほど遠ざけていた「ドブさらい」や「巨ジャイアント・ラット大 鼠退治」などに加え、近くの牧場の牛乳配達や、畑の耕し、農作物の収穫などの依頼を素直に請けてくれるのである。

全ては、

「オールラウンダーのようになるため……」

なのである。

それが上手くいくかは別として、そうして経験を多く積めば、たかがゴブリン退治ごときから彼らが生きて還って来てくれる可能性が上がるわけだ。

これを、受付嬢が歓迎しないわけがない。

……尤も、それで「彼」への思いが揺らぐかといえば、別の話だが、
さして。

指名の依頼書を受け取ったオールラウンダーは、これへすらすらと目を通していく。

初めの頃……それこそ冒険者登録をした時などは、登録用紙の文字を読むことが出来ずにいた彼だが、受付嬢や槍遣いの手ほどきのおかげで、人並みに文字の読み書きをすることが出来るまでに至ってい

る。

しかし、依頼書の書き方が堅苦しかったとみえ、

「よくわかんねえ」

眉を顰めたオールラウンダーは、困ったように受付嬢を見た。

彼女もまた、

「しようがないですねえ」

言いつつ、大仰に肩を竦めると、オールラウンダーから依頼書を受け取って目を通し、その内容をかみ砕いて説明してやる。

傍から見ると、まるで仲のいい姉弟のようである。

「つまりはですね。地下の水道に怪物が出たのでやっつけてほしい。これが一つ目の依頼。そして二つ目が、化け物を退治した後で下水道を掃除してほしい、ということですね」

受付嬢の簡易な説明を聞いたオールラウンダーは、

「それならわかった」

顔を明るくし、頷く。

これを見て、受付嬢も自然と朗らかな笑みを浮かべるが、やがて首を傾げ、

「でも、本当にオールラウンダーさんは有名人ですね。ご一緒している令嬢さんたちのことも書かれますよ」

いまいちど依頼書へ目を通した。

確かに、依頼書の初めは、

「オールラウンダー様一党へ」

と始まっており、本文の中にも、たびたび貴族令嬢たちを示唆するような部分が存在している。

この依頼書が送られたのは、辺境の街から広野を東へ二日ばかり行ったところにある、水の街。

つまりはそれほど距離があるということと、そんな場所においてオールラウンダー一党の内訳を把握している依頼書の送り主が、不気味と言えば不気味であった。

しかし、オールラウンダー本人は、例の如く深く考えず、

「ま、いってみりゃわかるだろ」

そう言うと、受付嬢から依頼書を受け取るや、

「じゃ、ねえちゃんたちさがしてくる！」

そう言って、ギルドを後にした。

これに、笑顔で手を振って応えた受付嬢は、その姿が完全に見えなくなつたところで、深い溜息を吐いた。

営業的笑顔に疲れたわけではない。オールラウンダーへ向けていたものは、「彼」に向けるものとはほぼ同質のものである。

では、溜め息の要因はなにか。

それは、明日に迫つた昇級審査についてのこと。

これを受けるは、とある一党で、全員が鋼鉄級から青玉級……つまりは、八位から七位への昇級がかかっているわけである。

単刀直入に言えば、彼らの昇級は叶うことになる。……ただ一人を除いて。

その一人というのは、一党の中の圃人斥候であつた。無論、これはオールラウンダーと組んでいる女圃人とは別人である。

して、その斥候が何故に昇級できぬのかといえば、それは簡単。冒険の際に潜入した遺跡において、発見した財宝をそっくりそのまま我が物としてしまっている……可能性があるので。

「可能性」にとどめているのは、「圃人斥候の羽振りが急に良くなつた」という状況証拠しか揃っていないから。

明日の昇級審査では、至高神の司祭である監督官も同席する。

彼女の扱う《センス・ライ破》によって、状況証拠も確かなものとなるだろう。

問題は、それから。

冒険者とは、所詮は無頼漢に他ならない。

そんな彼らへ、国営のギルドの一員として、罰するべき点は毅然とした態度で追及しなければならぬ。

彼らの目には、お役所仕事をしている者の説教など、偉ぶつたものにしか聞こえないだろう。

そうになると、どんな逆恨みを買うことになるか……。

尤も、審査に同席する『立会人』には、受付嬢が最も信頼を寄せている人物を選出しているが……。

「彼、引き受けてくれるかなあ……」
色んな意味で、彼女にはそれが気がかりであった。

其の三

「なんだか……怪しい感じもしますが……」

夜。ギルドに設けられた酒場の一席。円卓を囲み、仲間たちと夕餉を共にしつつ、貴族令嬢はまじまじと羊皮紙を見つめながら呟いた。「この書き出しもねえ。『オールラウンダー様一党』って……この子がリーダーみたい」

貴族令嬢の隣に座った圃人斥候が、不満げな顔をして紙の文字を撫でる。

「オラも、べつにそんなんじゃねえしな」

二人の対面に座ったオールラウンダーは、いつもの如く食べ物で両の頬を膨らませながら喋り、

「口のを呑み込んでから喋れ」

森人魔術師がそれを諫める。

かくして最後の一人。只人僧侶は、席を立てて貴族令嬢の後ろに立ち、羊皮紙に書いてある内容を覗き込みながら、

「でも……この『地下水道に出た怪物』っていうのが気になりますね。こういう怪物なのでしょうか」

依頼の中で最もあいまいな部分を指摘し、首を傾げた。

この依頼書を送りつけてきた主は、よほどにオールラウンダーとその周辺の事を知っているらしい。

でなければ、わざわざ「オールラウンダー様一党」などと貴族令嬢たちの存在を言及することは書かないはずだ。

ならば当然、彼・彼女たちの冒険者等級のことも知っていよう。

オールラウンダーは黒曜級。貴族令嬢たちは、揃って鋼鉄級。上級者どころか中堅とも言えぬレベルなのだ。

そんな彼らへ討伐を要請する「怪物」とは、どういうものなのか。まさかに魔神王とやりに繋がる者とも思えぬし、ゴブリンならゴブリンで、そう明記すればいい話だ。

「それに……」

貴族令嬢は、最大の疑問点を口にする。

「どうして、オールラウンダーさんや私たちが指名されたのでしょうか。地下水道の清掃だけなら、まだわかりますけど……怪物の討伐なら、私たちよりも等級が上の冒険者はたくさんいます。それに……」
一旦、言葉を区切った彼女は、この依頼書が送られてきた先の地名を見て、続ける。

「水の街には、剣の乙女もいる。それなのに、どうして……」

この言葉を聞いたオールラウンダーは、

「なあ。それってだれだ？」

と森人に尋ねる。

これへ代わりに答えたのは、僧侶であった。

「剣の乙女。今から十年も前に、復活した魔神王に挑み、そして打ち勝った冒険者一党……その一人。等級は第二位の金。偉大なる至高神に仕える大司教様ですよ！」

「……それって、すげえのか」

「凄い、なんてものじゃありません！ 白金……つまりは勇者も現れぬ中で奮闘し、世界を救ったほどのお人なんです！」

「へえ……やっぱり世の中って広いんだな。亀仙人のじいちゃんがいつてたけど……つええやつがいっぱいいるや」

オールラウンダーはそう言うや、ぶるりと体を震わせた。武者震いというやつだ。

「お前……まさか闘いたい、なんて言わないだろうな」

一党を組んでより今まで。それなりにオールラウンダーの人となりを理解し始めた森人が尋ねると、

「へへっ」

彼は純粹な笑みを以て、これを肯定する。

その姿を見た僧侶は、ぶんぶんと力強く首を振り、
「闘いたいだなんて、とんでもない！ 至高神のアーケビショップ大司教は、無益な戦いを好まないのです！ たとえ組手程度の軽いものとはいえ！」

熱を含んで迫る僧侶を見て、さすがのオールラウンダーも、

「お、おう……」

少し引いた様子で、渋々と頷いた。

貴族令嬢は微笑まし気に、

「彼女。役職柄、剣の乙女に並々ならない尊敬の念を持ってまして……」

その言葉へ被り気味に、

「憧れです！ ああ……一目でいいから、その神々しいお姿を……」

僧侶はいつになく、目を輝かせて遠くを見つめるように、うっとりとした顔つきとなっている。

半ば呆れてこの様子を見ていた圃人は、

「……だったら、行くだけ行ってみる？ 水の街へ」

と呟き、続けて、

「依頼主から話を聞いてさ。もっと『怪物』についてを詳しく知って……それでもヤバそうなら、悪いけど断ればいいよ」

「……そうだな。私たちより位が上の冒険者なら、たくさんいる。それに……」

圃人の言葉に頷いた森人は、ちらとオールラウンダーを見て、

「こつちには、勇者のような力を持った、黒曜級がいるからな」

にこりと笑いかけると、

「ん？」

再び食べることに集中しだしたオールラウンダーが、不思議そうに森人を見つめ返す。

「まっ。よしんば怪物がわたしたちの倒せる奴だとして……街に蔓延る怪物をやっつけたんだから、剣の乙女様も顔くらい見せてくれるかもよ」

圃人の言葉に、僧侶がぴくりと耳を動かす。

「剣の乙女様へ……拝謁できるチャンス……」

淡い期待に身を震わせる僧侶を見やって、暫し考え込んでいた貴族令嬢は、

「では、明日一番に水の街へ向かいましょう。でも、くれぐれも無理はしないように」

その言葉で、話し合いは締めくくられた。

其の一

辺境の街から、広野を東へ二日ほど。

鬱蒼とした森を抜け、あちらこちらに伸びる枝川を従えた湖の中州に、その街は栄えていた。

人呼んで、水の街。

がたりごとりと幌を揺らし、一台の馬車が、街へ続く城門へと姿を消していく。

……いや、馬車だけではなかった。

その真後ろでは、逆立ち歩きをした一人の少年が、

「よっ。ほっ」

と、どこか楽しそうに続いているのだ。

かくして、石畳に舗装された道を行く馬車は、広場の停留所へと停まり、幌から冒険者たちが次々と出てくる。

件の逆立ち歩きの少年は、やがて女四人の冒険者たちの姿を見出すと、

「じゃ、いこうぜ」

飛び跳ね、宙でぐるりと身を反転させて二足の歩行となった。

これを冒険者……貴族令嬢一党は、呆れた様子で見ている。

少年ことオールラウンダーは、辺境の街から水の街へと移るこの二日間、絶えず逆立ち歩きでの移動に拘り続けていたのだ。

当人曰く、

「修行だ」

ということらしい。

「依頼人って、どこにいらんだっけ？」

多種多様な者たちが集客のために声を張り上げている様子を物珍し気に見つつ、圃人野伏が呟いたのへ、

「えっと……」

腰のベルトから吊るしたポーチより羊皮紙の依頼書を取り出した貴族令嬢は、

「ドルク……という酒場ですね。大通りから外れた裏路地に、そのお

店があるみたいです」

これへ、

「少々、怪しい気もするが……」

森人魔術師は警戒の色を見せたが、

「ここに……ここに剣の乙女様が……」

「うひゃあ！ あつちこつちからうまそうなニオイがする！」

只人僧侶とオールラウンダーは、そんなことお構いなしに、それぞれの興味あることへと気持ちを移している。

これを見た森人は、仕方もなくといった風に笑い、

「……じゃあ、行きましようか」

と促した貴族令嬢が先頭を歩き、その次に圃人と森人。そしてオールラウンダーが、

「おい。おいてかれちやうぞ」

未だ目を輝かせている僧侶の腕を引っ張って、最後に続いた。

こうして一党が辿り着いたのは、まだ日が真上にあるというのに、その光が届かぬ裏路地。

それまでの異国情緒あふれる雑踏が嘘のように失せ、しんと静まり返った空間であった。

その一郭に、目指す酒場があった。

「準備中」

と掲げられた看板を無視して扉を開け、店の中へと入ってみると、
「……お客さん。表の看板はしっかり見てもらわなくちゃ困りますね」

初老の只人の男が、カウンター越しに声をかけてきた。恐らくは酒場の店主であろう。

貴族令嬢は出て行く代わりに、

「下水道掃除の依頼を請けたものです」

言いつつ、突き出すようにして羊皮紙を見せた。

店主の男の眉が、ぴくりと動いた。

次いで男は、

「どうぞ」

五人の冒険者を、カウンター席へと誘った。

これへ素直に従った貴族令嬢たち。

果たして最初に話を切り出したのは、圃人野伏であった。

「んで、単刀直入にお聞きしちゃうけど。下水道にいる化け物ってなんのことなのよ」

この言葉に、店主は少しばかり困ったような顔をした。

「実はね、お客さん。俺もよく分からないのさ」

「よく分からない？」

「ああ。俺は、な」

意味深な言葉の次に、店主はちらと店の入り口を見やる。

すると、まるでタイミングを計ったようにして、一人の男が、

「マスタあ。やってるかあい」

ふらついた足取りで店の中へと入って来た。

昼間から酒気を帯びたその男は、赤ら顔のままに貴族令嬢たちを見て、

「へえ。この店もそういうことを始めたのかい」
などと宣う。

それが何を意味するのか。分からぬほど世間を知らぬわけではない女性陣は、一気に不快の色を露わにした。

察した店主は、

「おい、お前さん。この人たちは、冒険者様さ。ちようどいい。あの事を話してやりなよ」

これを聞いた酔いどれ男は、

「ああん？」

貴族令嬢たちの首から下がった鋼鉄の小板……その近くにある『もの』へいやらしい視線を向けた後で、

「なんでえ。鋼鉄かよ」

とは言いつつ、床にどかっと座ると、数日前に体験した奇妙な出来事を、貴族令嬢たちへ聞かせてやった。

「その日は、この酒屋で飲んだ後で、ふらっこふらっこしてたんだけど

よ……」

酔いどれ男は、浮浪者であった。

酒場で思うままに酔いしれた彼は、さりとして帰る家もなく、ぶらぶらと深夜の街を歩いていた。

すると、

「きやあつ……」

という女の悲鳴がするではないか。

不気味に思いつつ、その声がした方へと行ってみると、そこはまた別の路地裏。

果たして石畳の道の上に、娘の骸が転がっており、それに覆いかぶさっていた影が、

「なんだあ、てめえは！」

浮浪者の大声にびくりと震え、逃げ出した。

男は足元にあった小石を掴んでこれを追いかけたが、その影は逃げに逃げた末、街の至る所に流れる用水路……その一つへ飛び降り、びちやびちやと音を立てて彼方へ消え去ろうとしたのだが……。

「そしたらよ。地下水道に繋がる穴ぼこから、ずいと大きな何かが出てきたと思ったらよ。娘殺した奴をよ……ばりばりとかみ砕いちまったのさ」

娘を殺した影は、妙に甲高い悲鳴を上げ、骨の碎かれる音を立てながら、遂に『大きな何か』に喰われてしまったらしい。

月明かり照らす中、浮浪者はその『大きな何か』を見た。

短い四足で、腹ばいになって這う巨大な……蜥蜴のようなもの。

沼竜アリゲイタと呼ばれるその化け物は、血に塗れた牙を不敵に浮浪者へ見せると、のそりのそりと地下水道へと引き返してしまっただけらしい。

話を聞き終えた貴族令嬢たちは、流石に顔色を青くして額に汗をにじませた。

街の地下に、そのような怪物が住み暮らしているとは。

沼竜は、確かに伝説に語られるようなものではないが……。

「沼竜は顎の力が非常に強く、水を素早く泳ぎます。恐らく……まともな地下へ潜って戦っても、こちらに勝ち目はないでしょうね……」

貴族令嬢が齒噛みして言うのへ、

「かといつて、そんなに頻繁に向こうさんが地上に出て来てくれるとは思えないしねえ……」

「圃人野伏が、消極的な声を被せる。

すると、

「だから、オールラウンダーさんへ依頼を寄こしたのさ」

一党を順々に見やった店主は、

「吟遊詩人が歌っていたのを聞いてね。かの辺境の地において、駆け出しの目標となつている一人の冒険者。拳を繰り出せば岩が砕け、魔術を放てば山一つ吹き飛ぶ。そんな人喰い鬼^オみたいな力を持っていながら、仕事の大小は選ばない……ってね」

そう言つて期待に目を輝かせ、

「で、そのオールラウンダーさんはどなたかね？ あんたかい？」

一党の頭目である貴族令嬢へ問うたが、彼女は引きつった笑みで首を振り、

「多分、この子ですね……」

隣に座つた、山吹色の道着を着込んだ少年を指した。

「……へ？」

力ない、店主の声である。

其の二

店主の男は、

「冗談だろ?」

と言わんばかりにオールラウンダーを見やった。
無理もない話である。

カウンター席に座る少年は、とても岩を砕く拳も、山を吹き飛ばす魔術も持ち合わせているようには見えないのだ。

すると、店主の気持ちを代弁するように、

「そんなら、是非ともオールラウンダー様のお力を拝見したいもんだねえ」

などと、酔い潰れの浮浪者がせせら笑う。

「ゴクウ。やっちゃいなよ」

言ったのは、圃人野伏。浮浪者のいやらしい視線に最も不快感を表していたのだ。

名を呼ばれたオールラウンダーは、

「いいのか?」

少しばかり躊躇うように、圃人野伏を見やる。

「いいって、いいって。そちらさんは力を見たいようだし?」

圃人は、挑発するように店主と浮浪者を見た。

「お、俺は別に、そんな……」

不安げに言葉を濁す店主に対して、

「おうおう。やれやれ!」

浮浪者の男は、すっかり嘘っぱちだと思っっているらしく、はやし立てるばかり。

やがて、オールラウンダーは店内を見回した後で、

「なあ、おっちゃん。あれつかつてもいいか?」

そう指さしたのは、店内の隅っこに置かれていた酒樽。

といっても、中身はすでに空けており、いつか処分しようと思って、遂に今まで放置されていたものだ。

「別に、構わんが……」

承諾を受けたオールラウンダーは、さつと腰元に両手を引き寄せて重ねると、

「波っ！」

勢いよく腕を樽へ向けて突き出した。

瞬間。ぼうつと火が灯るような音とともに、彼の両手から青白い光弾が飛び出し、これが樽へとぶち当たり、木っ端みじんと相成った。

店主は勿論、それまで馬鹿のように笑っていた浮浪者も、二日酔いが瞬時に引くほどに、驚愕のあまり目を見張った。

これを見た圃人野伏は得意げに、

「これでもゴクウは手加減してる方だけどね。信じられないなら、この店吹っ飛ばすくらいの手加減でやってみようか？」

彼女のその言葉に、

「い、いえ……結構です……」

店主は、冷や汗掻きつつ首を振ったものである。

かくして一党は、借りてきた猫のような浮浪者の案内を受けて、街の郊外にぼつりとある、寂れた石造り（この街の建物は例外なく石造りだが）の建物へとやってきた。

曰く、この建物は混沌勢力との戦いによって親を亡くした子供……すなわち戦争孤児を引き取るための施設であつたらしいが、どうしたわけか子供の失踪事件が相次いで発生し、これを不気味がった周辺住民の要望もあつて、閉鎖になつたらしい。

「そんな曰く付きなら、さっさと取り壊しちゃえばいいのに」

圃人の言葉に、

「簡単に言うが、建物一つを壊すのにも金がかかるからな。この施設を動かしてた奴らはいつの間にか夜逃げしちまつて、そうなると街が金を払うことになる。しかし、まさかこんな小汚え小屋のために、大事な大事な金を使うのも憚られる。そうしているうちにどんどんとほつたらかしにされ、今となつてはろくでもねえ奴の温床みたいになつちまつてるよ」

俺みたいにな、と締めくくつた浮浪者は自嘲の笑みを浮かべつつ、一党を施設中庭にある井戸の前へと誘つた。

「用水路からも行けることは行けるが……街の管理者たちが目を光らせてるからな。まさかに、こんな薄汚え親仁の依頼を請けて下水道を探索に来た、なんてのが通じるわけもねえ。するつてえと、こういう人んちの井戸やらが、地下水道への侵入経路となるわけさ」

その言葉を最後に、案内を終えた浮浪者は去っていく。

これを見送った一党は、

「やして……」

と、井戸の中を覗き込んだ。

貴族令嬢が、足元にあつた小石を拾い上げて、これを落としてみる
と、

「ごっん」

という音が返ってくる。やはり、水は枯れているようだ。

井戸内側の側面には、底へと続く梯子が設けられている。

これを最初に下つたのは、オールラウンダーであった。

「うわっ。くせえ」

降りるにつれて、彼の声は徐々に共鳴していく。

暫くすると、

「おおい。おりてこいよー。大丈夫みてえだ」

反響するオールラウンダーの声。

領き合つた一党は、一人また一人と地下水道へ下っていった。

彼女たちをまず襲つたのは、臭気。ゴミやら排泄物が集結する地下

水道は、鼻が曲がるほどに臭う。

一番に苦しがつていたのはオールラウンダーで、

「まえに、すごいクサイやつが天下一武道会にいたけど……そいつとおなじくらいくせえ」

今までで一番に苦しそうな表情を見せたものである。

だが、平穏なる街の下へ胡坐をかく化け物を前に、臭気ごときで退散するわけにもいかない。

僧侶の《ホーリーライト聖光》を頼りに、まるで迷宮の如く進んでいく貴族令嬢

一党を次に襲つたのは、

「GYA!!」

右手の脇道から、突然に飛び出してきた小さな影。それも十。

醜悪な面をした緑肌のそ奴らを、一党は飽きるほどに見ていた。

「ゴブリン……い！」

よもやこんなところで遭遇するとは。

圍人は矢の代わりに短剣を、貴族令嬢が長剣を引き抜き、森人が杖を構えるその僅かな隙を、

「だりやつ！」

徒手空拳で飛び出したオールラウンダーが補い、瞬く間に二匹の小鬼どもを、脇にある汚水流れる水路へと落としていく。

「光源は絶やさず！ 挟み撃ちも考えられますので、後ろにも十分な警戒を！」

手早く命じた貴族令嬢は、オールラウンダーに続いてゴブリンの群れへと勇躍した。

其の三

「しっかし……神聖なる剣の乙女様がいらっしやる水の街の地下に……選りによってゴブリンが住み着いてるなんてねえ……」

小鬼の群れの最期の一匹を、容赦なく汚水へ蹴り飛ばした後で、圃人野伏が皮肉交じりに呟いた。

その傍らでは森人魔術師が、顎へ手をかけつつ、

「もしや……あの依頼者が言っていた、『娘を殺し、化け物に喰われた影』というのは……ゴブリンのことではないか？」

と推察する。

それへ、

「ですが……妙じやありませんか？ あの男性が言うことが本当で、その犯人がゴブリンというのは……」

飽くまでも慎重に、貴族令嬢が異を唱える。

「なにが妙なの？」

圃人が問うと、令嬢は少しばかり表情を暗くした後で、

「……嫌なことだけど、思い出してください。ゴブリンが娘を殺すのは、自分たちの巢へ引きずり込んで蹂躪し、それにも飽きた時です」
その言葉を聞いた瞬間、オールラウンダー以外の戦士たちが、一様に苦い顔つきとなった。

思い起こされるは、山砦での一件。

無数のゴブリンどもに寄つてたかられ、砦の広間へと連れていかれ、裸に剥かれ……。

横手を見れば、無残な最期を遂げた村娘たちが、小鬼どもの餌となるべく山を築いている。

思い出すだけでも身の毛がよだつ、苦い記憶。

しかし、だからこそ妙なのだ。

ゴブリンとて、捉えた雌を自分たちの巢へ連れ去り、そこで凌辱するだけの知恵はあるのだ。

水の街という、いわば敵の本拠地とも呼べる場所で、堂々と娘を殺すだけの度胸を、奴らが持ち合わせているだろうか。

そこまで考えが至ったところで、

「女性を殺したのは……また別の存在、ということですか……？」

不安げな表情のまま、僧侶が新たな可能性を口にする。

貴族令嬢は難しい顔つきのまま、

「可能性が無いとは言えません」

と、頷くでもなく、さりとして首を振るでもなく。

「この依頼、思った以上に根が深そうです……」

貴族令嬢のその言葉に、一党は固唾を飲んだ。

……ただ一人を除いて。

「よくわかんねえけど……どうすんだ？　このまま、おっちゃんのことってたバケモノを退治しにいくのか？」

地下いっぱいに反響するような明朗な声で、オールラウンダーがこれからの指示を仰ぐ。

この様子を見た森人は頭を抱え、

「お前……今の声が他のオルクに伝わっていたらどうするんだ……」

「へ？　あの緑の奴ら、ほかにもいるんか」

「こんな薄暗くて汚らしい空間があるんだ。まさかに、さつき斃した十匹程度が群れの全てというわけではないだろう」

「そっか……」

オールラウンダーは暫し腕を組んで考えているようだったが、やがて頭を上げ、

「ま、それだったらぜんぶ、ぶつとばしやいいだろ」

なんとも単純明快な解決策。

意気込むように、腕をぐるぐると回した彼を見た貴族令嬢たちは、いつもならば、その明るさに笑みを漏らしたところだが、今回ばかりはそうもいかない。

例えば、地下水道に住み着いた『化け物』を斃し、ゴブリンどもを駆逐したとして……果たしてそれが事件の解明につながるか。そこが不安であったのだ。

しかし、迷ってもいられない。

かくして、頭目である貴族令嬢が下した決断は、

「……………ここは、一旦地上へ戻りましょう。怪物だけでなく、ゴブリンたちとの戦闘も避けられませんし……長期戦への備えを整えないと……」

これであつた。

だが……。

「……………ねえ、あれって……………」

来た道を引き返し、梯子のかかる壁を見上げてみると、先までぽっかりと地表に続いていた穴が、黒く塗りつぶされている。

何者かが、石井戸に蓋をしたのだ。

「ゴクウ。あれ壊せる?」

「まかせとけ」

圃人に言われて、オールラウンダーが両手を重ねる構えを見せた。

「かめはめ波」だ。

しかし、

「待ってください」

と、貴族令嬢の制止を求める声。

彼女は、頬を伝う一筋をの汗を拭った後で、

「別の出口を探しましょう」

そう提案した。

「なんでさ?」

圃人の問いに答えたのは、森人魔術師。

「考えても見ろ。打ち捨てられた廃屋にある石井戸へ、わざわざ蓋をするような律義者がいると思うか?」

「……………どういふことさ?」

「蓋をした者は、私たちが下水道へ潜ったのを確かめた上で、それを実行したということさ」

「それって……………」

圃人は、自身の頭に浮かんだ考えを確認するかのように貴族令嬢を見やる。

その視線に気づいた令嬢は、こくりと頷いた後で、

「私たちが廃屋の井戸を伝って下水道へ潜入したことを知るの

……あの酒場の店主と、その利用客である浮浪者以外にいません。彼らが私たちを地下水道へ閉じ込めたと考えるのが自然でしょう」

この言葉を聞いた圃人は、

「だったら、なおさら地上へ戻って、あいつらにぎやふんと言わせな
きやー！」

と憤るが、飽くまでも貴族令嬢は首を振り、

「ここは、まんまと罠にかかったと見せかけましょう。飽くまで状況証拠しか揃ってない今、彼らを糾弾するのは難しいことです。別の出口を探し、そこから何食わぬ顔で彼らの下を訪れば、必ず彼らはボ
口を出します」

塞がれた地表への出口を、強く睨む。

「彼らが何を企てていようが……決して好きにはさせません」

強い、貴族令嬢の言葉であった。

其の四

迷宮とも思える地下水道を、どれほど歩いた時だろうか。

「む……？」

ふと足を止めた森人が、ぴくりと耳を上下した。

「どうしました？」

貴族令嬢の問いに、

「しっ」

人差し指を自身の口元へ当てた森人は、

「オルクの声だ。足音がしないのが妙だが……」

すると、次に口を開いたのは圃人。

「もしかして、泳いで来たりして？」

そう言つて、脇を流れる汚水の川を見た。

考えられぬことではなかったし、水を伝つて一党の元に小鬼どもが迫つて来たのは事実であつた。

しかし、奴らはガラクタの寄せ集めで一丁前に船など拵えていたのである。

その数、無数。

手に手に武器を取る小鬼どもの中に弓を構える個体を見た貴族令嬢は、

「ソンさん！ かめなんとかを、水面に！」

そう叫び、これを受けたオールラウンダーは、

「わかつた！」

応えると同時に、さつと腰元へ両手を重ね、これを突き出す。

オールラウンダーの放つ「かめはめ波」の利点は、魔術や奇跡のよ
うに、長々とした詠唱を必要としないところにある。

天におわす神々へ精神を結んだり、強き言葉をもつて世界を改竄し
たり……その必要は一切ない。頼りとなるは、己の体に迸る「気力」の
み。

無論、より高い威力を放つにはそれなりの集中力も要するが、水面
へ衝撃を与え、小鬼どもの粗末な船を波で包む程度であれば、その必

要もない。

「波っ！」

果たしてオールラウンダーの両手より放たれた青い光は、尾を引いて水面へと直撃。

汚水は柱の如く噴き上げ、衝撃によって高波が生まれた。

「GYAO!?!」

「GUGYAA!」

波に吞まれた小鬼どもが、次から次に水の底へと消えていく。

どうやら奴らは鎧を纏っていたらしく、それが重しとなって、身を滅ぼしたようだ。

後に残るは、転覆して腹を見せた船のみ。

暫く水面を見つめ、ゴブリンどもが顔を見せないことを確認した一党が、さて先へ行こうとした時である。

「まだなにかくる……」

珍しく顔を引き締めたオールラウンダーが、汚水の川を睨み据えてそう言った。

直後。

飛沫を上げて水面から飛び出してきたのは、白い顎。

これが、底に沈んでいたゴブリンどもを、鎧ごとばりばりと噛み砕き、呑み込んだ。

「ア、沼竜……!」

貴族令嬢の叫びと同時に、一党はさつと身を翻して逃亡に出る。

しかし、ただ一人。オールラウンダーだけは動かなかった。

ゴブリンどもを喰らい、水面から顔だけを出して様子を窺う沼竜を、彼もまたじつと見つめ返している。

「ゴクウー・逃げなよ！」

圃人の叫びに、

「でもよ」

オールラウンダーは一言置いた後で、

「こいつ、悪いやつじゃねえ気がする」

やはり、沼竜を見て言うのだ。

「はあ?！」

再び叫ぶ圍人の横で、しかし貴族令嬢も冷静になつて様子を窺っている。

(確かに……ただ獯猛なだけの化け物なら……どうしてソンスンを攻撃しないのかしら……)

いつしか闘った、ゴ布林ライダーが従える山犬のように、野生の勘で力量差を弁えたか。

それにしても、どこか妙だ。どのあたりが妙なのかと言われれば、答えに困るが……。

そうこうしているうちに、動いたのは沼竜であった。

彼(?)は、通路へとその大きな顎を乗せると、じろりとオールラウンダーを見やる。

「……のつていいのか?！」

オールラウンダーの問いに、沼竜はおくびにも似た鳴き声を上げる。

これを承諾と解釈したオールラウンダーは、

「よっ」

軽い掛け声と共に、沼竜の背中へ一跳び。

少年を乗せた沼竜は、ゆっくりゆっくりと汚水を掻き分けて泳ぎ、時折、貴族令嬢たちを振り返る。

「ついでにい、つてことなのかな……?！」

「……敵意はなさそうですね」

かくして、未だ警戒は解かないものの、貴族令嬢たちも沼竜を追つて通路を進む。

道中、一度もゴ布林どもと遭遇することなく、一党が辿り着いたのは、通路の壁側に設けられた、上へと続く梯子。

見上げてみると、ぽつかりと空いた穴を通して、薄暗い一面に、無数の小さな輝きが散りばめられているのが見える。

それが「夜空」であると理解するのに、一党は少しばかり時間を有した。

「おめえ、道案内してくれたんだな」

オールラウンダーが頭を撫でてやると、沼竜は心地よさそうに目を細め、また一鳴き。

案内を終え、オールラウンダーを降ろした沼竜は、汚水を掻き分け、奥へ奥へと消えていく。

これを見送った後で、一党は梯子を上っていった。

「ここは……」

石井戸から出て広がる光景は、先までの汚く臭い地下水道から一変。

地を覆う芝生と、天まで伸びようかという大樹。それらが微風に揺れ、かさりかざりと音を立てる。

夏特有の、熱気と少々の涼しさを孕んだ、妙に心地のいい夜の風であつた。

神聖さを帯びた静寂に満ちるその空間に、一党は息を呑む。

ふと、芝生を踏みしめる音がした。

一党の視線が集中したのは、空間の奥。

白亜石の柱によつて装飾された建物の入り口から、こちらへ近寄る一つの影。

その豊満が透けようかという薄い白衣。歩くたびに揺れる、腰まで伸びた金色の髪。

天秤を鏢にした長剣を杖のようにして歩み寄る……一人の女性。

彼女を見た途端、僧侶が感動の声を漏らした。

「剣の……乙女様……」

果たして女性……剣の乙女は、ちらと一党を見やった。

しかし、彼女の目に貴族令嬢たちの姿は映らない。その瞳は、黒い帯によつて隠されているからだ。

「誰……？」

清らかな鈴のような声による、剣の乙女の誰何。

これへ、

「おめえが、悪のびしよ濡れか」

オールラウンダーのその一言に、令嬢たちは凍り付いた。

其の五

「絶対にやると思った……」

諦めと呆れの混じった表情で額を押さえる貴族令嬢の横で、

「も、申し訳ありません！ 申し訳ありません！ このような失礼を！」

僧侶がそう叫び、剣の乙女へ何度も頭を下げる。

して、剣の乙女は柔和な笑みを浮かべるや、オールラウンダーと視線を合わせるように……:といても、彼女は目隠しをしているので合わせようがないが。兎も角、腰を屈めた彼女は、

「もしかして……大司教アーケビショップのことかしら？」

そう言うのと、

「そう！ それだ！」

明るく笑ったオールラウンダーが、ぽんと手を打つ。

その様子が可笑しかったと見え、更に笑みを深めた剣の乙女は、すつくと立ちあがり、

「井戸からひよっこり現れた、賑やかで面白おかしい同胞の方々。歓迎しますわ」

我が子を迎え入れるかのような、抱擁の身振りを以て貴族令嬢一党を迎えた。

令嬢と僧侶はこれに深々と頭を下げて応え、オールラウンダーは、「よろしくな」

などと、親し気に握手を求める。

その傍らで冴えぬ顔をしていたのは圃人と森人であり、胸にわだかまった疑問を先に口にしたのは、圃人であった。

「なんで、わたしたちが井戸から来たなんてわかったのさ」

この問いかけに、剣の乙女は僅かに肩を震わせたように見えたが、しかし物腰柔らかな態度は変わらず、

「ふふっ。泥と汚水の臭いを纏ったあなた方と、その背後にある石井戸を見れば、分かりますわ」

そう言うって、すらりと細い人差し指を、一党の背にある石井戸へと

向けた。

「すげえな。目隠ししてても、そういうのがわかるのか」

と、これは純粋なオールラウンダーの感心。

「凄いでしょう」

剣の乙女は、まるで自慢げな子供のような態度で応え、その後でふわりと身を翻すや、

「お話の続きは、聖域にて伺いましょう。どうか、奥の礼拝堂へとおいでください」

そう言つて、まるで夢幻のようにふわふわとした足取りで、建物の中へと入っていった。

これへ、貴族令嬢と僧侶、オールラウンダーが続いていくが、圃人と森人はどこか躊躇うように、じりじりとした足取りだ。

「……どうしました？」

頭目ということもあり、一党の機微をいち早く察した貴族令嬢は、背中越しに圃人と森人へ問うた。

森人は、

「いや……」

と言葉を濁したが、圃人は思いつめた末に覚悟を決めたようで、

「あの女の人……何かを隠してるような気がするんだ。それが何かは分からないけど……」

そう言つたものだが、これに反論するのは僧侶。

「剣の乙女様に限って、そんな……第一、初対面の私たちに何を隠しているというのです？」

「だから……それが分からないんだってば……」

剣の乙女に対する、信と疑。今にもこの二つがぶつかりそうになつたところで、一党は神殿の最奥……先に剣の乙女が言っていた、礼拝堂へと足を踏み入れた。

天窓から入る月の光が、奥にある祭壇を照らす。

その手前では、ちよこなんと床に座つた剣の乙女が、

「さあ、どうぞ」

自身の傍に座するよう、促す。

これに一同が従うと、
「さて」

劍の乙女が切り出しの一言の後に、
「皆様は、どうして神殿の裏庭にいらっしやったのですか？ それも、
かような夜更けに」

問うのへ、貴族令嬢は今までの経緯を語った。
水の街の裏路地にある酒場。その常連客から、『怪物』を斃してほ
しいと依頼されたこと。

実際に依頼を請けに地下水道へ潜つてみると、入り口が人為的に塞
がれてしまったこと。

仕方もなしに水道を探索する中、ゴブリンの群れに遭遇したこと。
件の『怪物』とやらは、思った以上に害のない存在であったこと。
話を聞き終えた劍の乙女は、僅かに唇を噛み、またしても肩を震わ
せた後で、

「そう、ですか……」

絞り出すような声と共に、ゆっくりと立ち上がると、

「実は、私。辺境の街のゴブリンスレイヤーという方へ、ある依頼を託
しておりますの」

すると、『ゴブリンスレイヤー』という単語に反応したオールラウン
ダーが、

「スツチャンも、こっちにくるのか」

その反応に驚いたらしい劍の乙女は、

「え、ええ……」

と頷く。

「ゴブリンスレイヤーへの依頼と言うと……やはり、ゴブリン退治？」
確認するかのよう貴族令嬢が問うと、

「ええ」

肯定を表す、劍の乙女の沈痛な声音が返ってくる。

続けて乙女は、

「予定通りならば、明日にはゴブリンスレイヤー様がこの水の街を
……いえ、法の神殿を訪れますわ。その時に依頼の詳細をお聞かせす

るのですが……」

言葉を区切り、上目遣いに一党を見た後で、

「どうかその際、あなた方も同席し、願わくば彼と協力して依頼を請けてほしいのです」

そう言うではないか。

一党は、顔を見合わせた。

察するに、「ゴブリン退治」の依頼を請けてほしい、ということらしいが……。

(まさか、かつての英雄からそのような依頼を請けるとは……)
このことである。

雲の上のような存在である、金等級から頼りとされるのは悪くない気分であるが、こうなるとどうも腑に落ちない点も出てくる。

例えば、

「剣の乙女様が、ゴブリン退治へ乗り出すわけにはいかないんですか？」

というもの。

しかし、

「どうか、お願いいたします。街の平穏と命運をかけた依頼なのです」
剣の乙女にそう強く言われると、無下に断るわけにもいかなくなつてしまった。

其の六

翌日の昼過ぎになって。

法の神殿最奥の礼拝堂へ、例によつてずかずかと無作法な足音を響かせて入つて来た者がいる。

ゴブリンスレイヤーである。

彼の後ろには、女神官や妖精弓手、鉤人に蜥蜴僧侶という、すっかり馴染んだ一党もいた。

果たして彼らを最初に向かえたのは、

「ようー！」

それまで退屈気に、礼拝堂の円柱から円柱へと飛び移つて暇を持て余していたオールラウンダーであつた。

「ひゃあつー！」

突然に空から飛来した、しかも見知つた顔の登場に、女神官が可愛らしい驚きの声を上げる。

「なんじやい。指名の依頼と聞いていたが……坊主たちも剣の乙女とやらから名指しされておつたか」

鉤人道士が、その白い髭を扱きながら言うのへ、

「オラたちはたまたまだ」

オールラウンダーが答える。

「……たまたまつて……なにがどうたまたま運んだら、ここにいるのよ」

そんな彼を、妖精弓手は呆れたように見やつた。

聖域の静寂を取り払うかのように賑やかとなつたその場を、

「こほん」

咳払いが一つ。すると、再びしんと辺りが静まり返る。

一同の視点が、祭壇の前に立つ剣の乙女へと向いた。

果たして彼女は、にこやかに口元を緩めると、

「ようこそ、頼もしい冒険者よ。歓迎いたしますわ」

と、新たな訪問者たちを迎え入れる。

しかしゴブリンスレイヤーは、

「能書きはいい」

と一蹴するや、

「ゴブリンはどこにいるっ…」

剣の乙女へと問うた。

これに代わりに答えたのはオールラウンダーで、

「あいつらなら、下にいたぞ」

と足元を指す。

彼の言葉を補うように、

「私たち、昨日地下下水道に潜ったんです。ゴブリン退治とは別件だったんですけど……でも、そこでゴブリンの群れに遭遇したんです」

貴族令嬢が言うのへ、「なるほど」と蜥蜴僧侶は頷いた後で、

「かような古都の地下ともあらば、それは遺跡か迷宮も同然。小鬼どもが潜むには、うつつつけでしょうな」

しゆるしゆると舌を出し入れしながら、推察を述べた。

ゴブリンスレイヤーも、これに同意を示す頷きをした後で、

「奴らは、いつから地下にいるっ…」

剣の乙女へ問いを投げた。

彼女はゆっくりと頭を振り、

「正確なことは分かりません……」

申し訳なさそうに首を垂れた後で、

「ですが……本格的な動きが見られたのは、一ヶ月前のことでしたわ」

ひと月前。夜分遅くに使いに出した侍祭の娘が、翌朝になって、路地裏で遺体となって発見された。

発見者によると、娘は生きながらに体を切り刻まれたらしい。

すぐさま街の衛視たちが搜索に乗り出したが、全く手掛かりを掴むことが出来ぬ。

そうこうしているうちに、物取りや通り魔、引き攫いといった犯罪は増えていった。

……で、手がかりが掴めぬのならば、現場を押さえるしかない。と
いうので、衛視だけでなく冒険者も加え、街では大掛かりな巡回が行われた。

して、これが功を奏した。

とある冒険者の一党が、女性を襲う小さな影を斬り伏せたところ、それがゴブリンだったのである。

様々な考察がなされた末、一連の事件は、街の地下に巢食ったゴブリンどもの仕業だろうということになった。

すぐさま、討伐の依頼が出され、冒険者たちが向かったものだが、彼らは帰って来なかった。

そんな折、剣の乙女は辺境の勇士であるゴブリンスレイヤーの歌を聞いた。

一縷の望みをかけて彼女は指名の依頼を出し、そして現在に至る。

「どうか、わたくしどもの街を救っては頂けないでしょうか」

全てを話した後で、剣の乙女は深く頭を下げた。

これに対してゴブリンスレイヤーは、

「救えるかは分らん。だが、ゴブリンどもは殺そう」

淡々とした態度で応える。

これへ、深く溜息を吐いた妖精弓手は、

「あんたたちも、一緒に来るでしょ？」

とオールラウンダーたちを見やる。

「おう」

オールラウンダーが言いかけるのを止めた貴族令嬢は、

「私たちは……少し確かめたいことがあるのです」

「……確かめたいこと？」

「はい。……そもそも、私たちがこの街に来たのも、指名の依頼を請けたからなんです」

「それって、オルクボルグみたいに？」

「ええ。ですが、ゴブリン退治ではなく、下水道の掃除と、そこに巢食う別の怪物退治という名目で」

「別の怪物……？」

気になる単語に、妖精弓手の長い耳がピクリと動いた。

「その怪物って？」

「白くて巨大な、沼竜でした。ですが、それは依頼で聞くよりもずっと

温厚で……現に、私たちがこうして神殿に来られたのも、沼竜が案内をしてくれたからなんです」

「……まるで、のっぽが好みそうなおとぎ話じゃな」

鉱人道士は、言葉こそ囁きながら、真剣そのものの表情で貴族令嬢の話に耳を傾けている。

「して、何が気になるのかね」

腕を組んだ蜥蜴僧侶が促すと、令嬢はこくりと頷いた後で、

「私たちは廃屋の石井戸から地下へと降りたのですが……その入り口を塞いだ者がいるのです。私たちはその犯人が、依頼を寄こした者たちであると踏んでいます」

「はて……？ 依頼をしておきながら、冒険者を罠にはめたということですか？」

「……恐らく。その真偽を確かめた上で、事実ならその真意を問いただしたいのです」

「なるほど」

ぎよろり。大きな目を貴族令嬢一党へ向けた後で蜥蜴僧侶は、

「しからは、別行動ですな」

そんな彼の言葉を、

「関係ない」

ぴしやりと閉じたゴブリンスレイヤーは、

「俺たちは俺たちで、ゴブリンを殺すだけだ」

全く芯の揺れないその発言に、彼の率いる一党は呆れを通り越し、くすくすと笑い合った。

武の天を目指す者

辺境の街と牧場とを結ぶ一本道を、一台の荷車が往く。

台には、中身のぎつちりと詰まった木箱の数々に、若き剣士と女魔術師が乗っていた。

果たして車を曳いていたのは、彼らと一党を組んでいる女武闘家であり、その顔を真っ赤にさせつつも、一歩一歩確実に踏みしめていた。

「なあ。本当に街と牧場を十往復もするのかよ」

同郷で幼馴染の剣士が、荷台から心配そうな声を寄こす。

これへ、振り向いた女武闘家は、

「大丈夫」

と、顔いっぱい汗を浮かべながら、明らかに無理の出ている笑みを浮かべて答えた。

本音を言えば、今すぐにも止めて欲しい剣士なのだが、昔に、近所で大威張りをしていた年上の男の子を、泣いて謝らせるまで必死になって喰らいついた彼女の姿を思い出し、やがて無理を悟って黙ってしまった。

女魔術師も、良くも悪くも淡白な性格なので、

「あの子の気の済むまでやらせてあげればいいわ」

と、ついこの間、安い報酬を貯めに貯めた末に購入した最新の呪文書へ目を通しつつ、剣士へ言ってやったものである。

何故、このように女武闘家が燃えているのかと言えば、その要因はオールラウンダーにあった。

初めての依頼を請けるまで、女武闘家の中での最強は、「亡父から教わった格闘技」であった。

例え、相手が魔王であろうが人喰い鬼であろうが、父の教えが砕けぬはずはない、と。

しかし、攫われた娘を救うために潜った洞穴の中で、見たこともない大柄のゴブリンを見上げた時、彼女は本能的に、

(勝てない……)

と悟ってしまった。

倍ほどもある体格差の前には、父直伝の格闘技すら無意味なのだ、と。

だが、そんなのお構いなしと言わんばかりの力を見せつけた者がいた。それが、オールラウンダーであった。

途中、ゴブリンスレイヤーなる冒険者の助けがあったとはいえ、オールラウンダーは大柄ゴブリンの首を一撃で吹き飛ばすほどの蹴りをしてみせたのだ。

女武闘家にとっては、衝撃であった。

ついさつきまで、武道の限界を垣間見たような気がしたのに、それを楽々と突破していくオールラウンダーの姿は、どこか恐ろしくもあったが、それ以上に彼女にとっては「希望」であった。

(極めれば……こんなに強くなれる……)

このことである。

これ以来、胸の中に巣食っていた、己の力量への慢心と、それによって知らず知らずのうちに定めていた限界とを取り払った女武闘家は、ドブさらいや野良仕事といった依頼を率先して請けるようになった。

これは、辺境の街でオールラウンダーの噂が囁かれるようになる前からのことであり、

「常日頃から、体を動かし、勘を磨け。修行が絶えることはない」

という、父の言葉を思い出したからだ。

かくして女武闘家は経験を重ねた結果、格闘技術の向上は勿論のこと、例えばゴブリンの巣へ潜った際に、その悪辣な罠の設置を察知できるほどの鋭い勘働きを手に入れていた。

故に、今現在の彼女の役割は、攻撃手兼斥候を担うものとなっている。

更には、少し前に起こった、ゴブリンの大軍から街外れの牧場を守るために赴いた戦いにおいて。

剣士や貴族令嬢と共に戦ったとはいえ、あの大柄ゴ布林……
田舎者へと、致命的な隙を生じさせる一撃をお見舞いすることが出来た。

彼女の中での自信は、大きいものとなった。

(これで、あの子に近づけた)
と。

だが……。

戦場で見たオールラウンダーの動きは、女武闘家が培ってきた武道の常識をも大きく超えるものだった。

無数の残像が出現するほどの素早い動き。ゴブリンどもを塵も残さぬほどに消し去る、魔術めいた技。

少しばかりは埋まったかのように見えたオールラウンダーとの差は、全くと言っていいほど埋まっただけはなかったのだ。

だが、これを受けて諦めるどころか、

(少しでも、近づいてやる！)

と、向上心を燃やすあたりに、女武闘家の武闘家たる光るものがあるといえよう。

かくして彼女は、自分なりに鍛錬方法を考え、依頼のない日などはこうして、自ら考案した修行を行っているのだ。

「やってやる！ やってやるぞー！」

また一步、女武闘家は前へと進んだ。

辺境の街は、まだ遥か彼方である。

其の一

ゴブリンスレイヤー一党と合流した翌日。

朝も早いうちから、貴族令嬢一党は件の酒場を訪れた。

店主や、常連である浮浪者の驚愕の表情が見られるものかと思つたが、店内はすでもぬけの殻。

「くそっ！ 先手を取られたか！」

森人魔術師が珍しく感情をあらわにする隣で、オールラウンダーは鼻をひくつかせ、

「こっちだ」

と、カウンターへ入り、更にその奥へと続く扉を開けて進んでいく。その先にあつたのは、食料庫。

一同、

(こんな時に……)

などと呆れたものだが、それも一瞬のこと。

空間奥に、まるでガラクタを寄せ集めたような偶像が祭壇に祀られているのを見て、彼女たちは息を呑んだ。

祭壇には他に、天秤と剣とを組み合わせた装飾品を、真つ二つに折つたものもある。

「これって……もしかして邪教の……？」

只人僧侶が、固唾を飲んだ後で呟くのへ、

「そう考えるのが……自然でしようね」

貴族令嬢が、折れた装飾品を手にしながら答える。

「ジャキョウ、ってなんだ？」

オールラウンダーが問いかけると、圍人野伏が簡潔に教えてやる。

「魔神王を蘇らせようとしてる、碌でもない奴らのこと」

「わるいやつってことか」

「そゆこと」

二人のやり取りの間にも、貴族令嬢は足元を見やって、祭壇が左右に引きずられた形跡があることに気が付いた。

これには従わず、乱暴に祭壇を蹴り倒してみると、そこに地下へと

続く穴が出現したではないか。

いよいよ、怪しくなってきた。

禍々しい神を崇めるような祭壇に、小鬼どもが巢食う地下へと繋がる入り口。

その目的は定かではないが、酒場の関係者が「祈らぬ者」（ソンプレイヤー）であることは間違いないだろう。

「あのおっちゃんたちのニオイ、この下からしてくるぞ」

オールラウンダーはそう言って地下への入り口を指したが、貴族令嬢たちは渋った。

このまま地下へと潜ったとして、それ自体が彼らの目算だという可能性もある。事は慎重に運ばなければなるまい。

逡巡の後、貴族令嬢は顔を上げるや、

「私とソンさんで、地下へ潜って彼らを追跡します。みなさんは、剣の乙女様へこのことを知らせてください」

三人の仲間へ言ったものだが、

「回復役もいなければ！」

僧侶は勇み、貴族令嬢たちと同行することになった。

かくして、

「すぐに後を追いかけるからね！」

そう言って店を後にした圃人と森人を見送った後で、

「……では、行きましょう！」

気合の入った貴族令嬢の号令の下、三人は地下へと降り立った。

二日ぶりの地下水道は、相も変わらず廃棄物と排泄物とが混じり合い、鼻の曲がるような臭いで満たされている。

「えっと……法の神殿の井戸から降りた地点がここだから……」

貴族令嬢は、降りるなり腰元の雑囊から一枚の羊皮紙を取り出し、広げてみせた。

これは、剣の乙女から託された地下水道の地図……その写しである。

「私たちは今……この辺りにいるわけですね」

貴族令嬢がそういつて指したのは、法の神殿からの侵入口から南東

へ少しばかり離れた地点。

途中、五つほどの横道が存在するが、いずれも行き止まりへと繋がっており、このまま真つ直ぐ行くと、どうやら開けた場所に出るらしい。

僧侶は、その開けた場所を指して、

「彼らが私たちをおびき寄せるとして……ここが最も適した場所でしょうか」

「……その道中の脇道で待ち伏せて、私たちを気絶させてから、この広間へ運び込む……とも考えられます。いずれにしても、用心していきましよう」

貴族令嬢はそう答え、僧侶に《ホーリーライト聖光》を命じて光源を確保した後、陣形を整えて歩き始めた。

先頭を行くは、最高戦力のオールラウンダー。

その後ろを僧侶が行き、最後に貴族令嬢という、戦士二人で僧侶を囲み、守る形となっている。

ところが道中における敵襲はなく、三人は呆気なく、最奥にある広間への入り口手前まで辿り着くことができた。

これがまた、却って不気味である。

「中には……誰もいないみたいですね……」

入口の扉へ耳を張り付けた貴族令嬢は、しんと静まり返った室内の様子を告げる。

それを聞いた僧侶は首を傾げ、

「……では、あの男たちはどこへ……?」

疑問を口にする。

それに対する明確な答えも出ないままに、

「とにかく、中を見てみましょう」

貴族令嬢は鉄扉へ手をかけ、これを開けてみた。

重々しい扉を開けた先には、左右それぞれにきちんと並んだ石棺が六つと、

「あれは……」

広間の中央に、一つの影がある。

裸に剥かれ、赤茶色の長い髪を垂らした……人だ。
膨らんだ胸から察するに、恐らく小鬼どもの慰みとなった街の娘か、冒険者か。

彼女は、部屋の両側の壁から伸びた鎖によって、両の手を縛りつけられていた。

ぐったりと頭を垂れた彼女へ、

「大丈夫ですか……!」

と近寄ろうとする僧侶を、貴族令嬢が制した。

「砦での一件を、思い出してください」

その言葉に、僧侶は「はっ」と何やら気付く。

そう。オールラウンダーと初めて出会った山砦での出来事。

先に砦へ潜入していた貴族令嬢一党は、村娘の骸を利用するとう、悪辣極まりない小鬼どもの罠にかかり、危うく命を落としかけたのだ。

「では、あれも……?」

「罠である可能性が高いです」

次いで貴族令嬢はちらとオールラウンダーを横目に見やり、

「ここから、彼女を繋ぐ鎖を壊すことは出来ますか?」

と問うた。

彼は、

「どうだろうなあ。かめはめ波だと、あのねえちゃんごとやっちゃいそうだけど……」

困ったように腕を組んで考えたが、少しすると、

「あっ!」

何かを閃いた表情となり、

「イヤな奴の技だけど……いっつか!」

言うや、人差し指を伸ばし、女を縛る鎖へ向けた。

直後、彼の指先にぼんやりとした光が集中する。

それが最高潮に達した時、

「どどん!!」

掛声と同時に、彼の指先から細長い光の線が突出し、これが鎖を千

切り破った。

だらり。女の腕が下がったと同時に、垂れていた首も落ちた。やはり、女は囿として利用された骸だったのだ。

途端、両開きとなった鉄扉とはまた別の扉が、上から落ちてきて、広間を塞ぐ。

「やはり、罠でしたか」

眩く貴族令嬢の横で、

「このニオイ……ゴミとかクソとかとはちがうニオイだ」

オールラウンダーが、やはり鼻をひくつかせ、そう告げた。

扉の向こうからは、何か気体が噴出している音が聞こえる。

「毒気……ですね……」

杖を胸に手繰り寄せ、これを固く握りしめた僧侶が、額に汗を浮かべて呟いた。

其の二

鉄扉の隙間から漏れ出た白い瘴気が、すぐさま空気に溶けて消えていく。

暫くすると気体の噴出音は途絶えたが、

「もうしばらく、様子を見ましよう」

果たして貴族令嬢の指示通りに待っていると、ごとりと何か重い物が動いたような音がして、

「あつ……」

「誰もいない……」

男二人の、驚愕の声が部屋の向こうから聞こえた。

この声、件の酒場の店主と常連の浮浪者のものである。

貴族令嬢はこれを確かめるや、

「ソンさん！ 扉を！」

その言葉を受けたオールラウンダーは頼もしく頷くや、

「だりやつ！」

力強い気合声と共に、鉄の扉を蹴り倒した。

瞬転、ぎよつとして二人の男が貴族令嬢たちを見やる。

「あなたたちの正体は分かっています！ 邪教の使徒よ！」

只人僧侶が指さし叫ぶのへ、店主の男は舌打ちを一つするや、腰に吊るした革袋から小さな黒光りする石コロを取り出し、これを床へばら撒いた。

すると、小石がむくむくと質量を増やしていくではないか。

終わってみると、醜悪な面構えをした翼竜の如き石の化け物が、七

匹ほど。

「さあ、行け！ 樋嘴！ 奴らは混沌に仇を成す憎き敵だ！」

店主の男の号令に従い、石の翼竜……ガーゴイルはゆつくりと貴族令嬢たちを振り返り、

「GYAAAAA！」

けたたましい鳴き声を上げるや、翼を広げ、一斉に襲い掛かって来た。

「しまった……！」

突如として現れた混沌の眷属に戸惑った貴族令嬢たちだが、
「のびろ、如意棒！」

その叫びと共に身を長くしたオールラウンダーの細棒が、僧侶どもも貴族令嬢の体を左手へと突き飛ばしてくれたおかげで、なんとかガーゴイルの突進を回避することが出来た。

二人が身を立て直す間に、ガーゴイルの群れへ勇躍したオールラウンダーが、一匹へ殴りかかって頭を吹っ飛ばし、
「それっ！」

瞬く間に二匹目の背中へと飛び移るや、組んだ両腕を振り下ろし、その脳天を打った。

頭頂に、鉄槌で叩かれたかのような衝撃を感じたガーゴイルは、用水路へと落下し、暫くもがいたものの、やがて沈んでしまった。

翼があるとはいえ、石で構成された体の重みが、水の底へと彼を誘ったのである。

これを目にした貴族令嬢は、何やら僧侶へ囁くと、
「こつちです！」

叫び、ガーゴイルどもの注意を引いた。

黄色く光る眼を貴族令嬢へと移した石の翼竜どもが、一斉に飛びかかる。

これを不敵な笑みを以て迎えた貴族令嬢は、
「それっ！」

何を思ったか、背後を流れる用水路へと跳んだのである。

そのまま汚水の流れに呑まれるかと思っただが、なんと彼女は水面の上にびたりと立っているではないか。

果たして彼女は、飛来するガーゴイルどもをギリギリまで引き付けた後で、

「えいっ！」

斜め前方……つまりは再び通路へと飛び移った。

一方でガーゴイルどもは、その速度故に急な方向転換が出来ず、先ほど貴族令嬢が立っていた、水面の見えない足場へと突っ込んでい

く。

……が、彼らの体は見えぬ足場にぶつかることなく、そのまま汚水の中へと呑み込まれていった。

自身の身の重さによって、一匹、また一匹と水底へと沈んでいくガーゴイル。

遂に一匹も浮かび上がらなくなったところで、

「上手くいきましたね……」

隅に隠れていた僧侶が、額に汗を浮かべて貴族令嬢とオールラウンダーへ歩み寄った。

「すげえな、おめえ。水の上に立てるのか」

目を輝かせたオールラウンダーが言うのへ、苦笑を浮かべた貴族令嬢は、

「彼女の協力があったからですよ」

と、僧侶の肩を叩いた。

気恥ずかしそうに頬を掻いた僧侶は、

「あの時、私の奇跡……《プロテクション聖壁》を、水面の足場代わりにしたんです」
先の手品の仕掛けを明かした。

慈悲深き地母神は、聖なる壁を顕現させる奇跡を以て、貴族令嬢を汚水の流れから守ったのだ。

後は、貴族令嬢が通路側へ跳んだのを見計らって、神へと結んだ精神を解くだけ。

奇跡による足場は瞬時に姿を消し、ガーゴイルどもは汚水へと真つ逆さま……というわけだ。

かくして、ガーゴイルを相手にした戦場を後にした貴族令嬢たちは、先ほど白い瘴気……毒気が噴出していた広間へと足を踏み入れたが、店主と浮浪者はどこかへと姿を消してしまっていた。

(二体、どこへ……?)

首を傾げた後で、貴族令嬢はふと思い出した。

それは、この部屋に噴出した毒気が収まった時のこと。

何か重くて固い物が動いた音の後に、店主と浮浪者の戸惑いの声があったのだ。

(まさか……?)

貴族令嬢は、広間に置かれた石棺の数々を見やった。

酒場の食料庫にあった邪教の祭壇よろしく、この石棺のどれかも、秘密の入り口となっているのではないか。

果たして、貴族令嬢の考えは的中した。

「ふんっ……!」

一つの石棺の蓋を外してみると、中には更に下へと続く階段が用意されていたのだ。

それへ踏み込む前に、

「奇跡は、あとどれくらい?」

貴族令嬢が問うのへ、

「あと、四回ほどでしようか」

僧侶が指を折って答える。

少しばかり迷った貴族令嬢であったが、ちらと横目にオールラウンドーを見るや、

(大丈夫……!)

自分に言い聞かせるように、心の中で呟き、

「さあ、後を追いましょー!」

勇んで階段を下っていった。

其の三

延々と続く階段を下り終えると、それまでの臭気漂う狭苦しい水路から一変し、床を大理石で埋め尽くした、開放感ある空間が一行の前に出現した。

その天井も奥行きも、暗闇によって果てが見えないほどである。もしかすると、その高さは地上に至るほどまでもかもしれない。

かくして少し前を行った所では、酒場の店主と浮浪者……もとい、邪教の使徒二人組が、仁王立ちとなつて冒険者たちを待ち構えていた。

「観念なさいー！」

空間にあるやもしれぬ罫を充分に警戒しつつ、貴族令嬢が叫んだ。すると、先までは慌てふためいていた二人の男どもは、にやりやりと笑みを浮かべ、

「馬鹿め。追い詰められたのは貴様らの方よ」

酒場の店主を偽っていた男が、不敵に言うや、ぱちりと指を鳴らした。

途端、ぐらぐらと地面が揺れたかと思うや、白色の床が盛り上がり、これがうねうねと蠢いたかと思うや、やがて二足の巨兵へと変貌したのだ。

「やれっ！ ゴーレムー！」

店主の叫びとともに、床石と粘土とで形成された巨兵……ゴーレムが、不気味に光る眼差しを貴族令嬢たちへ向け、その巨腕を振り下ろした。

「あぶねえっー！」

オールラウンダーが叫ぶと同時に、三名の冒険者たちはそれぞれ別の方角へ跳ぶ。

何もない床を叩くだけに終わったゴーレムの一撃だが、それによって生じた衝撃波が、三方向へ散った冒険者たちを追いかける。

「やべっー！」

オールラウンダーは着地と同時に再び床を蹴り、衝撃波が迫る前に

上空へ舞い上がり、これを躲した。

だが……。

「……あ、があっ！」

「あっ……うああっ……！」

彼ほどの異常な身体能力を有していない貴族令嬢と僧侶は、まとも
にこれを喰らって、床に倒れ伏す。

「ねえちゃん！」

宙に浮いたまま、貴族令嬢たちへと意識の逸れたオールラウンダー
を、ゴーレムの巨腕が再び襲った。

「しまっ」

叫ぶ間に殴り飛ばされたオールラウンダーは、そのまま白壁へと叩
きつけられた、

「くっ……」

しかし、すぐさま立ち上がることが出来たのは、流石であった。

これを見たゴーレムは、ずんずんと地を揺らしながら迫ってくる。

だが、オールラウンダーの視線はゴーレムでなく、その遙か後方で、

「か、はっ……」

「……」

血反吐を吐きながらなんとか立とうとする貴族令嬢と、あまりの痛
みに気を失っている僧侶に向けられていた。

「まってる、ねえちゃんたち！ 今、こいつをやっつけるからな！」

オールラウンダーの叫びに、店主の男の嘲る声が返ってくる。

「愚かな！ やっつける、だど？ 倒せるはずがあるまい！ 例えお

前が、化け物じみた力を持っていようがな！」

「やってみなけりゃわかんねえさ！」

言うや、疾風の如く駆けたオールラウンダーは、ゴーレムの足元ま
で瞬く間に距離を詰め、

「だりやっ！」

横殴りに、巨兵の右足を撃った。

たちまち拉（ひしゃ）げ、砕け散ったゴーレムの右足だったが、

「えっ!？」

飛び散った土くれが、瞬時にゴーレムの欠損部分へと結合していく。なんとも驚くべき再生力であった。

「だから言ったろう。倒せるはずがない、とな！」

店主が叫ぶや、復活した右足を以て、ゴーレムがオールラウンダーを蹴り上げた。

果たして蹴り上げたオールラウンダーを追いかけるようにして、ゴーレムが身を屈め、足の発条（バネ）の力を利用して跳躍する。

僅かに追い越したゴーレムは、組んだ両腕を振り下ろし、オールラウンダーを地面へ叩きつけた。

「ぎゃっ！」

二度、三度と地面を跳ねたオールラウンダーは、期せずして貴族令嬢たちの元へと戻って来た。

「ソ、ソッさん……」

鉛のように重たい体を引きずりながら、それでもなんとか起き上がった貴族令嬢が、オールラウンダーへと歩み寄る。

オールラウンダーもまた、

「ち、ちきしょう……」

眩きつつも、ゆっくりと立ち上がる。

……と。

二人の戦士の体が、淡い光に包まれた。

背後を見やると、息も絶え絶えの僧侶が杖を支えに、懸命に地母神へ奇跡の嘆願を行っていたのだ。

完全回復とまではいかないが、戦士たちは体が幾ばくか軽くなったのを感じた。

「よかった……」

力なく笑った僧侶が、ぐらりと倒れそうになるのへ、貴族令嬢が支えてやる。

「……大丈夫。気を失っているだけです」

心配するオールラウンダーへそう言った貴族令嬢は、僧侶の体を背に負い、

（どうする……？）

今も迫りくる強大な敵を見て、考えを巡らせた。
が、打開策が浮かんでこない。

僧侶はダウンし、奇跡は使えない。

血反吐吐く中で、ゴーレムの再生力の前には、オールラウンダーの
脅力も無意味なことが分かった。

(どうする……？ どうする……!?)

焦るあまりに考えの纏まらない貴族令嬢の横で、

「そうだっ！」

オールラウンダーが、ぽんと手を打った。

其の四

「かめはめ波なら、あいつをぶっとばせるかもしれねえ」

オールラウンダーの提案に、貴族令嬢は一瞬戸惑った。

かめはめ波。それは、オールラウンダーの最も得意とする技。

体内を流れる「気」という潜在エネルギーを、構えた両掌に集中させ、一気に放つ必殺の奥義だ。

その驚異的な破壊力を、貴族令嬢はこれまでに何度も目の当たりにしている。

(だけど……)

貴族令嬢は、絶望によって胸を見たしつつ、迫りくる岩石の巨兵を見上げた。

確かに、かめはめ波なら奴の手足だろうが胴体だろうが、吹き飛ばすことは可能だろう。

だが、どうやらゴーレムは、体の一部分でも健在であるならば、そこを起点として瞬く間に再生してしまうらしい。

となれば、あの山のような巨体を余すところなく一気に消滅させなければならぬ、ということになる。

詰る所、かめはめ波には破壊力があっても、あの巨体を丸々呑み込むだけの範囲が足りないのだ。

しかし、オールラウンダーは語る。

「オラの師匠の亀仙人のじいちゃんはさ。本気のかめはめ波で、燃えちまった山をまるごとぶっとばしちまったことがあるんだ」

だからさ、とオールラウンダーは付け加え、

「オラも力を満々に出せば、あいつくらいはぶっとばせるかもしれねえ」

と豪語するのだ。

ふと、貴族令嬢が笑った。

どうせもう逃げ場などない。

仲間によって、剣の乙女たちへ、邪教の使徒の暗躍も伝わっていることだろう。

やれるだけのことはやった。悔いが無いといえば、嘘になるが……。

最期に、やれるだけの抵抗はしておきたい。

やがて貴族令嬢はこくりと頷き、

「やりましょう！」

「おう！」

オールラウンダーは力強く応え、拳を突き出してきた。

貴族令嬢はこれへ、同じように拳を突き出し、こつりと打ち合わせる。

果たして最初に動いたのは、貴族令嬢であった。

「ほらー、こつちですよー！」

僧侶を背負いつつ、それでも素早く広間を駆ける貴族令嬢へと視線を移したゴーレムが、その進路を彼女へと向けた。

これを見たオールラウンダーは、素早く腰元へ両手を重ねるように構えるや、

「か……」

眩くのと同時に、青白い光が生じる。

これを見た邪教の使徒が、

「ゴーレム！ ガキを先に殺れ！」

腕を振り上げて命じる。

すぐさまゴーレムは、視線をオールラウンダーへと移そうとするが、

「えいつー！」

いつのまにやら僧侶を降ろしていた貴族令嬢が、素早く腰に差した長剣を引き抜くや、これをゴーレムの顔面へと投げ打った。

目の前を掠め跳んだ長剣。その投擲主を確かめるべく、ゴーレムは再び視線を貴族令嬢へと落とす。

……と。

「か……め……め……め……め……」

なんと貴族令嬢はオールラウンダーと同じように、腰を落とし、上下に重ねるようにして構えた両手の中に、眩い光を宿しているではな

いか。

邪教の使徒共は混乱した。

(まさか、あの小娘も……う?)

である。

果たして、不敵な笑みを浮かべた貴族令嬢は、

「波っ！」

の掛声と共に両腕を突き出したものだが、掌が眩しく光っているだけで、何も放出する気配はない。

呆気にとられた邪教の使徒たちが、貴族令嬢の背後を見た。

よろよろと頼りなく、しかし確かに地を踏みしめながら、地母神へ聖なる光の恵みを嘆願する僧侶の姿が、そこにはあった。

(しまった！ 偽装か！)

ゴーレムは、すでに貴族令嬢目掛けて拳を振り上げている。

それより少し離れたところにいるオールラウンダーは、暴れ弾けんばかりの光を、その両掌に宿していた。

「いかん！ ゴーレム！」

叫ぶが、巨兵の振り上げる拳を止める術は、もうない。

貴族令嬢は、ゴーレムへ背を向けるや、走り抜け様に僧侶を小脇に抱え、死に物狂いで駆けた。恐るべき火事場の馬鹿力である。

かくして、

「波あああっ!!」

空間を揺るがすほどの気合声と共に、少年の両手から青白い光が放たれた。

巻き添えを喰らわぬよう走る中で、ちらと後方へ目を向けた貴族令嬢は、見た。

今までに見たのとは比べ物にならない、全てを呑み尽くす雪崩か津波のような、迫力と轟音と破壊力とを秘めた……まさに「必殺」の一撃。

頭頂からつま先まで、ゴーレムの巨体を丸々呑み込んだそれは、広間の床に深い抉りの跡を残し、やがて消滅した。

終わってみると、戦場に残ったのは貴族令嬢をはじめとする三人の

冒険者と、浮浪者を装っていた邪教の使徒一人だけ。

彼は、仲間の使徒が、オールラウンダーの一撃による波に吞まれ、断末魔すら上げることなく、体の一部分を残すことなく「消滅」したことに衝撃を受けたあまり、ぱくぱくと口を開閉し、だらしなく失禁をしていた。

貴族令嬢は荒い息を整えつつ、

「ほ、ほんとにやった……」

改めて、オールラウンダーの化け物じみた実力を思い知った。

せつかくに意識を取り戻した僧侶は、かめはめ波の生じさせる轟音により、再び気を失ってしまっている。

其の五

それから暫くして。

街の衛視たちを引き連れて戦場に駆け付けた圍人と森人は、その壮絶なる戦いの爪痕を目にして目を見開いたものの、くたびれ果てて床に胡坐をかいているオールラウンダーの姿を見て、

(ゴクウがやったんだ！)

と、すぐさま大方の事情を呑み込んだようだった。

かくして生き残りの邪教使徒は捕縛され、その場において簡単な尋問がなされた。

オールラウンダーの規格外の強さを目の当たりにし、すっかり気力の失せた使徒は、意外なほど素直に尋問に応じた。

それによれば、彼や酒場の店主は、十年前に剣の乙女とその一党によって滅ぼされた魔神の残党であり、件の酒場を街の潜伏先として、魔神の復活を目論んでいたらしい。

魔神復活のためには多くの贄が必要となる。地下水道に蔓延るゴブリンは、それを収集するための尖兵であったのだ。

しかし、一人だけ例外がいた。

それは、路地裏で骸となつて発見された侍祭の娘。あれは、剣の乙女への宣戦布告のために殺したものであった。

(なるほど)

貴族令嬢は得心がいった。

残酷だが臆病なゴブリンが、夜中とはいえわざわざ人の領域で殺人を犯すわけがないのだ。

奴らは、巢の最奥へ得物を引き攫い、そこで充分に蹂躪を楽しんだ後に殺す。

あわや自分たちも同じような末路を辿りそうになったからこそ、貴族令嬢は侍祭の娘殺害のやりくちに疑問を感じていたのだが、これだようやつとそれも晴れたようだった。

だが、そうなると新たな疑問が浮かび上がる。

剣の乙女は、侍祭の娘の殺害も、ゴブリンがやったものだと考えて

いたようだった。

(自分へ向けられた宣戦布告の印を、剣の乙女様は見逃していたということになる……)

このことである。

実際に対面してまだ日は浅いが、貴族令嬢は剣の乙女に対して、聡明だという印象を抱いていた。

そんな彼女が、自分へ向けられた敵意をむぎむぎと見逃すものだろうか。かつては魔神を滅ぼした金等級の冒険者が、である。

しかしながら、その疑問を否と片づけると、新たな問題が浮かび上がる。

すなわち、剣の乙女は魔神の残党の暗躍を知りながらもその事実を伏せ、水の街で起こる事件の全てをゴブリンの仕業だと片付けてしまった……ということになるではないか。

全貌を公表すれば、街の住民たちが混乱状態に包まれる……というのならば、話は分かる。

しかし彼女は、たまたま法の神殿に出た貴族令嬢たちだけでなく、自分から指名したゴブリンスレイヤー一党にも、真実を伏せて依頼内容を話していた。

これが、貴族令嬢にとっては気に入らなかった。

冒険者である以上、行動の一つ一つに誠実さを示さなければならぬ。それなくば、ただの無頼漢と何ら変わりがなくなってしまうからだ。

一方で、依頼者にも同じことが言える。

冒険者の誠実な行動に対して、彼・彼女らも嘘偽りなく依頼内容を伝え、きっちり報酬を払う必要がある。

これがなければ、彼らは冒険者を「罫に嵌めた」ことになり、理由はどうかあれ、その行いは祈らぬ者ノンプレイヤーとみなされても仕方がないからだ。

まさかに、剣の乙女に悪意があったとは思えないが、

(これは、詳しいことを本人から聞いて、その真意を質さなくては……)

貴族令嬢の決意は、ここに固まった。

して……。

だいたいの尋問が終わり、衛視によって連行されようとする邪教の使徒を、

「あつ、ちよつと待つて」

と圃人が呼び止めた。

「あんたたちが魔神を復活させようとして、その手先にゴブリンを選んだのは分かったよ。でも、どうやってあいつらをこの下水道へ運んできたのさ？」

圃人の問いに、もはや崇める神の復活が水泡に帰したことで抗う気の失せた邪教の使徒は、

「古代の遺物……《転移》の鏡を使った」

ぼそりと呟くように答えた。

「《転移》の鏡……？」

圃人の聞き返しに、こつくりと頷いた使徒は、

「ここからじゃ到達できないが、水の街の下水道……それを更に奥へ行つたところに、地下墓地カタコンベへと繋がる階段が隠されている。それを下つて更に奥へ進めば、礼拝堂に出る。鏡は、そこで守られている」
淡々と情報を提示した後に、やがて衛視たちによって、今度こそ連行されていった。

これを見送つた後で、

「《転移》の鏡……」

圃人はそう呟き、オールラウンダーを見るや、

「ゴクウ！ もしかしたら、ゴクウの世界に帰れるかもよ！」

と手を握つた。

「ほんとか？」

オールラウンダーも、にんまりとして手を握り返す。

貴族令嬢も、

（よかつた……）

と思う反面、剣の乙女への疑念を考えると、どうも心から笑うことは出来なかつた。

其の六

降りしきる大粒の雨が屋根を叩き、その音が礼拝堂の中にも響き渡っていた。

夕餉の時刻をとつくに過ぎてなお、剣の乙女は祭壇前に跪き、祈りを捧げている。

ふと、彼女は面を上げた。

何者かが、礼拝堂に入ってくる気配を感じたからだ。

一瞬、杖代わりの剣を強く抱きよせ、唇を固く結んだ剣の乙女だったが、

「失礼を承知で、参りました」

凜としたその声音を聞いて、体に走る緊張を解いた。

振り向き、目隠しの帯越しに、彼女は来訪者の姿を見た。

気高く染まった、白。まだ、恐れも穢れも知らないであろう、白。自分とは正反対の、白。

懐かしくも思い、また羨ましくも思うその気配を、彼女は例によって両腕を広げ、子を抱きすくめる母親の如く歓迎した。

しかし、来訪者はそれにいちいち反応を取るでもなく、

「二つ、確認したいことがあります」

淡々と話を進めていく。

その声音の中に僅かな怒りの感情があるのを察し、乙女は来訪者が何を言わんとするのか、おおよそ把握出来た。

果たして来訪者……貴族令嬢は、

「どうして、黙っていたのですか」

静かに、しかし確かな憤りの念を込めて剣の乙女へ問うた。

予想通りであった。

偶然に裏庭の井戸から法の神殿にやって来た冒険者一党が、邪教使徒の潜伏先を突き止めた……という報告を聞いた時から、こうなる気がしていた。

かくして、諦めの溜息を吐いた剣の乙女は、

「どうして、お分かりに？」

と問い返す。

「邪教の使徒が述べていました。侍祭の娘を殺したのは、あなたへ向けた宣戦布告の印だ、と」

「……」

「魔神を打ち倒した金等級のあなたが、それを見逃すほど愚かだとは思えません」

「……買い被りすぎですわ」

自嘲気味に笑った剣の乙女は、こつりこつりと緩やかに靴音を鳴らした後で、

「確かに……今回の事件の黒幕は、十年前に私たちが打ち滅ぼした魔神の……残党ですわ」

力なく述べた。

そんな彼女へ、今度こそ貴族令嬢は問う。

「どうして、それを黙っていたのですかと。」

すると乙女は、

「みんな、分かってくれると思ったから」

そう呟いた。

貴族令嬢は首を傾げた。

「皆が分かってくれる？」

「ええ。この街で起こった凄惨な事件の数々……それら全てがゴブリンの仕業だと聞けば……きつと……みんな……」

そこまで聞いて、貴族令嬢は「はっ……」とした。

初めて剣の乙女を目にした時、その目元を覆う黒い帯を気にはかけていた。

(きつと、先天的に目が見えないのだろうか)
と。

しかし、先の発言を受けて分かったような気がした。

何故に彼女が、その黒帯で両の眼を隠しているのか。

生まれた時より目が見えないのではなく、何者かによって視力を奪われたとしたら。

奪った犯人は、恐らく……。

貴族令嬢は、それ以上の追及が出来なくなってしまった。

小鬼どもによって裸に剥かれ、蹂躪こそされなかった彼女でさえ、今でも奴らと対峙する際には、背筋の凍る思いがする時がある。

しかし、それでも奴らを相手に出来るのは、その弱さを共有できる仲間の存在と、

(どんなにとんでもないことでも、必ずなんとかしてくれそうな……)

そういう気持ちにさせてくれる少年がいるからだ。

対して、剣の乙女はどうだろう。

白金等級の冒険者がいない中で魔神を斃した金等級の冒険者。

水の街の平和の象徴として存在する、清らかな乙女。

そんな彼女が、

「ゴブリンが怖いので、助けてください」

と求めたとして、どうなる。

神聖視されている英雄が、最弱の怪物を目の当たりにすると今でも震えが止まらない、などと。

街の住民から嘲りを受け、侮蔑され、果ては今回のような邪教の者がこれ幸いと言わんばかりに、攻めてくるやもしれぬ。

英雄は英雄らしく、どんな化け物にも怯えてはならないのだ。

「でも、結局は何も変わりませんでしたわ」

絶望に満ちた声で、剣の乙女は呟いた。

「街の人々は、確かにゴブリンの存在を認識しました。でも……剣の乙女がなんとかしてくれる。襲われるのは自分じゃない。だから、大丈夫だと……」

人々は、小鬼の災いが自分に降りかかってくることなど、露ほども思っていないかった。

襲われるのは自分ではなく、「誰か」だ。その認識もあつただろう。しかしそれ以上に、「剣の乙女」の存在が大きすぎたのだ。

街の平和を司る英雄の存在が、皮肉にも彼らから小鬼に対する恐怖心を取り払ってしまったのだ。

……ふと、剣の乙女は顔を上げた。

それに気づいた貴族令嬢も、後方……つまりは礼拝堂の入り口を見やる。

「おっ。いたいた」

果たして入って来たのは、両手に骨付き肉を持ったオールラウンダーであった。

彼は、二人の娘の間に走る緊張にも気が付かずに近寄ると、

「ねえちゃんたちがさ。明日のことで話があるって」

肉を噛み締めながら、貴族令嬢へそう告げた。

「……ええ」

ゆっくりと頷いた彼女は、

「失礼します」

剣の乙女へ頭を下げるや、逃げるようにして礼拝堂を後にしてしまった。

それに続こうとしたオールラウンダーだったが、剣の乙女の視線に気づき、

「ん？ なんだ？ これ食いたいのか？」

左手に持った骨付き肉を差し出したが、彼女はそれを受け取る代わりに、

「あなたに、怖いものはあって？」

と尋ねた。

純粹無垢が人の形をしたような少年へ。

しかし、

「ううん……あんまりねえな」

予想通りの返答に、剣の乙女は肩を落とした。

この子も、きつと私を救ってはくれないのだ、と。

だが。

「おめえは、なんか怖いものがあるのか」

少年が不躰に訊いてくるのへ、不思議と不快感は湧かなかった。

「……例えば」

剣の乙女はそう前置きして、

「例えば、私がゴブリンを怖がっていたとして……あなた、笑いますか

？」

言うのへ、

「なにかおもしろいのか」

オールラウンダーは、大変真面目な顔で聞き返すのだ。

これがなんだか面白くて、くつりくつりと笑った乙女は、その場に座り込み、

「皆には、内緒よ」

親しき友へ話すかのように、人差し指を自身の唇へ当てがった後に、

「私ね、ゴブリンが怖いの」

自分でも驚くほど素直に、オールラウンダーへ「弱さ」を曝け出してしまったものである。

それを聞いた少年は、

「おめえ、つええんだろ？ でも、あの緑のちっこいのがこわいのか」

と言ってしまった。

(嗚呼、やっぱり)

一時の気の迷いを後悔した剣の乙女だったが、

「ふうん。そっか」

それだけで、彼はこの話題を打ち切ってしまった。

少しばかり驚いた剣の乙女は、

「笑わないの？」

と尋ねたが、

「なんで？」

聞き返されると、返答に困ってしまう。

果たして、それっきりで話は終わり。

肉を食べ終えたオールラウンダーは立ち上がり、

「まあ、まかせとけよ。オラたちとスツチャンたちがいれば、あいつらみいんなやつつけてやるから」

そう言うや、さっさと礼拝堂を後にしてしまった。

去り行く後姿を見て、暫くは呆気に取られていた剣の乙女だったが、やがて柔らかな笑みが口角を伝って広がっていった。

其の一

翌日の昼間過ぎになって……。

オールラウンダーは漸くに目を覚まし、純白の寝台より跳ね起きた。

無理もないことである。

昨日対峙した邪教の使徒……それが使役するゴーレムを跡形もなく吹き飛ばすために、彼は力の殆ど全てを出しきってしまったのだ。

その膨大なる生命力を完全に養うためには、むしろもう半日眠っていた方が良いでしょうにも思えるが、やはりそこがオールラウンダーの不思議なところ。

「よっ。ほっ」

飛んだり跳ねたり、虚空へ向けて鋭い正拳突きや蹴りを放つたりした後で、

「うん。力^{りき}満々だ」

満足気に言ったものである。

そうしてから一室を見回した彼は、ここにきて他の仲間の不在に気が付き、

「なあ。ねえちゃんたちは？」

魔術師へ問うた。

彼女は依然として本に目を通したまま、

「明日の探索に備えて、買い物をしているよ」

と言いかけたものだが、

「おっ、起きたね」

扉を勢いよく開け広げ、どしどしと入って来た圃人野伏の澆瀨とした声によって、それは遮られた。

果たして彼女は、一室にいるオールラウンダーと魔術師とを交互に見ながら、

「二人とも、ちょっとおいでよー」

言うが早いのか、二人の腕を強引に掴み、ぐいぐいと歩き始めたものである。

「読書の最中なのだが」

それまで読んでいた本を小脇に抱え、じとりとした視線を送る魔術師だが、野伏は全く意に介さず。

法の神殿を出て、人であふれる街並みを歩くこと暫く。

「あつ、来ました」

と彼方より聞き慣れた声が出たのへ視線を向ければ、そこにいたのは貴族令嬢と只人僧侶。

二人は、小さな屋台の前に立っており、

『『あいすくりん』を五つ』

オールラウンダーたちの姿を見た令嬢は、店主へなにやら注文したようであった。

「へえい」

注文を受けた店主は愛想よく頷くや、大きな金かねの容器に満たされた物を匙で掬い、これを固い焼き菓子の上に乗せた。

焼き菓子の上に乗せられたのは、牛の乳を冷やして固めた……氷菓子の類であった。

「うわあ……」

野伏と僧侶が目を輝かせる横で、

「そつか。『あいすくりん』って、アイスのことだったのか」

オールラウンダーが、どこか懐かしそうに呟いた。

これへ、

「前にも食べたことがあるんです?」

貴族令嬢が尋ねる。

「うん。亀仙人のじいちゃんのところまで修行してたときなんだけどさ。修行がおわって、晩メシ食ったあとで、じいちゃんがよく食わせてくれたんだ」

「へえ……」

「うん! やっぱりうめえ!」

そう言った時には、すでにオールラウンダーの手に『あいすくりん』はなく、皿の役割をした焼き菓子の欠片が残されているのみだった。

「もつと味わって食べなよ」

圃人野伏が勿体なさそうに言う横で、只人僧侶は『あいすくりん』の冷たくて甘い感覚を楽しんでいる。

これを貴族令嬢と森人魔術師が、まるで年下の妹と弟たちを見守る姉のように、実に優しい目で見守っていたものだったが、

「それにしても……昨日あんなことがあったのに、この街の人たちは変わらないんだね」

圃人野伏が、周囲の喧騒をぐるりと眺めた後でそう呟いた。

石畳の道の両脇では、様々な屋台を出した様々な種族の者たちが、これも様々な地方からやって来た様々な種族の冒険者たちへ、あれ買えこれ買えと、怒号にも似た客引きの声を上げている。

潜伏していた邪教の使徒が捕縛され、このことが瞬く間に街中へ広まったことが、嘘のように思えた。

彼らはまだ、

(剣の乙女がなんとかしてくれる)

と思っているのだろうか。

それを考えた時、『あいすくりん』を食べていた貴族令嬢の手が止まった。

昨晚知ってしまった、金等級英雄の秘密。

それを思うと、何やら街の人々のこうした様子が薄情に思えてならなかった。

同時に、

(私たちも、同じなのでは……)

この思いも、脳裏を過るよぎのだ。

ちらと、貴族令嬢は横目にオールラウンダーを見た。

彼らにとつての精神的支えが剣の乙女のように、今の彼女たちにとつての精神的支柱はこの少年なのだ。

だが、いずれは彼と別れる時が来る。

彼は、この地の住人ではないのだから。

そして別れの時は、すぐそこにまで近づいている。

この水の街の地下深くに、彼を元の世界に戻す道具があるのだから。

(他人事では……ありませんね……)
『あいすくりん』をぺろりと舐めながら、貴族令嬢はそんなことを
思った。

其の二

『あいすくりん』を食べ終え、明日に向けての物品を買い揃えた時、すでに空には月明かりが広がっている頃となっていたのだが、折悪く大雨が降ってきてしまったので、貴族令嬢一党は近くにある宿屋でその晩を明かすことになった。

「明日の今頃は、もうゴクウとお別れしてるころかなあ」

宿屋の一室。

夕餉を終え、あとは寝台で寝るのみとなった時に、ふと圃人斥候が呟いた。

それへ、

「いよいよよとなると、寂しいものがあるな」

森人魔術師が、ちらと隣の寝台を見やりながら言った。

話題の当人であるオールラウンダーは、すでに腹を膨らませて眠っている。

「そうになると、今後は彼抜きでの冒険になりますね」

僧侶の言葉に、ぴくりと貴族令嬢が揺れ、

「そう、ですね……」

力なく呟いた。

これが、他の面々から見ても、

(おかしい……)

と感じられて、

「頭。もしかして寂しいとか?」

圃人が、わざとからかうように問うたものだが、

「そうかもしれない」

貴族令嬢はあっさりとこれを肯定してしまった。

いよいよもって、

(おかしい……)

であった。

てつきり、

「そつ、そんなことありませんよ!」

と、純情な乙女の反応を期待していただけに、である。

果たして貴族令嬢もまた、ちらりとオールラウンダーを見るや、
「彼に山砦で助けられて……冒険を共にするようになってから半年……色々な戦いを経験して、私たちも力をつけてきましたが……やはり戦いのどこかでは、彼の常識を超えた力に頼り切っているところがあるのでは……と、ふと思ったのです」

その言葉を受けた森人が、

「つまるところ、ソンがいなくなつた後が不安なのか」

ずばりと言い当てたものだが、

「……その通りです」

彼女はこれをも肯定してしまった。

「今日の街の様子を見て……私も彼らと何ら変わりがないんだなあ、と思つたんです」

「どういう風に同じなのさ？」

「邪教の使徒が地下で暗躍していたというのに、街の人々は剣の乙女がいるから……と安心している。私もまた、命がけの冒険に身を置いているのに、ここところは恐怖を感じるようなことがなく、それが彼の力あつてのことだと……改めて思つたのです」

「なるほどねえ」

言うや、圍人は寝台に倒れ込み、

「確かに。今まではゴクウがいたから別に危険もなかったって感じかもねえ」

でもさ、と付け加え、

「なにもここまで生き残れたのは、ゴクウだけのおかげじゃないと思うけどね」

そう言つて、貴族令嬢を見やって、にんまりと笑つた。

僧侶の奇跡。

森人の魔術。

貴族令嬢の剣術と指揮力。

「んで、わたしの弓と斥候としての腕。これだけ揃えば、向かうところ敵なしだよ」

その細腕に力こぶを作った圃人が、これをペしりと叩いてみせたのへ、

「半年前は、あわや殺されかけたがな」

森人が悪戯っぽく囁く。

それへ、

「あの時からずっと強くなってるからいいんだよ！」

圃人が頬を膨らませたのを見て、ようやくに貴族令嬢へ笑顔が戻ったようだった。

して、夜も更けてから。

宿屋一室の寝台に仰向けとなり、天窓から覗く月を見ながら、貴族令嬢はまんじりとも出来なかつたが、

「大丈夫」

隣の寝台から、森人がその声をかけてきた。

彼女は続けて、

「確かに、私たちもソんに頼っているとところはあつたが……それだけではない。各々が各々の力量に、油断や慢心ではない自信を持っている。それに……その実力を最大限に引き出してくれる、あなたの閃きがある」

だから、私たちは安心して戦えるのだ、と。

「大丈夫。あなたは自分が思っている以上に、強くて賢い方だ。決して、ソんに依存しているわけではない。大丈夫、大丈夫」

その声が、まるで母親が子供を寝かしつける呪文のように貴族令嬢の頭の中に響き、やがて彼女は深い眠りの中へと落ちていった。

次に彼女が目を覚ましたのは、天窓から朝日が差し込む時であった。

すでに他の仲間みんな起床しており、

「はやく朝メシ食いにいこうぜ」

オールラウンダーは、いつもの調子で腹を空かせている。

これを見て柔らかな笑みを浮かべた貴族令嬢は、

「そうですね」

言うや、一党と共に食堂へと向かった。

その日の朝食も、いつも通りであった。

談笑や今日の冒険についての打ち合わせ。これを交えているうちに皿に盛られた食べ物はすっかり消え、

「じゃ、行きましようか」

会計を済ませ、宿を後にする。

法の神殿へ向かう道中、誰も、

「今日でお別れだね」

などとは口にしなかった。

其の三

法の神殿へ戻り、裏庭の井戸へ向かってみると、そこには先客がいた。

ゴブリンスレイヤーの一党である、妖精弓手・鉾人道士・蜥蜴僧侶の三名である。

「なんじやい。お前たちも今から探索か」

鉾人道士が言うのへ頷いた後で、

「あの、ゴブリンスレイヤーさんたちは？」

貴族令嬢は、不在であるゴブリンスレイヤーと女神官の行方を問うた。

すると、鉾人道士はくつくつと笑った後で、

「二人仲良く、物買いよ」

さも愉快気に言うのである。

「へえ……」

その手の話が大好きな圃人野伏が、これまたにやにやと笑って呟いた。

しかし、彼女たちは知らなかった。

昨日のうちに、その二名が重傷を負って神殿に担ぎ込まれて来たのを。

幸いにして命を取り留めた二人が装備を整えている間に、この三名が地下水道の探索を担ったというわけである。

その訳を貴族令嬢一党へ話さなかったのは、

(こやつらも、かみきり丸とは浅からぬ縁がある。今は二人も元気になったことだし、心配させるだけ損じやとて)

という鉾人道士の考えがあったからだ。

「時に……昨日はご活躍でしたな」

ぎよろり。大きな目をオールラウンダーへ向けた蜥蜴僧侶が、優しい笑みを浮かべてそう言った。

邪教使徒捕縛の報せは、無論の事に彼らの耳にも入っている。

ここだけの話だが、巨大なゴーレムを跡形もなく吹き飛ばしたこと

も。

「まあ、あんただったらもう何をしても驚かないわよ」

妖精弓手は呆れたように言った後で、

「でも……まさかあなたたちを嵌めようとした依頼者が邪教の一味だったとはね。なに？　あなたたち、奴らに喧嘩を売るようなことでもしたの？」

貴族令嬢へ尋ねた。

貴族令嬢は首を振り、

「正直、誰でもよかったそうです」

そう言い、ぽつりと語り始めた。

実のところ、彼女は昨日のうちに、牢獄へ送られた邪教使徒を訪ね、そもそも何故に自分たちを罠に嵌めたのかを聞いただしていた。

使徒が言うことには、魔神復活の贄にしようとしたということらしい。

初めこそ、ゴブリンを使役して娘を攫い、贄を集めていたのだが、これを剣の乙女が嗅ぎ付けて、街中を監視と冒険者が巡回するようになった。

(これはいかぬ……)

敵陣にて見つかったゴブリンが、冒険者たちに敵うわけもない。

更なることには、どうやら地下水道には白き沼竜が潜んでいて、これもゴブリンどもを喰らっているという。

そこで使徒たちが耳にしたのが、吟遊詩人のとある歌であった。

それは「オールラウンダー」なる冒険者を歌ったもので、

「二度拳を振るえば人喰い鬼は弾け飛び、奇怪なる魔術を放てば山一つが消える」

などという。

(これだ！)

使徒に妙案が浮かんだ。

歌の内容が多少の誇張を含んでいると考えても、歌の題材とするほどのものだから、それなりに実力はあるはず。

そのオールラウンダーとやらが、沼竜とどっこいの実力とみて、

(上手くぶつけければ、相打ちに出来る……)

使徒はそう考えたのだ。

更に嬉しいことには、そのオールラウンダーなる冒険者は女の仲間を四人も連れてきているという。

男の冒険者ならその場で殺してしまうゴブリンだが、女ともなれば生きたまま巣に連れ込んでくる。

邪魔な沼竜を排除しつつ、生きのいい贄が四人も手に入る。これ以上のことはあるまい。

こうしたわけで、使徒はオールラウンダーへの指名依頼を送ったのだ。

彼らの最大の誤算は、オールラウンダーの実力が吟遊詩人の歌う通りそのままだった……ということに尽きるだろう。

「なるほどねえ」

全てを聞き終えた妖精弓手は、ちらとオールラウンダーを見やっ
て、

「そりゃ、ご愁傷様ね」

邪教へ、さすがに同情の念を以てそう呟いた。

話が一区切りしたところで、

「御一同も、今日はこちらで、小鬼どもの討伐をしてくださるのかな？」

蜥蜴僧侶が、舌をチロチロと出しながら尋ねてきた。

「それもありますか……」

貴族令嬢は、捕縛した際に邪教の使徒が言っていたことを、蜥蜴僧侶たちへ教えてやった。

「ふむ。異なる地へ繋がる鏡……」

顎へ手をやり蜥蜴僧侶が呟いた後で、

「つていうか、この子が違う世界から来た……つていうのも初耳よ」
妖精弓手が、その長くて鋭い耳をぴくりぴくりと動かしながら言った。

その横で、

「となると、小僧と顔を合わせるのもこれが最後となるわけか」

鉦人道士が、白くて長い髭を撫でつつ呟いた後で、

「かみきり丸や娘つ子には、そのことを？」

尋ねたものだが、

「いってねえ」

彼は、はつきりと言った後で、

「別に、もうあえなくなるわけじゃねえし」

この言葉を聞き、

「あんたねえ。こつちに来られる保証だつてないじゃない」

妖精弓手が呆れたように言ったものだが、

「その鏡つてやつを使えば、いつでもこれるじゃねえか」

そう言われると、後はもうなにも口から出てこない。

かくして、話は終わった。

「ともすれば、今回はこの八名で地下水道を……共同戦線というわけ
ですな」

「狭苦しい地下では、ちと騒がしすぎると思うがのう」

「いいんじゃないの？ オルクボルグたちが休んでる間に、ぱぱと
オルクたちをやっつけて、驚かせちゃいましょうよ」

ここに、貴族令嬢たち五名と妖精弓手たち三名とによる一時的な一
党が出来上がったのである。

其の四

剣の乙女より手渡された地下水道の地図。その末端を更に先へ進むと、雰囲気は一変する。

排泄物と廃棄物とで悪臭を放つ汚水は、透き通るほどの清水へ。壁に生えるカビや苔は、戦士と思わしき者たちを描いた壁画へ。

直角であった曲がり角も、蛇のようにしなやかに曲がり、木々の枝のように方々へ伸びている。

「恐らくは、神代の頃に起こった戦争にて斃れた戦士たちを葬るための場所でありましょう」

蜥蜴僧侶が言う通り、ここは地下墓地^{カタコンベ}。

万が一にも化け物共が、この地に眠る戦士たちを脅かさぬよう、中の構造は非常に入り組んだものとなっている。

しかし、鉦人道士たちには調べる当てがあるようで、

「今日の探索は、ここからじやて」

そう言ってやって来たのは、とある玄室。

入り戸であろう重厚で純黒なる扉は無残に打ち破られ、室内には激しい戦闘の形跡がある。

その一隅に、更に下へと続く階段があり、これを一同は下つていった。

かくして、この地下墓地の最奥へと一同が辿り着いたのは、地上に夕焼けが広がる頃であろうか。

その間、奇跡的にも敵襲は無かった。それが却って不気味でもあるが……。

「ふう」

地図役である蜥蜴僧侶が一息ついた後で、

「安心する間もなさそうだわい」

鉦人道士が、前方へと顎をしゃくってみせた。

石造りの長椅子が並んだ、こじんまりとした一室。その奥には祭壇があり、壁には、まるで大盾の如き鏡がはめ込まれていた。

恐らく、その鏡こそが《転移^{ゲート}》の鏡なのだろう。

目に見える距離に目的のものがあるというのに、貴族令嬢たちの表情は浮かなかった。

その原因は、一室の中央にある。
目玉だ。

巨大な目玉が、少しばかり床より浮遊して、部屋の中央に居座っているのである。

瞼と思わしき部位からは無数の触手が伸びて、その先端からは別の小さな目玉が生えている。

純粹とは言い難いぎらついた眼の輝き。口元より生えた鋭い牙。どうも、目玉はこちら側とは到底思えぬ。

「うへえ。わたし、ああいうウネウネしたやつ苦手……」

圍人野伏がげんなりとした顔つきで言うのへ、

「拙僧の知り得る仲にも、ウネウネとした者はおりますが」

蜥蜴僧侶が、舌を出し入れしながら呟いた後で、

「ああした未知の類には、矢鱈と戦を仕掛けるべきではないと思うが……」

ちらり。横目にオールラウンダーを見やった。

彼は、腕をぐるぐると車輪の如く振り回した後で、

「そう言うわけにもいかねえよ」

言うや、ぴよんと一室に飛び出した。

目玉の視線が、一気に少年へ向けられる。

と……。

目玉から伸びた触手の先端……そこにある小さな目玉から、赤き閃光が放たれた。

閃光は瞬時にオールラウンダーの額を捉え、

「あちっ!?!」

悲鳴を上げたオールラウンダーは、堪らず左側へ飛び退いた。

しかし、相手は無数の小さな瞳。一つの攻撃から逃れれば、また一つの攻撃が迫る。

「うわっ！ わわっ！」

次々と迫る目玉の赤き閃光を、オールラウンダーはなんとか避けて

掻い潜り、やつとのことで貴族令嬢たちの元へ戻って来た。

一室から冒険者が姿を消したことで、目玉は攻撃を止めたようだ。もつとも、その視線はこちらを向いたままであるが。

「さしもの小僧も、手詰まりかえ」

鉦人道士が、にやりとして見やるのへ、

「ううん」

オールラウンダーは、じつと目玉を見据えつつ、

「それでもねえとおもう」

言うや、

「よっ、ほっ」

と屈伸の運動をした後で、

「ちよつとどいてて」

一行を通路の両脇へ寄るように言った。

果たして、皆がこれに従ったのを見るや、

「よおい……」

の掛声で身を屈め、両手の指を床につけ、右足を前、左足を半歩後ろへ置いたオールラウンダーは、

「どん!!」

という合図とともに、まるで弦から放れた矢の如き速度で一室へ飛び込んだ。

目玉が、再びオールラウンダーへ赤き熱線を放つ。

が、それは半透明となった彼の体を通り過ぎるだけだった。

「あっ」

叫ぶと同時に、妖精弓手はいつかの牧場攻防戦を思い出した。

戦場に投入された三匹の小鬼英雄。その一体を相手にした時に放った、オールラウンダーの技。

無数の分身を生み出し、相手を翻弄するそれを、彼は残像拳ざんぞうけんと呼んでいた。

瞬く間に、一室をオールラウンダーの残像が埋め尽くす。

目玉の熱線が、ご丁寧にこれを一つ一つ撃ち落とそうとするが、悉くすり抜けてしまう。

目玉が、苛立ったように顔(?)をしかめた時であった。突如、目前に現れたオールラウンダーが、

「ていつー!」

鋭い正拳突きを一つ。

だが、これで一齐に無数の小さな目玉が彼の方を向いた。

向いたと思いきや、赤き熱線が集中する。

……と。

やはりこれも、残像であった。

半透明のオールラウンダーをすり抜け、熱線が向かう先には……。

「LEDEERRRRRRRRRRRR!」

自身の集中砲火を受けた目玉が、奇怪なる悲鳴と共に火だるまとなり、やがて息絶えた。

因みにオールラウンダーはと言うと、その間に貴族令嬢たちの元へと戻っている。

「これでいいだろ?」

オールラウンダーが言うのへ、誰もが反応に困った。

と、その直後である。

「あっー!」

叫んだのは、只人僧侶。

彼女は一室の奥を指さし、

「鏡が……!」

と小さく叫んだ。

果たして、祭壇へ祀られるようにして壁へ埋め込まれていた鏡……その表面がゆらゆらと揺らぎ始め、そこから一匹の小鬼が顔を出した。

隻眼の、小鬼英雄。

奴の表情は、恐怖によつて満たされている。まるで、何かから逃げて来たかのようだ。

しかし、英雄が鏡から出てくることは叶わなかった。

奴の体が……そして鏡までもが、何やら紫の光を帯びた粒子へと変換され、やがて弾け飛んでしまったからである。

暫しの静寂。

「……鏡、無くなっちゃったわね……」

妖精弓手が、流石に気の毒そうにオールラウンダーへ声を掛けた。

とある神様の憂鬱

おい、キテラ！ お前、何度言えば分かるんだ！ 僕はなあ、お前の宇宙にいる……なんだったか……あの緑色でちっこい奴らが大嫌いなんだよ！

あいつらときたら、不潔で弱いくせに調子に乗って……？ 殖力だけは一人前。いつも下衆な事しか考えてないし……。あれだ、あれ。地球ではゴキブリとかいうのが嫌われてるが、あれと同じだ！

……つたく。おかしな鏡で、こつちとお前の宇宙とを繋げやがって……。そのおかげで、あの緑の奴らが何匹も僕の星に雪崩れ込んできたんだよ！

あんなのがいるんだから、お前の宇宙も程度が知れるつてもんだ。え？ なに？ 鏡はどうしたか、つて？ そんなもん、破壊したに決まってるだろ！ あの緑の奴らもろともな！

何を怒ってるんだ！ お前に怒る権利なんか……。

へ？ 第七宇宙のサイヤ人が……？ お前の宇宙へ？ 孫悟空？

馬鹿言え。悟空は今、なんとかって星へ稽古に出かけてるんだ。だろ、ウイス？

ほら、この杖の玉をよく見ろ。この通り、悟空はバンパとかいう小さな惑星にいるだろうが。

なに？ お前の宇宙に来た悟空はもつと小さい？

そんなに言うんだったら、見せてみろ。

……。

おい、他人の空似とかじゃないだろうな。フリーザから聞いたことがあるぞ。サイヤ人の下級戦士は使い捨ても同然だから、顔のタイプが少ないって。

でも、まあ……このド派手な道着は間違いなく悟空のだな……。

……。

どうして悟空がお前の宇宙にいるんだ！

げえっ！ ぜ、全王様が……!?! と、時の界王神から、歴史書の写しを貰って……?!

くそつ、あのちんちくりん娘め……。余計なことをしやがって……。

……だあ、もう！ 分かってるよ！ お前が悟空を返すために、あの鏡を使ったのは分かった！ それを僕が破壊してしまったのもな！

だが、お前も悪いんだからな。お前があんな不潔な生命体を放置してなかったら、僕があ鏡を破壊することもなかったんだ！

いいか、キテラ。こうなったら共同戦線だ。全王様の機嫌を損ねない程度に、上手い具合に悟空をこっちの宇宙へ転移できるようにするんだ。

なに？ そううまくはいかない？ 転移の術を手に入れられるのも、運次第？ 馬鹿！ そういった因果律をいじつちまえば……つて、全王様もそのサイコロ遊びとやらに参加してるんだよな。

ううむ……。下手に手を出したら、全王様の機嫌を損ねかねんな……。そうなったら、どっちの宇宙も消されちまう。

くそつ。せつかく力の大会が終わったのに……。

こうなったら、仕方がない。全王様が飽きるのが先か、悟空が転移の手段を見つけたのが先か。これを待つしかないだろうな。

全く。いつの時代も僕を困らせてくれる奴だよ、孫悟空というやつは。

其の一

「街は救われたからいいものの……小僧には災難だったわなあ」

円卓を囲んで向かい側に座った鉦人道士が、骨付き肉へかぶりつきながら言うのへ、

「なんでだ？」

パンを頬張ったオールラウンダーが、不思議そうに首を傾げた。

ここは、水の街の一隅にある酒場。

街の水夫やら冒険者やらで賑わう店内の片隅で、オールラウンダーは鉦人道士や蜥蜴僧侶とともに、昼餉を共にしている。

因みに言うと、ゴブリンスレイヤーは、

「確認したいことがある」

と言って法の神殿へ留まり、女性陣は装飾品やら肌着やらを見たいということ、意気投合し街へ繰り出している。

さて、酒場の様子へ話を戻そう。

《転移》^{ゲート}の鏡を目の前で失い、少しばかりは落ち込むであろうと思われたオールラウンダーは、相も変わらずケロリとしている。

その様子を見て、鉦人道士は呆れを表す溜息を吐いた。

「お前なあ。自分の住んでる土地へ戻れなくなっただぞ？」

「また、巻物をさがせばいいじゃん」

「簡単に言うがなあ……」

果たしてこの様子を見ていた蜥蜴僧侶は、くつくつと笑いながら、

「武道家殿は、まるで空か海のように大らかな精神でありますなあ」

そうやって、少しばかり熱でとろけたチーズへかぶりつく。

「なんも考えてないだけかねえか……？」

ドワーフは訝し気な目をオールラウンダーへ向けつつ、火酒を煽った。

その時である。

「よう」

三人の座る席へ、そうやって声を掛けてきた者がいる。

自他ともに『辺境最強』と認める槍遣いと、その仲間である魔女だっ

た。

「あれ？ おめえたちもこっちにきてたのか」

パンを呑み込み、スプーンへ手を付けながら、オールラウンダーは意外な顔見知りの登場に顔を綻ばせる。

「ったく。無駄足もいいところだったけどな」

槍遣いは、ふんすと鼻息荒くして椅子に腰かけた。

その隣へ、煙管を吹かした魔女も座る。

「なんじゃい。無駄足つてのは、どういうこつた？」

鉦人道士が自然に差し出したジョッキを、これも自然に受け取った槍遣いが、

「おたくらの頭目に、使い走りを頼まれたのさ」

「使い走りとな？」

「何に使うか知らねえが、小麦粉を持ってきてくれ……だなんてよ。わざわざ手紙の配達まで依頼して、俺に言ってきたやがった。んで、遠路はるばる来たと思つたら」

今まさに語気が最高潮へ達しようとした槍遣いの言葉を、

「助かったが、今、使う、機会は、なくなった、ですって」

魔女が、妖艶な笑みを浮かべて続けた。

ぐぬぬ。言葉を奪われた槍遣いが、行き場のない怒りをどうにかして発散しようと、ジョッキに注がれた酒を飲み干す。

「小麦？ はて、なんに使うのでありましようや？」

「知らねえよ。おたくの頭に聞いてくれ」

「ふむ」

ふと湧いた疑問も、濃厚な味を奏でるチーズの前では泡のように、すぐ弾けてしまう。

「うむ。甘露、甘露」

これを横目に見た鉦人道士が、

「ま、あいつが頼んだ以上、もう使わない……ってこたあ無いだろうよ。お前さんが運んできた小麦やらも、いつかは使う時が来るだろうて」

と慰めたが、

「水の街で、急ぎで使うからってんで、遠路はるばる来たんだ。それをよう……」

槍遣いはがっくりと肩を落としたものである。

「ふふふ……」

その様子をさも可笑し気に見やった後で、

「この、街でも、お手柄、だった、みたいね」

魔女は、ゆったりとした口調でオールラウンダーへ話しかけてきた。

ここまでの道中で、彼とその仲間が邪教の使徒を追い詰めたという話を聞いたのであろう。

すると横にいた鉦人道士が、

「おまけに、混沌の眷属も単独で斃しちまった。街へ戻れば、また昇級するんじゃないか？」

言うのへ、

「じゃあ、またメンセツつてのをやるのか。オラ、あれニガテなんだよなあ」

オールラウンダーが眉を顰めてぼやく。

これを聞いた鉦人道士は愉快気に笑い、

「面接なんてなあ、『はい』と『いいえ』を繰り返して、適当に領いきゃいいのさ」

そう言つて、火酒を一気に飲み干した。

隣にいた蜥蜴僧侶が、そんな道士へぎよろりと目を向ける。

「術師殿。冒険者は誠実な態度と信頼が命。あまり適当を吹き込むのは感心しませんな」

「馬鹿。冗談だよ」

「武道家殿は純粹無垢の塊のようなお人。それへ冗談を吹き込むのは……」

「へいへい。気を付けるよ」

こうして酒場での酒食と談笑が終わったのは、夜も更けようかという頃であった。

やけ酒を飲んだ槍遣いはすっかり泥酔し、これを蜥蜴僧侶が背中へ

負い、

「今日のところは、ご一緒に神殿へ参りましょうぞ」

彼の誘いを受け、魔女も共に法の神殿へと赴いたのである。

其の二

「では皆さま、お気をつけて」

翌朝、そう言って神殿前まで冒険者たちを見送りに出た剣の乙女は、どこか晴れ晴れとした表情であった。

更に不思議な事には、ゴブリンスレイヤーの方を見やる度に、彼女の顔は瞬く間に上気してしまうのである。まるで、初恋を経験したうら若き少女のように。

これを察したのは、色恋沙汰に敏感な圃人野伏と、冷静で人生経験豊富な森人魔術師くらいであった。

かくして、一同が広場にある馬車の停留所へ足を向け始めた時、「お待ちになって」

剣の乙女が、オールラウンダーを呼び止めた。

次いで彼女は、彼の一党の頭である貴族令嬢へ、何やら目配せで訴え、これを受けた令嬢も、こつくりと頷いた後で、

「ソンさん。先に広場の停留所へ行つてますからね」

言い残し、その場を去ってしまった。

留まったオールラウンダーは、

「なんだ？」

きよとんとした表情で、剣の乙女に問いかける。

そんな少年へ、乙女は小鬼殺しへ向けたのとはまた別の……まるで親しき友へ向けるかのような柔和な笑みを浮かべ、

「ねえ。これからも、あなたは私のお友達でいてくれる？」

しやがみ込み、視線を合わせて、ゆつくりと尋ねた。

少年の返答は、実に迅速。

「おう」

力強く頷いた彼は、ずいと乙女へ手を差し伸べてきた。

柔らかかだった笑みが、弾けんばかりのものへと変わり、少年の小さな掌を握り返した乙女は、これを打ち振りながら、

「ありがとう！」

それまでの、美麗で奥ゆかしく、神々しさすら感じられる雰囲気は

どこへやら。

いよいよ子供に退行したかのような乙女の、目元を隠すその黒い帯から、一筋の熱いものが伝っていく。

これが気にならないほど、オールラウンダーも鈍感ではない。

「なんだ、おめえ。泣いてんのか」

少年の言葉に、乙女は恥じることなく頷き、

「だって、嬉しいんだもの」

と言つて、涙を拭う。

「誰かを慕うことも素敵なことだけれども……お友達を作るつて、こんなにも嬉しいことだったつて……久しぶりに思い出せたもの」
やがて涙を拭いきった乙女は、また笑みを優しいものへと戻し、

「ね。内緒よ。私が、ゴブリンを怖がつてるつてこと」

「大丈夫だつて。オラ、口はかたいんだ」

その言葉を後に、暫しの沈黙が訪れる。

これを受け、もう話すこともないと見たオールラウンダーが、

「じゃ、またな」

と引き返そうとするのへ、まだ『友達』と話したりない剣の乙女が、
「ねえ、またこの街に来てくれる？」

言うのへ、

「ううん。どうだろうな」

オールラウンダーは、悩むようにして呟き、

「オラ、探し物してるからなあ」

「探し物？」

「うん。『げーと』つてやつの巻物」

『《転移》？ それなら、鏡が……』

「あの鏡、消えちまった」

「え？」

「よくわからんけど、消えちまった」

暫くは、ぽかんと口を開けていた剣の乙女であったが、

「だったら……！」

両手を「ぱん」と叩いてみせるや、

「《転移》^{ゲート}に纏わる魔道具の情報が手に入ったら、一番にあなたへ教えてあげる」

と、提案を持ち掛けた。

「ほんとう？」

「ええ。本当に」

「サンキュー！」

今度は、オールラウンダーが顔を綻ばせて乙女の掌を握る番。

こうして、互いに充分笑い合った後で、今度こそ訪れる別れの時。

「あのワニにも、よろしく言つといてよ」

「ワニ……………」

「ほら。あの白い奴」

「……………ああ、沼竜^{アリゲイタ}のことまで……………」

「へへっ。目隠しのねえちゃんと、おんなしニオイがしたからな」

その言葉を受け、僅かに剣の乙女が顔を赤くする。

一応、オールラウンダーのためにを言っておくと、彼にはそういった趣味とは無縁の人物である。

犬のような嗅覚を持つオールラウンダーは、単に沼竜と剣の乙女から『同じ匂い』を感じ取り、彼らの間にある関係を、臆気ながらに気付いただけのことであった。

すなわち沼竜は、乙女にとっての使徒^{フェアミリア}。

醜い小鬼を蹴散らし、その凶悪な見た目を以て、冒険者を地下水道から『避難』させるための見張り役。

このことに気が付いたのは、オールラウンダーの他にもう一人。

見すばらしい革鎧と鉄兜に身を包んだ、並々ならぬ執念を持つ小鬼殺しだけだ。

……………さて。

どんどん遠くなっていく小さな冒険者の後姿。

これへ、剣の乙女はいつまでもいつまでも、大きく手を振って見送りをしたものである。

「またね」

「豆粒ほどになったオールラウンダーが、広場へ続く曲がり角へ差し

掛かり、いよいよその姿が見えなくなってしまった後で、乙女がぽつりと呟いた。

収穫祭天下一武道会編 収穫祭特別企画立案書

テンカイチブドウカイとは、オールラウンダーさんの住んでいる地で開催されていた、大規模な武道大会です。

はるばる遠い都に集まって来た、あらゆる武道武術の達人たちが、自慢の強さを競う夢の武道大会とのこと。

開催理由としましては、武道大会を神々のサイコロ遊戯に見立て、その戦いによって、秋の収穫への感謝の念を送ろう、というものです。更にもう一つ。オールラウンダーさんがこの地に来て、半年が過ぎました。普段、表にこそ出してはいませんが、彼も元の世界を思い、寂しがつていることと思います。そんな寂しさを少しでも和らげるべく、彼の世界に伝わる伝統行事をこちらで再現し、喜んでもらおうと思っております。

また、上級の冒険者の戦いぶりを間近で見ることにより、新米の冒険者さんたちのいい刺激になるとも思えます。

本来、この大会には予選と本戦とが分かれています。登録されている冒険者の人数を考えて、ギルド推薦の優秀な冒険者八名による、トーナメント方式の試合からいきなり始めようと思えます。

そのうちの一人は、もちろんオールラウンダーさんです。彼が参加しなければ、意味がないので。

次にルールの説明へ移りますが、「武舞台」と呼ばれる正方形の試合場から落ちて場外となったり、「参った」と降参する。あるいは、倒れてから十のカウントを取られても負けとなります。

時間は無制限。武器の使用や、武具の装備は反則。急所への攻撃や目潰しも禁止。当然、相手を殺害することも駄目です。

これに加えて、奇跡の使用も禁止します。飽くまでも、自分の発揮できる能力だけで戦ってもらうので、神々へ嘆願し、祈りを聞き届けずて貰う奇跡はそれに反すると考えました。

一方で、魔法の使用は大丈夫です。あれは神々より力を受けるので

はなく、自分の力で世の理を改変して発動するので。

また、決勝戦においては特別なルールが設けられます。

仮に、二人同時にダウンしてしまい、十のカウントが取られてしまった場合は、先に立ち上がって、

「優勝したもんね」

と笑顔で宣言した方の優勝とします。……なんでこんなルールなんですかね。

さて、いよいよ優勝賞品の説明をいたします。

オールラウンダーさんの知っているテンカイチブドウカイでは、優勝者には賞金が授与されるのですが、正直な所、ギルドもいっぱいいっぱいのところをやっているのです、お金ではなく、街の様々なお店から、自慢の商品を集めて、それを優勝者へプレゼントしたいと思っております。

幸い、オールラウンダーさんは街の皆さんから大変な好評を得ているので、こちらの確保も間違いないと思います。そのうちの一つ、街より少し離れた所の牧場には、話を通してあり、承諾も得ています。

以上が、テンカイチブドウカイの概要となります。

秋の収穫祭をさらに盛り上げるためにも、是非、この企画を実現したいと考えております。よろしくお願いいたします。

其の一

醜悪な偶像を祀った礼拝堂の中に、奇怪なる絶叫が木霊した。

首筋への剣閃を受けた悪魔が、祭壇にもたれかかるように倒れ、やがて力尽きる。

「ふう……」

果たして悪魔の最期を見届けた貴族令嬢は、邪な血に塗れた愛用の長剣へ拭いをかけ、これを納める。

その背後から、

「お疲れ様」

と声を掛けてきたのは、彼女の一派が一人の圍人野伏。

更にその後方では、同じく仲間の森人魔術師と只人僧侶が、礼拝堂内に並べられた木製の長椅子を、一つ一つ丁寧に検めている。

「ふうむ」

やがて全ての椅子を調べ終えた森人魔術師が、表情を渋くして唸った。

傍らでは、只人僧侶が懸命に何やら祈りを捧げている。

「行方不明の人たちは……？」

貴族令嬢が問いかけて近寄るのへ、

「……」

森人魔術師は答える代わりに、長椅子を顎でしゃくってみせた。

椅子の座面下には荷を収納できる空間が設けられていたのだが、そこに入っていたのは、人であった。

尤も、すでに息は絶えている。

遺体は~~い~~ずれも洗い清められており、男であれば黒の背広服に、女であれば純白のドレスへと好意を施されていた。

『いずれも』と表記したのは、礼拝堂の中にある長椅子全てに、誰かしらの遺体が収納されていたからだ。

「奴らめ……ここを企んでいたのだ……」

不気味さよりも怒りが勝った森人魔術師が、拳をわなわなと震わせつつ、今は口もきけなくなった教団教祖……もとい悪魔の骸へ視線を

向けた。

彼女の疑念に答えたのは、貴族令嬢。

「勿論、魔神の復活ですよ」

至高神に仕えし自由騎士もまた、邪教の非道で陰惨な魔の手に落ちた犠牲者のことを思うと、怒りで胸がいっぱいになっていた。

ここで、何故に彼女たちがこの場にいるのかを述べておこう。

それは、十日前のこと。

「娘が、妙な新興宗教にのめり込んだ挙句、帰って来ない。どうか連れ戻してほしい」

と、貴族令嬢たちへ指名依頼を寄こしてきたのは、然る小さな街に豪邸を構える商家の主。

水の街より帰還してより、こういった『宗教絡み』の依頼が貴族令嬢たちの元へ舞い込むのは、珍しいことではなくなっていました。

それというのも、かの剣の乙女へ復讐を画策していた邪教団の残り火……その捕縛劇に彼女たちが大きく関わったのが要因である。

水の街における小鬼騒動の真相を暴き、剣の乙女の命を守った貴族令嬢たちの功績は、吟遊詩人の歌によって瞬く間に各地へ広がった。

これを聞きつけた街の人々は、

「それほどの冒険者ならば、きつと私たちの依頼を請けてくれる。そして、きつと解決に導いてくれる」

という結論に至った。

それからは、もう連日のように殺到する依頼、依頼、依頼。

「隣村で、夜な夜な怪しい儀式が行われている」

とか、

「どこどここの新興宗教が胡散臭いので調べて欲しい」
とか。

彼らにとつて、『怪しげな宗教集団』というのは、すなわち『邪教』とイコールし、『邪教』とくれば、

「剣の乙女を邪教の魔の手から救った貴族令嬢一党に依頼を……」
なのである。

今回の依頼は、五件目であった。

かくして貴族令嬢たちが、商家主の言う『新興宗教』の調査に乗り出してみると、

「高額のお布施を払わされた」

とか、

「脱退を申し出ると、恐喝された」

とか、

「教団の信者に、性的暴行を加えられそうになった」

とか。街の人々から、あれよあれよと黒い噂が出てくる。

事実を確認に、教団本部へ乗り込んでみると、初めこそしらを切っていた教団の教祖や副教祖だったが、

「いやなニオイがする」

というオールラウンダーの一声。

彼の言う『いやなニオイ』とは、何も悪臭のことだけではない。

邪な者が放つ、陰湿な雰囲気をも、臭いとして敏感に察知できるのだ。

「そうか。貴様らが水の街で同胞を……そして魔神様の降臨を妨げた者たちであったか!」

激昂した教祖と副教祖が、自ら正体を現した。

そのうちの一人は、襲ってくると思せかけて、天井近くの硝子窓を突き破って逃亡を図り……。

「あつ、そうだ。ゴクウは?」

「圃人野伏が声を上げた。」

逃亡した悪魔を、

「のびろ、如意棒!」

朱色の細棒を天まで伸ばしたオールラウンダーが、追跡したままなのである。

……と。

激しい音を立てて、礼拝堂の天井から何かが落下してきた。

漆黒の外套に身を包んだ、只人の男。悪魔としての正体を現す前の、邪教副教祖である。

その後から、これはふわりと身軽に着地した者が。

四方八方に伸びた独特の黒髪。

やけに目立つ山吹色の道着。

背に負った、朱色の細棒。

オールラウンダーは、

「こいつ、いきなり飛ぶんだもんな」

物言わぬ邪教副教祖を見やって、そう呟いた。

其の二

小さな街に蔓延っていた邪教団が殲滅されてより五日後。
依頼の報告を終えた貴族令嬢たちへ、受付嬢が一枚の広告を差し出してきた。

「収穫祭特別企画……テンカイチブドウカイ？」

見慣れぬ単語に貴族令嬢が首を傾げる横で、

「天下一武道会!？」

驚きと喜びの大声を上げたのは、オールラウンダーであった。

受付嬢としては予想通りなのだろう。少年の反応を見て、優しく目を細めている。

「なんだ、そのテンカイチブドウカイとやらは」

耳をピクリと上下させ、森人魔術師が問うてくるのへ、

「すぐくでつかい武道大会だ」

オールラウンダーが至極簡潔に説明してやった。

「……なるほど」

参考になったかならなかったか。ともかく森人魔術師は、それ以上の問いを諦めたようである。

さて、発言の流れは再び受付嬢に移る。

「収穫に対する感謝の念を神々へ送る一環として、オールラウンダーさんから前に聞いたテンカイチブドウカイのことを思い出したんです」

でも。

受付嬢は少しばかり困った顔をして、

「その……こちらで選出した八人の冒険者さんたちに出場してもらわずだったのですが……殆どの人が、その……予定があるみたいで。選手がなかなか集まらないんです」

オールラウンダーに対して、申し訳なさそうに言ったものである。

『ああ……』

少年を除いた一党の女性陣が、一様に頷いた。

依頼を終えて辺境の街に戻って来てから、ギルドへ往く道中だけで

も、

「な、なあ……お、お前は……その……収穫祭を見て廻ろうとは思わないのか？」

と、仲間の重戦士へ尋ねる女騎士であったり、

「馬鹿！ お洒落をするとは言ったけど、祭祀の衣装は着ないってば！」

顔を赤らめ、見習聖女が新米戦士の背中を強く叩く姿を見ることが出来た。

なるほど。彼・彼女らが『冒険の仲間』から『親しき男女』として日常を楽しむことが出来る時間は、収穫祭以外にないのかもしれない。

その意図を無視して、

「武道大会を開くから出てくれ」

などとは、とても受付嬢からは言えなかったであろう。

彼女もまた、浮足立っている冒険者たちの気持ちが分かる立場にあるからだ。

「まあ、出てくれる人はいることにはいるんですが……」

受付嬢は、困ったように笑った後で、テンカイチブドウカイの出場者名簿を内緒で見せてくれた。

そこには、特別枠としてオールラウンダーの名前と、『辺境最強』である槍遣いの名前が記載されているのみ。

これも、貴族令嬢たちの中では得心がいった。

槍遣いが受付嬢に向ける好意が並々でないことは、傍から見ても分かるというもの。

おおかた、

「お嬢さんのためなら、この辺境最強の槍遣い、是非とも出場しますとも！」

などと、張り切って参加を申し出たに違いない。

「あと六人、か……」

出場者名簿へ暫く目を落としていた貴族令嬢は、やがて何かの決心をしたらしく、

「あの……私も、出場することは出来ますか？」

凜とした声で、武道大会への参加を表明した。

これを歓迎しない受付嬢ではない。

「はい、喜んで！」

いそいそと名簿に貴族令嬢の名を記したものの、それでもあと五人足りない。

どうしたものか。

悩みの沈黙を続けている一同へ、

「どうなされた」

と声を掛けてきたのは、蜥蜴僧侶。その後ろには、例によって鉾人道士と妖精弓手。そして珍しい組み合わせとして、槍遣いと魔女の姿もある。

実のところ彼ら、一党を組んでとある依頼をこなしてきたばかりなのであった。

「おっ。なんとか武道会のことか」

ひよいを受付の机を覗き込んだ槍遣いが言うのへ、

「ほう。武道大会とな」

蜥蜴僧侶の目が、ぎよろりと開かれる。

彼は、

「失礼」

と一言置いてから、貴族令嬢が持っていた広告を受け取り、目を通した後で、

「ふむ。己の肉体一つを以て、真に強きものを決める……というわけですか」

興味深そうに呟いた。

かと思ふや、まるで勝鬨を上げるように、

「しからは、拙僧も出場させていたどころ！」

大声と共に、力強く拳を天へ突きあげた。

僧侶職とはいえ、生粋の戦士である蜥蜴人。天下一の強者を決めるとあらば、黙っていられないのだろう。

これで、後四人。

「なあ、スッチャンは……」

オールラウンダーが、候補者の一人の名を上げたものだが、

「あいつは出んだらうよ」

鉱人道士に一蹴されてしまう。

因みに言うと、彼や妖精弓手、森人魔術師も出場するつもりはない。

これが単なる武道大会ならば別やも知れぬが、

「戦いを神々に献上する」

という開催理由が、

「神々と共にある」

の精神である鉱人や森人にとって、解釈違いとなっているからだ。

彼らは神々を尊んではいるが、やたらと崇めることをしないのである。

ともあれ、あと四人。

「じゃあ、オトメのねえちゃんは？」

水の街における英雄の名前を口にしたオールラウンダーへ、

「もつと難しいですよ……」

呆れ果てるように、貴族令嬢がツツコミを入れる。

そこへ、圃人野伏が思い出したように、

「ねえ、ゴクウ。あの娘は？」

と言いつ出した。

「へ？ 誰？」

「ほら。ゴクウが最初の冒険で一緒だったっていう、武闘家の女の子」

その娘には、貴族令嬢も覚えがあった。

春における、ゴブリンの大軍からの牧場防衛戦。

貴族令嬢は、例の女武闘家と若い剣士を引き連れ、ともに死線を潜り抜けたのである。

なるほど。彼女ならば、『武道大会』にはうってつけかもしれない。聞けば、このところは己で考え出したオリジナルの鍛錬方法に精を出しているらしいではないか。

銀等級の槍遣いや、規格外のオールラウンダーがいるために、優勝こそ難しいかもしれないが、神々へ献上するに値する試合をしてくれ

ることは確かである。

「そっか！　じゃ、オラたしかめてくる！」

言うが早いのか、オールラウンダーは疾風の如くギルドを飛び出してしまった。

「あいつ、その娘がどこにいるか分かってるのかね」

槍遣いが、ぽりぽりと頭を掻きながら呟いた。

其の三

真つ直ぐにギルドの裏手に出たオールラウンダーは、果たしてお目当ての人物を見つけた。

訓練場にて、剣士の投げた小石を軽い身のこなしで躲す、女武闘家。オールラウンダーの接近に気が付いたのは彼女ではなく、同じ一党の女魔術師であった。

「ソンが来たわ」

それまで読んでいた魔導書を閉じ、女魔術師が静かに言うと、剣士と武闘家が動きを止める。

「ゴクウ！」

「久しぶりだな！」

「へへっ。おっす！」

と挨拶もそこそこに、オールラウンダーは早速本題を持ち出した。

「なあ、おめえ。天下一武道会に出場しねえか？」

唐突にオールラウンダーから切り出された女武闘家は、

「テ、テンカイチブドウカイ……？」

聞き慣れぬ単語に戸惑った様子であったが、

「天下で一番つええ奴を決める大会なんだ。受付のねえちゃんが、シューカクサイとかいう祭りで開いてくれるんだと」

という説明を受ければ、その目も輝きに溢れるというもの。

「天下で一番強い奴……」

その響きに、女武闘家は武者震いが止まらなかった。

無論にこれは、自分が天下一を勝ち取った未来の姿を想像して舞い上がっているわけではない。

収穫祭の一部企画とはいえ、集う強者たち……とりわけ、秘かに待ち望んでいたオールラウンダーとの試合が実現できるかもしれない、という可能性を見出して、心が弾んで仕方がなかったのだ。

かくして、

「でるだろ？」

オールラウンダーの誘いに、

「もちろん！」

女武闘家は力強く頷いた。

これで、あと三人。

「おめえたちはどうする？」

オールラウンダーは、剣士と魔術師も誘ってみたが、

「お、俺は見物してるよ。正直、ゴクウたちと戦える自信ないし」

「私も。そもそもが魔術専門だし。肉弾戦なんて不利でしかないもの」

二人は参加をパス。

さて、残りをどうするかというところで、

「げっ、オールラウンダー……」

ばつの悪そうな声とともに近づいてきたのは、無精ひげを蓄えた、戦斧装備の中年男。

その首からは、銅の認識票がぶら下がっている。

「おめえ……だれ？」

オールラウンダーがきよとんととして誰何するのへ、青筋浮かべつつ、がくりと崩れ落ちそうになった男は、

「俺だよ、俺！ いつかためえと食べ比べをして負けた……」

「ああ」

さして興味もなさそうに、オールラウンダーは思い出した。

オールラウンダーと食べ比べをして、完膚なきまでに敗北した銅等級の冒険者。

負けた罰として六十人前の食事代を一人で払う羽目になり、それが出来ぬ罰として、借金の返済が完了するまでの間、冒険で得た報酬を全てギルドに献上することになった銅等級の冒険者。

新米冒険者たちがドブさらいや巨大鼠退治へ本格的に取り組むようになつた、陰の立役者とも呼べる存在だ。

依然として、彼の借金は返済されずにいる。

(このままじゃ、とても返しきれない……)

というところで組合から提案されたのは、

「新人の教育係というのはどうでしょう」

これであつた。

こうして、銅等級は若き剣士一党を引き連れ、冒険に出ているというわけ。

依頼達成の報酬に加え、

「教育料」

ということまでボーナスも発生し、以前よりは借金の返済がスムーズになっていた。

銅等級にとって、決して悪くはない話だったのだ。

さて……。

そんな銅等級へ、

「先生ー、先生も、テンカイチブドウカイに出てみてくださいよ！」

と提案したのは、鉢巻の剣士。その横で、女武闘家も「うんうん」と頷いている。

「なんだ、そりゃ？」

首を傾げた銅等級は、剣士たちから概要を聞くと、

「冗談じゃねえ」

呆れたように首を振る。

「辺境最強だったりオールラウンダーだったりが出るんだろ？ おまけに武器も駄目とくりゃ、俺が勝てる見込みがねえだろ」

そこへ、

「この子に負けるのが怖いんじゃない？」

女魔術師が、武闘家を顎でしゃくって見せた。

銅等級はすぐさま反応し、

「んなこたあねえよ！」

茹蛸のように赤くなり、

「上等だ。指導してる娘っ子に負けて堪るもんかえ。おい、オールラウンダー。俺も出るぜ」

武道大会開催に必要な人員。これを拒むオールラウンダーではない。

「よしっ！ あと二人だ！」

兎も角、新たな二人の参加選手を伝えようとギルドへ戻ってみる

と、

「そうですか。これで開催決定ですね！」

受付嬢が、表情を明るくした。

「へ？ あと二人たんねえんだろ？」

ぽかんとするオールラウンダーへ、貴族令嬢が事情を聞かせてやる。

オールラウンダーが女武闘家を誘いに行っていた頃、ギルドへ二人の冒険者が訪れた。

二人とも、外套をすっぽりと覆って詳しい身なりは分からなかったが、

「片方は、私と同じ背丈だったよ」

圃人野伏が言うのだから、一人の外套は圃人と見て間違いないだろう。

して、その二人はロビーで残りの参加選手について悩む受付嬢たちへ、

「ほう。面白い催しをしているのですね」

ずいと近寄るや、

「他方から来た者でも、参加できるものでしょうか？」

と尋ねてきた。

これを逃さぬ手はない。

「はいっ！」

受付嬢が頷くのへ、

「きつと、面白いですよ！」

オールラウンダーの楽しみを実現させてやりたいと、貴族令嬢が援護する。

彼女たちの熱意が伝わったものか。

「では、参加しましょう」

二人の外套は、首から下げた鋼鉄の認識票をそれぞれ差し出した。

これを参加者名簿へしたためた受付嬢が、

「是非、お待ちしております！」

と言うのへ、

「こいつも、楽しみだと申ししておりますよ」

外套の片方が、小さい相方の頭へ手を置きながら応え、やがてギルドを後にしたという。

「ふうん」

これを聞いたオールラウンダーは、一つ頷いた後で、

「でも、これで決まりだな！」

眩しく笑って見せた。

「拙僧、武道家殿と拳を交えるのは初めて故、楽しみ、楽しみ」

蜥蜴僧侶が、にんまりと笑って舌を出し入れするのへ、

「オラだって、楽しみだ」

オールラウンダーが応え、

「おいおい。俺とやるのは楽しみじゃねえのかよ」

槍遣いが割って入ると、

「んなことねえよ。オラ、なんだかワクワクしてきてんだ！」

間近に迫った武道大会に思いを馳せ、声を弾ませた。

『彼』か 『あの子』か 『デート』か 『司会』か

「つてことは、お祭りの日は一日通して、その武道大会とやらの審判と司会を務めるわけだ」

「そう、なります……」

「彼、ああ見えてもライバル多そうだけど、それでいいの？」

「うっ……で、でも……私が企画したことですし……それに、あの子の喜ぶ姿も見たいし……」

「見るだけなら、デートの一時に試合を観戦するだけでもいいと思うけどねえ」

「うっ……」

「冒険者つて、明日をも知れぬ身だよ？ 彼だつて例外じゃない。時の運が少し傾いて、ゴ布林たちに……つてこともあるかもしれないよ」

「うう……」

「そしたら、また来年でいいや……なんて言ってる暇ないよ？ 来年どころか、永遠にチャンスが来なくなっちゃう」

「う、うう……」

「……私が、代わつてあげようか？」

「へ？」

「テンカイチなんちゃらの審判と司会。私が代わつてあげるよ」

「えっ、で、でも……」

「職務もいいけど、自分のことも優先しなくちゃ」
「……」

「気にしなくても大丈夫。どうせ私はお一人ですし」

「あつ、いや……」

「ふふっ。そんなに取り乱さなくてもいいよ。一人でいることに、なんの寂しさも無いし。それに、あの子が戦う姿つて今まで見たことないからさ。私、一度間近で見ってみたかったんだよね」

「……いいんですか？ 本当に」

「いいとも。親友が困っている時に手を差し伸べなくて、至高神に仕

えることなんてできないよ」

「……あつ、ありがとうございますー」

「そんな頭を下げてもらうほどのことでもないってば。あつ、試合スケジュールとか組み合わせの手順とかはもう決めてるわけ？」

「はい、一応。これがそうなんですけど……」

「ふむ。くじ引きで決めるわけね。んで……午前中に四試合を行って、準決勝進出者を決める、と……」

「午後は、準決勝と少しのインターバル。そして夕暮れ時に決勝をやるうと思っっているんです」

「時間的に、ギリギリ奉納とは被らない感じだね」

「試合が長引けば、被ってしましますが……」

「長引くかね？」

「こっちの冒険者さんたちだって、オールラウンダーさんに引けは取りませんよ」

「さすが。彼らを長年戦地へ送り続けた人が言うことは違うや」

「いや、そんな……えへへ……」

「まあ、万が一にも被ったとして、巫女様による奉納の祝詞と、戦士による戦いの献上。それが同時に行われるのも、なかなか乙なものかもしれないね」

「そう、ですかね？」

「そうともさ。さ、何はともあれ話はこれでお終い。ほら、そうと決まれば早く話をつけて来なきや」

「えっ、い、いまからですか……」

「……そうか。彼は今、冒険に出かけてるんだっけ。だったら、帰って来るまで待てば？ 仕事終わりに酒場でお酒でも飲んでさ。酔いに任せれば、上手くいくかもよ」

「そんなものでしょうか……」

「こういうことに必要なのは、とにかく勢いだよ。ほら、頑張れ」

こうして、当日の二人の役割は決まった。

其の一

『これより、辺境の街における第一回天下一武道会を開催します！』

日が昇る空へ、色とりどりの花火と共に上がった、監督官の大音声。

これは、ドラゴンズローア 蜥蜴僧侶の竜 吼による奇跡の賜物。

本来、この奇跡は彼の咆哮を響わたらせ、相手を竦ませるための奇跡なのだが、少し応用すれば、このように他者の声を拡げることもあるのだ。

ここは、ギルドの裏手。訓練場。

普段、土を均しただけの広場には、板石を敷き詰めて出来た正方の舞台が設置され、その東側には《幻想》の神を、西側には《真実》の神を模った彫刻が装飾されている。なかなか洒落た造りだ。

果たして舞台の四方には、階段状の長椅子が設けられ、そこには早くも街の住民や、特に逢引や店巡りの予定が無い冒険者どもが観客として座り込み、やんややんやと勝手に盛り上がっていた。

彼らが好奇の目で見ると、舞台の上に立つ八人の冒険者。

他方から来たという、外套姿の冒険者二人。

いつもの民族的衣装を身に纏い、シウルシウルと舌を出し入れしている蜥蜴僧侶。

剣士から借りた赤い鉢巻を締め、気合十分の女武闘家。

両手に、鶏を串焼きにしたのを持って、これにかぶりついているオールラウンダー。

武器、防具の類は装備禁止というので、組合から支給された袖なしの黒いシャツに、通気性の良い長ズボンという出で立ちとなった、槍遣い・貴族令嬢・銅等級冒険者の三人。

この八名の中から、己の体と技を競つての『天下一』が決まるわけだ。

沸き立つ観客の声を抑え、審判兼司会である監督官は、ルールの説明へと移る。

『試合の組み合わせと順番は、くじ引きで決定いたします』

そう言うと、彼女は足元にあった木箱を持ち上げ、観客に見せる。

箱の中には、一から八までの番号が記載された紙が入っており、これを選手たちが一人一枚引いていくわけだ。

早速、一人一人が名前を呼ばれ、木箱の中へ腕を伸ばしていく。これを観客席から眺め、

「ゴクウと頭。しよっぱなから当たらなければいいね」

圃人野伏が、バケツのような器に入った、白く泡のような粒上の菓子を掴み、口に運びながら呟いた。

この菓子、乾燥させたコーンの粒を煎って、塩で味を調えたものである。

「その前に、うちのトカゲに負けちゃったりして」

そういった妖精弓手が、横から手を伸ばし、コーンの菓子を掴んだ。

これを気にせず圃人野伏は、

「そんなことないよ」

と唇を尖らせる。

それを、

「まあ、まあ」

野伏の後方。客席二段目に座った僧侶が宥めた。

そうこうしているうちに、どうやら試合順は決まったようだ。

木版に乗せた羊皮紙へ目を落としながら、監督官が声を張る。

「お待たせしました！ では、対戦順をお知らせします！」

かくして、彼女が発表した対戦順は、以下のようなものであった。

第一試合。 貴族令嬢対槍使い。

第二試合。 蜥蜴僧侶対外套冒険者の一人で、背の高い方。

第三試合。 女武闘家対その指導役である銅等級冒険者。

第四試合。 オールラウンダー対外套姿の冒険者で、小さい方。

「あちゃあ」

圃人野伏が、掌で目元を覆った。

「頭。最初から辺境最強が相手じゃんか」

なのである。

すると、

「なあに。望み薄というわけでもないさ」

と近寄ってくる声。

盆の上に、レモネードの注がれた八つの杯を乗せた、森人魔術師である。

その背後には、脂の滴り落ちる骨付き肉を持った鉱人道士の姿もあった。

森人は、知人たちへとレモネードを配っていく。

この中には、槍遣いの連れである魔女や、女武闘家の応援に来た剣士と魔術師の姿もあった。

して、全員に飲み物が生き渡ったことを確認した森人は、

「これが武器を使用した真剣勝負ならいざ知らず。徒手空拳で戦うのは皆同じ条件なんだ。ソンの組手を通して、そちらの方の心得もある令嬢殿なら、引けを取ることもあるまい」

しかし横から、

「いや、それは分かんらん」

鉱人道士が言葉をかける。

白い顎鬚を撫しつつ彼は、

「あの長槍のだとて、辺境最強と謳われるに至った銀等級の冒険者。槍が無ければ闘えません、というわけにもいくまい。油断は禁物じゃろうて」

厳しい目つきで、舞台上を見やった。

すでに他の選手は舞台袖に引き払い、早速に第一試合の対戦カードである貴族令嬢と槍使いとが対峙している。

この間に立った監督官は、

『時間無制限！ 参った、と宣言する。舞台から落ちる。倒れてから十のカウントを取られる。これらが敗北条件です。では、始めてくださいっ！』

宣言すると同時に、舞台を離れた。

瞬間、二人の選手は「ぱっ」と距離を取り、それぞれの構えをとる。貴族令嬢は両腕を直角に曲げ、顔面を守るようにした構え。対して槍使いは、得物こそ手にしていないが、まるで槍の矛先を相手に向けたような構えであった。

「悪いな、お嬢さん。この辺境最強の槍使い。一回戦であっさり負けるわけにはいかねえのさ」

言うや否や、弦を放れた矢の如く、槍使いが地を蹴った。

其の二

それまで喚き立っていた観客たちの声が、一斉に止んだ。

《サイレンス静寂》の奇跡を受けた……というわけではない。ただただ、声を発することさえ忘れて、舞台上で繰り広げられている闘いに夢中となっているのだ。

「くっ……」

槍使いの鋭い手突きを、貴族令嬢は左に身を反らせて躲す。

……が。

「そらっ！」

躲されることも想定内だったのだろう。槍使いは身を捻り、右足を大きく振り回す。

連続での回避が難しいと判断した令嬢は、両腕を構えて防御の姿勢に入った。

しかし。

「フェイント！」

瞬時に足をひっこめた槍使いが、下から掬い上げるように腕を突き上げてくる。

(しまった……！)

焦燥に駆られつつ、貴族令嬢はむしろ後方へ倒れるようにして、槍使いのアップパーカットを避けた。

一回、二回と後転し、身を起こして息を整える令嬢へ、

「へえ。流石に、あの化け物小僧と一緒に冒険してるだけのことはあるな」

攻撃を二度も躲されたというのに、槍使いは余裕の表情。

「化け物なんかじゃありません！ 只人です！」

一方で、二度も攻撃を回避した貴族令嬢は、額よりじんわりと汗を浮かべていた。

白石の舞台上で対峙する二人を見て、観客はただ固唾を飲んだ。

初めは、ただのお祭り行事の一環だと思っていた。

だからこそ、皆手に手に食べ物や飲み物を持ち、談笑し、誰が優勝

するのか賭ける者さえいた。

だが、どうだ。

舞台上で展開された、僅かなやり取り。

それは、お遊びの範疇を越えている。しかし、殺し合いとまでは殺伐としていないが。

冒険者同士が、日々の冒険と依頼とで培ってきた経験と技量、そして体の動き。これを余すところなく、ぶつけ合っている。

これを見ての飲食や賭博が、何やら後ろめたいものであると、観客は思い始めていたのだ。

それは、袖に控えた他の選手とて同じ。

「あの野郎、槍なしでもあんな動きできたのかよ……」

驚愕に目を見張る銅等級冒険者の横で、

「ふむ。令嬢殿の身のこなしも、なかなかどうして……」

蜥蜴僧侶が、目を鋭く細め、友の動作を真似して顎を擦っている。

外套姿の二人は、何事か囁き合い、それと距離を置いた所では女武闘家が黙然と試合の様子を見守っている。

「やるなあ。二人とも」

オールラウンダーもまた、楽し気に舞台上へ視線を向けている。

どうも今日は、尻がむず痒い気がする。

……さて。

舞台上では、呼吸を整え終えた貴族令嬢が、

「よ、余裕のつもりですかー！」

槍使いへ怒鳴っていた。

「まさか」

辺境最強は、例の槍の矛先を向けるような構えを以て、答える。

「これは殺し合いじゃねえ。互いの技と流儀とをぶつけた闘いなんだ。あつぷあつぷの奴の尻を叩いて勝負を決めるのは、俺の流儀じゃないんでね」

言った途端、またしても槍使いが床を蹴った。

貴族令嬢、今度は構えもなしに、これを見据えている。

「か、頭！」

「ちよつと！ 防御くらしいときなさいよ！」

それぞれの一党で斥候を務める圍人と妖精弓手が、思わず立ち上がって叫んだ。

「諦めたか！」

槍使いが、令嬢の肩元へ狙いを定め、腕を伸ばす。

瞬間。

前に倒れるように身を屈めた貴族令嬢が、槍使いの腰元へ抱き着いた。

抱き着くや否や、

「ふんぬ！」

どこか可愛らしい気合声と共に、ずるずると槍使いの体を後方へ押しやる。場外へ押し出すつもりなのだ。

「くっ！ このっ！」

槍使いは貴族令嬢を振りほどこうとするのだが、これがどうしても離れない。

遂に、二人は舞台の端まで来た。

「いけっ！ そのまま落とせ！」

森人魔術師が、珍しく興奮気味に叫んだ。

……と。

「残念だったな」

槍使いが、笑った。

その言葉の意味を訝しみ、貴族令嬢の力が少しばかり緩む。

ふと、槍使いが後方に倒れた。

つられ、貴族令嬢が彼の体の上に来る。

いつのまにやら、彼女の腹部に槍使いの足裏がかけられていた。

「いかんっ！」

鉦人道士が目を見開く間に、

「そうらっ！」

場を揺るがすほどの大音声の後、槍使いが倒れ様に令嬢の体を投げ飛ばした。

ふわりと宙に舞った体をどうにか出来る芸当を、彼女は持ち合わせ

ていない。
どさり。

彼女の小さな尻が、平らな土についた。

『場外！』

審判が下す、無慈悲な判定。

己の力を利用されていたことを、貴族令嬢はここに知った。
悔しさが、途端に胸の内に溢れる。

大会に出場したのは、これまでの冒険を通して自分がどれだけ成長したかを見極めるため。

オールラウンダーに頼らずとも冒険できるだけの力量が、自分についたのかを確かめるため。

だのに、その機会があつさりと終わってしまった。

あまりに、呆気なく。
だが。

「ねえちゃん！ すごかったぞ」

真つ先に駆け寄って来る、小さな影。

オールラウンダーが、にんまりと笑っている。

彼の「すごかった」が、お世辞ではないことくらい分かっている。分かっているが、しかし。

「負けては、意味ないですけどね」

自嘲気味に、令嬢は笑みを浮かべる。

そこへ、

「最初の一発で、決めたと思ったんだがな」

舞台から降りた槍使いが、背後から声を掛けてきた。

「やっぱ、その化け物小僧と一緒に冒険していると、動きの凄さも伝染するのかな」

ぶすりともせず言う槍使いへ、

「……化け物じゃありません。只人です」

貴族令嬢もまた、槍使いを睨み返した。

……と。

同時に、二人が吹き出す。

「負けました。完敗です」

令嬢が差し伸べた手を、

「あいつの言葉を借りるわけじゃないけどよ」

槍使いはそう言って握り、言葉を続ける。

「如何なる時でも、常にあらゆる状況を想定して戦う。それが大事、らしいぜ」

打ち振るった手をやがて解き、槍使いは選手の控えの席へと戻る。

「ふう」

一息ついた令嬢は、

「ソンさん。頑張ってくださいね！」

これにオールラウンダーは、

「おう！」

拳を突き出して答えた。

其の三

白石の舞台上で対峙する相手を、

(はて、妙な……?)

蜥蜴僧侶が、訝しんだ目で見据えていた。

試合となっても外套を外さぬというのは、まあいい。

世の中には自身の外見を気にし、それによって並々ならぬ迫害を受ける者もいると聞く。恐らくは対戦相手も、その類の者なのだろう。

問題は、試合に向ける姿勢。

構えを全くしないというのは、先の貴族令嬢のように、敢えて相手を油断させて攻撃を誘い、それによる反撃を狙うつもりなのだろうか。それにしても、闘志というものを全く感じない。

生粋の強戦士であり、戦いの中に高揚を見出す蜥蜴僧侶にとって、相手の態度は、

(舐めている……)

としか思えぬのである。

そんな思いを見透かしたもののか、

「さあ。ぶ(遠慮なく)」

相手が、大手を払ってみせた。

「うぬ！」

その態度に対する返答か。はたまた怒声か。気合声を上げた蜥蜴僧侶が、のっしのっしと相手へ迫る。

外套は、依然として動こうとせぬ。

身を捻った蜥蜴僧侶は、ぶるんと尾を振った。

横薙ぎに払われたそれを、外套がひよろりと躲した。空へ、跳んだのである。

そのまま外套は、二回ほど空で回り、猫のような足取りで着地した。蜥蜴僧侶にとっては、想定内のことである。でなくば、どうして相手へ殺意を込めた一撃を送ることが出来ようか。殺すことが禁じられた、この闘いで。

先の一撃は、相手の出方を伺うための『脅し』に過ぎぬ。

その『脅し』に、相手は軽い身のこなしを以て応えた。
(なるほど。あのような態度をとるだけのことはある……)

そして、分かったことが一つ。

「お手前は、^{バットフット}獣人の類ではないかね？」

問うてみると、頭まで包んだ外套のてっぺん辺りが、ぴくりと揺れた。それこそが、蜥蜴僧侶の投げた問いに対する答え。

「よくお分かりで」

肯定しつつも、相手は外套を脱ぐことはしない。余程に、己の外見に複雑な思いを抱いているのだろう。

蜥蜴僧侶には、その気持ちが分からない。現に自分は、大きな蜥蜴が二足で歩いているという己の外見に、いささかの疑問も感じたことはないし、好奇の目で見られることは幾ばくかあったとはいえ、それに対して後ろめたさを感じたことはない。

しかし、それが相手の気持ちでないがしろにする言い訳とはならない。だから、

「その外套を脱げ」

とは言わなかった。

言わないが、そろそろ試合に対するやる気を見せて欲しいところ。

「そうやって、いつまでも逃げ回っている気かね？」

決して苛立ちを込めて言ったわけではないが、相手は蜥蜴僧侶が怒っていると思っただけらしい。

「失礼」

外套は浅く頭を下げるや、

「この舞台、半ばお祭り騒ぎで参加を申し出たものですから、まさかにあんな本気の洗礼を受けるとは思いませんでしたので……」

「お手前は、先の試合を見ていなかったのかね」

「見ていましたとも」

「ならば、この試合がどういうものかわかるはずだ。祭りの一環として開催されているが、闘い自体は祭りではない」

「なるほど」

「お分かりいただけましたか？」

「ええ。もちろん」

これで、ようやくと相手の真価が分かる。

蜥蜴僧侶がそう思った時だった。

外套が、くるりと踵を返した。

(……?)

警戒しつつ、その場を動くことなく蜥蜴僧侶は、相手の出方を伺う。

やがて、舞台端まで来た外套は、

「よっ」

ぴよこんと跳ね、なんと自ら場外に落ちたのである。

「なんと……」

流石に驚愕に目を見張る蜥蜴僧侶へ、こちらを振り向いた外套が、

「この闘いに参加される皆様の心意気というものを、しっかりと理解いたしました。私は、どうやら舞台に立つ資格の無い者らしい」

そう放つ言葉の中に、どうやら嫌味は含まれていないらしい。

こうして、第二回戦は呆気ない幕切れの元、蜥蜴僧侶の勝利に終わった。

これに納得できる蜥蜴僧侶ではないが、まさかに闘志の失せた相手へ詰め寄るわけにもいくまい。

そうしたところで、何も変わらないということ、蜥蜴僧侶本人が良く知っているからだ。

しかし、納まりつかぬ者がいた。

客席にいる、妖精弓手である。

「なによ、あれ！ 闘う気が無いなら、最初っから出てくるな、つての！」

知人が次の戦いへ駒を進めたというのに、胸から込み上げてくるのは喜びではなく、憤り。

彼女が期待したのは、蜥蜴僧侶が相手の力全てを凌駕した上での勝利であった。

まるで、勝ちを譲ってもらったような先の試合内容では、どうもすつきりしないのである。

「まあ、まあ。いいじゃねえか。次の闘いは、あの槍使い。まさかにあいつが自分から舞台へ落ちることはしないだろうさ」

「そう言う問題じゃなあい！」

あわや中指をおったてようとする妖精弓手を、観客席に加わった貴族令嬢を含め、女性陣がなんとか取り押さえようと必死であった。

其の四

冒険者としての等級差が、必ずしも勝敗を決する要因とはならない。

天下一武道会第三試合が、まさにそういった内容だった。

片や、筋骨隆々の逞しい肉体を持った銅等級の男。片や、鍛え抜かれたとはいえ、しなやかな四肢を持つ黒曜級の女武闘家。

会場にいた殆どの者が、銅等級の勝利を確信した。

だが、どうだ。

実際に試合が始まってみると、双方ともに、力の拮抗した試合展開をしてみせるではないか。

「つていつー！」

女武闘家の放った鋭い突きを、

「くっー！」

舌打ち混じりに躲しつつ、銅等級もまた、拳を突き出す。

これを、女武闘家も拳を以て打ち返した。

打ち合う拳が弾けた瞬間、二人とも俊敏に後方へ跳んで距離を置く。

(つたく。とんでもねえガキに育ちやがって……)

銅等級が、心の内で呟いた。

もう少し、あっさりと試合の片が付くと思っていた。

だのに、この有様はなんだ。

仮にも銅等級である自分が、小娘に……それも、黒曜級冒険者を相手に互角の戦いを演じているとは。

これはなにも、銅等級が位に反して弱いとか、そういうわけではなかった。

これが、戦場におけるなりふり構わない殺し合いであつたなら、試合内容も違っていただろう。そちらの経験ならば、銅等級の方が遥かに上を行っている。

だが、これは武道大会だ。

武器、防具禁止。頼りになるは、己の体だけ。

銅等級も、徒手空拳の腕がからつきしというわけではないのだが、何分にも相手の方が、技術が上回っている。

加えて銅等級は、借金返済の条件として、ここ暫くは白磁級冒険者が請けるような依頼ばかりをこなしてきた。

戦いらしい戦いと言え、下水道にいる巨大鼠か、ゴブリン程度。それらを半ば作業的に屠っていたものだから、彼の戦闘感覚が大幅に鈍ってしまったのだ。

対して女武道家は、

「日々、修業」

という亡父の言葉を絶えず胸に秘めて冒険に挑んでいた。

例え相手が鼠だろうと小鬼だろうと。決して気を緩めることなく、一撃一撃を渾身の力を込めて放つ。

依頼のない日は、剣士や女魔術師に手伝ってもらって、独自の鍛錬に明け暮れた。

水の街から帰って来たオールラウンダーが、何やら鋼鉄の亀の甲羅を背負って依頼をこなすようになったのを見た時は、

「私も……！」

なけなしの金を払って、ギルド一区画にある武具屋の店主である翁に頼み込み、同じ商品を作ってもらったりもした。

果たして彼女は、見てくれも気にせず、小鬼や鼠相手の依頼時以外は、常時亀の甲羅を背負っての生活を送っていたのである。

その成果が、今惜しみなく発揮されている。

鋭い手の突きが、銅等級の頬を掠めた。

しかし彼は、焦るでも苛立つでもなく、

(どうしたもんかな……)

思考を巡らせ、今一度女武闘家から距離をとった。

銅等級が息を切らせているのに対し、女武闘家はうつすらと汗をかいてはいるものの、呼吸は整っていた。

このまま徒に時を稼いだところで、待っているのは敗北。

銅等級として。彼女を率いている一党の頭として。負けるわけにはいかなかった。

そんな極限状態で、彼は奇策を思いつく。
にやり、と口角を上げた銅等級は、後ろ手に腰元を触れる仕草をした。

訝しむ女武闘家。

その様子を確認した銅等級が、何かを投げ打った。

いや、投げ打った素振りをしたただけだ。

試合前には、ギルド職員によって嚴重な身体調査が行われている。
会場に武器を持ち込むことなど、土台無理な芸当であった。

だが……。

「!?」

やはり、そこは格闘家としての経験より、冒険者としての経験が
勝った故であろうか。

何か得体の知れないものを投げられた。女武闘家はそう判断し、咄
嗟に左手へ跳んだ。

これを見た銅等級は、

(今だー！)

床を蹴り、女武闘家へ肉薄する。

着地したばかりの女武闘家は、隙だらけ。一気に畳みかければ、場
外へ……。

勝利を確信して突き出した銅等級の拳が……半透明となった女武
闘家の体をすり抜け、空を切った。

「なっ……」

驚愕に目を見開いた銅等級が、背後から気配を感じて咄嗟に振り向
いた。

そこへ、

「せいっー!」

身を屈めていた女武闘家が、飛び上がりざまに拳を突き上げた。
拳は見事に銅等級の顎下を捉え、彼の体を場外に吹き飛ばす。

暫しの静寂。

それを破ったのは、

『じよ、場外!』

司会である監督官の一声。

瞬間、わっと会場が盛り上がる。

当の女武闘家は、

「で、できた……」

何やら力の抜けた様子で、へなへたと舞台へ崩れ落ちてしまった。

そこへ、オールラウンダーが駆け付けてきて、

「おめえ、いまのって残像拳だろ？」

目を輝かせて問うてきた。

女武闘家は、にんまりと表情を綻ばせて、

「えへへ」

肯定を示す笑いを一つ。

「すげえ！ オラ、一回つきりしか教えてねえのに！」

「い、いやあ……それほどでも……」

照れを隠せず戸惑う女武闘家。これを離れた所で見ていた銅等級

は、

「全く……」

ぼやきつつも、どこか嬉し気に頬を緩めた。

其の五

午前の部の最終戦である第四試合は、少しばかり朗らかな雰囲気にも包まれて開始された。

なにしろ拳を交えるのは、子供ほどの背丈をした冒険者二人。

何も知らない観光目的の冒険者や、『冒険』におけるオールラウンダーの一面を知らない街の住人からすれば、なんとも微笑ましい光景であることだろう。

かくして、

『試合開始ー』

監督官によって切られた、闘いの火蓋。

それと同時に動き出したのは、小柄な外套冒険者であった。

彼は瞬時にオールラウンダーの懐へ飛び込むや、ばさりと布をはためかせ、擦り切れたブーツを以て蹴撃を繰り返してきた。

元より、これで慌てるようなオールラウンダーではない。

彼はむしろ、入れ込まれた蹴りを脇に挟むと

「それっ」

二度、三度と円を描き、相手を振り回す。

しかし感心なことに外套冒険者は、

「ちっ」

舌打ち一つをするや、身を捻り、もう片方の足でオールラウンダーの顔面を蹴り込んだ。

予期せぬ一撃だったのだろう。オールラウンダーの手から、足が離れる。

拘束を解かれた外套は、俊敏な動きで後方へと回り跳んだ。

跳んだのはいいが、着地するや否や、呻き声をあげてしゃがみ込み、足を庇う。

なんと硬いオールラウンダーの顔面か。まるで、鉄の塊を蹴ったような感覚。

だが、闘いにおいてこれほどに大きな隙もあるまい。まして、オールラウンダーであればなおさら。

気配に気づいて外套が顔を上げた時、すでにオールラウンダーは目前にいて、じつとこちらを見下ろしていた。

その余裕綽々たる態度が、外套の神経を逆なでしたものらしい。物言わず、外套は拳を突き出してくる。

が、しかし。

拳は、虚空を突いたのみ。

オールラウンダーの体が、半透明になっている。

先の試合で女の武闘家が見せた、妙な術。確か「ザンゾウケン」とか言っていたが……。

ならばと、外套は脇目も振らず前方へ駆けた。

目くらましを以て背後からの奇襲。実に古典的。

現に先ほどの闘いでも、あの女武闘家は相手の背後に回って、見事に勝利を決めた。

同じ轍を踏んでなるものか。

十分に走ったところで、外套は振り向いた。のだが……。

「……？」

オールラウンダーの姿が、どこにもない。

見渡す限り、舞台の上から彼の姿が消えてしまっている。

(どこにいった……？)

きよろきよろと辺りを見回していると、

「……だよ」

空から、声が聞こえた。

ふと見上げると、日に重なったオールラウンダーの姿。

外套は驚きこそしたが、すぐに安堵した。

むしろ好都合。どうせ、空中では自由に身動きも取れない。降りてくるタイミングを見計らって、場外への一撃を叩き込めば……。

などと考えを巡らせている時であった。

降下中のオールラウンダーが、何やら腰元へ手を当て、

「波っー」

叫ぶと同時に、両腕を前へ突き出した。

途端、青白い光が尾を引いて、外套へ迫る。

「なっ……」

驚愕しつつ、それでも跳び退つて躲そうとする辺り、どうやらこやつも並みの冒険者とはいかないらしい。

……が。

光が白石へ着弾すると、凄まじい爆風が舞台を駆けた。

いくら俊敏な動きを得意とする外套も……いや、だからこそ。その爆風に抗う術もなく、ふわりと両足が宙に浮き、かと思えばあっさり舞台外へ体を運ばれる。

『場外！』

監督官が判定を下すと同時に、外套の頭巾が、はらりと下りた。

見えたのは、鋭い耳と浅黒い肌。あどけない顔立ち。

ダーケル

闇人か。観客、選手問わず、その正体を巡ってざわめきが走る。

一方で、きよとんと相手を見つめているオールラウンダー。

……と。

『あつ、あなたは……！』

監督官が、目を見開き、外套冒険者を指した。

『あなた……いつかの昇級審査で不正を暴かれた圃人の……』

その言葉に外套が……いや、圃人が忌々し気に舌を打った。

それは、オールラウンダー一行が、かの邪教使徒による偽の依頼を請けて水の街へ向かった日のことであるが……。

辺境の街の冒険者ギルドにおいて、とある一党の昇級審査がなされていた。

武僧に重戦士、妖術使いと圃人の斥候。

彼らはいずれも冒険者等級第八位の鋼鉄級で、七位の青玉級へ昇格の予定であった。……ただ一人を除いて。

その一人というのが、圃人の斥候。今オールラウンダーと試合をして、場外負けをした者である。

昇格できなかった理由は、ただ一つ。冒険において探索した遺跡で財を見つけたにもかかわらず、それをギルドへ報告することなく、全て自らのものにしてしまったからだ。

無論の事に、圃人は仲間へも宝のことは告げていなかった。

この裏切り行為は、冒険者としての信頼を欠く行為だ。信頼を欠いた冒険者は、ただの無頼漢に過ぎぬ。

しかし、そんな彼へ組合が下した処分は、白磁等級への降格と、辺境の街における冒険活動の禁止。

冒険者としての資格そのものを取り上げなかったのは、初犯ということと、有能さを秘めた冒険者であるという、組合の期待もあつたらこそ。

だが、彼はそんな組合の思いなど露知らず、まして自身の犯した違反を棚に上げ、これを言及したギルド職員と、審査に立ち会った上級冒険者へ並々ならぬ殺気を放っていた。

この昇級審査には、《看破》センス・レイを以て真実を見極めるために監督官が同席した他、受付嬢と、彼女直々の指名でゴブリンスレイヤーの姿もあつた。

不正の摘発以来、この街に舞い戻ったものか。それとも当初から居残っていたものか。

どちらにせよ、武道大会へ出場した目的は、

(おおかた……審査に立ち会ったギルド職員と、上級冒険者への復讐……)

監督官は、そのように推察した。

当初、この大会の審判と司会は、受付嬢がすることになっていた。

これをギルドで偶然に聞きつけ、圃人は参加を申し出たに違いない。

参加手続きの際、彼は無言で鋼鉄の認識票を差し出してきたが、今にして思えば、あれはどこぞの冒険で息絶えた冒険者の亡骸から拝借したものだったのだろう。

外套姿のままこの街で活動するには冒険者という身分が最も都合がよく、その身分を証明するものが必要となってくる。しかし、彼はすでに辺境の街における活動を禁じられた身。だからこそ、他者の認識票が必要だったわけだ。

果たして彼は、武道大会へ出場を果たした。

参加選手が皆無手で、しかも収穫祭によって浮足立っているからこ

そ、忍ぶにしても公にしても、ギルド職員の一人や二人を殺すことなど、容易だと考えたのだろうか。

しかし、その野望も潰えた。

監督官の告発によって、観客も選手たちも（約一名を除いて）、皆警戒の目で圃人斥候を見ている。

ご丁寧に、彼も規則に則って武器を持たなかったのがいけなかった。もはや、抵抗する術もない。

「くそっ！」

悔し気に叫びつつ、彼は槍使いと蜥蜴僧侶によって取り押さえられ、縄で嚴重に縛られたのち、どこぞかへ連行されていく。

かくして、準決勝戦へと駒を進めたオールラウンダー。

彼は呆気に取られ、何が何やらという様子。

観客席も、いまいちすつきりとしらない中で、

「おかしいわね……」

妖精弓手が呟いた。

圃人斥候と共にいた、もう片方の外套の姿が、いつの間にか会場から消えているのだ。

其の一

無事に準決勝戦へ進出する選手も決まり、さて昼食と休憩を兼ねたインターバルへ移ろうかという時に、

「大会の中止を検討した方が良いのでは？」

組合の方で、そのような提案が浮かび上がった。

尤もな事である。

先の第四試合において、辺境の街を追われたはずの圃人斥候が、自身の審査に立ち会ったギルド職員と冒険者の復讐を企てていたことが判明したのだ。

とするならば、圃人斥候と共にいたもう一方の外套冒険者も、同じような思惑をもって動いているとみて良い。

しかし、奴めはすでに会場から姿を消し、依然として行方が掴めていない。

「ゴクウ。あいつの臭い、分からないの？」

こちらは貴族令嬢の一党で、やましいところなど一つもない圃人野伏がオールラウンダーへ尋ねてみたが、

「そんなに気にしてなかったからなあ……」

ということ、結局は手がかりを掴めなかった。

ところが、である。

「いえ。大会は続けましょう」

そう言い出たのは、なんと復讐対象に含まれている監督官本人であった。

彼女は、午後の闘いへ駒を進めた四人の選手をぐるりと見た後で、「彼らの目的の一人が私なら、ここで大会を進行していれば必ず戻ってくるはず。そこを捕えましょう」

「しかし、奴めは我らの顔を知っているが、我らは奴めの顔を知らぬ。奇襲の優位性はあちらにありますぞ。相手もまさか、拳一つで乗り込んでくるわけでもあるまいに……」

蜥蜴僧侶が顎を撫しつつ言うのへ、

「それなら、お任せくださいー！」

張り切って申し出たのは、令嬢一党の只人僧侶。

「私の《プロテクション聖壁》なら、遠くからの攻撃でもお守りできます」

「……なるほど。あえて遠方からの攻撃を誘発し、その軌道から位置を割り出す……」

ふむ。一息ついた蜥蜴僧侶は、ちらと監督官へ視線を向け、

「危険な目に遭わせてしまいますが、信用してくださいますかな？」

問うた。

監督官はにんまりとして、

「勿論。冒険者さんたちは信頼が商売道具。それを信じないで、ギルドの職員なんて務まりません」

堂々と答えた。

かくして、方向性は決まった。

午後からの試合も予定通りに開催し、その上で奇襲者をおびき寄せ

る。だが、何も相手の狙いは監督官だけではあるまい。

圃人斥候の審査には、受付嬢とゴブリンスレイヤーも立ち会っている。

「それはこっちに任せて」

無い胸を張って申し出たのは、妖精弓手。

彼女は長くて鋭い耳をひよこひよここと上下させ、

「オルクボルグと受付の子は、午後からデートすることになってるの。見張るなら丁度いいわ」

何やら楽しそうに、鼻息を一つして見せた。

横にいた鉾人道士が、

「お前。あいつらの逢引の様子を見たいだけなんじゃねえのか？」

呆れた目つきで言う。

これへ妖精弓手は、

「何よ。文句あるの？ こっちは命を守ってやるのよ。デートの様子くらい見たって罰は当たらないわよ」

むしろ開き直って言ったものである。

しかし、流石に妖精弓手と鉾人道士だけでは手が足りぬ。

そこで、ゴブリンスレイヤーと受付嬢の秘かなお守りに、令嬢一党の森人魔術師と、女武闘家の同郷である若き剣士も参加することになった。

因みに言うと、剣士一党の女魔術師は会場に残つての警戒と護衛役。

「私だって、補助魔法の一つや二つ持つてるのよ」

彼女は眼鏡をくいと上げ、得意げに言ったものである。

「では、昼食と休憩を挟んで午後の部へ……と言いたるところなんです……」

監督官は、ちらと舞台上を見やった。

白石を敷き詰めた床の一部が、見事に碎けて欠損している。

先の試合でオールラウンダーが放った「かめはめ波」による被害だ。

「舞台の修復に時間がかかりそうなので、ちよつと長めに休憩を取りましようか」

其の二

壊れた武舞台を修復するのは、鉦人道士の仕事となった。

「なあに。腕利きの大工の様にはいかんがな。元に戻すくらいなら、訳もねえ事さ」

そういうことらしい。

だが、舞台の修繕を待った上でゴブリンスレイヤーと受付嬢の護衛には行けないということで、妖精弓手は代わりに圃人野伏を連れていくことにした。

「二党の斥候役が二人もいるんだもの。人混みに紛れて奇襲しようにも、上手くいかないわよ」

と、妖精弓手は自信満々たる態度で言ったものである。

圃人野伏もまた、

「同族のせいで、圃人全体に悪い印象を持たれても困るからね。ここは一丁、名誉挽回、汚名返上のために働いちゃうよ」

にんまりと笑い、腕を捲る仕草を見せた。

勿論の事だが、この快活なる圃人の少女を疑いの目で見る者など、この場にはいない。

かといって、同情や憐みの目を向ける者もない。

ただただ、『頼もしい圃人の斥候』なのである。

さて……

妖精弓手たちが会場を離れると、後に残るは舞台の修復に励む鉦人道士の他に、ギルドの監督官と、その護衛役である四人の只人。すなわち僧侶と令嬢、魔術師に魔女。そして、準決勝へと駒を進めた四人の戦士たち。

「小鬼殺し殿たちは、すでに人混みの中かと思われる故に仕方もないが、こちらはうかうかと祭りの渦中に飛び込むわけにも参りませんまい。ちと寂しいが、この会場で昼食としましょうか」

蜥蜴僧侶の提案に反対意見はなかったが、

「それでも、年に一度の収穫祭だ。成人迎えたばかりのガキどもは祭り見物に行ってもいいんだぜ」

槍使いが、一応は気を利かせたつもりで言ってみた。

これに、女魔術師と女武闘家は「子ども扱いするな」と膨れてみせたものだが、

「オラ、どんなメシがあるかみてくる」

オールラウンダーだけは、硬貨の詰まった革袋を貴族令嬢から受け取るや、出店の並ぶ街の中へと繰り出していった。

冒険者。街の住民。祭り目的の観光客。通りすがりの冒険者。多種多様な人々が行き交う街の中に、多種多様な食べ物匂いが漂っている。

さて、どれから手をつけようか。

迷い、きよろきよろと出店を見比べていたオールラウンダーの視線に、見知った人影。

「あつ。牧場のねえちゃん！」

声を掛けて駆け寄ってみると、果たして人影……牛飼娘は、

「あつ。オールラウンダーさん！」

弾けんばかりの笑顔を以て、彼を迎えた。

「なんだ。今日はハデな服きてるんだな」

オールラウンダーが言うように、牛飼娘はいつもの作業着ではなく、鮮やかな青に染められたドレスと、大きなリボンのついた鍔の広い帽子という、ともすればどこかの令嬢のような出で立ちであった。

「そういうオールラウンダーさんは、いつもの格好なんだね」

「うん。武道大会があるからな」

「ブドウタイカイ……？」

「うん。天下一武道会。天下で一番つええやつをきめる大会」

「へえ」

自然に、並んで歩きながら言葉を交わす二人。

そこへ、竜の鳴き声の如きオールラウンダーの腹の音。

「いけね。昼メシ食いにきたんだった」

すっかりへこんだ腹を擦りながらオールラウンダーが言うのへ、くすりと笑った牛飼娘は、

「それだったら、私が美味しいお店いろいろ教えてあげるよ」

そう言つて、ぐいと少年の手を引く。

少年もまた、遠慮することなく、

「サンキュー」

と応えた。

(彼だつて、今頃は受付さんと一緒だもんね。……それに、これはデー
トじゃないし。多分)

牛飼娘は、心の中でそんなことを呟き、茶目つ気たつぷりに舌を出
した。

清楚なドレス姿の娘と、それに手を引かれる道着姿の少年。果たし
て彼らの姿が、他の者たちからどう映つたものか。

ともかく二人は、様々な店を見て廻つた。

串に刺した林檎へ、水飴を絡めた菓子。

川魚を塩焼きにしたもの。

店主曰く、「遙か遠方より取り寄せた」という、不思議な形と模様を
した果実。

どこかの飯屋の親仁が、「時間内に完食できたらお代無用」とする豚
の姿焼きも、オールラウンダーにかかれれば「あつ……」と言う間に胃
袋の中。

「ほんと、よく食べるね」

顔を綻ばせる牛飼娘へ、

「へへ」

オールラウンダーは、頬に肉の欠片をつけたまま、笑い返す。

さて、次はどの店を見ようか。

『彼』との祭り見物が終わってから、少しずつ晴れていった胸のもや
もや。

笑顔戻りつつあつた牛飼娘の悲鳴が、賑わう街中へ木霊したのは、
あまりにも突然のことであつた。

其の三

彼にしてみれば、圍人の胸中で渦巻く復讐心などには毛頭興味が無かった。

肝心なのは、お祭り気分で浮かれている冒険者たちの足元を掬い、混乱に陥らせることである。

尤も、それは彼自身が望んだことではない。

彼や、圍人をこちら側へと巻き込んだ、ある男の命令であった。

その男にどのような思惑があるのか。それすら、彼の知ったことではない。

彼はただ、暴れることが出来ればそれでよかったのだ。

戦い、斃す。己の死を悟った相手が見せる面の、何とも情けないこと。

それを見る度に彼は、得も言われぬ高揚感に満たされた。

組合が主催した「武道会」とやらに参加したのも、そのためだ。

試合の中で唐突に相手を殺し、会場をどよめかせた上で残りの者たちを一掃する。それまで浮足立っていた街の中が、驚愕と恐怖の悲鳴で埋め尽くされるわけだ。

……だが。

初戦で対峙した蜥蜴人は、なかなかの実力者であった。奴を殺すには、少しばかり骨が折れる。

なので彼は、敢えて自ら試合に負け、こっそりと会場から姿を消した。

あの蜥蜴の次の相手は、聞けば「辺境最強」と評されているらしい実力者。

蜥蜴も辺境最強も、銀等級らしい。

そんな二人がぶつかり合えば、試合終わりには双方が疲弊すること間違いなし。そこを狙うのだ。

一気に銀等級の冒険者が二人も殺されたとあれば、会場は混乱必至。周囲が慌てふためけば慌てふためくほど、こちらの仕事はやりやすくなる。

あとは圍人と協力して、残りの参加者と観客を殺すだけ。

圍人を除けば、後の選手はむさ苦しい中年男と、ガキが二人のみ。蜥蜴との試合直後に会場を離れたので奴らの戦いぶりは見えていないが、外見だけでもおおよそその判断は出来る。大した敵じゃない。(ともかく……動くなら午後からだ)

そこで彼は、他の者たちに倣って、午後まで祭りを楽しむことにした。

今のうちにたらふく美味しい物を喰っておこう。あの男の計画通りに事が運べば、出店も何もかもが潰されてしまうのだから。

金ならあるし、どうせ後で全て自分たちのものになるのだ。

美味しい物を喰い、飲み、浮かれた者たちの間抜け面を見て、胸を昂らせる。

晴れやかな奴らの表情が、もうすぐくしゃくしゃに歪むのかと思うと、我慢が出来なかった。

……それにしても、妙だ。圍人の試合も、もう終わった頃だろう。街の広場で合流する手はずなのだが、何をやっているのか。

と、その時である。

彼の視線に止まった、二人組。

一人は、気品を感じさせるドレスに身を纏った娘。こちらは知らない。

だが、その娘が手を引いている少年に、彼は見覚えがあった。

あれは確か……圍人と闘うはずの奴だ。

『万能者』などと呼ばれている、黒曜の冒険者。渾名こそ大仰だが、オールラウンダー大方、雑用を何でもこなすので街の住民から有難がられているだけなのだろう。つまるところは、使い走りというわけだ。

瞬間、彼の口角が上がった。

手を引く娘は、万能者の姉とみた。

二人とも、やはり祭りの雰囲気_ニに酔いしれて、楽し気に微笑み合っている。

もしも。もしも今ここで、万能者を殺したとすれば、どうなるだろう。

狩獵豹チータイの特性を持つ獣人の彼ならば、この人混みの中でオールラウンダーに迫り、その息の根を止めることなどわけはない。

唐突に殺された弟を目にし、姉はどういった反応をするだろうか。驚きの余りに言葉も発せないだろうか。それとも、甲高い悲鳴を上げるものか。

そんな姉の息の根も、やはり止める。

広間にいる者も、これを見て恐怖するに違いない。

あの男は、贅は残しておけと言っていたけれども、街を混乱させるためには、二、三の死者だけでは物足りぬ。

混乱に乗じて、更に殺しても問題なからう。

決意した彼は、右腕を飾る腕輪を撫でた。

腕輪には、獣の牙による装飾が施されている。

その牙の一本を強引に引きちぎり、彼は何事か囁いた。

牙が、見る見るうちに姿を変えて、一振りの曲剣となる。

周囲を行き交う者たちが、少しばかり異な目を以て彼を見た。

だが、彼は気にすることなく、ぐつと身を屈めたかと思うや、やがて勢いよく跳躍してみせた。

その体が、瞬時にオールラウンダーへ迫る。

「さあ、苦しめ」

ぼそりと呟いた彼が、少年の脳天へと、曲剣を振り下ろした。

其の四

いかに力を込めようと、曲剣がそれ以上の進行を拒んでいる。外套の奥で獣人は青筋を浮かべ、牙をむき出しにした。

目の前にいる少年は、その小さな両掌で白刃を挟み、見事に受け止めている。

……と。

少年が、くらりと両掌を右へ傾けるや、小枝のように曲剣が折れてしまったではないか。

「なっ……い！」

驚愕に目を見開く獣人の腹へ、容赦なく少年の蹴りが決まった。

それは、およそ子供のような背丈をした少年が放ったとは思えぬ威力を秘めていた。

臓腑の全てを槌で殴られたような痛みにも、思わず獣人は蹲る。

この姿を見下ろしながら、

「おめえ、あのちっこい奴の仲間だろ！」

少年が叫んだ。

獣人は、答えぬ。

答えぬがしかし、段々と痛みの引いてきた獣人は、さり気なく左手首にはめた腕輪へと手を伸ばし、これを飾る牙のアクセサリーを引きちぎった。

瞬間、身を上げた獣人が、

「死ねっ！」

牙が変化した曲剣を、掬い上げるようにして放ってきたものだが……。

「よっ」

少年はひらりと後方へ回り跳んで、難なく一閃を躲す。躲した後で少年は、

「おめえ、ちよつと前にオラがやつつけたイヤな奴にそっくりだ」

獣人を睨み据えて言うや、素早く構えをとった。

獣人は、いよいよ焦った。

真つ向からの勝負も、あの化け物じみた力の前には無意味。かといつて、二度に渡る不意打ちも失敗に終わった。

(なにか……なにか他に手立ては……)

ちらと横手を見た獣人の目に、青いドレス姿の娘が映った。

瞬間、決意が固まった。

「くそっ！」

叫びつつ、曲剣を少年へ投げ打った。

少年は、頭を左へ傾け、事も無げに投剣を躲す。

その刹那、獣人は素早く娘へ迫り、背後に回ると、そのか細い首へ腕をかけ、

「動くなー！」

叫んだ。

「ねえちゃん！」

少年が、やっと焦りの表情を見せた。

形勢逆転だ。

獣人は、娘の首を腕で絞めたまま、再び腕輪の装飾を剣へと変えた。これが、最後の一振り。まさか、ここまで消費するとは思わなんだ。

「動くなよ。動けば、この娘の首が吹き飛ぶー！」

忠告しつつ、獣人は少年へにじり寄る。

彼の頭の中に、もはや逃亡の選択肢はない。

人質があれば、少年はこちらの要求に従い、棒立ちにならざるを得ない。そこへ、今度こそ確実に剣を叩き込む。叩き込んだ後で、やはり娘も斬り殺す。後は、周囲で歯噛みしながらこの様子を見物している者たちを、順々に殺していくのだ。

妄想に酔いしれ、また一步。悔しさに塗れた少年への一太刀まで、もう少し……だが。

「うっ……」

突如として、背中に強烈な衝撃を受けた獣人は、思わず手の力を緩めた。

曲剣が、そしてドレス姿の娘が、獣人の腕を離れる。

それでも懸命なことに、倒れまいと足を踏ん張った獣人が、血走っ

た目で背後を見た。

「おめえ、ほんとに悪いやつだな」

呆れたような視線を向ける少年の姿。

「ば、馬鹿な……」

確かに少年は、前方にいたはず……。

今一度、視線を前に向けてみると、やはりそこには山吹色の道着を来た少年の輪郭がある。あったのだが……。

「あつ……」

ぼんやりと透けたその輪郭が、やがて解けて消えてしまった。

蜥蜴僧侶との戦いが終わってすぐに会場を後にした獣人は、少年……もといオールラウンダーの技の一つである『残像拳』を目にしてはいなかったのである。

「ち、畜生……」

悔しさと共に、体に張っていた力が抜け、ぐらりと獣人が倒れた。気を失ったのである。

これを見届けた後で、オールラウンダーは娘……すなわち牛飼娘に駆け寄り、

「ねえちゃん、大丈夫かー」

声を掛けた。

少しばかり涙の漏れた彼女は、これを腕で拭いつつ、

「だ、大丈夫。ありがとね」

健気に笑って見せる。

しかし、あまり安心は出来なかったのだろう。オールラウンダーは天へ向けて、

「筋斗雲ー」
きんとうん

と叫んだ。

すると、空の彼方から街の広場へ、金色の雲が降りてきた。

周囲のやじ馬が驚きの声を上げるのにも気にせず、

「ねえちゃん。これに乗ってみろよ」

オールラウンダーが、牛飼娘へ促した。

不思議な雲を訝しみつつ、

「う、うん……」

頷いた彼女が、

「し、失礼します……」

と断りを入れ、雲に足を乗せる。

ふわりとした柔らかな感触が伝わった。

思い切って彼女は、

「えいっ」

雲に全身を乗せてみる。

ふわふわと浮遊した雲は、しっかりと彼女の体を乗せていた。

「やったな！」

オールラウンダーは笑顔でそう言った後で、倒れ伏している外套の襲撃者を軽々と担ぎ上げ、

「オラはこのまま会場までもどるけど、ねえちゃんは どうする？」

問われた牛飼娘は、暫し逡巡した後、

「私、家に帰るよ」

と答えた。

いまいち状況が把握できないが、これ以上少年と行動を共にしても、却って足手まといになりそうだ。

そんなことになれば、『彼』にも心配をかけることになる。それだけは避けたかった。

果たしてオールラウンダーは、

「わかった」

頷いた後で、

「筋斗雲。ねえちゃんのこと、よろしくな」

雲へと語り掛け、その頭……と思わしき部分を撫でてやる。

これに応えたものか。雲がふわりと上昇するや、風をきって空を駆けた。

「わわっ！」

初めこそ、その速度に戸惑った牛飼娘であったが、何やら馬にまたがって広野を駆ける心持となり、すっかり眼下に広がる光景を楽しむまでになった。

其の一

オールラウンダーによって試合会場まで引きずられた獣人襲撃者は、監督官や蜥蜴僧侶たちの厳しい尋問を受けることになった。なにしろこちらには《センス・ライ看破》の奇跡がある。如何なる嘘も通用しない。

かくして得られた情報は、

「獣人や圍人は、夕暮れ時を見計らって街中で騒ぎを起こすよう、ある男に命じられたにすぎない」

ということであった。

「どうやら、逆恨みの詰まらぬ復讐劇だけでは終わりそうにありませんな。街の騒ぎに乗じて、男が何かを仕掛けるだろうというのは明白……」

蜥蜴僧侶が舌をチロチロと出し入れする横で、

「こいつらに街で騒げと喚けた男……その居場所が分かればなあ。事を起こす前に叩けるんだが……」

じろり。鉞人道士に目を向けられ、獣人襲撃者はバツが悪そうに首を垂れる。

獣人たちもまた、『ある男』の詳しい所在を知らなかったのだ。

彼らは決まって、辺境の街にある酒場を集合場所して収穫祭への算段を話し合っており、

「現地集合、現地解散」

が常であった。

「圃人は自分の復讐が果たせればそれでよく、獣人もまた暴れる場が与えられるのであればそれでいい。打ち合わせの後、わざわざに男の後をつけようなどと、二人は考えもしなかったのだ。」

「その男とやらも、それが分かっていたからこいつらに話を持ち掛けたのだろうかよ」

鉱人道士が、つまらなそうに鼻を鳴らす。

つまりは、二人が騒動を起こしたのちに捕縛されることも織り込み済みで、だからこそ男は自分に関する詳細を二人へ明かしていなかったのだ。

男の所在も、真の目的も不明。あとはもう、男が騒ぎを起こすように指定した夕暮れ時を待って、様子を見るか……。いや、そんな悠長な態度でいいものか。

なかなか意見のまとまりが得られない中で、

「しっかしよ。敵さんも、どうしてこの街を標的にしたものかね。まあ冒険者の組合があつて、それなりに冒険者もいるっちゃいるが……。いつそ剣の乙女がいる街へ襲撃をかけた方が、よっぽど自慢にならねえか?」

鉱人道士が疑問を口にした。

それへ蜥蜴僧侶が、

「確かに。あの街の乙女は魔神を打ち倒した一党の一人。言わば英雄とも呼べる存在。それを討ち取ったとあらば、邪なる者にとっては名誉ともなりましような」

と頷く。

この時、貴族令嬢の耳がぴくりと揺れた。

(劍の乙女……魔神……)

彼女の脳裏に、水の街での激闘の記憶が過る。

酒場の店主やその常連を騙った邪教の使徒たち。彼らは、崇拜する魔神を斃した劍の乙女へ復讐すべく、そして魔神を呼び寄せるべく、秘かに活動していた。

小鬼どもを操って街の娘たちを攫わせ、魔神復活の贄に……。

そこまで思い起こして、貴族令嬢は「はっ……」と気が付いた。

この様子を察知した只人僧侶が、

「どうしました……？」

心配そうに問いかけるのへ、

「もしかして相手は……この街の人達を贄として、魔神の復活を企んでいるのでは……？」

貴族令嬢が、呟くように言った。

これを聞き、殆どの者は表情を強張らせたが、しかしゆっくりと頷き合い、

「なるほどなあ……」

鉦人道士は、その白くて長い顎鬚を撫しつつ舌を打った。

「収穫祭ともなれば、他方から観光のための旅行者や冒険者も集まる。魔神を復活させるための供物としては、丁度いいかもしれない」

「祭りの雰囲気呑まれ、皆は浮足立っておりましょうにな。奇襲を受ければ、それだけ迎撃の対応も遅れるというもの」

蜥蜴僧侶もまた、慎重に頷く。

そこへ女魔術師が、

「でも、いったいどうやって街を襲うつもりなのかしら……?」

仲間である女格闘家を見て、尋ねるように言うのへ、

「この間は、邪教の使徒がゴブリンを尖兵として贄を集めていました
が……」

貴族令嬢が呟いた。

すると、

「今回も、同じ手口かもしれませんよ」

腕を組んで逡巡していた監督官が、一同を見渡しつつ言葉を放つた。

彼女は次いで、

「収穫祭の前ですけど、ゴブリンスレイヤーさんが言ってたんです。
最近はゴブリン退治の依頼が全くないのが気に入らない、って」

でも、と監督官は言葉を繋げ、

「よくよく考えてみれば、他の種族から物を奪って、女性を攫うような
ゴブリンが全く活動しない、というのはあり得るんでしょうか?」

と、問いを投げかけた。

その場にいる皆が、首を横に振る。

ゴブリンに雌の個体は存在せず、また「他者から奪うのが手っ取り
早い」という信条の奴らに、物を生産するという意識が芽生えるとは
到底思えぬ。

では、ゴブリンどもは今どうしているのだろうか。

「誰かが、ゴブリンたちへ物資を提供している……ってわけか？」

槍使いが呟いた言葉に、監督官は「恐らく」と言いつつ頷く。

では、その『誰か』とは何者か。

場にいた殆どの者の予想が、一つになる。

「その誰かさんが、この街で騒ぎを起こすように囁けた奴と同じってことか！」

飽くまでも推理の範疇を出ないが、可能性の一つとしては充分。

だが、肝心の『誰かさん』の居場所が分からぬ。

……と、鉦人道士はなんとなしに獣人襲撃者を見て、

「そう言えば……」

と呟いた。

「こいつら、武道大会へ出場する時に認識票を出してたよな？」

鉦人道士の確認に、蜥蜴僧侶がしっかりと頷く。外套姿の二人が武道大会への参加を申し出る時、彼らも貴族令嬢一党も同じ場所にて、その一部始終を見ていたのだから間違いない。

次いで鉦人道士は、

「あの圃人、審査で不正を暴かれてこの街での活動を禁じられたんだよな？」

監督官へ訊く。

やはり審査の場に同席していた監督官も、はつきりと頷いた。

これを見た鉦人道士が、

「あの圃人が出した認識票……まさかには本人のではありません。そんなことすりゃ、てめえの素性がバレて復讐も出来なくなっちゃう」「ともすると……あの認識票は偽物……？」

蜥蜴僧侶が唸るように問うのへ、

「いや、あれが他の冒険者の遺品だとしたら……？」

鉦人道士のこの言葉に、一同は目を見開いた。

「そうか！ その冒険者たちが最期に向かった依頼先を確かめれば、大元にたどり着ける可能性がある！」

女格闘家が納得するのへ、

「そういうことだ」

鉦人道士が不敵に笑った。

其の二

辺境の街から西へ暫く行った所に、小さな廃村がある。件の冒険者二人が最期に向かった先は、そこであった。何故に彼らがそのような場所へ赴いたのかと言えば、

「廃村や廃墟と言うのは犯罪者たちの恰好の隠れ家となりやすいので、一度調査をしてほしいと近くの村の人達から依頼があったようです」

監督官が、少しばかり埃のかかった依頼書を眺めながら説明を加えた。

因みに言うと、この依頼が出されて六日程した後、廃村からもほど近い所にある洞穴を根城としていた野盗どもが、別の冒険者一党によって成敗されている。

依頼を出した村民たちは、これにすっかり安堵したらしく、廃村調査の依頼など忘れ切ってしまったようである。

ギルドの方でも、以来廃村に纏わる不気味な噂を聞くでもないというので、

「廃村には異常なし」

と判断してしまい、還らぬ冒険者もまた、

「他の地へ身を移したのだろう。よくあることだ」

そのように処理をしてしまったようだ。

「……職務怠慢ですね」

廃村関連の依頼報告書を呆れた顔で眺めつつ、監督官は深い溜息を

吐く。

だが今は、その問題体質を突いている場合ではない。
現状で先ずすべきことは、件の廃村へ向かって、敵の存在を確かめることなのである。

「ハズレだという可能性も考慮して、廃村に割く人員は少数精鋭というのはどうでしょうな？」

蜥蜴僧侶の提案に、首を横に振るものはいない。

かくして廃村へ向かうメンバーに選ばれたのは、オールラウンダー、只人僧侶、貴族令嬢に女格闘家の一党である魔術師……この四名であった。

黒曜級が三名に、鋼鉄級が一名。そこだけ見ればなんとも頼りない戦力ではあるが、

「なあに。等級が、必ずしも冒険者の実力に直結するとは限らねえつてのは、武道会で見たことじゃねえか」

鉱人道士の言葉の通りであり、

「俺を納得の出しにしないでもらいてえな」

鋼鉄級の冒険者が、つまらなそうに呟いた。

さて……。

昼下がりに辺境の街を出た四人が件の廃村へ到着したのは、夕暮れ近くになってからである。

鬱蒼とした森を抜け、村への一步を踏み込もうとした時、

「……瘴気に溢れてるわね……」

列の後方から、女魔術師が嫌な顔をして呟いた。

貴族令嬢も只人僧侶も、そしてオールラウンダーもまた同じである。

四人は警戒の色を強くし、廃村へと入っていった。途端、視線を感じる。

村内に点在する寂れた廃屋から、黄色い瞳だけがぎよろりところらを向いているのが見えた。間違いない。ゴブリンの瞳だ。

いよいよ、怪しくなってきた。

只人僧侶と女魔術師は杖を構え、貴族令嬢もまた剣を抜き払うと、

「ソンさん」

オールラウンダーへ呼びかけた。

「わかった」

力強く頷いたオールラウンダーは、勢いよく駆けだし、小鬼の瞳が覗くガラス窓を突き破って廃屋内へと飛び込んだ。

直後、小鬼の怒号が響いたかと思いきや、他の小屋からもゴブリンが飛び出してきて、貴族令嬢たちへと殺到してくる。その数は多く見積もっても二十匹ほど。

（随分と数が少ない……）

ゴブリンが村を襲ったとあらば、そこにいたであろう娘たちは、繁殖と慰みの道具として惨たらしい末路を辿ることになるのが常だ。

ともすれば、群れの規模はもつと大きくてもいいはずである。

（周囲の森の中へ、仲間が潜んでいるのかしら……）

拭えぬ違和感を抱えつつ、貴族令嬢が三匹目のゴブリンを斬り伏せた時である。

空に上る日の光……かと思紛うほどの眩い輝きが、彼女の視界に飛び込んできた。

「!?」

咄嗟に令嬢は、斃したばかりの小鬼の骸を蹴り上げた。小鬼の骸は令嬢の盾となり、白い閃光を代わりに受ける。転瞬。その緑色の肉体がどろどろと溶けたではないか。

「これは……デイスインテグレート《分解》……!」

水の街で、名伏しがたき目玉の化け物が放って来た熱線。

(シャーマン呪文遣いがいた……?)

思いつつ、貴族令嬢はゴブリンの波の奥に目をやった。明らかにゴブリンとは違う、只人の成人男性ときほど背丈の変わらぬ、薄汚い外套に身を包んだ何者かが、そこに立っていた。果たして『何者』かは、ゆっくりと拳を貴族令嬢へと突き出した。はらりと布が下がり、褐色の肌を持った五指が見えた。その薬指には、赤い宝石を嵌めた指輪が。ぼつりぼつりと、『何者』が呟いた。宝石が、閃光を放つ。

「伏せて!」

青ざめた貴族令嬢が踵を返し、後方にいた僧侶と魔術師を抱えて倒れ込んだ。

それとほぼ同時に、輝きが虚空を突き進み、森の中へと消えた。

「り、リーダー!」

僧侶が、悲鳴にも似た声で貴族令嬢へ呼びかける。
頭目の右肩は、浅いものの熱線によって見事に抉られていたのだ。

「《小癒^{ヒール}》を！」

僧侶へ言い置いて、女魔術師が立ち上がり、外套の者を鋭く見つめ、杖を構える。

……と、その時である。

「だりやつ！」

煉瓦造りの屋根を突き抜け、オールラウンダーがやつと外に出てきた。

其の三

小屋から飛び出たオールラウンダーは、外套の方を一瞥した後で、

「あつ、ねえちゃん！」

軽傷とはいえ肩を焼かれた貴族令嬢の元へ駆け寄った。

「だいじょうぶか!？」

「だ、大丈夫です……。こんな浅い傷……」

このやり取りの間に、僧侶がもたらす《小癒^{ヒール}》の奇跡によって、貴族令嬢の外傷は見る見る塞がれていき、痛みも引いていく。だが、肉を直接焼かれた感覚だけは体が覚えてしまい、暫くは離れる気配がなかった。

「ちよつと！ こつちも加勢して！」

前に立つ女魔術師が、《火^{ファイ}矢^{アボルト}》の術を放ちながら叫ぶ。

彼女が使える術の上限より、ゴブリンの数は圧倒的に多い。一人で持ち堪えられる時間など、たかが知れていた。

これを察知したオールラウンダーは、魔術師の頭上を飛び越えて前線に出ると、

「波っ！」

予備動作の一つもなく、いきなりの《かめはめ波》を放つ。

青白い輝きにゴブリンの群れが吞まれていくのを見つつ、

「相変わらず出鱈目な火力してるわ……」

呆れたように呟いた女魔術師が、瞠目した。

舞い上がり、やがて消えゆく黒煙の中、かの外套がただ一人、悠然と立っているのが見えたからだ。

更によく見ると、奴めの体を、雲の如く白く透けた巨大な両手が包み込んでいるのではないか。

なるほど。《かめはめ波》は、その手によって防御されたいらしい。

「手荒い挨拶だな。ヒューム 只人」

埃を払う手つきを以て、外套が初めて口を開いた。

次いで奴は、外套の頭巾を外し、素顔を見せる。

漆黒の肌。鋭い耳。後方へ撫でつけた、白銀の髪。

ダークエルフ
「闇人……」

未だ肉の焼ける感覚に苦しみつつ、貴族令嬢が呟くのへ、

「如何にも」

闇人が、にやりと口角を上げて頷いた。

次いで彼は、周囲を見渡し、廃村に小鬼の姿が一匹もないことを確かめるや、わざとらしく肩を竦め、

「やれやれ。西の小鬼は全滅か」

溜め息交じりに呟く。

これを聞いた貴族令嬢は、

(「西の……？ まさか……!」)

表情を青くし、

「ゴブリンの群れは……他の場所にもいるということですか……！」

と闇人へ問い迫った。

彼はけらけらと愉快気に笑い、

「その通り。今頃は、東南北の部隊が一斉に行進を始めている頃だろう。祭りで浮かれている街へ向けて、な」

まるで勝ち誇ったように言ったものである。

（ゴブリンの数が少なかったのは、他方に分散させてたからだっただ……！）

そのことに気付いた貴族令嬢は、もはや肩に残る焼けた感覚も忘れて立ち上がると、

「ソンさん！……ここをお願いしますか！」

叫んだ。

オールラウンダーは、

「まかせとけ！」

背中越しに頼もしく頷く。

これを見た闇人は、

「馬鹿め。今さら街へ戻ってなんとなる」

嘲笑するが、

「三方から攻めてこようとも、相手はゴブリン。街にいる冒険者たちでどうとでもなります！」

貴族令嬢の啖呵を聞くと、瞬時に笑みを消し、

「それはお前たちが街へ戻れるならばの話だ」

言うと同時に、その右腕を突き出した。

薬指に嵌められた指輪から、またしても眩い熱線が貴族令嬢へ放たれる。……が、その直線状に割り込んだオールラウンダーが、両腕を突き出して《ディスプレイングレート分 解》の術を真っ向から受け止める。

分厚い土壁をも瞬時に溶かす閃光を、しかしオールラウンダーは、

「あちちっ……！」

掌に多少の火傷を負いながらも、見事に受け切ってしまった。

これには流石に闇人も驚いたようで、

「馬鹿な……！」

と目を見開く。

そんな彼へオールラウンダーは、

「おめえの相手はオラだ！」

鋭く睨みつけて言い放った。

「なんだと？ 私の相手は、貴様一人で充分ということか？」

「そうだ！」

瞬間、闇人の額に青筋が浮かんだかと思うと、

「ほごくなー!」

地を蹴り、瞬く間にオールラウンダーへ詰め寄った。
彼の右手には、いつの間にもやたら魔力によつて煌く突剣が握られている。

「死ねっ!」

怒号とともに繰り出される刺突を、オールラウンダーは身を屈めて
躲し、次いで足払いをする。

「ぬっ……!」

宙に浮いた闇人は、素早く身を反転させて受け身を取り、追撃をけ
ん制するために剣を横薙ぎに払った。

オールラウンダーが、素早く後方に跳び退る。

そのままゆっくりと立ち上がった闇人は、すっかり顔から怒りを消
して、余裕ある不敵な笑みを取り戻すと、

「なるほど。ただの只人のガキではないようだな」

何を思ったか、手にした魔剣をふいと投げ捨てたのである。

これには流石にオールラウンダーも首を傾げる。

その様子を見た闇人は、

「分からぬ、という顔をしているな」

にんまりと笑うや、唐突に左手を空へと掲げた。

見るとその手には、何かを掴まんと掌を広げた、奇妙な腕の彫像が
握られている。

「これ以上百手巨人ヘカトケンケイルの膂力を我が身に宿せば、寿命が大幅に削られてしまうが……そうも言っておれんようだ。聞けば忌々しき勇者はまだ成人になったばかりの、子供のような見て呉れだとか。貴様がその勇者に違いあるまい。ならば、こちらもなりふり構ってはおられぬわ！」

闇人が放つ言葉の何一つ、オールラウンダーには理解できない。だが、

(あいつ……迫力がすくなくなった……！)

このことだけは、本能的に察知できていた。

迫力と言っても、姿形が劇的に変わったわけではない。

外套に包まれた闇人の筋肉が、一回り膨れ上がっただけのことである。

しかし、その内から発せられる気迫には、オールラウンダーが冷や汗を一筋垂らすほどには凄みがあるのだ。

かくして空を見上げると、それまでの夕暮れが幻のように消え失せ、分厚き黒雲が渦を巻いている。

更地も同然となった廃村に、強烈な風が吹き荒れた。

内から溢れ出る力に、闇人は酔いしれ、狂ったように笑う。

だからこそ、気付かなかった。すでに貴族令嬢たちは、廃村から姿を消していた。

其の四

例えばもし、廃村と辺境の街との直線上。そのちょうど中間の地点に小さな農村が存在していなければ。

例えばもし、その農村が『駅』の役割と担い、街へ向かうための馬を貸し出していなければ。

貴族令嬢たちが辺境の街へ辿り着く時間が遅れ、そのために三方からの小鬼襲撃に対し、街の冒険者は後手に回り、この事件の結末はまた違う運命を辿った……のやもしれぬ。

だが、しかし。背には僧侶を負い、前方には女魔術師を抱えた貴族令嬢は慣れた手つきで馬を駆り、辺境の街へ戻って来たのは、薄く暗くなつた空へ、ふわりふわりと明かりをともした提灯が浮かび上がる頃であった。

これは天灯てんとうというもので、この明かりを目印として、清らかな魂を天へと導き、邪な魂を追い払う……そのような謂れのあるものだ。

果たして、馬に跨つて街門を潜つた貴族令嬢たちを、鉱人道士たちが真っ先に出迎えた。

因みに言うと、妖精弓手たちは一応にまだゴブリンスレイヤーと受付嬢を陰ながら見守っている。

馬から降りた貴族令嬢は、東南北からゴブリンの群れが押し寄せていることを一同へ知らせるや、

「こりや、ちと厄介じやのう」

鉱人道士が舌打ち混じりに呟く。

彼の脳裏を過つたのは、春に起こつた牧場防衛戦のことだ。

ゴブリンの王が率いる大軍を、死者こそ出さずに守り切つたものの、雪崩のように迫りくる小鬼どもを片付けるのには骨が折れた。

それが別々の方角から一気に押し寄せるともなると……。

そこまで考えたところで、

「いや」

という蜥蜴僧侶の眩きが、鉦人道士の耳に入った。
鱗の彼は真剣な表情で腕を組みつつ、

「剣士殿の報告を聞けば、西の廃村にいた小鬼の群れは二十。三方から迫っている他の群れの規模も、それと同程度と見て間違いないような気がしますな」

と意見を述べた。

これは、決して物事を楽観視しているわけではない。

「仮に敵方が小鬼の群れを四つ同時に使役しているとあらば、剣士殿たちが廃村で交戦した小鬼の群れの規模はもっと大きかったはず。だのに二十匹程度であったということは、やはり一つの群れを東西南北へ分散させた何よりの証拠でしょう」

蜥蜴僧侶の推察に、一同は「なるほど」と頷く。

「……だがよ。その闇人とやらと一緒にだったから……つまりは戦力がもう充分だったから、廃村のは二十匹程度だった、つてのは考えられねえか？」

槍使いの反論に、やはり蜥蜴僧侶は首を振り、

「^{ロード}王でもない限り、小鬼の群れが百を超えることはありませんまい。ならば、単純に計算して一つの部隊の人員が二十を超える可能性もまた皆無」

きっぱりと言い放つ。

すると、その発言に新たな疑問を浮かべた銅等級の冒険者が問う

た。

「……なんで群れに王がない、って分かるんだよ」

これを受けた蜥蜴僧侶はぎょろりと目を向き、

「群れを操るにあたり、同じく小鬼を統べる者の存在は、邪魔だとは思
いませぬか？」

戦に生きる意義を見出す彼だからこそ、戦における事の運び方はこ
の中の誰よりも熟知している。……尤も、ゴブリンどもの特性につい
ては、ともに冒険をする「小鬼殺し」から得た知識のおかげだが。
さて……。

三方から迫る小鬼どもの規模も、どうやら目星がついた。ならば早
急に部隊を編成し、対応に当たらねばなるまい。一つ一つの数は少な
いようだが、それでもスピード勝負になることは確実なのだ。

かくして手短な話し合いの末、その場にいる者たちで三つの部隊が
出来上がった。

一つ。東からの小鬼に対応するのは、貴族令嬢、只人僧侶、銅等級
冒険者、女魔術師。

一つ。南に向かうのは、鉾人道士と蜥蜴僧侶。

最後の一つ。北側を防衛するのは、『辺境最強』の槍使いと連れれの魔
女。そして女武闘家。

「そっちは二人で大丈夫なのかよ」

槍使いが声を掛けるのへ、

「心配ご無用。こちらにはあと二体ほど手数が増えますので」

蜥蜴僧侶が不敵な笑みを以て応じ、

「そちらこそ、いいのびっ。」

槍使いへと問い返す。何が『いい』のかといえば、今頃は天灯にでも目を向けているであろう一組の男女のことだ。

好敵手に、好いた女性との逢引を譲るままでいいのか。つまりはそういうことである。

辺境最強の男は、つまらなそうに鼻を鳴らすと、

「あの野郎が祭りとデートに浮かれてる間に武勲を立てたとありや、俺の評価もうなぎ登りよ」

この言葉が強がりではなく、一応は彼なりの気遣いであると感じているのは、長い間一党を組んでいる魔女だけであろう。

なんとと言っても、今日はハレの日。街の住民であろうが冒険者であろうが、日常を忘れて楽しむべき日なのである。

『奴』にとっては冒険……もとよりゴブリン討伐が。受付嬢にとっては、そんな彼を見送って、還りを願うことが日常なのだ。

今日くらい、そんなことを忘れっぱなしというのもいいことだろう。

「意外と、紳士、なのね」

煙管を吹かした魔女が、成長した息子を褒めるように槍使いの頭を撫でた。

「っせえ！」

反抗期を迎えた息子の如く、槍使いがその手を払った。

其の五

(おのれ……！ 勇者の力がこれほどとは……！)

盛り上がった筋肉と額に一層の青筋を浮かべ、闇人は内心で舌を打った。

魔神を打ち倒し、水の街における邪教団を滅ぼしたという勇者の話は、伝いに伝った情報で耳にしていた。魔神を斃したのは実のところ勇者ではなく、針鼠の獣人と背丈が高く聡明そうなゴブリンだった、という目撃情報もあるが、今はどうでもいい。

彼にとつて大切なのは、目の前に対峙する只人の少年が、一端とはいえ百手巨人ヘカトンケイルの脅力を宿した闇人の拳に、正面からぶつかって拮抗しているということのみ。

(この幼さでこの力とは……！ 今のうちに潰しておかねば、必ずや我ら混沌の勢力の障壁となる……！)

対して少年は、

(やっぱ世の中つてのは広いんだなあ。こんなにつええ奴がいるなんて……)

驚きつつも、嬉しさを抑えきれずにいた。

勿論、目の前にいる闇人が悪い奴だというのは知っている。知っているがしかし、それ以上に強者の存在というのは少年の胸を高鳴らせるものだったのだ。

強者の存在というのは少年にとって、気持ちよく力の全てを出し切ることが出来る存在であり、自分を更なる強さの領域へと誘ってくれる師のようなものなのだ。例えそれが、どうしようもない悪人であっても。

少年……オールラウンダーがにんまりと笑っていることに気付き、

更に青筋を太くした闇人は、

「何が可笑しい！」

叫び問う。

オールラウンダーもこの問いに、

「あんたつええからさ、オラわくわくしてるんだ！」

などと馬鹿正直に答えたものだから、

「舐めるな！」

これを余裕ある挑発と受け取った闇人が、地を蹴って肉薄してきた。

振り下ろされる闇人の拳を、頭上で組んだ腕を以てオールラウンダーが防御する。

ぼこり。彼らの周囲の地面が、丸く凹んだ。

更に闇人が力を入れようとするのへ、

「だあっ！」

オールラウンダーは組んだ腕を広げ、巨人の力を秘めた拳を弾く。

「ぬっ………！」

大きく仰け反った闇人の腹部へ、

「だりやっ！」

オールラウンダーの正拳が突き入った。

一瞬、呼吸がまともに出来なくなった闇人であったが、それでも心にオールラウンダーを見下して睨むと、膝頭で少年の顎を蹴り上げた。

宙に浮かんだ少年の体へ、

(しめた……！)

好機を逃すまいと、闇人が拳を突き出す。

この時、何か布が裂ける音がした。

勝利を確信した闇人の顔が、すぐさま驚愕に染まる。

何故か手応えのない右腕……その手首に、猿の尻尾が巻き付いている。その尻尾を辿ると……。

「あつ、シツポがはえた！」

なんと尾が生えているのは、オールラウンダーの尻からなのだ。

「なっ……！」

瞠目する闇人を他所に、無邪気な笑みを浮かべたオールラウンダーは、するりとぶら下がった腕から降りると、そのまま嬉しそうにぴよこりぴよこりと周囲を跳ねまわる。

しかしその動きが、先ほどよりも明らかに鋭さと速さを増していることに気付き、更に大きく目を開いた。

「貴様……何者なんだ……」

驚きの連続のあまり闇人が誰何するのへ、

「オラ、孫悟空だ！」

名乗ったオールラウンダーが、ふと姿を消した。

(否……！)

姿を消したわけではあるまい。あまりに速い動き故に、巨人の力を宿した闇人の目でさえ、少年の姿を捉えられずにいるのだ。

果たしてオールラウンダーは、闇人の眼前に姿を現すと、物も言わずにその顔面へ蹴りを入れた。

「おっ……おおっ……！」

よろめき、痛む頬を抑える闇人へ、

「そらっ！」

オールラウンダーは組んだ腕を振り下ろし、その脳天を叩く。

「ぐっ……！」

地面へ叩きつけられ、それでもなんとか立ち上がった闇人だが、脳を揺さぶられたせいで視界がぐらりと安定しない。

オールラウンダーはそんな彼をじつと見つめ、やがて視界が安定したのを確認するや、

「けっこうきいたろ！」

にこやかに言い放つ。

(おのれ……この私が、遊ばれている……！)

屈辱が胸の中を支配し、しかしどうにもならない力量差を目の当た

りにし、やはり悔しさが込み上げてくる。
それによつてもはや冷静さを失つた闇人は、

「おのれっー！」

右の拳をオールラウンダーへ突き出した。

その薬指に嵌めた指輪から繰り出される、本日三回目の
《ディスタント分解》。

オールラウンダーは慌てることなく、そつと右の掌をかざす。

そこへ吸い込まれた熱線は、決して少年の皮膚を貫くことなく、無慈悲にも果てた。

「もうそんなのきかねえぞ」

といった時、すでに闇人の姿は目の前から消えていた。

すぐさまオールラウンダーは気配を感じ、空を見上げる。

常人ならざる跳躍力を以て、闇人は宙に跳んでいたのだ。その手には、先ほど捨てた魔剣が握られている。

瞬間。暗雲が少しばかり開けて、真ん丸とした月が顔を出した。

「死ねい！」

落下の勢いと巨人の臂力を以て振り下ろされた魔剣。しかし、その刀身が折れた時、さすがに闇人は恐怖を感じた。

(こいつ……！ 化け物か……！)

折れた魔剣を今度こそ捨て、それでも距離を取つてなんとか隙を見ようとした闇人が、オールラウンダーの異変に気付いた。

彼は空を見上げたまま、棒立ちの態なのだ。まるで闇人のことなど眼中にない。

やがて、彼の体がどくりどくりと大きく震え出し、その瞳が真紅に染まった。

得体の知れぬ不気味さに闇人が動けないでいると、突如としてオーラウンダーが空に浮かぶ満月に向けて吠え出した。

次の瞬間、盛り上がった筋肉によって山吹色の道着は弾け飛び、彼の体が一回りも二回りも大きくなっていく。

ぐんぐんと巨大化していく彼の体は、次第に全身から毛が生え、それこそ山一つすら超える背丈を持った、恐ろしいヒビの化け物となったのである。

其の六

所変わって、辺境の街の東側。鬱蒼とした林の中で、貴族令嬢たちはゴブリンの一群と交戦を繰り広げていた。

とは言っても、それほど熾烈なものではない。

ゴブリンどもの数は、蜥蜴僧侶が睨んだ通りちようど二十四という、奴らの数の利から言えば小規模なものであったし、どういうわけかこの林には落とし穴の罠が仕掛けられており、それに嵌って死んだ個体もいれば、

「罠のある所に進軍するなんて！」

とでも言っているのであろう。殿を務める個体へ詰め寄る奴もいる。

貴族令嬢たちとはというと、これも誰かしらが予め設置していた土嚢に身を潜め、仲間割れを起こしている小鬼ども目掛けて石くれを投げている。

投石の役目は、貴族令嬢と銅等級の冒険者だ。

二人の投げ打つ石は、風を突っ切って直進し、ゴブリンどもの頭や鼻頭を叩いて砕く。

只人の投擲力は、他種族の及ぶところではない。まして二人の冒険者は、一党の中では先陣を切る戦いの要なのだ。それが投げ打つ礫が、小鬼一匹の息の根を止めずして今日まで生き延びることができるはずもない。

突然の奇襲に驚いたゴブリンどもも、一応は手槍や斧を投げつけて抵抗するも、貴族令嬢たちが身を潜める土嚢に阻まれ、反撃は無意味に終わった。

やがて最後の一匹が、銅等級冒険者の投げた礫に鼻を砕かれ、よろめいた先で待っていた落とし穴に落ち、その底に生えた幾つもの杭に貫かれて息絶えた。

「……意外と、呆気なかつたですね……」

もしもの時に備えて精神を集中していた僧侶が、恐る恐る土囊から顔を出しつつ呟いた。

「ま、ここに落とし穴を仕掛けてくれた誰かさんのおかげだな」

銅等級が、最期のゴブリンが落ちた穴へ余った小石を投げ入れ、

「よし、入った」

と嬉しそうにはにかむ。

それをじりと見やった後で女魔術師は、

「さ、早く他の人達と合流しましょう。……とは言っても、どっちも銀等級ばかりだから大丈夫だとは思うけど」

冷静か不愛想か。いつもと変わらぬ声音で言った。

かくして、やはり人手の少ない南側……すなわち鉱人道士と蜥蜴僧侶を手伝いに行こうと意見はまとまり、移動を開始しようとした時。

「……どうしました？」

僧侶が、ふと足を止めて西側を見つめる貴族令嬢へ声を掛けた。

「いえ……」

彼女は、何か思いつめたような表情をしていたが、やがて思い直し、

「行きましょう」

僧侶と共に、先へ進んだ銅等級たちの後を追いかけた。
さて……。

件の廃村では、見境なく暴れる大猿の攻撃から、それでも懸命に闇人が逃げ回っていた。

(確かに、凄まじいほどの破壊力だ……！　しかしっ！)

彼は、その左手に握る禍々しき腕の偶像を見つめ、不敵に笑った。

(百手巨人ヘカトンケイルさえ召喚できれば、こちらのもの……！)

混沌の神々が、最初期の戦遊戯において造り出した、戦うための存在。

その威力、秩序の神々を幾ばくも打ち倒したほど。

いかなる勇者といえども……それが恐ろしい巨大な猿の化け物に変わったところで、己の与する神をも斃す巨人の前には、成す術も無からう。

(奴が暴れている隙に街へ向かい、儀式を……！)

今一度、片腕を模った偶像を闇人が握りしめた時であった。

それまで吹き荒れていた風が、より一層に強さを増した。

これを受けた大猿は、苛ついたように咆哮を一つ飛ばす。

かくて化け物の頭上に、漆黒の渦が出現した。

「あれは……！」

それを見た闇人が、驚愕の声を上げる。

「アストラル霊界へと続く扉か！ ……ははっ！ そうか、あの化け物ならば、ヘカトンケイル百手巨人へ捧げる贄としては充分というわけか！」

かくして渦は竜巻となりて、大猿の体を光の粒子へと変換して
く。

やがてそれは全て、渦の闇の中へと吸い込まれてしまった。

「さあ、姿を見せよ！　ヘカトンケイル百手巨人！」

渦へ向けて、闇人が叫んだ時だ。

ぱりん。硝子の碎け散るような音が聞こえ、それと同時に左手へ衝
撃が走った。

見れば、手に掴んだ偶像が、粉微塵に碎け散っている。

「なっ……！」

驚きの余り目を見開いた時、全身の筋肉が萎縮していくのを彼は感
じた。百手巨人の力が、抜けていくのである。

最初彼は、これも巨人顕現の前触れなのだと思っていた。

しかし、どうも違うらしい。

空を覆っていた暗雲は綺麗さっぱり消え去り、すっきりとした夜空
へ散りばめられた星々が瞬き、二つの月が煌々と輝いている。

「ど、どうしたのだ……！　へ、ヘカトンケイル百手巨人はどうした。何故に姿を見せ
ぬのだ！　あの猿の化け物を贄として、この地に降り立つのではな
かったのか！」

静寂を取り戻した夜の風景へ、闇人の叫びが虚しく木霊した。

横槍、再び

街の人達の想いが。気持ちだが。暖かな光となって満ちている世界。その中で、黒く渦を巻いた嵐が、だんだんと人の形を作っていく。……いや、やつぱり前言撤回。人つて、あんな横からわらわらと腕が突き出るような姿してないもん。なに、あれ？ ムカデ人間？ でも、ムカデだつて足は百本だつて聞くよ？ どうみたってあのでっかいの、手が千本は生えてるんだけど……。

「あれが百手巨人^{ヘカトンケイル}。神代の頃の混沌の尖兵」

いや、説明はありがたいんだけどさ。なんで冷静でいられるわけ？ つていうか名前を付けた人もさ、手抜きしちゃだめだよ。いくら数えるのが面倒だからつて。百本と千本の違いは目に見えて分かるでしょ？

なんなの？ あの託宣つてば、実は混沌側の神さまのお告げだったりするわけ？ だよね？ どうみたってボクを殺す勢いの化け物だもんね？

……まあ、深く考えても仕方ないや。こうして^{アストラ}霊界とやらに来ちゃつたわけだし。敵を前にして逃げ出すのも、勇者としてどうかと思うし。

ボクの右手には、魂で繋がった聖剣がある。そして、隣には二人の頼もしい仲間がいる。負ける気がしない理由は、それだけで充分。こんな優しい光でいっぱいになってるあの街を、こんなデカブツに滅茶苦茶にさせるわけにはいかない。

一つ息を深く吸つて、吐く。

さあ、いくぞ。戦いにおいて最も大事なものは、口上だ。それをきつちり決めないと、なんか力入らないし。

「勇者、推さ——」

その時だった。

また、新しい黒い竜巻。それが、ボクとデカブツとの間に割って入る。

やっぱり竜巻は人の形を成していくんだけど……いや、さつきから「人の形」って言うてる割には、二足歩行なところが同じなだけで、背丈は全く違う。新手の奴は、デカブツと同じくらいデカブツだった。

「語彙力貧弱」

うるさいよ、さつきから！ この世界嫌い！ ボクの思ってること、みんなに筒抜けなんだもん。

……で、新しい方のデカブツは、やっぱり人間じゃなかった。

猿だよ、猿。でっかい猿の化け物。毛むくじやらで、目を真っ赤にして。それであのムカデのデカブツを睨みつけてる。

「ムカデじゃなくて、ヘカトンケイル百手巨人ですよ」

いちいち突っ込まなくてもよくない？ ってか、なんでみんなそんなに冷静なの？ 見たところお友達にはなってくれなさそうななのがもう一匹増えたんだけど。

そうこうしているうちに、猿の化け物が鳴いた。魂だけのこの状態でも、なんだか肉体がぶるぶる震える感覚がする。……ちよつとちよつちよつたかも。

まあ、そんなことはどうでもよくて。まるで今ボクがしようとしてた口上みたいに、一鳴きした猿の怪物が、ぽっかりと口を開いた。

初めはボク、あの猿がムカデ巨人を食べようとしてるのかと思っただ。でも違った。

猿の口に、光が集まってく。この世界の光とはまた違う、どこか怖い感じのする光。

それが、ムカデのデカブツに向かって飛んだ。ディスタントテグレート《分解》とは比べ物にならない太さの、光の柱。

前にも見たことがある。

魔神と戦おうとした時、どこからともなく現れた不思議な二人組。片っぽは背の高くて、やたら頭のよさそうなゴブリン。もう片っぽが、ボクより一回り背の低い、針鼠みたいな髪型をした男の子。

その男の子が、

「勝利の大砲」
ビクトリーキャノン

とか言っつてぶっ放してたっけ。

光の大砲は、あつという間にデカブツを呑み込んで、綺麗さっぱり消しちゃった。

いつもクールぶってる賢者ちゃんも、流石にこれにはびっくりしたみたいで、口をパクパクしてる。

ボクだって、同じ気分だよ。あのデカブツをやっつけてくれたのはいいけど、この大猿もボクたちの敵になりそうだし。

そう思つてると、ゆっくりゆっくり猿がこつちを振り向いた。

なんだろう。さっきのムカデカブツは行ける感じがしたけど、このおつきな猿は分からない。

そもそもこいつ、聖剣の致命的一撃受けても、ダメージすらつかないぞうなんだけど。

それでも逃げるわけにはいかない。さっきの奴を簡単に斃した化け物なんだ。こんな奴がああ街へ降り立ったら、それこそ一巻の終わり。

改めて剣を構えた時、また猿が吼えた。……あ、だめ。完全にちびった。

……と思つたら、猿が動きを止めて、わなわなと体を震わせる。

やがて体がどんどん小さくなって、それと同時に光の粒に変わっていつて……。ついにはどっかへ消えちゃった。

「な、なんなのでしよう……。今のは……」

ボクに聞かれても、分かるわけがない。とにかく、現世に戻らな
きや！ あの猿の怪物が街へ降り立ったらヤバいことになる！

其の一

星々が散りばめられた夜の空へ、再び黒い渦が出現した。

渦は光の粒子を吐き出し、それは雪のようにはらはらと地へ舞い降りる。

粒はやがて一か所にまとまり、人の形を成した。

先ほどまで大猿となつて暴れていたオールラウンダー。その、少年の姿である。

彼はどういうわけか全裸であつた。

ヘカトンケイル
〔百手巨人は、やはりこの少年に敗れたのか……〕

闇人は、自分でも驚くほどすんなりとその事実を呑み込んでいた。そこには、目の前で倒れている少年の、(彼がそう思い込んでいるだけだが)勇者たらしめる実力を認めている部分と、その姿を見ることがなくあつさりと敗れ去ってしまった百手巨人への失望もあつたようだ。

彼はがつくりと項垂れ、しばし時の流れも忘れて座り込んでいたが、やがて馬の蹄が地を蹴る音を耳にし、顔を上げた。

一人の女が、馬を駆つて廃村へと入ってくる。貴族令嬢だ。

「ソンさんー!」

叫んだ彼女は、馬から飛び降りるや否や倒れたオールラウンダーに駆け寄り、一方では鋭く闇人を睨みつけた。

闇人はというと、そんな彼女に危害を加える気など毛頭なかった。突如として秩序に目覚めたわけではない。

(もう、どうでもよい……)

諦観である。

混沌の神より託宣を受け、意気揚々と今日まで積み重ねてきた物す

べてを、あの訳の分からぬ大猿の化け物によって、一瞬のうちに水の泡とされてしまったのだ。

彼の胸中には虚無のみが限りなく広がるのみだったのだ。

「気を失っているだけだ。……とつとつとそいつを連れて、この場から消えるんだな」

気落ちしたままの声で言う闇人へ、貴族令嬢は訝し気な視線を送る。

(罨か……?)

と思いつつも、貴族令嬢はオールラウンダーを抱えると、素早く身を翻して馬に跨り、その場を後にした。

彼女は廃村の状況を見ただけで、オールラウンダーが闇人に敗北したと勘違いしてしまったのだ。

なまじ闇人の実力は《デイスインテグレート分 解》しか見ておらず、そのため、

(彼と戦っても、犬死するだけ……。さっきの言葉が本当なら、今は引き返して、態勢を整えるべき……)

その結論に至ってしまったのである。

途中、何度か彼女は背後を振り返った。

闇人が追ってくる様子も、《デイスインテグレート分 解》の輝きもない。どうやら本当に見逃してくれたらしい。

(余裕のつもりかしら……)

どこか不気味に思いつつ、彼女は馬を走らせる。

オールラウンダーが全裸であると気付き、羞恥の叫びを上げたのは、街へ戻ってすぐのことであった。

……さて。

廃村に残った闇人は、貴族令嬢の姿が見えなくなったことを確認すると、その場で大の字に寝転がり、空を眺めた。

瞬く星々を見つめながら、

「……くっそおおお！」

彼は突如として叫び、地面を叩いた。

忘れかけていた怒りと悔しさが込み上げてきたのである。

「ヘカトンケイル百手巨人は、秩序の神すら打ち倒す巨人ではなかったのか……。それが……。あんな訳も分からぬ……。理性のかけらもない猿の化け物なんぞに……！」

二度、三度と地面を叩き、彼は歯噛みをする。

浮いた青筋が、今にもはち切れて血を吹き出しそうであった。

「……違うー！」

彼は目を見開き、空に広がる星々を薙ぐように手を払う。

「ヘカトンケイル百手巨人が……。神々直々の尖兵が弱いわけがないのだ……。！」

これを認めるということは、サモナー召喚士としての自分の実力が、『その程度』だと肯定するも同じ。

秀でた剣の腕と魔力は、彼にとって絶対的な自信の後ろ盾となるものであった。故にこそ彼は自尊心が大きく、何者かに負けたり劣ったりすることを認めるわけにはいかなかった。

「この私の実力は……。こんなものではない！　こんなものではないのだ！」

彼の元へ、混沌の神による託宣はすでに届いていなかった。
いや、もはや彼にとってそんなことはどうでもよかった。

「今に見ている、勇者よ。私はこのままでは終わらん……終わらんぞ。
神の愛する尖兵が使い物にならぬというのならば……私がそれを
凌駕する実力をつければいいのだ！」

自暴自棄の果てに、彼が掴んだ答えはそれであつた。
傍から見れば、なんとも滑稽な回答であろう。

神々が支配する世界において、彼は神にも届かんとする力を欲しよ
うというのだ。

しかし、彼は本気であつた。

何者にも頼らない。信じられるのは己の力のみ。

秩序の神に愛されているとはいえ、相手は只人の少年。……猿の尻
尾が生えているのを見ると、獣人の可能性もあるが。

兎も角。只人であろうと獣人であろうと、闇人の中でも特に秀でた
才を持つ自分が、奴の辿り着いた境地に至れないわけがない。

「せいぜい己の力に酔いしれているがいい、勇者！ 私はいつか、お前
の力を超えてみせる！」

月夜に、闇人決意の咆哮が轟いた。

其の二

収穫祭から二日が経った、昼下がりのことである。

辺境の街からはハレの日の雰囲気すっかり鳴りを潜め、しかし往来する旅人や冒険者の足は絶えず、大通りなどはいつものようにがやがやと賑わいの声でひしめき合っていた。

そんな街の一郭において、ハレの日の続きを行っている者たちがいた。

ギルド庁舎裏手にある訓練広場。その中央に立って対峙するのは、オールラウンダーと女武闘家だ。

結局あの後、三方から攻めてきたゴブリンの対応であったり、闇人と交戦したオールラウンダーが気絶して戻って来たこともあり、武道会は準決勝を行わずして中止となってしまったのである。今日は、その続きをしようというわけだ。

無論、槍使いや蜥蜴僧侶にも声を掛けたのであるが、いずれも冒険の予定が入っており、残念ながら参加は出来なかった。

冒険者とは明日をも知れぬ身。なかなか、

「皆の予定が揃ってから……」

というわけにもいかないのである。

さて……。

事実上の決勝戦となったこの試合の審判を務めるのは、貴族令嬢である。監督官もまた、ハレの日が終われば組合の業務に戻らなければならず、

「最後まで司会やってみたかったなあ」

と口惜しそうに呟いていたものだが、こればかりはどうにもならなかった。

「では、準備は良いですね？」

広場の中央に立つ二人へ、貴族令嬢が呼びかける。

対峙した二人は、片や楽しそうに、片や緊張の面持ちでこくりと頷いた。

「ゴクウ！ 頑張れ！」

舞台の脇。広場を囲むようにして設けられた柵に寄りかかり、貴族令嬢一党の圃人野伏がオールラウンダーを応援するのに対し、

「小娘！ 落ち着いて動きを見れば、いい線行けるはずだ！」

と、これは女武闘家の属する一党の頭である銅等級が、諦めの混じった声援を送っており、これを仲間の女魔術師が冷めた目で見ていた。

因みに言うと、武舞台はすでに撤去されてしまっている。なので、適当な枝で武舞台と同じ広さを囲む線を引き、そこから出たら場外……というルールとなっていた。

「はじめっ！」

貴族令嬢が掛け声とともに、二人の選手が跳び下がって距離を取る。……かと思われたが、

「ていつー！」

不意に、女武闘家が背後へ回し蹴りを放った。

確かな手応え。

いつの間にか女武闘家の背後に回っていたオールラウンダーが、それでも彼女の蹴りを、組んだ両腕できつちりと防御していた。

「やるなあ！　もうおめえに残像拳はきかねえかもな」

笑顔でそう言うオールラウンダーへ、

「伊達に鍛えてないからね」

頬にうつすらと汗を流し、女武闘家が返す。

彼女は足を戻すと同時に素早く後方へ下がった。

そこへ、

「いくぞっ！」

疾風の如き速度で迫ったオールラウンダーが、真っ直ぐに拳を突き入れてきた。

「いつ……！」

冷や汗掻きつつも、なんとか上体を海老反りにしてこれを躲した女武闘家であったが、その隙にオールラウンダーが足払いをかける。

「うわっ！」

これに対処しきれず尻餅をつく女武闘家。そんな彼女の両足を、オールラウンダーはがっちりと掴んだ。

(場外へ落とされる……！)

これを察知した女武闘家は、勢いよく身を捻った。つられてオールラウンダーの体も、ぐるりと宙に円を描く。

彼の手が足から離れ、拘束を逃れた女武闘家は、

(今だ……！)

この機を逃すまいとして、容赦なくオールラウンダーの腹部を蹴り上げた……その足へ、するりと猿の尻尾が絡まった。

「あつ……！」

と驚く間に、地面へ足をつけたオールラウンダーが勢いよく尻尾を振り上げると、それに伴って女武闘家の体も大きく上がる。

「それっ！」

果たしてオールラウンダーが尻尾を振り下ろすと、彼女もまた地面へ強く叩きつけられた。

「へへっ。便利だろ、シツポ」

ひよろひよろと尻尾を揺らめかせながら、オールラウンダーが自慢げに言う。

(あの尻尾……厄介だな……)

収穫祭の夜。全裸となって帰って来たオールラウンダーの尻に猿の尾が生えていることに気付いた時は、他の面々同様に大きく驚いた女武闘家であるが、今はそんなことを気にしている時ではない。

(あの素早い動きを捉えても……尻尾で攻撃を受け流されちゃう……)

遠距離からの攻撃を持っていれば話は変わったであろうが、残念な

がら女武闘家は魔術を習得していない。決め手は、接近戦による打撃しかなかった。

(こっとなつたら……当たって砕けろだ！)

半ば自棄気味に決意を固めた女武闘家は、地を蹴ってオールラウンダーへと肉薄した。

勢いを乗せて突き出した女武闘家の拳を、やはりオールラウンダーは尻尾を絡ませて受け流す。

舌を打った女武闘家が、がむしやらに手を伸ばし、尻尾の根元を掴んだ。

その時である。

「あっ……！」

オールラウンダーが声を上げた。

彼はそのまま、女武闘家の腕に宙ぶらりんとなる。

「ち、力が……ぬける……」

情けなく半目となった彼の体を、

(なんかよくわかんないけど、今しかない！)

女武闘家は、ぐるりぐるりと体を振り回し、

「それっ！」

勢いを乗せて彼の体を投げ飛ばした。

枝で引かれた線の外側へ、彼の体が落ちた時、

「じよ、場外！」

貴族令嬢が、呆気にとられつつも勝敗を告げる声を上げた。

其の三

日もとつぷりと暮れ、ギルドの酒場は帰還した冒険者たちでやんややんやと賑わい始める。

その一隅にある二つの円卓において、二組の冒険者一党がささやかな宴会を開いていた。

ささやかな天下一武道会の続きを終えた、オールラウンダーと女武道家……そしてその仲間たちである。

「優勝おめでどうアンド準優勝おめでどう記念！　かんぱあい！」

と圃人野伏の音頭に合わせ、一同はそれぞれ手にした盃を掲げた。

「おい、オールラウンダー。あんまり食うなよ。お宅の頭と折半とはいえ、俺は借金持ちなんだからな」

銅等級が危惧するのへ、

「わかった」

と言いつつ、オールラウンダーはすでに小鉢に盛られたサラダを五皿、スープを七杯、パンを十五ほど胃袋に収めている。

顔を青くする銅等級へ、

「今夜は、こちらが出しますよ？」

流石に気の毒に思った貴族令嬢が、隣の卓からそう言ったものだが、

「馬鹿言っちゃいけない。折半は折半だ。遠慮することあ、ねえよ」

銅等級は、意外にもそこところはしっかりとしていた。

「それに、明日からもっとガンガン稼げばいい話だしな」

彼がそう言うのと、

「うへえ……」

若き剣士は気の抜けた声を上げて円卓に突っ伏し、

「私、まだ一日に呪文使える回数そんなになんだけ……」

女魔術師は、睨みつけるように頭目を見た。

かくしてそんな二人の隣では、女武闘家が浮かぬ顔つきでスプーンを啜っていた。

「……どうした？」

これに一番に気付いた剣士が声を掛けると、

「うん。……なんか、スッキリしない勝ち方だったなあ、と思ってさ」

匙で掬ったスープを見つめながら、女武闘家が呟いた。

「なんだ。納得してねえのか」

エールをぐびぐびと飲み干しながら声を掛ける銅等級へ、女武闘家はこくりと頷く。

「あたしがゴクウに勝てたのは、偶然ゴクウの弱点を突いたからなんです。だから、殆ど運で勝ったようなものなんです」

「なるほどなあ。しかしよ。相手の弱点を突くのは、何も卑怯なことじゃねえ。それに、運も実力の内って言うじゃねえか」
「……そうですけど……」

飽くまでも納得のいかぬ女武闘家を見て、銅等級は困ったように笑って溜息を吐くと、

「だったら、今度こそ実力で叩きのめせるようにしねえとな」

そう言って、力強く彼女の背中を叩いた。

思わずスープをこぼしてしまった武闘家だが、僅かに笑顔をは戻ったようである。

これを確かめた銅等級は、

「ほれ。そうと決まれば今日はお開きだ。明日からビシビシ依頼こなしていくぞ」

手を叩き、腰に吊るした布袋を貴族令嬢へ手渡し、

「こっちの分の金だ。じゃ、そゆことで」

不貞腐れる二人の若者に喝を入れ、宿へと足を運んでいく。

それに続こうとした女武闘家は、ふとオールラウンダーの近くへ寄ると、

「ゴクウ！ 次にやるときは、運じゃなくって実力で勝ってみせるからね！」

そう言うや、さっさと銅等級たちの後を追いかけて行ってしまった。

オールラウンダーは頬に詰めていた物をぐくりと飲み干すと、

「オラだつて！　こんどはシツポもきたえてるからな！」

大声と共に、大手を振って応える。

他の冒険者たちが「ぎよっ……」として視線を向けるのへ、

「ソンさん。もう少し小さい声で……」

貴族令嬢が恥ずかしそうに囁いた。

「……それにしても、まさかゴクウにも弱点があったなんてねえ」

葡萄酒を堪能しつつ、圃人野伏がそう言ったのへ、

「確かに……。ソンさんほど鍛えぬいた人でも、やっぱりそういうのつてあるんですね」

パンを齧った只人僧侶が乗った。

オールラウンダーはサラダの盛られた小鉢へ手を伸ばしつつ、

「ああ。昔っからさ、シツポにぎられると力がぬけちまうんだ。死んだじいちゃんにも、すっかり鍛えとけて言われてたんだけど、今までちぎれちまってたから、鍛えるヒマなかった」

「……尻尾つて、千切れても生えてくるものなの？」

圃人野伏の問いに、

「オラのははえたぞ」

によりりによりりと尻尾を動かし、オールラウンダーが答える。

(そんな蜥蜴の尻尾みたいに……)

と圃人野伏は思ったが、実際問題この間まではなかった猿の尻尾がオールラウンダーの尻から生えているのだから、もはや何も言えなかった。

さて……。

それからようやくとオールラウンダーの胃袋も満足したようで、よいよ会計と相成った。

貴族令嬢は銅等級が残した革袋を開け、

「……」

思わず言葉を失った。

銀と銅の硬貨が入り混じって、金貨に換算して七枚ほど。オールラウンダーが食した物の、半分の額もなかった。

「折半って言いつつ、自分たちの食事代だけだね……」

圃人野伏が、同情したように貴族令嬢の肩へ手をやる。

これからしばらくの間、オールラウンダーへの厳しい食事制限が一党の中でなされたのは言うまでもない。

十一番目の物語 其の一

曇天の下。左右に広がる森の間を突き抜ける街道を、オールラウンダーは一人黙々と歩いていった。

目指すは辺境の街。彼は今さつき、『仕事』を終えたばかりであった。

それはありふれた、ゴブリン退治の依頼。村の近くの洞窟にゴブリンが巢食ってしまったので、村を襲われ、娘たちが攫われる前に対処してほしい、というもの。

折悪く新米の冒険者たちは出払っており、一部を除いて熟練の冒険者たちもゴブリン退治など眼中にない。

果たしてその『一部』の熟練者として、他方へのゴブリン退治に精を出しているというので、

「だったら、オラがいくよ」

オールラウンダーは二つ返事で応えた。

「ありがとう。助かるよ」

この時に対応に出た監督官は、すでにオールラウンダーの力量をその目に焼き付けているので、彼が単独でゴブリンの巢へ向かうことになんら戸惑いはなかった。

「そういえば……令嬢さんたちはどうしたの？」

それこそ春先以来だろうか。たった一人でギルドを訪れたのを珍しがった監督官へ、

「家に帰った」

オールラウンダーは淡々と告げた。

「……実家に帰らせていただきます、つてやつ？」
「？」

揶揄い半分で放った監督官の言葉を、「それはどういう意味だ」と心底思いつつオールラウンダーは首を傾げる。

このような対応をされると、なんだか振った本人が恥ずかしくなってきた、

「……なんでもない」

と項垂れてしまった。

それでもオールラウンダーは暫く彼女の言葉の意味を探り当てようとしたのだが、やがて諦めて、

「うちから手紙がきたんだと」

監督官へ理由を話してやった。

それは、今から三日前のことである。

収穫祭、そして天下一武道会が終わって落ち着いたころ、貴族令嬢宛に手紙が届いた。

初め、水の街のことを思い出して用心していた一党だったが、封を開けてみれば、送り主の正体は令嬢の父親。

「そーいや頭のお父さんって、病的な親ばかだよね」

赤茶けた髪を揺らして笑う圃人野伏の横で、顔を赤くしながらも貴族令嬢は否定が出来ずにいた。

「ねえちゃんのとうちゃんにあつたことあるのか？」

一党を順繰りに見つめたオールラウンダーが問うのへ、

「この一党を結成した時に、な」

森人の魔術師が、困ったように笑いながら答えた。

「可愛い一人娘が家を出て……しかも冒険者などという、明日をも知れぬ身となったことを心配していな。以前は七日に一回の頻度で、安否を確かめる手紙を送って来たものさ」

「それじゃあ郵送にかかるお金も勿体ないし、お父様の心労も絶えないうことで、少しでも安心材料になればと、一党である私たちがご実家へ行つて、なんとか安心させたんです」

魔術師の言葉を引き継いだ只人僧侶。そこから更に貴族令嬢が、

「それでも、一年に一回はこうして、家に帰ってこい、って手紙が来るんです」

困惑と懐かしさを混ぜたようにして、笑った。

「で、本当なら皆で帰りたいところなんだけど……」

言葉を濁した圃人野伏が、申し訳なきようにオールラウンダーを見る。

「頭のお父さんが勘違いしそうだからさ。悪いけどゴクウ、わたしたちが頭の家に行ってる間、この街で待っていてくれない？」

これへオールラウンダーは、

「さうや」

特に寂しさを覚えることもなく、こくりと頷いた。
かくして、今日に至るわけである。

「なるほどねえ」

話を聞き終えた監督官は、

「お父さんの気持ちも分からなくはないかなあ」

と天井を仰いで呟いたものだが、オールラウンダーにはその意味がよく分からなかった。

……さて。

場面を、冒頭部分に戻そう。

帰路を歩くオールラウンダーの頭頂に、ぽつりと冷たい感覚。

「おっ」

これに気付いたオールラウンダーが空を見上げると、透明で小さな粒が、ひとつふたつと天から落ちてくる。

それはやがて数を増し、瞬く間に土砂降りとなった。

「わわっ！」

いくら常人ならざる鍛え方をしているとはいえ、激しく降りつける雨に対してもへっちゃらというわけにはいかない。

オールラウンダーは両手で頭を庇いつつ、どこか雨宿りに丁度いい場所はないかと、脇に広がる森の中に飛び込んだ。

鬱蒼とした森の中は、天に伸びる木々の葉が飴受け皿となっているためか、雨粒が少ない。しかし、オールラウンダーの道着はすでに濡れ切ってしまった。

別段、裸になることに抵抗のないオールラウンダーなのだが、どうにも街中では裸になるのはいけないことらしい、というのを最近になって理解し、

(どっかで道着かわかしてこうかな)

思いつつ、適当な場所はないかと森を歩くこと三十分ばかり。

気が付くと、オールラウンダーは開けた場所に出ていた。前方には、ぽっかりと口を開けた洞穴もある。

依頼を終えたばかりということもあり、

(あの緑色のやつらがいるかもしれないねえ……)

オールラウンダーは警戒しつつ、

(そうになったら、やっつけてやる。でもって、そこで道着かわかそう)

と決めた。

一歩、また一歩と洞窟の奥へ進む度に、激しい雨音が遠ざかり、ぴちよりぴちよりと水滴が地面へ滴り落ちる音が響く。

(おっかしいな……)

オールラウンダーは首を傾げた。

くんくんと鼻をひくつかせても、ゴブリンどもが放つ独特の異臭が全く伝わってこないのである。

やがてオールラウンダーは、洞窟奥の広間に出た。
出て、

「おっ
」

と声を出した。

そこには、すでに先客がいたのである。

其の二

先客の数は、二名。いずれも漆黒の外套を頭まで被っており、顔までは判別できない。

彼らは角灯を挟んで向かい合っており、何かを口へ運んでいた。あまり外套姿の者に良い思い出が無いオールラウンダーは、

「おめえたち、悪いやつか！」

背に負った細棒を引き抜く構え、大音声で問うた。

これでやつと少年の存在に気が付いた二人が、殆ど同時に視線を向ける。……しかし、それだけ。

彼らは角灯の方へ向き直り、またしても何かを口へ運び始めた。

すっかり拍子抜けしてしまったオールラウンダーは、棒を仕舞つて、

「……なに食ってんだ？」

外套たちの後ろからひよつこりと顔を覗かせて尋ねた。

これへ、片方がゆつくりと振り向き、

「ん」

しわがれた声とともに、右手に持った木皿を差し出してきた。

皿の上には、齧りかけのパンとベーコンが乗っている。

「食うか」

しわがれた声が、オールラウンダーへ問いかける。

「いこのか？」

「いとも」

相手の了承があるなら、とオールラウンダーは遠慮なく皿を受け取り、パンとベーコンをぺろりと平らげる。

「坊主。腹減ってたのか」

しわがれ声が、頭巾を外しながら訊いてきた。

果たして露わになったのは、只人^{ヒューム}である老爺の顔。

頬は痩け、目元には皺が目立ち、鼻から唇にかけて、緩いカーブを描く線が見える。

眉も、後ろに撫でつけた髪も真っ白であったが、髭はきちんと剃られていた。

これをまじまじと眺めた後で、

「さつきまでバケモノ退治してたから」

あつけらかんと言いつつ放った。

ここにきて老爺は、オールラウンダーの首から下げられた黒曜の小板に気が付き、

「坊主、冒険者だったのかえ」

少しばかり目を丸めた後で

「お前さんがねえ……」

頭のとっぺんからつま先まで、値踏みでもするかのようにオールラウンダーを見て呟いた。

これへ、別に少年は抗議の声を上げるでもなく、

「なあ。オラもここで雨宿りしてもいいか？」

老爺へ尋ねた。

「いいとも」

即座の返答に、

「ありがとー！」

にんまりと笑ったオールラウンダーが、そそくさと道着を脱ぎ始める。

すると、

「ちよつ、ちよつと待った！」

老爺が両手を押し出して振り、慌てて止めに入った。

「なんだ？」

「なんだ、じゃないわな。いきなり服なんか脱ごうとしおつてからに」

「でも、雨でオラの道着ぬれちまったから」

「……ああ……」

老爺は、ちらともう片方の外套……子供ほどの背丈をしたのへ目を向け、

「そんなら、これ羽織つてから服脱げ」

そう言つて、自分が纏っていた外套をオールラウンダーへと差し出した。

「あんがと」

受け取りつつ、オールラウンダーは老爺の服装を見た。

どこぞの農夫を思わせる衣装の上には鎖帷子を着込んでおり、更にそこから肩当や肘当てといった物々しい装いをしている。

「じいちゃんも、ボウケンシヤなのか？」

オールラウンダーに問われた老爺は、くすりと笑った後で、

「なあに。しがない商人よ」

「……アキンド、つてなんだ？」

「物売りさ」

「なに売ってるんだ？」

「油さ」

「へえ」

これが洒落をきかせたものとは知らず、本当に油の商人だと信じてしまったオールラウンダーは、器用に外套内から道着を脱いだ。

脱いだはいいが、火が無い。

「しょうがねえや」

そう言ったオールラウンダーは老爺に歩み寄ると、

「悪いけど、これもつててくれ」

「……こうか？」

上下ひと繋ぎになった山吹色の道着の、左右の袖を掴んで広げてみせる。

「うん。サンキュー」

にんまりと笑ったオールラウンダーは、両の掌を上下に構え、

「波っ！」

と叫んだ。

途端、青白く丸い炎の玉が、少年の掌に宿って光る。

「なっ……！」

驚きの余り、老爺は道着を落としそうになった。

それでもなんとか道着を広げたまましていると、優しい温もりが顔に伝ってくる。

「こりや……炎を操る術か？」

「かめはめ波だ」

「……カメカメハ？」

聞き慣れぬ術名に、老爺は頭に疑問符を浮かべる。

と、そこへ。

「……」

先ほど老爺が気にかけていた、一際小さな外套が、音もなく近寄って来た。

外套は、オールラウンダーの掌に灯った炎を、まじまじと見つめている。

その炎が、外套の中から顔を浮かび上がらせた。

少女だ。どこか虚ろな目をした少女なのである。

雪のように白い面の、頬の辺りに切り傷のようなものが見える。

「おめえ、ケガしてるぞ」

何となくオールラウンダーが言うと、少女は慌てて顔を俯け、たまたつとその場を離れてしまった。

「……う？」

ぼかんとしているオールラウンダーへ、

「坊主。心配してくれるのはありがたいが、あいつのことはそっとしておいてやってくれ」

老爺が、重々しく低い声で呼びかけた。

この様子に只ならぬものを感じたオールラウンダーは、

「あ、ああ……」

訳が分からぬながらも、こつくりと頷いた。

其の三

夜になつても雨は上がらなかつた。

「今日は、ここで寝るしかねえわな」

老爺のこの言葉に異を唱える者はいない。といつても、他には少年少女の二人だけであるが。

かくして老爺は、角灯の近くに置いてあつた、竹を編んだ長方形の籠から一枚の毛布を取り出し、

「ほれ」

これを外套少女へと手渡す。

「床は硬えが、まあご愛敬だな」

少女は老爺の手から毛布を受け取ると、そのまま黙つて寝転がつた。

「すまねえな、坊主。毛布は一つしかねえのだ」

「オラはだいいじょうぶだ」

すっかり乾いた道着に袖を通したオールラウンダーが、気丈に笑つて見せる。

少女がすやすやと安らかな寝息を立て始めた。

しかし、老爺と少年はまだ眠気が来ないらしく、じつと角灯で揺れる炎を眺めている。

「実は、な」

老爺が、ぽつりと呟いた。

「おりゃあ、盗人なのさ」

老爺の唐突な告白に、

「ヌスツトって、どろぼうのことか」

とオールラウンダーは問い返す。

「そうとも」

老爺は頷きつつ、少年を見やった。

彼は角灯の炎を難しい顔つきで睨み、右に左にと首を傾けている。

彼は悩んでいた。

泥棒とは他者から金目の品々などを盗む者のことで、それが悪いことだというのは知っている。

知っているがしかし、傍にいる老爺を悪人だと認めて捕縛することを、彼はどうしてか躊躇っていた。

今までに、こんな経験はなかった。

さて、どうしたものか。

頭を悩ませているオールラウンダーを、老爺は苦笑を漏らして見つめながら、

（今日は、なんて日だ）

心の中で、呟きと溜息を吐いた。

オールラウンダーが「一仕事」終えた帰りに偶々この洞窟へ寄りかかったのと同じで、老爺もまた、「一仕事」の帰りに雨に降られ、

「こりゃいかん」

偶々この洞窟を見つけ、雨風を凌いで一夜を過ごすことに決めたのだ。

老爺の仕事の収穫品は、今傍らで眠っている少女一人だけであった。金目のものなど、何一つない。

だからといって、老爺が少女誘拐を趣味としているわけではないし、今頃は彼女の行方を気にしているであろう両親から攫ってきたというわけでもない。

老爺は専ら、ゴブリンの巢を『仕事場』としているのである。

ゴ布林は、略奪種族だ。

腹が空けば近くの村から家畜や農作物を奪い、武器が必要とあらば斃した冒険者たちから奪い、繁殖欲と残虐欲を満たしたければ女を攫う。

更に奴らは、財宝をも奪うことがある。

その価値も知らずに溜め込まれた財宝の数々を盗んでも、咎める者は誰もいない。持ち主であるゴ布林は憤慨するだけで、まさかにギルドや都へ被害の提出をするわけもないからだ。

尤も、老爺がゴブリンの巢に拘る理由はそれだけではない。

老爺は、ゴ布林どもが許せなかったのだ。

弱者からのみ奪い、殺し、女を犯す。

(そんな盗みなら、誰だってできるのだ……)

老爺は、盗みというものに一種の誇りと芸術性を見出していた。

無論、不当な力を以て他者から物を奪い、自分の糧とすることは許される行為ではない。そのことは老爺も理解している。しているからこそ、

(極力、他人様へ迷惑をかけてはいけねえ。盗むなら、阿漕な真似をして私腹を肥やす人面獣心の輩から。そいつらも、殺してはならねえ。そこに女がいたとしても、犯してはいけねえ)

老爺は、盗みにおいてそのような制約を設けていた。むしろこれこそが、『盗みの本道』と信じて疑っていない。そこを行くと、ゴブリンどものすることなすことは『邪道』とも呼べるものではないか。

奪うのは決まって、戦う者が殆どいない農村ばかり。

男であれば殺して食し、女であれば孕み袋として犯し、やはり食う。

(ちくしょうめ。なんて奴らだ……！)

奪われた者たちに対する憐みもあったかもしれない。だが老爺はそれ以上に、自分の信じる『盗みの本道』に泥を塗られたような気がして、それが我慢ならなかったのだ。

かくして老爺は、ゴブリンの巢へ狙いを定めた。

一人で潜る時であれば、手下を連れて攻め入る時もある。老爺は、盗賊団の頭であった。

今日の仕事は、単独であった。

下調べの結果、

「俺一人で十分な規模だ」

ということが分かっていたからだ。

して踏み込んで、十五匹あまりの小鬼と田舎者を殺し、巢の中を探った結果、得られた報酬は一人の娘。

体の至る所に切り傷や打撲痕があったものの、どうやら慰み物にはなっていないかったようだ。

粘り強く事情を聞いてみると、どうやら娘は近くの村から連れさらられて間もなかったらしい。

(なるほど。小鬼どもめ、娘を巢へ引き込んで、宴を始めるつもりだったのだ)

そこへ、老翁が折よく襲撃をかけたというわけだ。
更に老翁は、出身の村の場所を聞いたものだが、娘は何度も頭を振るばかり。

(こりや、焼かれたな……)

娘が今まで住み暮らしていた村は、今や焦土と化している頃だろう。恐らくは村の者たちも……。

(ま、ともあれこの娘の身の振り方も考えてやらねば……)

そうして老翁は、根城へ向けて娘を連れ立って歩き始めたものだが、そこへの驟雨。そして、現在に至るわけである。

其の四

雨が上がったのは翌日の朝になってからであった。

「う……………くつ……………」

目を覚まし、軽く伸びをしたオールラウンダーは、周囲を見てふと気づいた。

「じいちゃんたちがいねえ……………」

洞窟最奥の広間から、すでに老爺と少女の姿が消えていたのである。

「うちにかえったのかな……………」

眩きつつ、外に出たオールラウンダーは眩い日光に目を細める。
今日は一日快晴の兆しだ。

「ん……………？」

辺境の街へ向けて、一步前進した時。オールラウンダーはその鼻をひくつかせた。

犬並の嗅覚を誇る彼の鼻が、かの老爺と少女の匂いを捉えたのである。

「……………こつちだ」

地面へ四つん這いとなり、鼻をひくひくと動かしながら、オールラウンダーは自然と匂いのする方を追いかけていた。

大雨と、それによってぬかるんだ大地は、昨晩までの足音を洗い流

し、代わりに今朝洞窟を発つたと思われる老爺たちの足取りをしつかりと残してくれている。

その足跡と匂いを追って、四時間ばかりが経過した頃であろうか。日はすっかり天の頂まで昇り、今頃ギルドの酒場は昼餉を待ち望む来客たちの対応でんやわんやとなっていることだろう。

雲がゆっくりと過ぎていく空の下、遠くに山を望む丘陵地帯に、その小さな村はあった。

小さく設けられた神殿らしき建物を中心に、七つの家々が点在している。

そのうちの一つで、これは他のより一回り大きな家の前で、オールラウンダーは足を止めた。

畑仕事を終えた農夫や、水汲みをしている老婆が、この少年を珍しげな目で見ている。

外部からの客など、滅多にいないのだろう。

そんな周囲の視線も気にせず、オールラウンダーは家の自由扉を開けて中に入った。

屋内は、外見通りの広々とした空間が広がっていた。

円卓が四つほど設けられており、一つの卓につき四つの丸椅子が設置されている。

他にはカウンターテーブルも用意されており、その向こう側には酒瓶をいくつも並べた棚がある。どうやらここは酒場のようだ。

客場の奥には、恐らくは店の者が寝起きしている空間へと続くであろう廊下への入り口が見える。

……と。その入り口から、ひよっこりと顔を出す者がいた。件の、盗賊の老爺である。

「あつ……！ お前さんは……！」

老爺は、流石にオールラウンダーの来訪に目を見開いて、重ねて持っていた真つ白な皿を落としそうになった。

そんな老爺の背後から、やはり洞窟で出会った少女が、やはり白い

丸皿を持って、顔を覗かせる。

「……お前さん、ついてきたのかえ」

老爺が、溜め息の後に問うのへ、

「うん。ニオイをおつてきた」

オールラウンダーは素直に、しかしどこかぎこちなく頷く。彼とて、再度老爺たちに会ったところで何をしようかなど、考えてはいなかった。

冒険者の役目として盗賊を捕らえるつもりもなければ、老爺と世間話をしに来たわけでもない。

自分でも何がしたいのか、オールラウンダーには分からないでいたのだ。

そんな彼の胸中を察して……というわけでもないだろうが、

「……折角だ。なんか、飲んでいくか」

困ったように笑った老爺は、オールラウンダーを円卓の一席へと誘い、

「お前は、奥で自由に休んでいていいよ」

少女に言いつけておき、自分はカウンターへと入っていった。

慣れた手つきで老爺がこさえたのは、一見するとただの牛乳であったが、

「あまーいー」

一口飲んで顔を綻ばせたオールラウンダーは、これを瞬く間に飲み

干してしまった。

「ただの牛乳じゃねえ。卵に砂糖を混ぜ合わせたのさ」

老爺が、どこか得意げに種を明かしたところで、またもや酒場の自由扉が開いた。

入って来たのは、片や巖のような体軀をした逞しい大男。片や、そんな男の腰元ほどの背丈をした、腰の丸まった親仁。

大男は一瞬、オールラウンダー……その首に下げられた銀の認識票を見て顔を顰めたものだが、やがて何かを思い直したようで、

「ちよいと、お話が……」

老爺に囁き、先に奥へ通じる廊下へと姿を消していった。

これに腰を丸めた親仁が続き、

「坊主。今日はこれで店じまいだ。暗くなる前にお帰り」

最後に、老爺がそう言つて奥へ消えようとするのへ、

「なあー！」

オールラウンダーが呼び止めた。

呼び止めたがしかし、次の言葉が出てこない。

何を言うべきか、彼には分からなかった。

老爺は、どこか優しい目つきで少年の言葉を待っている。

「……また、きていいか？」

結局、少年がひねり出したのはこの一言だった。

それでも老爺は、

「ああ。いつでもおいで」

優しく、柔らかく。少年へ応じると今度こそ奥へと消えていった。

其の五

酒場店主の老爺。巖のような大男。腰の曲がった親仁。大の男三人が額を寄せて話し合っている様を、一人の少女が不思議そうに見守っている。

「ふうむ……」

やがて話が終わると、老爺は深い溜息を吐き、次いで傍にあった煙管を手にし、これを吹かし始めた。

「頭。どうしますっ？」

怪訝な顔で煙管を啜える老爺へ、大男がずいと寄る。

老爺はすぐには答えなかったけれども、少しの間を置いて煙を吐き出すと、

「こんなことなら、あの坊主を帰すのではなかったな……」

呟きざま、舌を打った。これを聞いた大男は、

「すると、頭。あの小僧は、やはり……？」

興奮気味に距離を詰めるのへ、老爺は苦笑いをして頷き、

「黒曜の冒険者様さ。ふ、ふふふ……。俺はな、あの坊主にてめえのことをすっかり喋ってしまったよ」

老爺の告白を聞き、大男は青ざめ、対照的に腰の丸まった親仁は、

「ほほう……」

まるで猫のように目を細め、髭のない顎を撫でつつ、にやにやと笑った。

老爺もまた、楽し気に笑ったものだが、それも一瞬の事。再び気を引き締めた表情となるや、

「おい。紙を出してくれ」

親仁に向かって命じた。

親仁は部屋の隅に置いてあった長方形の箱から、一枚の羊皮紙と一本の羽、そして墨の入った小瓶を取り出し、これを受け取った老爺は、何やらすらすらと紙にしたため始めた。

老爺が書いたのは、『依頼書』であった。

内容は、

「これこれこういう村で、盗賊の一味が村を占領している。至急、冒険者を派遣してほしい」

というもの。

老爺はこの依頼書に丹念に封をして、

「この村にきて早速で悪いが、お遣いだ。この手紙をな、今から俺が言う街にある、冒険者のギルドというのへ届けておくれ」

そう言つて、小さな革袋とともに少女へ託した。

袋は、やけに角ばっている。

封と袋とを受け取った少女は、きよとんとした面持ちとなつたが、

「さ、急いでおくれ。店の裏に馬小屋がある。目一杯に飛ばせば、月が昇るか昇らないかという頃に街につくはずだ。なあに。心配はいらない。ここから南東へ真っ直ぐに馬を走らせればいいのだ。俺の馬

も頭がいい。お前がすっかり跨っていけば、必ず街へ送り届けてくれるさ」

老爺に言い含められ、何が何やら分からぬうちに馬へ乗せられ、

「さあ、頼んだぞ」

老爺の声に応えるように嘶きを発した馬によって、彼女の体は辺境の街へと向かったのである。

これを見送った後で老爺は、

「さて、俺たちも支度をしなくてはなるまい」

そう言って大男へ向き直ると、

「今一度確認するが、あの話は本当なんだな？」

念を押した。

大男はゆっくり頷き、

「確かなことで。村の周りに、真新しい小鬼の足跡が二、三。ありや、王が率いる軍隊かと……」

そう言ったではないか。

この物語でも以前、ゴブリンの『王』が率いる軍勢に纏わる話をしたことがある。

都を攻め落とす、という大きな夢を持ったゴブリンの王は、その計画の第一歩として、辺境の街の近くにある牧場に目をつけた。

この時は、小鬼退治を専門とする奇特な冒険者の察知と、ギルドの冒険者総出での激しい戦いによって、奴らめを殲滅することが出来た。

しかし、今回の場合はどうか。

察するに、小鬼の軍団が攻め入ってくるのは今夜の事。果たして、今は夕刻。時間が無い。

今のところ戦力と呼べるのは、老爺を含めて、彼の手下である大男と親仁の三人だけ。

老爺率いる盗賊団がこれで全てではないのだが、何分にも人数がいるため、各地に『拠点』を張っており、そこへ人員を割いてしまっているのだ。

(今から仲間知らせてとて、とても間に合わぬ……)

老爺はそう踏んでいる。

そこで冒険者ギルドへ協力を要請したわけだが、

(ギルドには小鬼を専門とした物好きがいるとは聞いたが……そ奴が常にいるとは限らん。大体の冒険者は、小鬼相手など見向きもせんだろう。ならば、盗賊の一味が村を占領した……とする方が、少しは食いつきも良くなるはず……)

老爺が依頼書の内容を素直に書かなかったのは、そういった思惑があったからであった。

もはや、村など見捨ててさっさと逃げてしまえばいい話ではあるが、

(あんな薄汚い奴らの毒牙に、堅気の人達をかからせてはならねえ……)

この思いが、老爺を村へ留まらせていた。

「お前ら。最期まで、俺について来てくれるか？」

老爺が、じろりと目を向け問いかけるのへ対し、大男と親仁はさすが頷いたものである。

其の六

雲間を縫って、三日月が煌々と照っている。

その近くでは、緑色に、不気味に光るもう一つの月があった。

一説では、小鬼どもはその緑の月からやって来た……などとされているが、真偽は不明である。

さて……。

件の小さな村の酒場では、黒装束に身を包んだ三人組が、ぎらりと光る白刃を見せつけつつ、

「てめえら、動いちやならねえぜ」

伝法な口調で村人たちを脅していた。

脅し主は、酒場店主の老爺と、その仲間の大男・腰の曲がった親仁の三人である。

「お、親仁さん……。ど、どうして……」

脅されている村人の中の、禿げあがった頭に白髭を蓄えた老人が戸惑いの声を上げるのへ、

「へっ。馬鹿な奴らだ。酒場の店主が、まさか盗賊団の首領だとも気が付かないでなあ」

店主の……。いや、盗賊団首領の老爺が、嘲るように言ったものである。

村人たちの驚愕は、底知れぬものだった。それほどまでに、老爺たちが手にした信頼というものは、大きいものであったのだ。

ある者は目を見開くばかりで、ある者は口惜し気に歯噛みをしている。脅されている中には年端も行かぬ子供もいて、彼らは訳も分からぬままに泣いていた。

ふと、黒装束の一人……大男が窓から外の様子を見て、

「あつ、頭……」

と老爺へ声を掛けた。

闇に紛れての『仕事』を得意とする男の目が、村の外からこちらの様子を伺う黄色い粒の数々を捉えたのだ。

言うまでもなく、これはゴブリンどもの瞳なのである。

(ふむ……ざつと見て……三十というところか。まあ、こんな小さな村を襲うのだ。妥当というところか)

一人気に納得し、頷いた老爺は、

「おい。このド阿呆どもを、地下蔵に押し込んでしまえ」

命じるや、大男と親仁はすぐさま領き、カウンターへと引つ込んだ。カウンター奥の床板は外れやすく出来ており、それを剥がすと地下へ通じる階段が現れたではないか。

「それ。さっさと入らねえか」

大男に急かされ、村人たちは怯えながら足早に階段を下りていく。全員が地下へ向かったことを確認した老爺は、

「おい」

大男へ声をかけ、

「村の人たちが、万が一に抜け道に気が付かねえということもある。お前、一緒に地下へ行つてな。見張り役と見せかけて、それとなく脱

出口を教えてやってくれ」

と命じた。

大男は一瞬戸惑ったが、

「へい」

力強く返事をする、自分も地下へと消えていった。
これを見送った親仁が、

「それにしても頭。大芝居を打ったものだね」

にんまりとして、老爺を見やった。

老爺は鼻を鳴らし、

「細々ながら、平和な時間が長かったこの田舎村だ。小鬼の軍隊が襲って来る、だなんて騒いだところで、戯言だと受け取られかねないからな」

「そこで、本業の盗人稼業を使って、無理やりに村の人達をそれとなく逃がそう、って魂胆だ」

「あいつも、な」

「だろうと思った」

老爺の言う『あいつ』とは、先に地下へ潜った大男のことである。

「あれはまだ若い。それに力もある。抜け道を行った先で、小鬼どもが待ち構えているやもしれぬしな」

「腰の曲がるようになった老いぼれは、さっさと世を離れた方が良いものね」

「……皮肉か？」

「まさか」

旧知の共の如く、微笑み合い言葉を交わした老人二人。

彼らの目は瞬時に鋭いものとなり、それまで村人たちを脅すために使っていた、柄のない、身の反りかえった不思議な形状をした剣を握りしめ、

「さて、そろそろ暴れるかね」

「……死ぬなよ」

「無茶言うな」

その言葉を最後に、二人は老いぼれとは思えぬ素早さを以って、音もなく酒場を出た。

小鬼どもは、まだ村の外から様子を探っているようだったが、やがて村の静けさに安全を見たらしく、無作法な足音を轟かせて突撃を仕掛けてきた。

殿を務めるは、まるで鍋のような形状をした石兜を被った小鬼。こやつは右に左にと指をさし、

（さあ、攻め込め！）

とでも命じたらしく、これを受けた他の小鬼どもが、忌々し気な顔をしつつも、村に点在する小屋へ入ろうとした。

まさに、その瞬間である。

家の屋根から、黒い影が降りてきたかと思うや、一匹の小鬼の頭を踏みつぶし、次いで驚愕の余り動けなくなっている別の奴の首を、

「それっ」

掛け声とともに、煌く銀色の一閃が切り裂いた。

殿の小鬼が、黒い影の除去を命じる。

夜目の利く小鬼どもは、すぐさま影……盗賊団首領の老爺を捉える

や、飛蝗の如く群がった。

一匹が跳び向かって来るのを、

「むんー！」

鉄の籠手を嵌めた甲で弾いた老爺は、そのままもう片方の腕に握りしめた剣を、

「くたばれ！」

迫りくるもう一匹へ突き入れた。

しかし、こうなると隙が出来る。

小鬼にとつて、戦いにおける仲間の死というのは、自分の手柄を上げるための踏み台に過ぎないのだが、それとは別に仲間を殺された恨み怒りが噴出するところが、面倒なのである。

怒り狂い、しかし目先の手柄に胸躍らせた一匹の小鬼が、手にした石斧を振るい上げたのへ、

「ひゅっ……」

と風を切つて、『何か』が飛来した。

その『何か』は小鬼の首筋を正確に捉え、

「GYA、GYAO!？」

小鬼め、もんどりを打って倒れると、すぐに動かなくなってしまうた。

この様子を、少し離れた小屋の陰から見ていたのは、老爺と共に小鬼を迎え撃つために残った親仁。

彼の手には、細長い筒のようなものが握られている。親仁、得物は吹き矢であるらしかった。

(さて。奇跡が起きて、冒険者様たちが来るのを期待でもしようかね)

到底かなわぬ事態を期待しつつ、親仁は矢を筒に詰めた。

其の七

盗賊団の老爺たちが小鬼どもの軍と一戦を交えた、その少し前の事であるが……。

辺境の街の冒険者ギルドへ、息せき切つて駆け込んで来た一人の依頼者の姿を見ることが出来る。

その依頼者は、頭まですつぽりと外套を被つており、腰に巻いた帯には何やら角ばった革袋を吊るし、

「ど、どうしました？」

その様子を見て只ならぬものを感じ取ったギルドの受付嬢へ、

「……！……！」

息苦しさの余り言葉も発せないのだろう。懐から、何やら封筒を一つ取り出すと、これを訴えるような目つきで受付嬢へ差し出した。

すぐさま受付嬢は封を切り、中身を確認する。つい先ほど業務時間が過ぎたばかりなのだが、依頼者のひつ迫した様子を見ては、そうも言っていられない。

慣れた手つきで封を切ると、中に入っていたのは一枚の羊皮紙。そこには、

『そちらのギルドがある街から北西へ真つ直ぐ行ったところに、寂れた村があります。どういうわけか、そこへ盗賊団が押し入りを仕掛けています。どうか、冒険者を派遣してくださいますよう……』

と記されていた。

受付嬢が『依頼書』を読み終えたと知った依頼者は、次いで腰に吊るした革袋をカウンターへと置き、口の紐を解いて中身を乱暴に振り落とし。

金、銀、銅の貨幣の他に、紅玉、翠玉、青玉といった宝石の嵌められた指輪や首飾りがそこにはあった。恐らく、これが報酬なのだろう。

(……?)

しかし、受付嬢は訝しんだ。

依頼書の主が、『寂れた村』の住人であることは間違いないだろう。仮に他所の人間が盗賊団の襲撃を察知したとして、これほど高価な報酬を提示してまで、『寂れた村』を助ける義理も利点もないのである。

だが、それとするならば、『寂れた村』の住民が、金銀の貨幣やら高価な装飾品やらを報酬として差し出しているのも、奇妙である。

長らくこの稼業に身を置いてきた彼女は、『寂れた村』からの依頼者が、ギルドを……ひいては冒険者を頼るためにどのような報酬を差し出してきたかを散々に見てきた。

彼らが示す報酬は、銅貨の山に混じった少しばかりの銀貨と、相場が決まっているのである。

なんとも不釣り合いな報酬。さて、どうしたものかと悩んでいるところへ、

「あつ、おめえ……」

と割り込んできたのは、山吹色の道着を纏った少年。オールラウンダーだ。

彼の姿を見た外套姿の依頼者は、頭の頭をすっぽりと外した。

露わになったのは、瞳一杯に涙をためた、少女の顔。

彼女は、縋る様にオールラウンダーの両手を取り、何かを訴えた。言葉こそなかったが、オールラウンダーは何かを感じ取ったらしく、

「……じいちゃんたちが、あぶねえんだな!？」

その言葉に、少女は何度も頷いてみせた。

「あ、あの……オールラウンダーさん……？」

ただ一人、事態を呑み込めぬ受付嬢が言葉をかけるのへ、

「ねえちゃん！ オラ、こいつの村にいつてくる！」

言うや、オールラウンダーは受付嬢の返事も待たずに外へと飛び出した。

飛び出すや否や、

「筋斗雲っ!!!」

オールラウンダーが夜空へ呼びかけると、彼方から尾を引いて、金色の雲が飛来してくる。

「じいちゃん、ちよつとだけ約束やぶっちゃうけど、ごめんな！」

言うと同時に、オールラウンダーは雲へと飛び乗り、

「それっ！」

掛声を出すと、それに呼応するかのように金色の雲が空へと舞い上がった。

辺境の街の、見張り塔すらも越える高さまで上昇したところで、

「じいちゃんたちの村は……あっちだな！」

真っ直ぐに北西を見つめ、

「よろしくな、筋斗雲！」

雲へ声を掛けつつ、瞬く間に空を駆けた。

金色の雲……筋斗雲が空を突き抜ける速度は、馬が地を往くよりも数倍早い。

あつという間に辺境の街からの光は豆粒ほどにもなり、眼下には鬱蒼とした森が広がるだけになった。

……と。

闇と、木々から生える幾多もの葉との間に、オールラウンダーはあらゆるものを見た。

緑色の小さな怪物どもが、一人の大男へ今にも襲い掛からんとしているのだ。

大男の背後には、怯えたように縮こまる人々の姿もあった。

オールラウンダーは、大男に見覚えがあった。

「じいちゃんの店にいたおっちゃんだ！」

叫ぶや、オールラウンダーはすぐさま筋斗雲を急降下させた。

「くそつたれ……！」

果たして地上では、かの盗賊団の一味である大男が、村からなんとか脱出させた人々を庇いつつ、十五もの小鬼を相手にしていた。

これが大男一人と小鬼十五なら、

(なんでもねえ……)

のだが、いかんせん他人を……それも大勢を守りながら戦うというのは、骨の折れることであった。

うかつに村人たちへ、

「逃げろ！」

とも言えぬ。他に小鬼が隠れている可能性も十分に考えられるからだ。

終わりの見えぬ戦いに大男が舌を打った、まさにその時。

「だりやつ！」

空から、気合声と共にオールラウンダーが飛来し、たちまち小鬼の一匹を殴り飛ばした。

「あつ、お前は……！」

大男が、突然の乱入者に驚いている間にも、オールラウンダー二匹目、三匹目の小鬼を殴り、蹴り飛ばしていく。

気が付けば、十五匹全ての小鬼を、オールラウンダーが斃してしまっていた。

どうやら、他に小鬼どもが隠れている様子もないらしい。

「た、助かった……」

村人たちが、へなへなと腰を下ろしていく一方で、

「小僧。お前が来たということは……あの娘が、ギルドへ来たんだな？」

大男が問いかけるのへ、

「うん。すつげえいそいでるみたいだったからさ。おっちゃんたちになにかあったんじゃないかねえかとおもって」

「……まさにその通りだ。この先の村で、恐らくは頭たちが小鬼の群れ……いや、軍隊とも呼べる規模の奴らと戦っているはずだ」

「……そっか」

「頼む。助けに行つて欲しい。俺も、この人たちを近くの村へ送り届けたら、すぐに加勢に行く」

「うん。わかった。こっちはまかせといてくれ」

力強く頷いたオールラウンダーは、小さいながらも大男には頼もしく見えた。

其の八

(もう、いかん……)

盗賊団首領の老爺は、肩で息をしつつ、絶望に満ちた面持ちであった。

呪文遣いの存在を予見しなかったわけではない。

まさかに田舎者がいるまい、と決め込んでいたわけではない。

村に残ると決めた時から、すでに命を捨てた覚悟……そのはずであった。だが、いざともなると、やはり命を失うことに少なからずの恐怖を覚えるものだ。それが、人情というものである。

自分と共に村へ残ってくれた親仁は、これもやはり息を切らし、自由の利かなくなつた左腕を庇い、それでも感心に田舎者へ敵意の目を向けている。一時でも時間を稼ごうというのだ。

対峙した田舎者が、そんな親父のちっぽけな勇気を嘲り、手にした棍棒……いや、大木をそのまま引き抜いたかのようなものを振り上げた、まさにその時だ。

「GYA!?!」

田舎者が目を見開き、首元を掻きむしるようにしたかと思えば、まるで地鳴りのような音を立て、その場に倒れ伏したのである。

(……ぼ、冒険者か……? いや、いや……それにしても早すぎる……)

老爺も親父も、そして小鬼の軍隊もまた、倒れた田舎者の後方を見やった。

月明かりに照らされ、村へと割り込んでくる影が五つ。

一つ。錫杖をしっかりと握りしめ、しかし強く敵を睨みつけている神官衣に身を包んだ少女。

一つ。狩人装束を纏い、その細腕で大弓を引つ提げた森人。

一つ。民族衣装がやけにしつくりとくる、竜牙の如き刃を構える蜥蜴人。

一つ。さして興味もなさそうに、白くて長い顎鬚を扱きつつ状況を見据える鉋人。

そして最後の一つ。鈍色に輝く鎧で身を固めた、やけに無作法な足取りの只人。

「ほらね。オルクがいたでしょ？ 私の耳が間違うことなんかないんだから」

森人の少女が、得意げに耳を鳴らして言うのへ、

「そうか」

鎧の只人が、やけに不愛想で低い声を以って相槌を打つや、飛びかかって来た小鬼の一匹を、左腕の払いで殴り飛ばした。

彼の左腕には、円形の小さな盾が括りつけられている。

仲間が吹き飛ばされ、しかし仲間意識など皆無な小鬼どもが、都合のいい怒りを湧き上がらせた。

殿の……恐らくは殺めた冒険者の頭蓋骨を頭に被った奴が、何やら指示を飛ばした。

呪文遣いがぶつぶつと呟き始め、その隙を補うかのように、小鬼の波と二匹の田舎者が冒険者たちへ殺到する。

神官少女がより強く錫杖を握りしめ、森人が矢をつがえ、鉋人が小石に紐を括りつけたものを振り回し、鎧男と蜥蜴人が前に出る。

……と、そこへ。

「だりやっ！」

またも、乱入者が現れた。

月夜を背に、常人では決してあり得ぬ跳躍を見せたその者は、橙色

の拳法着に身を包んでいる。オールラウンダーだ。

そのまま小鬼の群れの中心に落ちた彼は、手始めに田舎者へと飛びかかった。

「あつ、あいつ……！」

森人が声を上げるのと、

「ソ、ソンさん！」

神官の少女が驚いたのが、殆ど同時であった。

小鬼には勿論の事、冒険者たちにとつても、オールラウンダーの乱入は衝撃的であつたらしい。

しかし、鎧男に蜥蜴人、鉋人たちの三名はとりわけ驚く様子も見せず、

「世間は狭いものですなあ」

言うや、勇躍した蜥蜴人が刃を振るって三匹の小鬼の首を刎ねた後で、

「まったくだ」

頷いた鉋人の手から離れた小石が、呪文遣いの一匹の鼻柱を打つ。

めつきり数の勢いを失ってしまった小鬼の群れへ、鎧男が容赦なく飛び込んでいき、右手に掴んだ中途半端な長さの剣を持って突き刺し、あるいは左腕に括り付けた盾で殴り飛ばしていく。

二人の女冒険者たちも、すぐさま状況に適応し、森人が流れるように矢を放ち、その後ろで神官は戦況を見守っている。

老爺もまた、立ち上がった。

これを最初に見た森人が、

「ちよつと！　じつとしてた方が良いわよ！」

言つたものだが、老爺はこれを無視し、小鬼の一匹へ飛びかかつて組み伏し、腹部へ短刀を深々と突き入れた。

血に塗れた短刀を引き抜くのと同時に、老爺は屍の手にしていた石斧をふんだくり、更にもう一匹へと近寄り、

「ふん！」

こいつの頭へと、力一杯に斧を振り下ろした。

小鬼の頭と斧が、粉々に碎ける。

「ご老体。素晴らしき手並みですな」

傍まで寄つた蜥蜴人が、その猛々しい姿には不釣り合いなほどに丁寧な口調で褒めるのへ、

「世辞は、こいつらを片付けた後でじっくり聞こうよ」

言いつつ、

「おい。動けるか！」

遠方で、片腕を庇つて座り込んでいた親仁へ声を掛けた。

「すまねえ、頭。動けねえ」

「そうかえ。まあ、少し休んでろや」

数では未だに負けているが、もはや勇氣百倍となつた老爺は、にっこり微笑んでそう言うや、再び小鬼の一匹へと飛びかかった。

三日月が輝く夜空の下、こうして冒険者と盗賊という、不可思議な同盟と小鬼の軍隊との戦いは、僅か十分ほどで決着を見た。
どちらが勝ったかは、言うまでもないだろう。

其の九

「それにしてもあんた、どうしてこんな辺鄙な村にいたのよ?」

小鬼の骸を足で小突きながら、森人の娘が言うのへ、

「ばあちゃんたちこそ、どうして……」

言いかけたオールラウンダーの両こめかみを、

「おねえさん、でしょ?」

威圧のある笑顔と共に、森人の娘が拳骨を据えて、これをぐりぐりと捻った。

途端に、戦いの気が消えた村へ、少年の悲鳴が響渡る。
森人と少年のやり取りを呆れた目つきで見つめた後で、

「坊主も気になるが、お前さん方のことも気になるわな」

鉦人が、顎鬚を撫しつつ老爺たちへ問いかけた。

盗賊団の老爺と親仁は、女神官の奇跡を受けて回復中であつたが、やがて老爺の方が寂しく笑つた後で、

「実は、な……」

と、己の正体をぼつりぼつりと語り始めた。

治療中であつた女神官は吃驚した様子であつたが、鉦人と、そのすぐ傍で聞き耳を立てていた蜥蜴僧侶は眉一つ動かさぬ様子であつた。

「さあ、煮るなり焼くなり好きにしてくれ」

全てを語り終えると、老爺は両腕を広げてそんなことを言いだした。

女神官は更に困惑の色を強め、

「わ、わたしはそんなつもりで助けたわけじゃ……」

老爺たちと鉦人たち。どちらか一方へ、というわけではなく、間に割って入った。

これを見た鉦人道士と蜥蜴僧侶は、互いに顔を見合ったかと思うや、にやりと笑いつつ、

「まあ、な」

と先に口を開いたのは鉦人道士。

彼は、優しい気な目つきで老爺を見やると、

「わしらは別に、盗人を捕えに来たわけではないしなあ……」

眩きつつ、今度は蜥蜴僧侶を見た。

民族衣装に身を包んだ彼は、二度も三度も頷いた後に、

「左様。拙僧らは、野伏殿の耳がたまたま捉えた戦いの音を気にして、この村へ赴いたまでのこと。言わば火中に己から飛び込んで火の粉を振り払ったまで」

そう言って、尻尾を地へ叩きつけると、

「盗人捕縛の依頼は請けておりませぬよ」

これもやはり、優しい声色で言ったものだ。

これを聞いた女神官は、ほっと胸を撫でおろす。

しかし、片や盗賊団の首領である老爺は納得いかぬらしく、

「しかしなあ……」

と唸る。

するとそこへ、オールラウンダーのこめかみを拳骨で挟んだままの妖精弓手が、

「ま、いいんじゃないの」

と会話に入ってきた。

「冒険者がオルクの巢に潜って手に入れた宝をネコババするってのなら問題行為だけど、あなたたちは冒険者じゃないもの」

老爺と親仁の首元を指して言った。

なるほど。一理あることだ。

だが、まだ老爺たちは納得がいかぬらしい。

難しい顔つきをしている老爺たちを、呆れたように見た鉦人道士は、

「それじゃ、こっちの頭目にご意見伺うとするかね」

言うや、彼方で小鬼の骸一つ一つを入念に探っている鎧男へ、

「おおい、かみきり丸や。この盗賊、ギルドへしよつびくかえ」

「興味が無い」

間髪なき鎧男の返答。

妖精弓手も鉦人道士も蜥蜴僧侶も女神官も、あまりに予想通りの答えに思わず苦笑い。

やがて鉦人道士は、

「だよ。うちの頭目がああ言ってるんだ。わしらが手の出しようはないわさ」

これを聞いた老爺は、

「ありがとうよ」

女神官へ礼を述べた後でゆつくりと立ち上がり、

「……いいのか？」

念を押すように尋ねる。

鉦人道士は鬱陶し気に、

「わしらが良いというのだから良いのさ。ほれ。気が変わらんうちに
行った、行った」

まるで犬か猫でも払うかのような手つきとなった。

老爺の心は、漸くに決まった。

彼は親仁を見つめ、親仁もまた、力強く頷いて老爺を見る。

やがて二人は、

「すまねえな」

深く頭を下げた後で、

「坊主。あの娘のことを宜しくと……くれぐれもギルドへ伝えてくれ」

「うん」

こつくりと頷いたオールラウンダーは、何かを言いたそうにもじもじとしていたが、暫くして言葉を決めたらしく、

「じいちゃん。また、あおうな！」

すつと手を差し伸べた。

老爺はこれを握り返し、

「もちろん」

そう言つて手を離すと、親仁と共に闇の中へと消えていった。

「お頭殿。これからも、あくどい者のみを騙られよ」

蜥蜴僧侶のこの言葉が、果たして二人へ届いたものかどうか。

……さて、それから話は一週間の時をまたぐ。

小鬼どもの脅威から逃れた件の村では、『元』盗賊団であった大男が酒場を切り盛りしている姿を見ることが出来る。

店にいるのは、彼だけではない。

あの夜、馬に跨つて大急ぎでギルドへ駆け込んだ少女も一緒であった。

娘はまだしも、大男すら未だに村にいるということは、村民たちは彼の正体を知つてなお、受け入れているということである。

男は、すっかり盗賊稼業から足を洗っていた。

(頭が俺を置いて消えたということは、恐らく、俺に堅気として生きて欲しいのだろう……)

おぼろげながら、首領である老爺の心内を、男は理解していたようである。

今日の客は、一人だけであつた。

「じいちゃんたち、いまどこかなあ」

カウンターの席に座り、牛乳を一気に飲み干したのはオールラウンダーである。

「さて、なあ」

大男は、空になったグラスへ再度牛乳を注いでやりながら、

「おうい。今日はもう店じまいだ。お前も、なんか飲みな」

客場で丸テーブルを拭いている少女へ声を掛けた。

少女は、こつくりと頷き、店の表扉へ、

「閉店」

と書かれた木板を吊るすや、とととととカウンター席に走り寄り、男が注いでやった果実の汁を飲み始めた。

ひんやりとした風が、店内へと入ってくる。

ついこの間まで聞こえていた虫の音は、いつのまにやら鳴りを潜めてしまっていた。

もうすぐ、冬が来るのである。

旅の空でのお話

……や？ 行き倒れかえ？

もし。もし。すっかりしなせえ。……ほ。どうやら息はあるようだ。

……や？ こりや、腹の音か。あんた、腹が空いているのだねえ。おい、親仁。確か袋に握り飯があったはずだが……。

「はい、はい」

ありがとうございます。さ、これをお食べなさい。

……はて？ 握り飯を見るのは初めてかね。……まあ、無理も無からうかな。お前さん、見たところは闇^{ダーク}人^{エルフ}だろうて。コメを食らう習慣なんかなからうて。

ほれ。一口齧ってみておくんない。これはね。焼き上げたコメを丸めて、そこへミソを塗りたくり、軽くあぶったものでしてね。へえ。どうです？ 美味しい？ そりゃよかった。

ところで、お前さん。どうしてこんな道の真ん中で倒れていたのかね。首に認識票をしていないところを見ると冒険者ではなさそうだし……人を見た目で判断するのは気が咎めるが……もしやお前さん、混沌に与する者かね。

……ふむ。まあ、無理に聞こうとは思いませんや。話したくねえのなら、お前さんの胸に秘めていなさるがいい。

ほら、この竹筒もやろう。中には酒が入っている。これから寒くなるからね。あおっておけば、体があたたかくなろうというものさ。

……さて、それじゃあつしらはこいらで失礼させていただきますよ。なあに。別段急ぐ旅でもねえが、ゆつくりしすぎるわけにもいかないのですね。

……どうなされた？ なに？ あつしらについて来ようというので？ 止めておきなさい。こういう時はね、互いが互いを知らないままに別れるのが一番さっぱりとしたものですよ。

……ほう。一飯の借りがある、と？ 律儀なことだ。しかしね。これはこの老いぼれの戯れでやったことさね。お前さんが、そこまで深刻になる必要は……。

ふむ。お前さん、相当義理堅いのだね。……なに？ そんなものじゃない、とね。お前さんの気が済まないから、ついてくる、と。

……ようござんす。それなら、お気の済むまでついてきなせえ。……ただし、あつしらの商売にケチをつけることはなしですぜ。

はて、なんの商売か、ですって。ふふん。人様のお蔵から、金目のものを……ちよい、とね。そうさ。盗み働きがあつしらの商売ですて。

そうさなあ。あつしらも、世間一般でいうところの祈ノンプレイヤーらぬ者なのでしようよ。例えそれが、小鬼どもの巢穴から頂戴するにしても、ね。

ほう。ちよいと興味のあるような目をしなすったね。

そうさ。まあ、他人から取るだけ取って踏ん反り返っているような、あこぎな連中から頂戴することはありますがね。

なんといつても、盗みの本道は、殺さず、犯さず、無い所から盗ま
ず。この三つを守らないことには、話になるめえ。そこをいくと、小
鬼どもはその三つの掟を見事に破っていやがる。犬畜生にも劣る所
業というものさ。

だからね。あつしらはこうして、奴らに思い知らせているのさ。

……？ まさか。正義だとかなんだとか、そんな下らねえもののため
に働いているのではないさね。てめえのやっていることが良いこ
とだとは、一度たりとも思ったことはありませんよ。ただね、横道に
逸れた者というのは、本道へ戻ることが……なかなかどうして難しい
ものだ。だから、こうして……外道は外道なりに筋の通ったことをし
てえと……そう思ったまでのことだ。

ふふん。難しい顔つきとなりましたね。なあに。そんなにややこ
しく捉える必要などありませんや。さっきに述べたのは、飽くまでも
あつしの信条。お前さんはお前さんで、自分の道を進めばよろしか
う。

……ほう。自分の事を、話おつもりになりましたかね？

いいでしょう。この古いぼれに、話せるだけ話してみなせえ。

……へへえ。つい先日にも勇者と相まみえた話、ねえ。面白い。一丁、聞かせてもらいたいねえ。

北方の砦編

其の一

秋に蓄えた栄養を元に獣たちが冬眠をするように、冒険者たちもまた、春から秋にかけての稼ぎをもつて冬を越す。

だが、全ての冒険者がそうであるとは限らない。

世の中には、この季節にのみ発現する迷宮やら宝石の類が存在するし、そもそも寒さを感じない種の冒険者としている。極めつけは、年から年中ゴブリンの身を相手取る奇異な冒険者もいるが、それはまた別の話。

……ともかく。貴族令嬢一党もまた、冬においても活動をする冒険者たちの一端であつた。

オールラウンダーを元いた地へと戻すため、今日も今日とて《^{ゲイト}転移》の巻物を探している彼女たちが今回訪れたのは、辺境の街から遙か北方に聳える雪山……その山裾にある小さな村である。

何故に彼女たちがここへ赴いたのか。その理由を簡単に述べておこう。

遡るは、一週間前のこと。貴族令嬢の父親を宥めるため、女性一党がその実家へと一時帰省したことは、この物語の中でも簡単に触れたことである。

父親からは、

「頼むから、冒険者稼業は止めてくれ」

と懇願されてしまった貴族令嬢であつたが、それでも冒険者としてのあれやこれが板についてきたものか。

(街の酒場に寄ってみましょう。他の冒険者たちから、何か面白い話を聞けるかもしれない……)

そう思いたち、地元の酒場へと立ち寄った。

彼女の地元は、辺境の街よりも規模が大きく、故に酒場で賑わう人々の数もそれなりである。しかし、その時は冒険者の姿はなかった。

期待は出来ぬと落胆した貴族令嬢であったが、それでも店に入った以上、何も頼まないまま出て行くのも失礼というもの。仕方なく隅の方の円卓へ仲間と共に座り、適当に葡萄酒とパン、そして蒸かした芋などを頼んで待っていると、

「ありや。お嬢様じゃございませんか」

そう言つて、円卓へ近づいてくる者が。

彼は、^{ドワーフ} 鉱人であった。

低い低い背丈が、腰を曲げているため更に低く見えるその鉱人は、街で指折りの鍛冶職人である。貴族令嬢が冒険者として旅へ出立する折、防具の一式を揃えてくれたのも彼であった。

老骨のドワーフは、懐かしさに目を細めつつ、

「いやあ……立派に御成なすつたねえ……」

そう言つて、何度も頷いた。

貴族令嬢の方でも、冒険者としての自分の後援者の登場に安心して気が緩み、すっかり現状を老鉱人へと話してしまった。

話を聞き終えた鉱人は、

「ふうむ……」

腕を組み、何かを考えこんでいるようであったが、暫くすると決心した顔つきとなり、

「わっしがお嬢様に教えたというのは、お父様には内緒にしてください」

いませ」

そう前置きして、とある遺跡の話をしてくれた。

それは、神代の頃に鉾人が築いたという、さる北国の砦の事であった。

雪が吹きすさぶ地方にあるその砦は、すでに鉾人たちは撤退してしまい、今はすっかりと廃墟になってしまっているらしい。

らしい、というのは、老鉾人も実際に砦を見たわけではなく、彼の母親から半ば御伽噺の類のようにして伝え聞いたのみに過ぎないからであった。

「ですから、へえ。その砦の場所は覚えているのですが、本当にあるかどうかも分からないので……けれども存在するとなれば、そこは鉾人が築いた砦。何かお宝が眠っていると思いますので……はい。行ってみる価値はあるかと」

そう言つて鉾人は、貴族令嬢が持っていた地図を借り受けると、辺境の街から件の砦までの道筋をスラスラとかきしるしてくれたのである。

かくして貴族令嬢一党は、辺境の街でオールラウンダーと再会を果たすや、すぐさま北方へ向けて旅立ち、そして現在に至るのであった。……だが。

村に入るなり、村民たちが心なしか白い目を自分たちへ向けていると、貴族令嬢たちは気が付いた。

「……私たち、なんか悪いことしたっけ……?」

小声で囁いてくる圃人斥候へ、

「いえ……そもそも、この街でまだ何もしていませんが……」

只人僧侶が、まるで小鬼の巢の真ん中に放り出されたかのように、おっかなびつくりと周囲を見回しながら返答する。

二人の前に行く、長身痩躯の二人組……貴族令嬢と森人魔術師は、

「ふむ。この様子では、我々に宿を貸してくれるだろうか」

「……そうしてくれることを願うしかありませんね」

と言葉を交わしている。

果たして最後尾を歩くオールラウンダーは、

「これ着てるからかなあ」

などと呟きつつ、道着の上に羽織っている物……雪降る前に平野で斃した狼の、肉を取り除いて毛皮にしたのを、二度撫でてみた。

しかし、それは杞憂であつたらしい。

酒場を兼ねた宿屋へ行ってみると、逞しい体つきをした店主の男が、顔を顰めて言い放った。

「部屋は用意できるが、料理は期待しないでくれよ。なにせ、あんたらの同業者が根こそぎ食い物をもつてつちまつたんだからな」

「同業者……？　すると、私たちの他にも冒険者が？」

「数日前からな。……っと、噂をすれば、だ」

そう言つて店主が、窓の外を忌々し気に見た。

釣られて貴族令嬢たちも視線を向けてみると、そこには草臥れた様子で一歩一歩を危なげに進んでいく、一人の娘の姿があつた。

其の二

心身ともに……そして身に着けているものも随分と草臥れた様子の娘を見て、しかし貴族令嬢は、

(おや……?)

と、何か引つかかるものを感じた。

その要因は何かと反芻する中で、彼女は外を歩く娘の中に、どこか上品めいた雰囲気を感じ取ったからだ、ということに気が付く。

途端、同じく外を見ていた店主の男が堪らず舌を打ち、

「北の山にゴブリンが巣を張ってるから、冒険者に討伐を依頼したんだが……奴ら、食料と材木を要求して来て、それが出来なけりや依頼はしねえ、と言ったもんだ」

俺たちだって、冬を越す蓄えは必要なのによ。

恨みごとのように放った店主の一言は、しかし貴族令嬢の耳には入ってこなかった。

彼女は、惹かれるように外の娘冒険者を目で追っていたのだ。

娘は、村の中で一番大きな家の前まで行くと、力なくその入り戸をノックした。

少しすると、白髭を蓄えた老人が出てきて、驚いたように娘を迎える。

それから、娘と老人はいくらか言葉を交わしたようであったが、突然に娘の方が頭を下げた。

これを見た老人は、呆れた表情をし、それでも腕を組んで何かを考えているらしい。

暫くすると、老人は厳しい顔つきで首を横に振った。

娘は、まだ頭を上げぬ。

これに見かねたのであろう。老人は、室内から様子を見ている貴族

令嬢からも分かるほどに大きなため息をついた後で、徐に娘の横を通り過ぎ、てくてくとどこかへ歩き始めた。

やがて、老人は宿まで来ると、

「ちよいと、ごめんよ」

まさに、宿屋の戸を開けて中に入って来た。

貴族令嬢は、老人の家の前で立ち尽くしている。

「村長さん。もしかして、またですかい」

店主の男が、老人へそう問いかけた。

老人……この村の村長は、貴族令嬢たちを一瞥して、驚きと喜びと困惑が入り混じったような顔をしたけれども、また店主の男へ向き直り、

「すまんのお……少しばかりでいいんじやが……」

どこか申し訳なさそうに頭を下げる。

店主の男は、苛立たし気に頭を掻きむしった後で、受付のカウンターを出て、酒場の機能を備えたホールのある扉を開けた。

そこは、薪やら非常用の食料やらを溜め込んでおくための倉庫であつた。

店主の男は、そこから両手いっぱい薪を抱え込み、そして積み重ねたその上に乾いた肉やらパンやらを乗せ、これを一旦はカウンターへと置き、手慣れた様子で背囊風の革袋へと詰め始めた。

この様子を見ていた貴族令嬢は、

「これは……彼女へ？」

窓の外にいる娘を指して、村長へ問うた。

老爺はしかめっ面のまま領き、

「小鬼ども相手に、兵糧攻めで使うそうですじゃ」

答えつつ、貴族令嬢たちの胸に下がる認識票を見て、

「よもや……お前さん方も、小鬼を退治しに来た類でしょうや？」

と、逆に問うてきた。

「あつ、いえ……そういうわけでは……」

貴族令嬢が言い淀んでいる間に、

「そら。あの娘っ子、呼んできな」

物品を詰め終えた店主の男が、三つほどの背囊をカウンターへと置いた。

これを見た村長は、溜息を一つするや、外に出て、自宅の前にじつと立ち尽くしている娘へ声をかけ、これを宿屋へと誘う。

屋内へ入ってきた娘は、貴族令嬢たちの姿を……そして胸に下がる認識票を見るや、目を見開いたものの、

「さあ、これで限界ですじゃ。どうか、小鬼どもを……」

という村長の言葉以外に何もないことに、どこか落胆したようで、がつくりと肩を落とすつつ、三つの背囊を、それぞれ背と胸に一つずつ。そして最後の一つを腕に掴み、

「ありがとう……ごいしました……」

深く深く頭を下げるや、宿屋を出て行ってしまった。

「おい。今のねえちゃん、もしかしてこれから山登るのか？」

ふと、オールラウンダーが村長へ問うた。

翁は、この純粹無垢たる少年へ、

「ああ。そのようじゃが……」

と口ごもりつつ答えた。

瞬間。

オールラウンダーは宿の外へ向かって駆けだした。

「ゴクウ！ どこ行くのさー！」

圃人斥候が呼びかけると、

「オラ、あのねえちゃんてつだつてくる！ こんなさみいのに一人で山なんか登ったら、死にしまうもん」

オールラウンダーはそう答え、宿を出て行ってしまった。

「……だ、そうだが。どうする？ リーダー」

森人魔術師が、ちらと横目で貴族令嬢を見る。

彼女の決断は早かった。

「……勿論。するべきことは一つ、です」

其の三

「おおいー！ そののねえちゃんー！」

背後から迫る大声を聞き、娘……令嬢剣士はびくりと肩を震わせ、慌てて背後を見た。

声の主であるオールラウンダーは、剣士の隣に並ぶや、

「おめえ、今から山に登るんだろ？ だったらオラが荷物もってやる」

言うや否や、剣士の手から背囊を引つ手繰るようにして抱えた。

いきなりのことで混乱している剣士の元へ、

「ちよつと、ゴクウー！ 毎度のことだけど急に動きすぎだってば！」

澆漑とした声とともに駆け寄ってくる、四人の冒険者たち。

その中で先頭を駆けていた圃人斥候が、

「だいたいさあ……もう、夜に、なつちやう、じゃん。山に、登るのは、明日の、朝でも、よくない？」

息を切らせて、剣士とオールラウンダーへ訴えるような視線を送る。

だが、娘の決意は揺るがぬものであった。

「……仲間が、待っていますの……」

蚊の鳴く様な声を、ようやくと剣士が絞り出す。しかし、その目には爛々たる光が宿っていた。

それでも、圃人斥候はなんとか雪山の行軍を止めようとする。

怖気づいているわけなどではない。

もうすぐ日が暮れようとしている。

自分たちは、長い旅を経てようやく村に辿り着いたばかりだ。

それに村長たちの話から察するに、剣士が今から向かおうとしているのは、ゴブリンどもが巢食っている罅の近く。

ただでさえ消耗している自分たちが、雪の中を山に登れば更に体力を失うことは必至。その中でゴブリンどもと一戦交えることになれば……。

一度、ゴブリンどもの邪欲に触れかけただけに、圃人斥候は慎重であつた。

しかし、剣士とて退く様子もない。

だからと言って放っておくわけにもいかない。

どうしたものかと手をこまねいているところへ、ずいと貴族令嬢が前に出た。

彼女は、剣士の肩にそつと手を置き、

「お気持ちは、痛いほど分かります。ですが、今は……いえ、今だからこそ体を休める時です。そうでしょうか？」

優しく声をかけた。

剣士は、じつと貴族令嬢を見つめていたが、やがて諦めがついたらしく、力なく項垂れ、こくりと頷いた。

貴族令嬢は、そんな娘の肩を優しく抱き、宿屋へと引き返して行った。

店主の男は、再び戻つて来た冒険者たちに少しばかり驚いたようであつたが、

「二晩の部屋をお願いします。食事は結構ですので」

貴族令嬢がきつぱり言うのへ、

「い、いや……そういうわけにもいかんでしょう」

そう言つて、夕餉として鉢一杯に積まれた蒸かし芋を提供してくれた。

村の現状を知った冒険者たちは……殊に剣士などは、とてもではないが芋を食う気にはなれなかったが、

「食わねえと、おっちゃんたちに悪いだろ」

芋を頬張るオールラウンダーの言葉に一理ありと、彼女たちも徐々に食事へ手を付けて行つた。

やがて食事が終わり、村内にある露天の温泉へと浸つて体を温め、明日の登山に備えて各々は眠りに就いた。

……いや、暗き闇の中、身支度を整えて宿を後にする影があつた。剣士だ。

彼女は、やはり三つの背嚢を腹と背と腕にし、

「……………ごめんなさい」

宿を振り返つて頭を下げ、力強く雪を踏みしめた。

……と。

「おい。あぶねえつていったろ」

そんな剣士を呼び止める声。

慌てて振り返つてみると、そこには一人の少年が。オールラウンダーである。

彼は、いつもの道着の上に狼の毛皮を纏い、

「オラがいっしょにいつてやる」

言うや、やはり先と同じように、剣士が持つ背嚢を強引に持った。

「……どうして？」

剣士の問いかけに、少年は淡々と答える。

「オラだって、ねえちゃんたちが山の中でふるえてたら、ほつとけねえもん」

すっかり背囊の全てを持ってしまったオールラウンダーは、

「さ、いこうぜ」

いつものまにやら先へ進み、振り向いて剣士に声をかけた。

暫くは呆気にとられていた剣士も、やがて瞳を鋭くし、唇をかみしめると、しっかりと頷いてその後続いた。

幸い、この夜は吹雪く様子もなさそうだ。

貴族令嬢たちが二人の失踪に気が付いたのは、翌朝になったのである。

其の一

「そ……そんな……」

麓の村の北側に聳える、雪山の一角。白い雪肌へぼつかりと開けられた洞穴……その入り口を見て、令嬢剣士はがっくりと膝から崩れ落ちた。

寸^{ずた}となった天幕。その少し先には、恐らくは天幕の主が障壁として設けたのであろう。木の柵が乱暴に打ち破られ、深い雪へ穿たれたそれに、三人の冒険者の亡骸がこれ見よがしに括りつけられていた。

一つ。壮年の只人。

一つ。小柄な（彼らの種は殆ど小柄だが）圃人。

一つ。圃人よりは頭一つ分大柄な、屈強な体つきをした鉋人。

いずれの骸も、猿股一つ身に着けることすら許されず、厳しい寒風へと晒されている。

虚脱しながらも、令嬢剣士はしっかりとその骸を見つめていた。

「……ねえちゃんのともだちか」

やはりこれも、しっかりと骸を見つめたオールラウンダーが、静かに問うた。

剣士は、少しばかり戸惑った様子を見せたものだが、やがてその問いかけにこっくりと頷く。

「……そっか」

すると、何を思ったか。オールラウンダーはゆっくりと骸へと近づき、これを拘束していた縄を解いてやると、

「ほんとは村までつれてってやりてえけど……いっぺんに三人はつれ

てってやれねえからな」

言いつつ、彼は手で雪を掻き、更に顔を出した地面を掘り、そうして三つの穴を作ると、それへ冒険者たちの骸を丁寧に埋葬し始めた。令嬢は、最初こそぽかんとこれを見やっていたが、すぐさま決意を秘めた顔つきとなり、

「……私も……！」

と、オールラウンダーの隣に立ち、仲間を手厚く葬った。
……かくして。

「オラ、これから中に入って、あいつらをぶっ飛ばす。ねえちゃんは？」

オールラウンダーが尋ねるのへ、

「……勿論、行きますわー！」

決然たる表情となり、頷く。

「よしー！いくぞっー！」

号令と共に、二人の冒険者は洞穴へと入り込んだ。

内部は、入つてすぐに下りが生じ、かと思えばすぐに上がっている。下りの底では、泥水が溜まっていた。恐らく、外から吹いてくる雪が解けて、土と混じったものなのだろう。

ゴブリンが割り貫いた穴にしては、随分と工夫が施されている。
……いや、それだけではなかった。

下りの底へ辿り着いた時、先頭に行くオールラウンダーが鼻をひくつかせた。

「……っ？ どうしましたの？」

令嬢剣士が首を傾げるのへ、

「血だ……。血のニオイがする」

言うや、少年は足元の泥水を見つめ、そして無造作にそれへ手を突っ込んだ。

途端、

「……やっぱり！」

声を上げたオールラウンダーは、水から手を引っ込める。

「トゲだ。水の中に、トゲがある」

その言葉に驚いた令嬢剣士は、腰に差した突剣を抜き、これで水を掻きまわしてみる。

伝わってくるは、こつこつとした硬い手応え。

泥水の濁りで隠蔽された落とし穴とでも言うべきか。オールラウンダーが血の臭いを嗅ぎ取ったということは、何人かはすでにその毒牙にかかったものらしい。

令嬢剣士は、改めてゴブリンどもの狡猾さに身を震わせつつ、恐る恐る水たまりを避けた。

こうして二つ三つと勾配をクリアした後で、二人はやっと洞窟の本道へと入った。

どうにも穴の開き方は天然のものではないようで、荒々しさを感じさせる。かといってすぐにでも崩落しそうな気配はなく、なるほどゴブリンどもが粗雑な道具で掘ったのが丸わかりである。

しかし、内部は複雑に入り組んでいるというわけでもなく、暫くは

道なりに進んでいくのみ。

(……どこかに見落としている道があるのかしら?)

などと令嬢剣士が考えを及ばせたところで、二人は丁字路へと差し掛かった。

「どっちに行けばいいのかしら……?」

ゴブリンの恐ろしさを意識し、さすがに慎重となった令嬢剣士がオールラウンダーへ尋ねる。

彼は、またしても鼻をひくつかせ、

「こっちだ。こっちに、あの化け物がいっぱいいる」

そう言つて右側の道を指した。

これを聞いた令嬢剣士が、身を強張らせる。

果たしてその様子を察したのか。

「オラひとりでいってこようか?」

オールラウンダーが、大したこともないように言った。

この軽さが、

「そつ、そんなわけにはいきません!」

という言葉をも、令嬢剣士に吐かせてしまった。

言ってしまった以上、もはや後戻りはできなかった。

其の二

丁字路右手を駆け抜けた先。天井高く、奥行きもいくらかある大広間で、ゴブリンどもは円匙スコップや鶴嘴を手に、冒険者に向けての奇襲用の穴を穿っていた。

めらり。オールラウンダーが手にした松明の明かりが、彼らへも届く。

これに若干の眩しさを覚えるとともに、奴らは憎き侵入者の存在を認め、罵りの咆哮を上げた。

令嬢剣士が、ぶるりと体を震わせる横で、

「よしっ！」

背にした朱色の棒を引き抜いたオールラウンダーは、勇んで広間へ勇躍した。

左手に松明。右手に細棒。あまり言い組み合わせではないものの、オールラウンダーは片手間に棒を振り回し、着実にゴブリンどもを仕留めて行く。

明かりの中で見えたゴブリンの総数は、計十七。そのうちの五匹が、すでに少年によって倒されていた。

(はやく……！)

身のこなしは勿論の事、襲撃を実行へと移すまでの迷いのなさも、令嬢剣士にとっては目を見張るものであった。

驚きこそしたものの、彼女はその場から動かない。

竦み上がってしまったわけではない。

広場に蠢くゴブリンどもを見て、

(今、わたくしが出て行ったところで……数に圧されるのは明白……)

そのことを自覚したからこそ、あえて狭い広間の入り口に立ち、ゴブリンどもが強制的に少数になる状況での戦いに備えているのだ。
やがて……。

「やっぱこれもつてるとやりづれえな……」

しげしげと松明を見つめたオールラウンダーは、何を思ったかそれを高々と空へ放り投げてしまったではないか。

くるくると空を回る松明の灯が、それでも弱々しく広場を照らす。ゴブリンどもの、そして令嬢剣士の視線までもがそれに集中する間に、オールラウンダーが姿を消した。

いや、風を切る音だけがする。

常人では決してなしない速度で動くオールラウンダーの姿を、捉えられる者などこの場にはいない。

果たして、松明が天井ギリギリへと昇った時、すでに姿なき敵によつて八匹のゴブリンが壁へと吹き飛ばされ、絶命していた。

困惑の声を上げたゴブリンどもが、そこでやっと広間入り口に立つ令嬢剣士の存在に気付き、

(あいつだ！ あいつを人質にとれ！)

などと思いついたのだろう。彼女へ殺到していく。

だが、この場において姿見えなき敵を後回しにすることが、一番の愚策であることに彼らは気が付かなかつた。

むしろ、広間で分散しているよりも、令嬢剣士目掛けて集中してしまつたゴブリンたちの前へ、

「ばあっ！」

突然にオールラウンダーが姿を見せた。

一瞬、ゴブリンたちの動きが止まる。

……と。

オールラウンダーは素早く両掌を腰元で重ねると、

「波っー！」

これを、颯さっと前へ突き出し、青白い光を放った。

必殺の《かめはめ波》。ゴブリンたちを呑み込んだそれは、塵一つ残さず、洞穴の壁を更に突き進み、やがて明滅する。

「ふう……」

一息ついたオールラウンダーは、折よく落ちてきた松明を掴み、炎が消えていないことを確認してから、

「おい。だいじょうぶか？」

入り口で、ぽかんと口を開けている令嬢剣士を気遣った。

「え、ええ……」

なんとか返事を絞り出した令嬢剣士は、ふと広間へと目を移し、ゴブリンどもが手にしていた得物を見た。

円匙。鶴嘴。巢穴の機能拡張のために用いられた物は、そのまま武器としても流用しやすい。

大方、あの寒村から奪い取ったものであろうが……。
ときて、令嬢剣士は目を開いた。

村から奪ってきた……つまりは只人が生成したにしては、随分と造りが粗いのだ。

まるで、金属精錬の素人が見様見真似で作ったかのような……。
では、その素人は誰か。

考えられる可能性は、ただ一つ。

(まさか……ゴブリンが、金属の精錬を……?)

前代未聞の話である。

他種から奪い、我がものとするのみのゴブリンが、自分から何かを生み出すことなど……。

だが、現に目の前にある、この造りの粗い道具の数々の説明をなんとするか。

認めなければならぬかもしれない現実と、認めたくない思い。それらを見る見るさせているうちに、

「なあ。さっきの分かれ道の左つかわにいつてみようぜ。まだあいつらがいるかもしれねえ」

一通り広間のゴブリンどもの死亡確認を終えたオールラウンダーが、令嬢剣士へ声をかけた。

これによつて現実に戻った彼女は、

(そうだ。まだ……まだ終わったわけじゃない……)

思い直し、気を引き締めた。

其の三

所は変わり、丁字路左側を行った突き当りの部屋。

腐りかけた扉を粉碎して中へ踏み込むと、広がるはまたしても広々とした空間。

きちんと間隔を置いて盛土が並び、その最奥には長方形の大岩が設置されている。

かくして、その岩の上には……。

「あっ……い！」

気付いた令嬢剣士が、真っ先にそれへ駆け寄る。

燃えるような赤髪をした、長耳の女性。

半森人ハーフエルフの特徴を備えた彼女は、糸纏わぬ姿で岩の上に横たわっていた。

「大丈夫ですか!？」

必死の面持ちで令嬢剣士がその身を揺すぶると、僅かに半森人の唇が動き、なにかもごもごと口にする。どうやら辛うじて息はあるようだ。

「このねえちゃんも、友達か」

オールラウンダーが尋ねると、令嬢剣士は力なく頷き、

「最後の、一人……ですわ」

と答える。

「……そっか」

途端、オールラウンダーは羽織っていた狼の毛皮を脱ぎ、これを半森人へ着せてやり、さらに自身の帯を解いて、彼女の腰元へ巻いてやる。

そうしておいて自分の道着には、元より生えていた尻尾を巻きつけ、代用としていた。何とも器用なものである。

毛皮の温もりによる効果か。半森人は、がたがたと震わせていた体をすっかり落ち着けた。それでも今だ小刻みに揺れるのは仕方もないことだ。

「ほかに部屋もねえみてえだし、村にかえろうぜ。そのねえちゃんもさむくて死んじゃまう」

オールラウンダーに言われ、令嬢剣士が半森人の体を抱き起こした時であった。

汚物に塗れた赤髪が揺れて、刹那にうなじが露出する。そこには、奇怪な図形の焼き印が施されていたのだ。

「……？」

その焼き印の示すものこそ分からなかったが、果たして瞬間、令嬢剣士は一つの可能性を見出し、今一度空間を見回す。

規則正しく並んだ盛土が、椅子の役割をするならば。

最奥に置かれた岩が、祭壇を意味するならば。

その上に横たわっていた半森人は……。

「生贄……」

その眩きを、令嬢剣士は首を振って否定したかった。

金属の精錬をするゴブリン。

邪教を信仰するゴブリン。

そんなもの、今までに見たことも聞いたこともない。
そしてなにより。

(この洞窟に……神官と思わしきゴブリンはいなかった……)

入口から丁字路までの道に、枝分かれの部分など一つもなく。
先に襲撃をかけた広間においては、いずれも手に手に武器を持っ
た、一般的なゴブリンばかりが相手だった。

この空間のように、礼拝堂の趣を入れるだけのこだわりがあるの
だ。神官衣を着て、気取る個体がいたとしてもおかしくはない。

現に、洞窟入り口には鉾人僧侶の骸があり、彼の衣服は剥ぎ取られ
ていた。

(少なくとも……神官の役割を持ったゴブリンが、他の場所にいる
……?)

令嬢剣士の体が、かたかたと震えた。

寒さのせいではない。

(ありふれたゴブリン退治の依頼とばかり思っていた……)

村の近くの洞窟に潜むゴブリンたちを殲滅すれば、それで終わり。
等級を上げ、功名を得るための第一歩。そう思っていたのに。

他の冒険者たちの噂とは違うゴブリンの一面。変わり果てた仲間
たち。そして背後に見えた、もっと大きな闇。

かくして令嬢剣士は、冒険者として夢見た明るき道が、全くの偽り
であったことを思い知った。

駆け出しの、白磁の身が首を突っ込んでいい案件ではなかった。
しかし、今更逃げる事が出来ようか。

思った以上にゴブリンが怖かったので逃げ出しました。実際がど
うであれ、そのような冒険者の評判など地に落ちたも同じ。

かといって、帰るべき名のある家は、飛び出したつきりで捨てたも同然。

今の自分には、何も無い。

(もう、どうしたらいいの……?)

不意に零れ落ちそうになった涙を、令嬢剣士は素早く拭った。もたれ掛かった半森人が、苦しそうに呻いたからだ。

(そうだ。今は、早く彼女を安全なところへ……)

意を決し、彼女は一步を踏み出す。

オールラウンダーは、その様子をじっと見守っていたようであった。

……果たして。

外へ出てみると、鉛色の雲の合間から、なんとか陽光が差し込んでいる様子であった。

雪こそ振っていないが、この中をちんたらと下って村へ行けば、確実に半森人は凍死する。

何か打開策は……。

そう思っ手て手をこまねいていると、

「ううん……。一回目だけど、しょうがねえ。ねえちゃん死んじゃうもんな」

何やら令嬢剣士の隣で独り言ちたオールラウンダーが、

「筋斗雲!!」

高々と、声を空へ向かって投げかけた。
するとどうか。

鈍色に光る雲をすり抜け、こちらへ迫る金色の雲。

一見すると綿菓子のような可愛らしい外見をしたそれは、オールラウンダーの目の前まで来て急停止した。

少年は、これへぽんと飛び乗ると、

「ほれ。こつちにわたして」

と、呆気にとられる令嬢剣士から気を失っている半森人を受け取る
と、これを前に抱え、

「ねえちゃんはオラの背中にひつついてろ。筋斗雲はよいこじゃねえ
とのれねえんだ」

そう言つて、令嬢剣士に背中を見せた。

恐る恐るといった風に彼女が少年の首元へ手を回すと、

「それっ！」

快活な声に従つて、金色の雲……筋斗雲は瞬く間に雪肌の山を眼下
に、空を駆けたのである。

「人を乗せる雲なんて……おとぎ話でも聞いたことありませんわ……
！」

「へへっ。筋斗雲つてんだ」
「キントウン……」

聞き慣れぬ奇妙な雲。その触り心地がふと気になった令嬢剣士は、
そつと手を伸ばしてみる。

だが、彼女の細やかな指先は、雲の表面をするりと突き通つてし
まった。

「!!」

慌てて手を引つ込める令嬢剣士を見て、

「ははっ。いったろ？ 筋斗雲はよいこじゃねえとのれねえ、って」

「……」

心に邪念が無い「よいこ」を密かに自負していた令嬢剣士は、むすりと頬を膨らませた。

と、まあこのようにして一行が麓の山へ着いたのは、物の数分かつた頃。

しかし、僅かばかりの和やかな時間は、村の家々から立ち上がる黒煙によって、打ち破られることになる。

其の四

村の入り口へと下降した筋斗雲は、主たちを地へと立たせるや、空の彼方へと消えてしまった。

これへ、

「ありがとなー！」

手を振って見送ったオールラウンダーは、すぐさま真剣な表情となり、

「ねえちゃんはどこでまっつてくれ」

言うや、抱えていた半森人を令嬢剣士へと預けると、勇猛果敢にも村の中へと飛び込んで行った。

……が、彼はものの十分程度で戻って来たものである。

勇ましかった表情は平時の穏やかな……というより、何やら拍子抜けしたかのようなものとなり、果たして彼の後ろには村長が続いていた。

「おお。そちらの冒険者殿も戻っておられたか」

村長は、どこか疲れ切った表情で一行を迎え、そして令嬢剣士が支える半森人の様子を一目見て、

「ここで立ち話をしている場合ではなさそうですね。さ、こちらへ」

そう言って、宿屋へと導いてくれた。

道中、令嬢剣士を見た。

いくつかの家々の外壁や屋根が崩れ、壊され、恐らくはその住人なのだろう。額や腕に包帯を巻いた人々が茫然自失という態で家の

前に立ち尽くしている。

かくいう先導する村長も、右頬には切り傷があり、額から右目にかけて包帯を巻いていた。

もはや、敵襲があったことは明白である。

(やはり……別のゴブリンの群れが……?)

などと令嬢剣士が至高を巡らせているうちに、一行は宿屋へと着いた。

店内は少しばかり騒がしかった。というのも、ロビーと酒場とを兼ねたスペースには円卓や椅子の類が隅の方に寄せられ、そこへ厚手の毛布が床を隠すように敷かれており、その上には痛々しい傷口を露わにした村の者が座り込んでいたのだ。

殆どが、若い男である。

彼らの傷口を見ているのは、少しばかり年の離れた二人の少女だ。

一人は十六歳前後。もう一人は、十に至るか至らぬかという年頃。

その顔立ちにどこか似通ったものを見るに、どうやら二人は姉妹のようだ。

「あれが、村にいる唯一の薬師でしてな。……と言っても、つい先日両親を流行り病で亡くし、その後を継いだばかりで……」

そう説明してくれた村長は、薬師見習いの娘で姉の方を呼びつけ、何やら耳打ちをした。

これを聞いた娘は、緊張の面持ちで頷くと、

「さあ、こちらへ……」

村長に代わって、一行を二回へと誘う。

階段を上がり、廊下の突き当りの部屋まで来た娘は、そこにある一室へと入ると、

「その……男性の方は、ご遠慮願います……」

申し訳なきように、オールラウンダーを見つめた。

ここへきて、令嬢剣士は村長や娘の配慮に気が付いた。

半森人の憔悴しきった様子を見て、更に令嬢剣士とオールラウンダーが小鬼どもの巣穴から帰って来たのだろうということを推察し、おおよその検討をつけたのだ。

すなわち。単に傷を負ったのではなく、小鬼によつて尊厳も何もかも奪われたのだろうということを……。

そういうわけでオールラウンダーは、訳も分からぬままに部屋から追い出された。

「なんだってんだ……？」

頭上に疑問符を浮かべながら階下へと向かおうとするオールラウンダーへ、

「あつ、やっぱりゴクウだ……！」

と、背後から声を掛ける者が。

圍人野伏であった。

麻の布一枚を纏ったの目の彼女は、右腕を力なく下げ、引きずるようにして歩み寄ってくる。

途中、ぐらついて倒れそうになったところをオールラウンダーが支えてやった。

「ありがとう……」

「ひでえケガだ……。どうしたんだよ？」

「それがさ……」

圃人野伏は、悔しさを顔いっぱいに表示しつつ、ぽつりぽつりと語り始めた。

……それは、オールラウンダーと令嬢剣士が小鬼どもの巣穴へと向かった、二時間ほど後の事であったが……。

「ゴブリンの群れが村を襲いに来たんだよ……」

これを最初に発見したのは、村の猟師だった。

ここ最近の不穏な気配を案じ、簡易な櫓を建てた彼は、そこから村の周囲を見張っていたのである。

果たして、奴らが来た。

「ゴブリンだあっ!!」

大声を上げつつ、櫓に設置した鐘を叩いて村民へ敵襲を伝えた彼は、すぐさま弓矢を取って、群れの先頭めがけて矢を放とうとして……突如、ゴブリンの群れから仄かな光が灯ったかと思うや、それが球状となって猟師へ迫って来たのだ。

光の玉は、そのまま櫓の中ほどに当たると、激しく爆発した。

すでに戦闘準備を整えて外に出た貴族令嬢たちは、崩れ落ちる櫓を目にし、驚愕こそしたものの、

「GROOOOB!!」

村へと雪崩れ込んできた小鬼どもを見て、すぐさま臨戦態勢になった。

見たところ呪文遣いや田舎者、英雄や王といった類の変異種はおらず、このまま殲滅かと思われたが……。

「GROORBA!!」

叫び声をあげ、戦場へと乱入してきた一匹の個体を見て、さすがに彼女たちは目を見張った。

通常の小鬼どもより背が高く、かといって田舎者ほど大柄でもない……そう。平均的な只人の成人男性とぴったり一致するような体つきをしたゴブリンが、そこにいたのである。

「私が出ます！ 援護を！」

叫んだ貴族令嬢が、長剣を斜め上から斬りかかるのへ、そのゴブリンはひらりと後ろへ跳び、次いで弧を描くようにして跳躍し、瞬く間に彼女の背後を取った。

「あつ……」

と叫ぶ間に、ゴブリンはその腕で貴族令嬢の首を絞め、まるで人質を取ったかのように、じつと圃人野伏たちを見た。

暫く硬直状態が続き、遂に痺れを切らせた圃人野伏が、

「頭を離せっ！」

太もみに巻いたベルトに挟んでいた短剣を引き抜き、ゴブリンへ迫った。

「馬鹿っ！ 闇雲に動くな！」

森人魔術師が叫ぶのと、只人僧侶がなにかを呟くのと殆ど同じタイミング。貴族令嬢を人質にとったゴブリンが、かぱりと口を開けた。そこへ、眩い光が集中していくのが見えた。相手へ迫る中で、

(これって……ゴクウのカメハメハ……!?)

圃人野伏が目を見張ると、ゴブリンの口から、光の玉が射出された。もはや止めの効かない圃人野伏の背後から、

「《ヤクタ》!!」^{投射}

彼女を飛び越えて前に出た森人魔術師が、太陽の如き火球を放つ。が、それは無慈悲にも光球に弾かれ、二人の冒険者へと迫る。

あわや直撃か……というところへ、只人僧侶の《プロテクション聖壁》の奇跡。

光球は壁に阻まれ、炸裂。そこへ生じた爆風によつて、粉々になった《聖壁》ともども、圃人野伏たちは大きく吹き飛ばされてしまった。

「がつ……」

地面へ叩きつけられ、それでも意識を失うまいとする圃人野伏は、見た。

変異種のゴブリンが、品定めをするかのようにして、地面へ這いつくばる三名の冒険者を見た後で、只人僧侶を拾い上げ、貴族令嬢ともども村から退いていくのを。

「待て」

という言葉も、圃人野伏には出せなかつた。

そのまま彼女の意識は、北方に聳える山へと消えるゴブリンの姿を最後に、闇の中へと落ちて行ったのである。

其の五

「つてことは……ねえちゃんたちはさらわれた、つてことか！」

叫ぶようなオールラウンダーの問いかけに、圃人野伏は口惜し気に頷くより他になかった。

怒髪天を衝く。

怒りの形相を見せたオールラウンダーが途端に駆けだそうとするのへ、

「どこ行くのさー！」

思わず圃人野伏が引き止めた。

「ねえちゃんたちをたすけるんだ！」

「そんなこと言うけど……頭がどこに連れてかれたのか分かるの？」

「……」

瞬間、オールラウンダーは力の抜けたようにその場に止まって俯き、

「……わかんねえ……」

力なく呟く。

と、そこへ。

「当てなら……あるさ……」

と割り込む声が。

宿の一室から出てきて会話に入ってきたのは、森人魔術師であった。

圃人野伏や只人僧侶を守らんと《ファイアボルト火 矢》での迎撃を試み、その結果として一番の至近距離で爆風を浴びてしまった彼女は、もはや頭部や左目、四肢の全てを包帯で覆うという、痛々しい姿であった。痛みを堪えて一歩踏んだ森人は、

「……と、砦、だ……。 私たちが本来の目的として……ぐっ……せ、潜入しようとした砦……そこが奴らの真の砦ねぐらに違いない……」

呻き声を挟みながら、そうオールラウンダーたちに伝えた。

「悠久の昔に打ち捨てられ……朽ち果てた砦……。 お、オルクたちが巢食うに、これほど都合のいい場所もあるまい……」

そう言ったところで、森人魔術師は力なく倒れ込んだ。それを慌てて支えてやったオールラウンダーは、

「だいじょうぶ。ねむっちゃまっただけだ」

圃人野伏へ伝えた。

薄い胸を撫でおろした彼女は、しかし悔しそうに、

「あたしもエルフの先輩もこんなだから……回復するのにいつまでかかるか……そうこうしてるうちに頭とあの子が……」

身を震わせながら言うのへ、

「へっっちゃらさ！ オラ一人であいつらぶつとばしてやらあ！ ねえちゃんたちのカタキうちだ！」

オールラウンダーは、不敵に笑ってそう言った。

「……あたしたち、まだ死んでないけどね……」

一方、その頃……。

宿屋二階の奥まった一室では、令嬢剣士が顔面蒼白となっていた。室内には毛布や衣服が散乱し、その中央で、半森人が泣き叫びながら蹲っている。

そのすぐ傍では、薬師の娘が背中を擦ってやりながら、令嬢剣士へ顔を向け、静かに首を横へ振っていた。

少し前。意識を取り戻した半森人は、薬師の娘の治療を受けている中で、じわじわとゴブリンどもの巣穴での記憶を呼び覚ましてしまったのである。

脳裏に焼き付いて離れない、小鬼どもから受けた凌辱の数々。

それをなんとか払拭しようと、彼女はもはや音もない叫び声をあげ、手当たり次第に毛布やら衣服やらを剥ぎ、投げ飛ばし、やがて手の届く範囲に何もなくなると、今のように体を丸めて嗚咽を漏らし始めたのである。

その全てを見ていた令嬢剣士は、半森人へかけてやる言葉をなかなか手練り寄せずにいた。

それどころか、薬師の娘のように、傍によって背を擦ってやることも出来なかった。

彼女はただ、その場に立ち尽くして、状況を見守ることしか出来なかったのである。

この時に彼女が思い知った無力感がどれほどか。それは当の本人にしか分からぬことだ。

無限とも思える、佇立ちよりつの時間。その中で、彼女は必死に自分に出ることを考えに考え、そして一つの答えに辿り着いた。

(ゴブリンたちを、斃なきなきや……)

である。

それは、復讐者が胸に燃やす炎のように、力強い決意のものではな

い。

ただ漠然と、

(これ以上、彼女のような……仲間たちのような犠牲者を出すわけにはいかない……)

そう思つてのことであつた。

無論、『出すわけにはいかない犠牲者』の中には、令嬢剣士自身も含まれている。

先の洞窟の一件で、彼女はゴブリンどもの恐ろしさを嫌というほど味わつた。

だからこそ、彼女はそのような答えに辿り着いたのかもしれない。あるいは、狂乱する半森人の姿を見るのが辛くて、逃げ道としてそのような結論に至つたのかもしれない。

ただ一つ言えるのは、もはや令嬢剣士の胸の中に、家柄に縋ることや、冒険者としてとんとん拍子に出世する、などといった考えはない、ということである。

さて……。

思い立つた令嬢剣士は、薬師の娘へ、

「その方を……わたくしの仲間を……よろしくお願いいたします」

言いおくと、部屋を後にした。

廊下に、さつきまで行動を共にしていた少年の姿はない。

(彼を探さないと……)

ゴブリンどもを相手に……それも、奴らの本拠地で戦うのに、自分一人ではいくらなんでも無謀というもの。

それに、洞窟で見た少年の戦いぶりは、一騎当千のものがあつた。

(それこそ、噂で聞いた勇者様のよう……)

本当は、彼一人に任せればいいのかもされない。だが、それをよしとしないのは、冒険者の端くれとしての小さなプライド故だろうか。兎も角。これでやっと、彼女も『冒険者』となったのである。

其の六

かくしてオールラウンダーは、一階の酒場兼ラウンジのスペースにいた。

彼は男と一緒にだった。

巖のように逞しい体つきをし、無精ひげを生やし放題にした、むさ苦しい風体の男だ。

毛皮のベストに毛皮の手袋。背には大弓を背負い、傍らには山犬がすやすやと寝息を立てている。恐らくは彼こそが、村の猟師なのだろう。

男とオールラウンダーは、円卓の上に地図を広げ、何やら話し合っている。

そこへ令嬢剣士が歩み寄ってみると、

「あつ、ねえちゃん！ 友達はだいじょうぶか？」

ふと顔を上げたオールラウンダーが、彼女へ問いかけた。

令嬢剣士は鈍く頷いた後で、

「何をなさっているの？」

オールラウンダーと地図。そして大男へとそれぞれ視線を向けて尋ねた。

この問いに答えたのは、大男である。

「このちつこい冒険者さんが雪山の砦に行きたいって言うもんだからな。道筋やら外観やらを教えてやっていたのさ」

図体にびたりと合った低い声で男が言うのへ、

「雪山の砦……？」

令嬢剣士は更に首を傾げる。

「そこに何が……？」

すると今度は、オールラウンダーが答えた。

「あの緑のバケモノたちがいるかもしれないねえんだ」

「……ゴブリンが……？」

「ああ。あいつら、オラの友達をさらっていったんだ。だからオラ、あいつらの家にいって、ねえちゃんたちを助けてくるんだ」

その瞳に闘志をみなぎらせて話すオールラウンダーへ、

「だけでも……本当に一人で行くのかえ？」

大男が不安げな目を向けた。

「うん！ オラ、一人でもへっちやらだ」

対するオールラウンダーは、力こぶを作り、にっこりと笑って見せる。

この姿を見た令嬢剣士は、少しばかり戸惑った。

自分が助力を申し出たところで、

「足手まといになる」

と突っぱねられてしまうのでは……と。

怖じ気づきそうになる彼女の脳裏へ、仲間である半森人の狂乱した姿が浮かび上がった。

(そうですね……。わたくしには、物怖じしている暇なんか……)

彼女は拳を握りしめ、深く息をついた後で、

「あ……あのー！」

大きく声を出した。

大男は驚き、オールラウンダーはまじまじと令嬢剣士を見つめる。

「どうしたの？」

と訊いてくるオールラウンダーへ、令嬢剣士は一瞬たじろいだものの、すぐさま喉を鳴らし、

「わ、わたくしもー！ ご、ご一緒……さ、させていただいてもよろしいでしょうか……！」

段々と小さくなっていく彼女の声を、しかし大男も、オールラウンダーも耳にしていた。

少しの間、沈黙が屋内を包んだ。

令嬢剣士の胸が高鳴る。

だが、そんな彼女の心配をよそに、

「ふうむ」

返ってきたのは、あっけらかんとした答え。

「……へ？」

思わず、令嬢剣士が間の抜けた声をあげるほどに。

「だから、いいよって」

「それって……」

「オラといっしょにきてくれるんだろ？　じゃ、いこうぜ」

ごく自然に手を差し伸べてくるオールラウンダー。

令嬢剣士は、それが意味するところを理解するのに遅れたが、

「よろしくな」

少年の声を受け、それが握手を求められているのだと気が付いた。令嬢剣士は、迷わず手を伸ばす。

「よろしくー」

固く握られた手と手。

今ここに、冒険者の結束が生まれたのである。

だが、そんな和やかな雰囲気もそこそこに、

「……じゃあ、そろそろ続きを話してもいいかね？」

猟師の大男が、申し訳なさそうに二人へ声を掛ける。

握手を解いた二人は……殊に令嬢剣士は、すっかりそれまでの悩みやらを払拭した、晴れ晴れとした表情となり、地図の広げられた円卓へと向かった。

「そんじゃ、例の砦についての説明に戻るが……」

そう言って、男は地図上の凸印のされている部分を指した。

「俺のじさまの話じゃ、これは神代の頃の鉦人の建てた砦なんだと」

「神代の頃の……鉦人……」

「そう。だから建物の中には、侵入者よけの仕掛けがわんさかあると見て良いだろうな」

「……そこに、ゴブリンが巢食っている可能性がある？」

「多分。洞窟の方の巢穴は、あんたがたが潰してくれたんだろ？」

「だったら、奴らが他にいつきそうな場所と言えば、この砦以外にはないだろうよ。奴らの罫といや、穴蔵か廃墟と相場が決まってるからな」

「なるほど……」

頷きつつ、令嬢剣士は考えを巡らせてみた。

仮にその砦がゴブリンどもの巢喰っている拠点だとして、どう攻め入ったらいいいのか。

最も確実なのは、真正面から攻め入ることだろう。並みの冒険者ならば兎も角、オールラウンダーがいるのならば、例えゴブリンどもが千匹いたところで、物の数ではあるまい。

だが、ただゴブリンを殲滅すればいいというわけではない。オールラウンダーの『友達』が、ゴブリンどもに攫われてしまっているのだ。

先の洞穴での一件を鑑みれば、その『友達』はゴブリンどもの拠点に引き込まれた後で、凌辱の末に始末されるか、はたまた奇怪なる教えの下に生贄とされるか……どちらかの末路を辿ることになるだろう。

しかし逆に言えば、その末路を辿るまでは、ある程度の猶予まで彼女たちの命は保障されている、ということでもある。

そんな中を真正面から強行突破してしまえば、『友達』を人質として利用されかねない。

(なんとかかひっそりと砦の中に潜入して、かつゴブリンたちに攻撃を仕掛ける前に、オールラウンダーさんのお友達を見つけるのがベスト……)

令嬢剣士がその考えを男に見ると、

「ううん……。俺も砦の中に入ったことがないんで、詳しいことはえねえが……」

そう前置きをした後で、

「一か八か。この方法に賭けてみるかい？」

と、二人の冒険者へ語り始めたのである。

いっほうそのころ

女神官が冒険者ギルドを訪れてみると、すでに受付カウンターの前には長い長い列が出来ていた。

冒険者のものではない。いずれも、街の住民たちが依頼を申請せんがために生み出したものなのだ。

ふと、女神官は列の中に牛飼娘がいることに気が付いた。

彼女の方もそれは同じで、こちらへ向けて手を振った後で、暫し悩んだ様子であったが、やがて吹っ切れ、列を抜け出して女神官の方へと駆け寄って来た。

「寒いねえ」

挨拶の代わりに放たれた牛飼娘の言葉へ、

「そうですねえ」

暖炉の傍で温まっていた女神官が同調する。

牛飼娘は、手にしていた一枚の紙を脇へと挟んだ後で、かじかんだ手を暖炉へと翳した。

女神官の興味が、その脇へ挟まれた紙へと向けられる。

これに気が付いた牛飼娘は、

「えへへ。雪かきしてもらおうと思って」

横目に、女神官へ教えてやった。

「雪かき、ですか?」

「うん。屋根の上に積もったやつとか、牧場からここまでの道を埋めてるやつとか」

「ゴブリンスレイヤーさんに、ですか?」

女神官の言葉を受けた牛飼娘は、

「頼まなくてもやってくれるとは思うけど……」

と前置きをした後で、

「彼には、こんな寒い間くらいはゆっくりしてほしいから」

眩くように言うと、笑みをこぼした。

そんな彼女の様子にほっこりすると同時に、少しもやもやとした感情を覚えた女神官は、友人へそんなことを抱いてしまったことを恥じ、その事実から逃れるように、

「では……その……誰に？」

話の軌道に戻した。

その様子がおかしかったのか。牛飼娘はくすりと笑った後で、

「オールラウンダーさんに、ね」

片眼を瞑ってみせ、茶目っ気を含めてそう言った。

「ソンさん、ですか」

「そういうことを喜んで引き受けてくれる冒険者さんを……って思ったら、まずオールラウンダーさんが浮かんでね。それでギルドへ来てみたんだけど……」

牛飼娘の視線が、受付前の長い列へと向けられる。

「でも、ゼーんぜんダメ。朝一番からあんな調子なんだって。あれ

じやあ、今日中に依頼を申し込めるかも怪しいや」

「あれ、みんなソンさんに向けての依頼なんですか？」

「そうみたい。やっぱみんな考えることは同じなんだねえ」

どうしたもんかな。

悩まし気に呟いた牛飼娘の姿を見て、

「ん、と……」

女神官は、人差し指を顎にあてがい、考えた。

否。考えたというより、悩んだ……と表現するのが近い。

ここで牛飼娘の依頼である雪かきを、女神官が直接引き受けたとして。

それは、彼女の住む牧場へ向かうことになるわけで。

今は冬真つただ中。連日降り積もる雪を掻き分けるとなると、それはそれを要するわけで。

そうになると、牧場で泊まり込んでの作業も辞さなくなるわけで。

そんなことを脳内へ巡らせている中で、女神官の顔が段々と赤くなってきた。

暖炉の灯を受けて火照った……だけではあるまい。

紅潮の原因を払拭せんがため、何か違うことを考えようとする女神官。だが、どうしても別の事が考えられなくて。

そうする中で目まぐるしく変化する女神官の表情を見て、牛飼娘は全てを察した。

(ライバルに助け船を出すのもどうかと思うけどなあ)

などと思いつつ、牛飼娘は手を差し伸べてやる。

「ねえ。あなた、雪かきやってみない？」

その言葉を受け、女神官は不意打ちを食らったかのように目を見張った。

「えっ？ ええっ!？」

「報酬ならしつかり支払うよ。そうだ！ 雪かきしてる間は、うちで食べたり寝たりしたらいいよ！」

「そっ、そんな……!？」

「いいって！ 冒険者さんに依頼するんだから、報酬はしつかり払わなくちゃね」

「で、でも……!？」

「つべこべ言いつこなし！ さ、そうと決まったら牧場へいこ！」

「あ、あの……!？」

女神官の腕を掴み、牛飼娘は半ば強引に冒険者ギルドを後にした。

其の一

「神代の頃とは言え、鉾人が建てた砦なら……かなり凝った趣向をしているはずだ。おらあ芸術だのは珍紛漢紛だが……そうした奴らの建てる豪勢な屋敷には、だだっ広い庭に噴水やら泉やらをこさえているのが常さ。つまりは、外から水を引き入れるための水道が通っているはずなんだ」

獵師の男の言葉は、まさに的中していた。

寒村から北へ北へと山道を登り、ようやくたどり着いた荘厳な砦。周囲は石造りの障壁で囲まれており、本来の主たちに棄てられた今もなお、侵入者を拒み続けている。……が、裏手へ回ってみると、下水道が通っていたのだ。

恐らくは春から秋にかけて、近くの川から水を引き入れているのだろうが、極寒の今となっては、つるつると滑る氷道が真っ直ぐ砦の中へと続いているのみ。

申し訳程度に侵入を阻む鉄格子は錆びており、それをオールラウンダーが小突こうものなら、いとも簡単に折れてしまう。

さて、これから潜入だ……と令嬢剣士が意気込んだ矢先。

「待て」

低い声が、吹雪の中でもしつかりと聞こえた。

驚きと警戒とを以って令嬢剣士が振り返ってみると、そこにいたのは漆黒の外套に身を包んだ二人組。

片や長身。片やそ奴の腰元ほどの背丈。

明らかに怪しい雰囲気放つ二人を、しかしオールラウンダーは、

「あっ！・ じいちゃんじゃねえか!？」

二、三と鼻をひくつかせた後で叫んだ。

果たして外套の一人……小柄な方が、頭を露わにすると……。

「よう、小僧。久しぶり……って言っても、秋以来だからそれほどねえか」

現れたのは、いつかの老爺。

この爺について触れたのは、『十一番目の物語』においてである。

辺境の街近くの小さな村で酒場を営んでいたこの老爺は、盗賊団の首領という裏の顔を持っていた。

と言っても、誰かれ構わず金品を強奪する外道……というわけではなく、

「盗みの先で祈る者^{プレイヤー}を殺してはならない。女であれば犯してはならない。金を取られて困窮するところから盗んではいけない」

盗賊は盗賊なりに、この三つの制約を設け、それを厳格に守り抜く……ある種の誇りを持った盗賊なのである。

この盗賊の老爺が、あわや仲間と共に殺されかけそうになったところを、オールラウンダーが助けたことがあるのだ。

老爺の放つ不思議で懐かしい雰囲気、オールラウンダーはすっかり懐いてしまっていた。

だが、そうなるともう一つの外套は誰だろうか。

「ううん……。こっちのやつも、どっかでかいだことあるニオイだ……」

またしても犬のように鼻をひくつかせたオールラウンダーへ、長身の外套が、いきなり蹴りを入れてきた。

「わっ！ なにすんだ！」

突然の攻撃に激昂するオールラウンダーへ、長身は言葉で応えず、代わりに頭巾を剥いだ。

見えたのは、整った顔立ちをした闇人ダークエルフの顔。

「あつー！ おめえ……」

またしてもオールラウンダーは驚きの声を上げた。

それもそのはず。この闇人は、今年の秋の収穫祭の折、辺境の街を奇襲せんとし、その中でオールラウンダーと交戦した……あの闇人だったからである。

「下水道からこそそこそ侵入とは……随分と臆病なやり方じゃないか。勇者よ」

厭味ったらしい笑みを浮かべた闇人には構わず、

「ど、どうしてじいちゃんどこいつがいつしよなんだ?！」

オールラウンダーは堪らず老爺へ詰め寄った。

老爺は暴れ馬を鎮めるようにして、

「どっどっど」

と言った後で、

「……おまえさんとこいつとの間にどんな因縁があるかは知らねえが……まあ、色々あつてな。今はこいつ、盗人見習いをしてるところなのさ」

老爺が言った『盗人』という言葉に、令嬢剣士の耳がぴくりと揺れる。

(盗人……? どうしてこの少年と、盗人なんか知り合いに……?)

これは別に、オールラウンダーを疑つての事ではない。

むしろ、純粹無垢の擬人化のようなオールラウンダーと、世間一般での悪役である盗人が、こうも親しく話していることが、彼女の中では解せなかったのだ。

だが、そんな令嬢剣士を他所に、男たちはどんどん話を進めていく。

オールラウンダーが、何故にこの砦へ潜入しようとしていたのかを話してやると、

「ほう。貴様の仲間というのは、あの娘剣士のことか。これはいい。小鬼どもに攫われた娘の末路など……」

愉快気に笑う闇人の脇腹を拳で勢いよく突いた老爺は、

「そりゃ、大変じゃのう」

まじまじとオールラウンダーを見た。

「じいちゃんたちは、なんでここに?」

「なあに。簡単な事じゃよ。冬つてえのは、寒さ故に家人たちが家に籠りつきりになる時期だからな。お盗めには向いてねえ。なればこそ、こうやって宝のありそうな廃屋やら迷宮やらを探して、片っ端から入り込んでるわけよ」

高くそびえる砦を見上げ、老爺は言う。

「だが、ここで再開したのも何かの縁だ。どうだ、小僧。お仲間探し、この爺にも手伝わせてくれねえか」

手を差し伸べる老翁を、闇人と令嬢剣士は驚愕の態で見つめ、対してオールラウンダーは、

「もちろんだ！」

その手を握ったのである。

其の二

雪山に聳え立つ荘厳な砦。その地下水道を往く三者三様の侵入者たち。

先頭を歩く盗賊の老爺は、青白い炎を揺らめかせる蠟燭を角灯に仕舞い込め、これを光源としている。

この蠟燭、所謂魔法の道具マジックアイテムで、『物探しの蠟燭』という。所有者が探し求める物が近くになれば、それだけ暖かく燃え上がるのだ。

「じいちゃんは不思議なもんをいっぱいもってるんだな」

オールラウンダーがそう言うと、

「うちには熟練の魔術師もいるからな。とは言っても、なんでもかんでも魔術で解決するわけにはいかねえ。それじゃ盗みに芸がなくなるものな」

老爺は得意げに鼻をひくつかせながらそう言った。

蠟燭が炎を揺らす対象は、攫われた貴族令嬢と只人僧侶である。

……彼女たちを『物』として扱うことには、どうかとは思うが。

しかし、蠟燭は彼女たちを『物』と判断したようで、木々の枝のように分かれる水道の中を、あっちこっちへと炎の向きを変え、老爺たちを目的地へと導いていく。

「物と判断されてるんだ。今頃は死体にでもなってるんじゃないのか？」

闇人が、さも愉快気に言うのへ、

「んなわけねえさ」

仲間であるオールラウンダーは、激昂するでもなく、むしろ笑ってそう言ってみせた。

それが面白くなく黙りこくってしまう闇人に代わり、

「ほう。随分と信頼してるんだな」

老爺が興味深げに言う。

「ああ。ねえちゃんたちはだいじょうぶだ」

根拠のない、しかし信頼を感じる少年の言葉であった。

そんなオールラウンダーの背後を歩く令嬢剣士は、不思議でならな

かった。

ゴブリンに攫われた娘が、それが冒険者であれ村娘であれ、どのような末路を辿るかについては、彼女は雪原の洞穴にて嫌というほど味わったことである。

(彼だって、それくらいは分かっているのに……)

洞穴内の惨状……殊に半森人の痛ましい姿を見ても取り乱さなかった辺り、この少年は相当な場数を踏んでいるのだろう。そう、令嬢剣士は捉えた。なればこそ、仲間である貴族令嬢たちの身を案じるのが道理というものではないのか。

しかし少年は、全くと言っていいほど落ち着き払っている。

(……分からない……)

冷酷というものではなく、しかし些か思いやりに欠けるような……。そんなことに思案を巡らせていると、

「ふふふ。お前さんも、その冒険を重ねていれば、そのうち分かってくるさ」

分かりやすく表情に出ていたのだろう。令嬢剣士の沈黙を心配した老爺が、彼女の心中を察して声をかけた。

令嬢は応えず、赤くなつた顔を俯けた。

と、その時である。

角灯の中の蠟燭が、一段激しく燃えたのだ。

「む。そろそろ近いの」

足を止めた老爺が、右へ左へと炎を向ける。が、炎は激しく燃えるばかりで、対象がある位置へと向くことはない。

ならばと天井へ持ち上げてみると、まるで指さすように炎の先端が伸びたではないか。

「真上、か」

「天井ぶつとばすか？」

さも当たり前前と言うオールラウンダーへ、

「馬鹿。丁度娘がいる場所だったらどうする。お前の馬鹿力で死んでしまうだろうが」

珍しく厳しい口調で老爺が窘める。

よっぽど堪えたのか。少年が肩をすくめる横で、身を屈めた老爺は、腰巻に巻きつけた雑囊の中を探り始めた。

果たして彼が取り出したのは、一枚の巻物。

「それって……魔法の巻物ですか……？」

令嬢剣士が問うのへ、

「《トシネル隧道》さ」

にやりと笑った老爺は、再び立ち上がり、またしても角灯を天井へと翳す。

炎が指し示す向きを確認し終えた彼は、徐に巻物の紐を解き、これを天へと投げた。

途端、巻物が綺麗な円を形作り、これがぴたりと天井へとはまる。直後、それが光を放ったかと思うと、次の瞬間には頑丈な造りの天井へ、ぽつかりと穴が開いていたのだ。

「よし。行け」

老爺に言われ、オールラウンダーはこくりと頷いて穴へと飛び上がる。

「おっ？」

果たして彼が穴の先で見たのは、短い廊下を挟み、左右に設けられたいくつもの牢獄。どうやら見張りはいないようだが……。

「GYAGGYAO!!」

いや、いた。どうやら彼は、『お楽しみ』をすることであったらしい。ゴブリンにおける『職務怠慢』とは、常に他者が行う時にのみ適用される概念なのだ。

「よし。ぶつとばしてやる」

オールラウンダーは足音を殺し、化け物の鳴き声とする最奥の牢獄へと進む。

赤錆びた鉄格子が開き、果たして奴はいた。

檻樓切れを一枚纏っただけの只人僧侶へ、今にも押し掛かりそうであつた奴に、

「それっ」

飛びかかったオールラウンダーは、背にした如意棒を引き抜き、そ

れを奴の首へとかける。

「……っ！ ……っ！」

声を発せぬそ奴の背中へ、オールラウンダーは容赦なく膝を蹴り込んだ。

瞬転。小鬼は白目をむいて、どきりとその場に倒れ込む。

「おい。だいじょうぶか」

「ソ、ソンさん……！」

「さみいだろ。これきてろ」

安堵の涙を流す僧侶へ、オールラウンダーは自身が来ていた狼の毛皮を着せてやる。

その時、老爺たちも鉤繩を使って牢獄へと昇って来た。

「こりやひでえ有様だ……」

顔を顰めた老爺は、まず入り口の箇所を確かめた。

上へと続く階段。足音を忍ばせてそれを上った老爺は、上階との境からひよっこりと顔をのぞかせた。

今しも見廻りをしているゴブリンが一匹、こちらへと背を向けて、奥へ奥へと消えて行くところであった。巡回直後のタイミングであつたらしい。

老爺は再び牢獄へと引き返すと、オールラウンダーがしとめたゴブリンの骸を探った。

極寒たる地下牢獄だというのに、腰蓑一つであつたそのゴブリンは、上等な拵えの鍵の束を持っていた。

「なるほど。役得だわな」

呟いた老爺は、ぴくりともしないゴブリンの死体へ蹴りを一つ入れ、

「これで牢屋を片っ端から開けてくれ。生きてる娘は手当てしてやろう」

そう言って、身を強張らせている令嬢剣士へと鍵の束を投げ渡した。

其の三

牢獄に囚われていた哀れな娘たちの中で、生き延びていたのは六名であった。

これを『たつた六名』と受け取るか、『六名も』と受け取るかは、やはりこの広い世界に身を置いた年月や経験の差が物を言うだろう。令嬢剣士の場合は、前者であった。

彼女は、牢獄の中で事切れている娘たちの骸へと目をやり、何とも言えぬ気持になっていた。

骸は一糸まとわぬ姿となっており、壁に埋め込まれた鉄輪に腕を繋がれたまま、だらりと力なく項垂れている。

こうした状態はまだいい方で、中には半分ほど木乃伊化したものや、更に酷い物は白骨となり、隅の汚物溜めの中へと無造作に放り込まれているものもあった。

「地獄を引きずって生き続けるより、まだましかもしれんよ」

立ち尽くす令嬢剣士へ、傍にいた老爺が声をかけた。

彼は、腰に巻きつけた雑囊から小瓶を取り出し、これの蓋を開けて、何やらそこから漂う匂いを生き残りの娘の一人へと嗅がせているところであった。

それまでぐったりと力抜けていた娘が、ゆっくりと目を開ける。

「よしよし。もう大丈夫だ」

久方ぶりの只人を見たからか。それとも老爺の笑みがよほど人のよさそうなものだったからか。娘は安堵の涙を浮かべ、なにやらぱくぱくと口を開けて喋ろうとする。

「無理をして喋ろうとするな。寝てればよいわさ」

老爺に言われ、娘はこくりと頷き、そしてまた瞳を閉じた。直後、安らかな寝息が聞こえ始める。

こうして四名の娘の介抱を終えた老爺は、

「そっちはどうだ？」

牢獄の最奥にいたオールラウンダーへと声をかけた。

少年の傍には、檻褸切れ一枚を纏ったのみの只人僧侶と、同じく貴

族令嬢の姿があった。

貴族令嬢の方は傷一つない元気な姿なのだが、僧侶の方は火傷の後が痛々しく残っている。恐らく、圃人野伏が言っていた、寒村での奇妙なゴブリンとの戦闘で負った傷なのだろう。

「だ、大丈夫です……」

僧侶は気丈に笑って見せたが、それがやせ我慢であることや、戦線離脱やむなしであることは明白であった。

「彼女、ここに運ばれてきてから碌に傷の手当なんてしてなかったんです。それに、この寒さもあって……」

貴族令嬢は語る。

「本当に運がよかったです。牢屋に放り込まれて……それでも彼女は奇跡を懇願できるだけの気力が辛うじて残って……」

かくして僧侶は、寒くて暗い牢屋の中、か細い声で《小癒^{ヒール}》の奇跡を嘆願し続けた。

そんな彼女の様子を、幸いにも見張り役のゴブリンは、

「死期を悟り、神へと助命を懇願する哀れな娘」

と見たらしく、にたりにたりと厭らしい笑みを浮かべ、これを眺めているのみであったのだ。

「なるほどのう」

話を聞き終えた老爺は、二度三度と頷いた後で、

「よし。お前さんは、わしと一緒に村へ行こう。娘たちを運ばにやらんし」

と、手を打った。

僧侶は困ったように、

「で、でも……」

反論をしようとしたのだが、声を出したことで体に響くものがあったのだろう。苦悶の表情を浮かべ、すぐさま蹲ってしまった。

「無茶を押し通すのが死への一番の近道さ。ほれ、ここで暖を取って英気を養ったら、すぐ出発するぞ」

老爺が言うのへ、

「帰りはどうやって……っ？」

令嬢剣士が問う。

老爺は不敵に笑い、

「迷宮に潜る時は、《トンネル隧道》の巻物を二つ以上備えて行くのが常識さ」と答えた。

なるほど。彼の雑囊には、あと二つほど巻物が見える。

「じゃあ、じっちゃんたちとはここでおわかれだな」

オールラウンダーの言葉に、老爺と貴族令嬢を除く一同が目を見開いた。

「まさか……あなた、ここに残るんですか……？」

令嬢剣士にそう聞かれ、

「きまつてるだろ。あいつらをみんなぶつとばすんだ。ほつとくわけにはいかねえもん」

さも当たり前のようにオールラウンダーは答えるのだ。

加えて、隣に立った貴族令嬢も、

「そうですね。ここのゴブリンたちは、数もさることながら……ソンのカメハメハのような術を使う個体もいます。放置しておけば、あの村の人達は確実に皆殺しにされてしまう……」

そう言つて、見張り役の小鬼の骸から拝借した手斧の調子を確かめつ、そんなことを言い始めた。

檻褸切れ一枚に手斧が一つ。そんな装備で、彼女もまたこの砦に残り、小鬼の殲滅を行おうというのだ。

令嬢剣士には、この二人が理解できなかった。

何も、今から小鬼を相手にしないでいいではないか。

一旦は老爺たちに続いて砦を抜けだし、後日体力を回復させて戻つてくれれば……。

「それだと、また村に奇襲をかけられる恐れがあります。牢屋の中の捕虜がいないと知れば、ゴブリンたちは怒り狂うでしょうし。そうなった時の彼らのすさまじさは、先日の比じゃないはずですよ。今ここで、彼らの息の根を確実に止めてしまわないと……」

「でも……あなたまで残ることは……」

「これは、冒険者としての意地でもあるんです」

力強い貴族令嬢の言葉であつた。

「はっ……」

とした剣士は、それ以上なにも言えなかつた。

立ち尽くす彼女を他所に、オールラウンダーと貴族令嬢はこれからの手はずを語り合い、老爺は捕虜の娘たちへと小瓶に入つた火酒を振るい始める。

上へと続く階段で見張りをしている闇人は、その長耳をぴくつかせ、

「こちらへ向けて足音が近づいてくる。巡回か、それにかこつけて娘を犯そうとしてる奴か……」

一同へと知らせた。

それが、令嬢剣士には「覚悟を決めろ」という催促の声にも聞こえた。

もはや、迷っている暇はなかつた。そもそも、寒村の宿で一度は決意をしたではないか。

「わっ、わたくしも……残ります！」

その一言に、貴族令嬢は力強く頷き、オールラウンダーと老爺は、にんまりと温かく笑つて見せた。

其の四

娘たちの逃亡を老爺に任せ、オールラウンダー、貴族令嬢、令嬢剣士、そして闇人の四人は地下牢を後にした。

「……どうしてあなたまで……？」

貴族令嬢は、警戒の目を闇人へ向けた。彼が以前に企んでいたことを思えば、それも当然のことと言えよう。まともな神経の持ち主であれば、辺境の街へ小鬼の群れを差し向け、混乱に乗じて街の住民たちを百手巨人ヘカトンケイルの生贄に捧げようとする者と協力するなど、土台無理な話なのである。

彼女が警戒の目を向けるだけでいられたのは、オールラウンダーという存在あつてこそであつた。

一方で闇人は、やはり長耳をぴくりぴくりと動かしつつ、

「私がいては不服か？」

挑発するような目つきで、貴族令嬢に聞き返すのだ。

今は敵陣のど真ん中。故に大声で反論するわけにもいかず、貴族令嬢は歯噛みをするのみである。

この様子を見ていた令嬢剣士は、しかし彼、彼女たちの間に生じた因縁の詳細を知らぬので、訳が分からぬといった表情であつた。

ここで、一行が目指している場所を明かしておこう。

彼らは、砦の武器庫に向かつて歩を進めていたのだ。貴族令嬢の武器防具を新調するという意味合いもあるが、

「そこを潰せば、彼らの戦力もいくらかは削れるでしょう」

この側面も持ち合わせていた。ちなみに、これを発案したのは貴族令嬢本人である。

ところが、一行は砦の内装をよく知らぬ。打ち捨てられた神代の頃の砦の見取り図などあるわけでもなく、しかし無作為にあちらこちらを探し回るわけにもいかない。

そこで役立つのが、盗賊の老爺が渡してくれた、『物探しの蠟燭』であつた。

先の《トンネル隧道》の術が記された巻物よろしく、魔法の道具マジックアイテムの類は必ず

二つ以上を備えて迷宮ダンジョンに挑む老爺なのである。

貴族令嬢が、

(武器庫……砦の中の武器庫……)

と念を込めるのに反応し、蠟燭の青白い炎がぼうつと先を右へ左へと傾ける。

後は、闇人の聴力とオールラウンダーの嗅覚を頼りに、罨の類がなにか。敵が向かって来ないかを確かめつつ、一同は着実に前進していた。

こうして四人は、砦の一郭に聳える大きな鉄の扉の前に来ていた。そこは回廊を上った先にある一室で、中庭を見下ろせる形となっている。

その中庭では、奇妙な光景が広がっていた。

あろうことか小鬼どもが綺麗に整列をし、左右に分かれて道をつくり、そして錆びれたラツパを吹き鳴らしているのである。

「へたくそめ」

聴力が他より優れている闇人は、不快感を露わにして中庭の光景を眺めている。

……と、その時。

小鬼どもが避けて作った道を、ゆったりとした足取りで歩む二つの影が現れた。

そのうちの二匹に、貴族令嬢は見覚えがあった。

かの寒村で、自分を人質に取った個体。

オールラウンダーの『かめはめ波』に似た術を使う個体。

僧侶ともども、自分たちをこの砦へと連れ去って来た個体。

成人した只人の男ほどはあろうかという背丈をした、逞しい体つきの小鬼であった。

そ奴の横で、真紅の外套……いや、恐らくは砦のどこかの部屋のカーテンを引きちぎって、それに見立てたものを引きずった個体が二匹。

どこぞの優良銀等級冒険者を思わせる、鉄兜と鎧に身を包んだその個体は、左右に広がる他の小鬼どもからの歓声を受け、それに一々頷

き返している。

「なんとも間の抜けた英雄だ」

闇人が皮肉を込めるのを聞き流しつつ、貴族令嬢は鉄の扉を触り、鍵がかかっていることを確かめるや、

「ソンさん。この扉を壊してください」

「いいのか？」

さすがに、扉を壊した時の大音声を気にしたオールラウンダーが念を入れるのへ、

「大丈夫。その代わりに、扉を壊したらすぐに中庭に飛び降りて、ゴブリンたちの相手をしてください」

その人と。貴族令嬢が自分を顎指したことに気が付き、

「っ!? この私を囮に……」

抗議の声を発しようとするのへ、貴族令嬢は人差し指を立ててみせ、

「ゴブリンに気付かれますよ」

いかに彼が混沌の勢力に与しているとはいえ、この砦に巢食うゴブリンからすれば憎き侵入者の一人にすぎないのである。

ぐぬぬ。歯噛みをして黙り込む闇人を他所に、

「ソンさん。お願いします」

「わかった」

頷いたオールラウンダーが、勢いよく拳を鉄の扉へ突き出す。

瞬間。分厚い扉が大きなお音を立てて吹き飛び、その先に樽に詰め込まれた槍やら剣やらが納められた一室が姿を見せた。

同時に、中庭のゴブリンどもも興奮から醒め、音のする城壁を見上げる。

「よしっ！ いくぞっ！」

オールラウンダーは道着の帯を締めなおし、強引に闇人の腕を掴んで、その場から中庭へと飛び降りた。

貴族令嬢は、

「見張りをお願いしますね」

令嬢剣士に言い置いて、倉庫の中へと飛び込む。

あまりに次々と起こった出来事に、令嬢剣士はあたふたと混乱を見
せていたけれども、

「頼みます」

倉庫内から貴族令嬢が寄こした、念押しの声に我を取り戻し、腰に
差した突剣を引き抜き、

「まっ、任せて……ください！」

力強く返した。

彼が気が付いてしまった時のおはなし

極寒の地でもゴブリンが腰蓑一つの姿であるのは、寒さにめっぼう強いというわけではない。単に彼らに生産性というものが欠けているからであつた。

果たして『彼』も、そのうちの一匹だったのである。

いつものように洞窟へ侵入してきた愚かな冒険者を、数の暴力で叩きのめした彼は、他の仲間たちに『お楽しみ』を横取りされ、広間の隅の方で情けなく縮こまっていた。

悴む掌をなんとか暖めようと身を震わせていた……その時である。

彼は、ふと気が付いてしまったのである。

手に力を込めると、仄かに暖気が生じるではないか。

だが、彼はゴブリン。その少しばかりの温もりなどありがたがるものではない。もっと。もっと暖かさが欲しい。そう願うようになる。

そこで今度は、掌に力だけでなく意識も集中してみせた。

するとどうか。ぼんやりとした光が掌に宿り始めたのである。温もりも、以前とは段違いのものとなっていた。

これはいい。

巣穴の隅で、独り良い気になっていると、仲間のうちの一匹がこちらへ近づいてきて、何を笑っているのかと問うてきた。

彼は、この不思議な温もりについてを仲間に教えるものかと思つた。自分は『お楽しみ』を堪能できなかったのだ。この温もりは、そんな自分だけが享受すべきだ、と。

無論、そんな彼の態度を、ゴブリンである仲間が快く思うわけがない。

隠していることを喋れ！

仲間が掴みかかってくる、いつしか彼は取っ組み合いの喧嘩を始めていた。

騒動に気が付き、他の仲間たちもなんだなんだと押し寄せてくる。

とうとう我慢ならなくなった彼は、仲間の頬を思いつき引つ叩こうとして……。

「GYAU!？」

瞬間。掌から、眩い光を放つ球が出たかと思うと、それが仲間の顔を吹き飛ばした。

首から上を無くし、無残に血を吹きながら倒れ伏した仲間の骸。見守っていた同族も驚いたが、彼の驚愕ぶりはおもつとであった。

それからの彼は、『渡り』として活動していくこととなる。

それはすなわち、巣から巣へと移って活動していく個体のこと。

別に彼は今まで居た群れを見限ったわけではない。

仲間の顔を吹き飛ばした、あの妙な力……。それを自由自在に引き出す練習として、群れの全てを相手にしていたら、情けなくも仲間たちが全て死んでしまっただけのことなのである。

独りになった彼であったが、別に不安はなかった。群れを失った代わりに、彼はあの不思議な力を完璧に我がものとしていたからだ。

その力は、呪文遣い^{シャーマン}が操る魔術とは違い、一日に放てる回数が決まっているわけではない。体力が続く限り、いくらでも光の玉を放つことが出来るのだ。疲れても、少しの仮眠を取れば、再び力を操れるようになる。

『渡り』としての活動を続けていった彼は、冒険者共を屠り、ある程度の期間が過ぎると群れの仲間たちを皆殺しにし……。そんな活動を続けていたのだ。

ゴブリンにしては珍しいことに、彼は他種の雌を犯すことに積極的ではなかった。

なにも、繁殖欲や性欲が綺麗さっぱりなくなつたわけではない。

彼は、不思議な力を引き出す技術を磨くたびに自分が強くなつていくことを自覚し、それが、

「楽しくて楽しくてたまらなく……」

なつてしまつたのである。

そんな彼が今回行きついたのが、極寒の雪山に聳える、鉦人が残した砦だった。

砦には、只人から奪つた防具に身を纏つたゴブリンがいた。

群れを指揮し、只人の真似事するそのゴブリンを、彼は裏で嘲笑つ

ていた。しかし、ここにきて彼は、この群れをたつぷりと利用してやろうと考えた。

ここらで腰を落ち着けるのも悪くはない。

自分は策を巡らせるのが苦手だ。ならば、他の得意な奴にそれを任せればいい。いざとなれば、あの力を振るえば、同族たちは縮み上がって、自分の言うことを聞かざるを得なくなるのだから。

いつしか彼の實力は、田舎者はおろか、英雄すらも凌駕するものとなっていたのである。

其の一

突如として現れた侵入者へ、ゴブリンどもは罵詈雑言の限りを浴びせる。

勝手に自分たちのテリトリーに入っただけでも度し難いが、奴らが飛び降りてきたのは、砦の武器庫から。なんたることか。さっきの大きな音は、奴らがあそこを台無しにした音に違いない。

ゴブリンどもの怒りは相当なものになった。

例の、鎧と外套を纏ったゴブリンが号令をかけ、射撃部隊が動く。

粗末な弓に、同じく粗末な矢を番え、そして放つ。

雨のように降り注ぐ矢を、オールラウンダーは背にした如意棒を引き抜き、手早く振り回して弾いた。傍では、闇人がちやつかりとその恩恵に与っている。

「くそつ、あの小娘め。生きて還ったら、きつと借りは返すぞ」

ぼやきつつ、闇人は腰元から突剣を引き抜き、臨戦態勢に移った。

(まったく。こうなるのなら、あの老いぼれから早々に離れるべきだった……)

彼は心の中で嘆いたが、後悔先に立たず、である。

そもそも邪な野望を抱く彼が、盗賊とはいえ人の良い老爺と行動を共にしているのには理由があった。

秋祭りの一件で、百手巨人ヘカトンケイル召喚の野望を潰された彼は、

(いずれ、混沌勢力繁栄の大きな障壁となる……！)

として、オールラウンダーを標的に定め、なんとしても彼を殺すべく……まずはそのための力をつけるための旅に出た。

出たはいいのだが、無計画にも程があるその旅路は、当日の晩に頓挫した。オールラウンダーとの戦いで体力を消費したまま旅に出たので、疲労と空腹によって道端で倒れてしまったのだ。

そこに救いの手を差し伸べたのが、同じく旅の道を歩いていた老爺たちであったのだ。

闇人が味わった屈辱は、計り知れないものであった。

(この私が……只人に計画を潰された挙句、只人によって命を拾われ

るとは……)

なのである。

この屈辱を、老爺殺害という非道な手段に移さず、

「貴様なんぞに借りを作るなど、ごめんだ」

そう言つて、老爺たちの仕事……すなわち盗賊稼業の手伝いをする
ことで帳消しにしようとする辺り、この闇人は混沌勢力にしてはどこ
かズレているところがあると云つてよい。

初めこそ、朗らかな笑みの似合う老爺が盗賊だということに多少の
驚きを感じた闇人であったが、

(なあに。他者を襲い、奪う。そんなことはこれまでに何度もやつて
来たことだ)

と高を括つていたのだが、老爺たちの盗みの技術は芸術のそれに近
く、闇人がそれまで行つてきた野蛮なものとはわけが違った。

「これ。そんな足音じゃ、小鬼どもに気付かれるぞ」
だの、

「馬鹿。殺すのは小鬼の巢に潜つた時だけだ」

だのと仕事の度に注意を受け、その都度、闇人の中のなにくそ精神
は強くなつていった。そうするうちに、彼は今日まで老爺たちと行動
を共にするようになってしまったのである。

しかし、今日は違う。当初は砦内の宝を物色し、盗み出すことで
あつたが目的であつたが、今となつては小鬼の殲滅が新たな目標。そ
れも、ひっそりとやるなら兎も角、もはや向こうに存在を察知されて
しまつているのだ。

(もはや、小手先の技術は必要ない)
のである。

オールラウンダーの防御を前にし、射撃部隊が矢の雨を止めた。

その背後から、手斧やら剣やらを構えた別部隊が雪崩れてくる。

そ奴らへ、

「くたばれっー!」

颯爽と間合いを詰めた闇人が、一匹、また一匹と、その首元を突剣
で正確に突き刺していく。

この様子を見ていたオールラウンダーは、「おっ」

と目を開いた。以前の彼とは、体運びが別人のように違うのである。

「やるなあ、あいつ。修業してたんだな」

言いつつ、オールラウンダーも向かい来るゴブリンどもを如意棒で薙ぎ倒していく。

次々と仲間が斃されていく中、長身のゴブリンと、聖騎士は余裕綽々の笑みで様子見を決め込んでいた。

……と。

戦場へ、息を切らせて駆け込んでくる別の個体。

漆黒の僧衣に身を包んだそのゴブリンは、聖騎士へと何事かを叫んだ。

「なんだ？」

迫るゴブリンの一匹を殴り飛ばしたオールラウンダーが、その様に氣を向ける。

「牢獄の娘たちがいないことに気付いたんだろう」

闇人が、《ディスタインテグレート分 解》の術でゴブリンどもを融解しながら応える。

彼の言う通りであった。

僧衣のゴブリンは、いわば聖職者。聖騎士が砦の主となる叙勲式には、必要不可欠な存在の一つだ。

果たして聖職者は、式典に必要なもう一つの要素である『生贄の娘』を連れて来ようと地下牢へ向かい、そしてそこがもぬけの殻になっていることに気が付いたのである。

聖騎士が、青筋を浮かべた。剣を引き抜き、掲げた。

あいつらを殺してしまえ！

ゴブリンの言葉が分からない二人の戦士も、それくらいのことには理解できた。

「奴らめ。更に死に物狂いで向かって来るだろうな」

「しるもんか」

慌てふためく射撃部隊を殲滅し終えたオールラウンダーが、他のや

つらを闇人に任せ、己は聖騎士へと突進を仕掛ける。

これを迎え撃つかのように、聖騎士の隣で静観を決め込んでいた長身の個体が、遂に動いた。

其の二

突進するオールラウンダーへ、長身のゴブリン……さながら拳闘士フアイターは、その長い足を振り上げて応戦する。

「ぎゃっ……！」

顎を蹴り飛ばされたオールラウンダーは、そのまま城壁へと叩きつけられた。

これを見た闇人は、驚愕のあまり目を見開き、動きを止めた。

(奴が……こうも簡単に蹴り飛ばされるとは……)

この事実も然る事ながら、拳闘士の見せた動きが、明らかにゴブリンが発揮できるものではなかったからである。

「う、ぐぐぐ……」

がらりがらりと落ちてくる瓦礫を払いつつ、オールラウンダーはようやく立ち上がり、姿勢を立て直す。だが、それを悠長に待つような拳闘士ではない。彼はすでに少年の目の前へと来ており、

「GYAU！」

まるで勝ち誇ったかのような咆哮の後、その胸ぐらを掴むと、勢いよく地面へと叩きつけたのだ。

「がっ……！」

そのまま、二度三度と石畳の道に打ち付けられたオールラウンダーは、仕舞いに上空へと蹴り上げられた。

すでに彼に興味を無くしたのか。拳闘士はゆっくりと闇人の方を振り返る。

「ちっ……！」

舌を打った闇人が姿勢を低くした……丁度その時。

「波ッ！」

頭上から、素晴らしい大音声が響くと同時に、青白い炎が拳闘士目掛けて突っ込んでくる。

「!？」

油断していた拳闘士は、しかし腕を交差して防御の姿勢を取りつつ、背後へと跳び退る。

的を外したオールラウンダーの《かめはめ波》は、それでも着弾と同時に爆風を生じさせ、拳闘士の体を押しやる。

空中で姿勢を崩された拳闘士は、背面から地へと落ち、むくりと体を起こした。その目が、吃きょと上を向く。

両掌を重ねた姿勢を保ちつつ、ゆっくりと下降してくるオールラウンダーは、

「はええな……」

苦々しい顔つきで呟いた。

戦いを傍観していた聖騎士が、拳闘士へと何かを叫んだ。しかし、拳闘士はそれを無視し、降りてくるオールラウンダーをじっと見つめているのみである。

聖騎士は苛立った表情を見せたけれども、それ以上の言及を諦めたようで、今度は僧衣のゴ布林へと叫んだ。

これを受けた聖職者が、何かをぶつぶつと呟く。

「あれは……」

この様子を眺めていた闇人が、何かに気が付いたように「はっ」として、城壁の上……自分たちが降りてきた武器庫の辺りを見た。

恐らく、まだあそこには貴族令嬢たちがおり、装備を整えているはずである。そんな場所から、細く赤い閃光が、上空へ向かって伸びているのである。

聖騎士が、閃光を見てにやりと歪んだ笑みを浮かべた。

次いで彼は剣の先をその閃光へと向け、オールラウンダーたちに恐れをなして縮こまっていた他のゴ布林どもへ何かを命じた。

指令を受けた下っ端どもが、爛々と目を光らせ、途端に城壁を上り始める。

「気づかれたぞ!!」

闇人が、貴族令嬢たちへ呼びかけた。

果たして、当の彼女たちはどうしているのか……。

「うっ……あ、あっ……」

やっとなさ装備を整え、さあこれからオールラウンダーたちの援護に……というところで、突然に貴族令嬢が蹲ってしまった。

「だっ、大丈夫ですか……!?」

駆け寄った剣士は、見た。

貴族令嬢の透き通るように白いうなじの辺りに、いつしかゴブリンどもの巣穴で見た、緑の月を模った刻印が燃え盛るように赤く光っているのを。

「あ、あつっ……!」

心配し、背中へ手を当ててみると、これが焼けるように熱い。

ふと、闇人がこちらへ何かを叫んでいる声を聴いた。

直後、下方からゴブリンたちが欲望に塗れた声を上げて迫ってきている気配を感じた。

貴族令嬢の体は熱く、とても抱えて逃げられるものではない。

そうこうしているうちに、とうとうゴブリンの先陣部隊が城壁を上り切り、二人の雌を見つけ、興奮の雄たけびを上げた。

守らなければ! 戦わなくては!

そんな戦意とは裏腹に、彼女の瞳は涙で潤んでいく。

体が震え、それでも辛うじて突剣を引き抜く。

やがてゴブリンの一匹がこちらへゆっくりと近づき、そして、

「あ、ああっ!」

それまで倒れ伏していた貴族令嬢が、狂ったような気合声を上げ、掬い上げるようにゴブリンの首筋を切り裂いた。

思わぬ反撃に、後方に控えていた無数のゴブリンがどよめくが、それも一瞬の事。

立ち上がった貴族令嬢は、鬼気迫る表情をしてはいるが、所詮は一人。傍にいるもう一匹は、生まれたての小鹿のように足を震わせている。

数で押せば勝てる!

目の前の獲物に舌なめずりをしたゴブリンどもが、またしても近づこうとするのへ、

「があっ!」

傍に斃れていたゴブリンの骸を掴んだ貴族令嬢が、これを群れへと投げた。

一匹がこれを受け止めるような形となり、他の者は巻き添えにならないようにと脇へ避ける。だが、狭き回廊で無数のゴブリンが同じ方向に動くとうなるか。

「GYA!?!」

一番端つこにいたゴブリンどもが、押し寄せる仲間たちによって圧迫されていき、やがて床を踏み外す。

高所から、ぼろぼろとゴブリンどもが落ちていき、その衝撃によって一匹二匹と次々に潰れて行く。

貴族令嬢とて、これを狙ったわけではない。迫りくる死の危険と、体を駆け巡る地獄の業火のような苦しみに、ただがむしやらとなつていただけなのである。

そんな中、貴族令嬢は剣士を庇うように前に立ち、

「だい、じょうぶ。きつと、まもり、ますから……」

途切れ途切れに、しかし不敵に笑って、そう言っただけなのである。

それは、精一杯の強がりであった。しかし、強がる事が出来るだけの勇気を、彼女は持ち合わせていたのだ。

瞬間。剣士の中で何かが弾けた。

「う、ああああっ……」

恐怖を拭うように、大声で叫んだ彼女は、迫るゴブリンの大軍へと掌を突き出す。

「《トニトルス……オリエンス……ヤクタ!!》」

呪文の詠唱と共に飛び出したのは、鞭のようにしなる紫電。それが、ゴブリンどもを文字通り一網打尽にしていく。

だが、ゴブリンは次から次へと後方から補給されていく。

剣士は、気の遠くなるような思いがし、瞳に涙を浮かべつつも、迫りくる敵をしっかりと見据えていた。

其の三

吐く息は白く、四肢は悴み、腹の虫は食物を求めて大きく鳴き声を上げている。正直に言えば、オールラウンダーの調コンディション子は最悪であった。

それもそのはずで、道中で羽織っていた毛皮は村へと逃げた只人僧侶へとやってしまったので、今着ている物は袖なしの道着のみ。食べ物の方も、ここ最近で口にしたものと言えば、寒村の人々が涎の出るのを我慢して提供してくれた蒸かし芋のみなのである。

そこをいくと、対峙する小鬼拳闘士は、長いことこの雪山を根城としているだけあって、すっかり体の仕組みが寒さに適応してしまっているし、見たところ空腹に餓えている様子もない。恐らくは砦の中に、捕らえた冒険者や村人たちで拵えた「食事」を蓄えておくための倉庫があるのだろう。

これがもし、オールラウンダー万全の状態であつたなら戦況は違ってきただろうが、冒険者として身を置いている以上、そのような言い訳は通用しない。

それにしても、だ。空腹と寒さ。この二つの要素さえ整えば、小鬼拳闘士はオールラウンダーとの力量差を埋められる、というのは厄介なことではないか……。

現に、戦いを傍観している闇人は、

(あんな小鬼風情に、何を手間取っているのだ……)

内心苛ついていた。

(百手ヘカトンケイル巨人の膂力の一端を宿した時よりも、苦戦しているのではないかな……)

なのである。

見たこともない個体だが、所詮は小鬼。それに、いつか自分を打ち負かしたオールラウンダーがやられっぱなしとなっていることに、闇人は我慢ならないでいた。

二人は、睨み合つて未だ動かない。

遠くで見守る小鬼聖騎士も、下手に動けないでいる。

そうこうしているうちに、とうとう闇人が痺れを切らした。

「ええい！ 何をしているのだ！」

怒声を放った彼は、唐突に拳闘士へと肉薄し、手にした突剣を突き出した。

これを黙って受ける拳闘士ではない。彼は横目に闇人の様子を見ただけでも、すぐさまオールラウンダーへと視線を戻し、それでも器用に、

「くたばれっ！」

闇人の突剣が当たる直前、するりと宙へと飛び上がり、身を反転させ、その勢いで闇人の頭を蹴った。

「がっ……っ！」

前のめりに倒れた闇人は、そのまま地に積もる雪の影響で、オールラウンダーの足元へと滑っていく。

「なにやっつてんだよ」

「五月蠅い！」

戦場において、下らぬ口論は命取りだ。

未だ空に身を置く拳闘士は、一見すると隙だらけであったが、

「GA！」

と、その大きな口を開いた時、オールラウンダーは奴めが何をするのかを悟り、

「やべえっ！」

闇人の襟首を掴み、慌てて後方へ跳んだ。

それと同時に……いや、僅か手前で、拳闘士の口から緑色の閃光が走った。

閃光はそのままオールラウンダーたちのいた箇所へとぶつかり、爆風を生む。

まともに受け身もとれぬまま、少年と、彼に掴まれた闇人は城壁へと叩きつけられてしまった。

「くっ……っ」

真っ先に起きたのはオールラウンダー。彼はそのまま、敵の位置を確認しようとして、

「あつ……」

すでに地に降りていた拳闘士が、今一度こちらへ向けて大口を開けているのを見た。

眩い閃光が、充分にその大口へと集中しており、それが容赦なく放たれた。

一瞬、避けようかと考えたオールラウンダーであったが、

「うっ……うっ……」

背後で闇人のうめき声を聞くや、その考えを捨てた。

躲す代わりに、彼は腕を交差し、防御の構えをとったのである。

果たして、拳闘士の放つ閃光は、見事にオールラウンダーへと当たった。

「なっ……!?!」

闇人が驚愕に目を見張る中で、オールラウンダーは閃光に押しやられる形で、砦の奥へ奥へと吹き飛ばされてしまった。

口を拭った拳闘士が、

「さあ、次はお前の番だ」

と言わんばかりに闇人を見る。

焦るかと思われた闇人であったが、むしろ何かが弾けたようで、

「くそおおー!」

突如として、青筋を浮かべながら怒声を上げた。

その途端、少しばかり周囲の空気が震えたものだが、これに気付いた者はいない。

さて、一方でオールラウンダーはといえば……。

「いちち……」

拳闘士が放った閃光を、なんとか上空に弾き飛ばしたところであった。

奴が放つ一発一発は致命傷を与えるほどのものではないのだが、こちらが思うように動けない一方、打たれるがままになっているというのは、オールラウンダーにとっても苛立ちの積もるものとなっていた。

「ハッチャンにあつたときは、家の中だったからさむくなかったんだ

けど……」

そう呟き、ふとオールラウンダーは上を見た。

先の拳闘士の閃光を弾いた時、砦の天井が崩壊し、気が付けばそこから夜の空が顔を見せているのである。

鉛色の雲は捌け、煌く星々が空を埋め尽くさんとしているのが見える。果たして、その中央に陣取るように、緑色に光る月も。

……と。オールラウンダーが動きを止めた。

瞳が虚ろとなり、猿の尻尾が逆立っている。

わなわなと、徐々に少年の体が震え始めた。

次の瞬間、

「わあああああつ!!」

悍ましい咆哮が、砦の中に響いた。

さる技術者の書きなぐり

サイヤ人の変身と言えば超サイヤ人だと思ってたけど、そう言えば大猿だって立派な変身能力なのよね。わたしってば、孫君が目の前であの姿になったのを何度か見てたのに、すっかり忘れてたわ。

きっかけは、こないだ地球にやって来たブロリーってサイヤ人。今は惑星バンパってとこにいて、ちよくちよく孫君に修業をつけてもらってる……っていうより、孫君の修業相手になってるらしいんだけど……。

まあ、そんなことは今はいいか。で、話を戻すんだけど、孫君がそのブロリーについて色々聞かせてくれたの。なんでも、彼は大猿に変身した時のパワーを、人間サイズのまま引き出せる形態を持つてるんだって。便利よねえ。孫君だってそんなことできれば、天下一武道会の会場を壊すこともなかったのに。……ああ、でも最初にドラゴンボールが集まった時に、ほら、なんていったっけ……顔もよく覚えてないんだけど……まあとにかく、わたしたちを捕まえた悪い奴らのお城から脱出も出来なかったのよね。

しかしながら、大猿のパワーを内包した形態かあ。あいつら、強くなりたいたらそっちの方も習得すればいいのに。孫君は、力の大会で覚えた「身勝手の極意」ってのを極めるって言ってるし、ベジータはベジータで、ブルーの先を見つけたみたいだから、そっちを極めることに躍起になってるみたい。

でも、どんな条件が揃えば、ブロリーみたいな形態になれるのかしら。別にわたしは強くなる気はないし、そもそも生物系の学者じゃないからフィールドは違うけど、ちよつと気になるのよねえ。

サイヤ人が大猿になるのは、『ブルーツ波』ってのが視覚から入って尻尾に反応するかららしいんだけど、ブロリーはお父さんのパラガスに尻尾を処置されてからも、あの形態を引き出せるのよね。それって、あれかしら。孫君が初めてゴッドになった時と同じで、

「大猿のパワーの領域をわが身に吸収してしまった」
からなのかしら。

興味深いわね。そもそも、本当に太陽光が月に反射された時だけブルーツ波が発生するのかしら。サイヤ人やフリーザたちがどれだけ調査したのかは分からないけれど、例えばこの地球だって、別の惑星から見た時、太陽光に照らされたのを見れば、ブルーツ波が発生するかもしれないわ。地球育ちのサイヤ人がそのブルーツ波を受けて大猿になり、それが新しい超サイヤ人誕生にきっかけに……なんてのは、ちよつとロマンティックが過ぎるかな。

あいつらのセン斯的に、そうなった場合の超サイヤ人は、「超サイヤ人4」とかになりそう。ゴツドやブルーは、それまでの超サイヤ人のナンバリングから派生したものとみたいだし。

それとも、あれかな。月の代用品で、かつ1700万ゼノを超えるブルーツ波を発生させる衛星を見た時、それこそブローリーみたいに「大猿の力を内包した形態」にでもなるのかしら。

未だオールラウンダーを勇者と勘違いしている闇人は、小鬼拳闘士と対峙する者が、オールラウンダーの姿をしたなにかだと察知した。と、その時である。

「がああっ!!」

空気が張り裂けんばかりの大音声を上げたオールラウンダーが、腕を負傷し苦悶している小鬼拳闘士の、その隙だらけの腹へと拳を突き入れた。

小さな拳が、いとも簡単に拳闘士の腹をぶち破る。

「GA!？」

目を見張った拳闘士の口から、夥しい量の血が流れ出た。

これには構わず、オールラウンダーは拳闘士の体を蹴り飛ばし、乱暴に拳を引き抜く。

どさりと後方に倒れた拳闘士は、もはや息をしてはいなかった。

一部始終を見ていた聖騎士が、怯え切った鳴き声を上げて逃げにかかると、

途中で何度も転げ、それでも懸命に中庭を突き抜け、やつこのことで聖騎士が城門まで到達した時、これをじっと見守っていたオールラウンダーが大きく口を開けた。

その口元へ赤々とした光が集約していくのを見て、顛末を悟った闇人が、

「いかぬっ!」

くるりと身を翻し、オールラウンダーの背面方向へと走り出した。

直後、背後から耳を劈く様な爆発音がし、激しい風が吹き荒れた。それによって容赦なく闇人の体が流される。

「くっ……!」

乱暴に地面へと叩きつけられ、二度三度と地面を転げた後で、ようやく闇人は体を起こした。

起こして、

「あっ……!」

と声を出す。

城門が。聖騎士が。美しかった砦の中庭が。綺麗さっぱりと消え

失せ、代わりに、半円筒状の凹みが地を抉っているのが見えたからであつた。

「がああっ!!」

それは勝利の咆哮であろうか。オールラウンダーが天を仰ぎ、大音声を上げる。

大気を震わせるその声が止んだ時。彼はゆっくりと後方を見て、果たして次なる標的を見つけたようであつた。

……さて。

この様子を、回廊から貴族令嬢たちも見ていた。

それまで数の多さに慢心していた小鬼どもも、先の爆発音と、それがもたらした破壊力を目の当たりにし、戦慄の余り動きを止めている。獲物はもう目の前なのだが、

(下手に動けば、あの化け物に殺される……!)

奴らはそう思っているらしい。

これを見た貴族令嬢は、ふと傍にいた剣士が腰に吊るしていた雑嚢を引つ手繰り、中身を探ると、

「行きますよ!」

何を思ったのか。石畳の床を蹴り、剣士に抱き着き、そして城壁から身を投げ出したのだ。

呆気にとられていた小鬼どもが、獲物の突然の行動に気付きはしたもののだが、やはり動けぬ。

「なっ、なにをっ!?!」

あまりにも唐突すぎる行動に、すっかり剣士が混乱していると……。

がくり。唐突に、落下が終わりを告げたのである。

娘二人の体は、ぶらりぶらりと宙に浮いて……いや、吊るされていた。

「よかつた。あなたがしっかりと用意してくれていた」

貴族令嬢が、片手でしっかりと剣士を抱きしめつつ、そんなことを眩いた。

彼女のもう片方の腕は、ぴんと上方へ伸びており、その拳が何かを

しっかりと握っている。

「あっ……い！」

貴族令嬢が握っているものを見て、剣士は納得の声を上げた。

それは、鉤縄であった。駆け出し冒険者に向け、様々な物品を一まとめにした『冒険者ツール』と呼ばれる装備のうちの一つなのである。

先端の鉤はしっかりと城壁を掴んでおり、これを確認した貴族令嬢は、

「行きますよ」

言うや、宙ぶらりんの状態から城壁を蹴って手早く下へ降り、ある程度のところまで行くと、ぱつと手を離れた。

降りた先は、砦の外側……ではなく中庭。今まさに、暴走したオーラウンダーが闇人を仕留めんとしている戦場なのである。

「どっ、どうして……い！」

どうして砦の外へ逃げなかったのか。その理由を訊こうとして、

「こっちですよ!!」

剣士の声は、オーラウンダーへと呼びかけた貴族令嬢の声によって阻まれた。

闇人へ飛びかかろうとしたオーラウンダーが、ぴくりと動きを止め、声のする方へと体を向けた。

剣士は、ますます貴族令嬢の考えが読めずにいた。しかし、この後の展開は予想できる。

鋭い目をこちらに向けたオーラウンダーは、白い息を吐き出しながら、

「あああっ!!」

予想通り、標的を娘二人へと変更し、突進してきたのである。

二

自分たちへ迫りくる脅威を前に、しかし貴族令嬢は落ち着き払っていた。

彼女は、未だ自分に抱き着いている剣士を強引に引き離すと、腰元

の剣を引き抜いた。

「戦う気ですの!?! 無茶ですわ!」

剣士が叫んだ。

しかし、貴族令嬢の目的はオールラウンダーとの戦闘ではなかった。

彼女は、手にした長剣を、

「それっ」

上空に放り投げたのである。

地を駆けながら、オールラウンダーはその剣の行方を目で追った。くるりくるりと回転しながら、長剣は目いっぱいの高さまで到達し……そしてオールラウンダーの視界に入った。長剣が舞う地点からもう少し上の、回廊からこちらの様子を伺っている小鬼どもの姿を。途端に、オールラウンダーが走りを止め、唸り声を上げる。その顔には、貴族令嬢たちへ向けたものよりも一層強い敵意が見える。

「走りますよー!」

剣士へ呼びかけ、貴族令嬢が急いでその場から闇人のいる方へと駆け出す。

「あっ……えっ!?!」

戸惑いながらも、剣士はそれに続いた。

「なるほどな」

自分の下へ二人の娘が駆け寄ってきた後で、闇人は呟いた。

「勇者の注意を引き付けつつ、小鬼どもの殲滅を計ったわけだ」

闇人の指摘通りである。

新たな敵を見つけたオールラウンダーは、逃げ出した貴族令嬢たちには構わず、回廊でこちらを見ている小鬼どもへ向け、大きく口を開いた。

これが何を意味するか。すでに一度、砦の主の顛末を見た小鬼どもが察知できぬわけがない。

ゆっくりとオールラウンダーの口元へ赤き光が集まっていく中、小鬼どもは我先に逃げようとし、しかし城壁から飛び降りる勇気もなく、もみくちやになり却って身動きが取れなくなってしまうた。

……と。

遂に紅の閃光がオールラウンダーより射出され、砦の一角ごと小鬼どもを包み、飲み込んだ。

「あつ」

という間もない。砦に巢食っていた小鬼どもは、こうして呆気なく、何の感動もなく、綺麗さっぱり全滅したのである。

化け物退治は終わった。しかし、戦いそのものが終わったわけではない。

「ふうっ……！ ふふうっ……！」

強大な力を連発したことで、流石に疲弊したと見えたオールラウンダーであったが、やがて顔を上げ、すんすんと鼻をうごめかせる。

匂いだ。オールラウンダーは、ついさつき逃げた貴族令嬢と剣士の匂いを嗅ぎ取り、そして……、

「あつ、あああつ!!」

見つけた。娘二人のほかに、先ほど自分が襲い掛かりかけた闇人の姿もとらえ、オールラウンダーは雄たけびを上げる。

「さて、どうする？ 勇者の取り巻き」

闇人が、無駄と悟りつつ身構えながら問うのへ、

「勿論、戦います」

貴族令嬢は言うのだが、彼女の得物は、囷に使った代償に、小鬼どもと運命を共にしてしまった。

「まさか……素手で戦うつもりですか……？」

剣士が、血の気失せながら問うのへ、

「そうしないと、彼を助けられないので」

貴族令嬢は、澄ました顔で言ったものである。

この態度に何かを察した闇人は、

「貴様。勝機があるのか？」

問うと、

「……確実じゃないし、敵のあなたには教えたくありませんが……」

前置きをした後で、

「彼は、尻尾を握られると力が抜けるんです。なんとか隙を見て、尻尾を握れば……」

「馬鹿な！ あの化け物の背後に回り、尻尾を掴めというのか！」
「だから、確實じゃない、と言ったんです」

少しばかり苛立った様子の貴族令嬢は、ちらりと剣士を横目に見て、

「《稲妻》の呪文は、あとどれくらい？」

「……あ、あと一回……」

これを聞いた貴族令嬢はこくりと頷き、

「結構。彼の援護をお願いします」

言ったかと思うや、思い切り地を蹴り、オールラウンダー目掛けて駆け出したのである。

「阿呆が！ 飛び出すのは囧の役目だろうが！」

青筋立てた闇人が、咄嗟に拳を突き出す。

彼の薬指には、赤い宝玉がはめ込まれた指輪が光っている。

迫りくる貴族令嬢を迎え撃とうと、これも地を蹴ったオールラウンダーへ、

「勇者！ こっちだ！」

叫ぶのと同時に、少年の左手方向へと跳び、

「《オムニス……ノドウス……リベロ!!》」

と唱えた。

すぐさま白き光が指輪の宝玉から迸り、《分テイスインテグ解》の魔法がオールラウンダーのこめかみを撃った。

もとより、それで頭を撃ち抜かれるオールラウンダーではないが、注意を引き付けるには十分。こうした暴走の欠点は、目の前の敵にのみ視点が向かってしまうために外部からの襲撃を受けやすいことであり、加えて言うならば、新たな敵を見ると、簡単にそちらへ注意が逸れてしまうのも欠点と言えよう。

果たしてオールラウンダーは、標的を貴族令嬢から闇人へと切り替えた。

「貴様！」

闇人が、切羽詰まったように剣士へ呼びかける。

「私はこんなところで死ぬつもりはない！ 貴様も命惜しくば、死ぬ気で援護しろ！」

三

剣士は、もうなりふり構わぬ様子であった。

冒険者として家を出た時に持ち出した、家宝とも呼ぶべき突剣を引き抜き、

「う、わあああああつ!!」

悲鳴にも似た声を上げ、オールラウンダーへと肉薄した。

無論、これを易々と許すようなオールラウンダーではない。

ぎろりと剣士へ視線を向けると、瞬時にそちらへと体を向け、疾風の如く向かって来る。それへ、

「どこを見ている！」

闇人がまたもや《ディスプレイテグレート分 解》の魔法を放つ。

後頭部を打たれたオールラウンダーが、前のめりに扱ける。

(これで、あと二回……)

使用できる魔法の回数なのである。

そこへ、迫った貴族令嬢がうつ伏せているオールラウンダーの尻尾を掴もうとし、

「あつ……！」

両手両足を発条のようにし、オールラウンダーが宙へ跳びあがったので、か細い貴族令嬢の指は虚空を掴んだのみである。

「ちっ……！」

舌を打った闇人が、空に浮かぶオールラウンダーを見た。

少年は、真下にいる貴族令嬢へ狙いを定めている。

(奴が死ぬのはどうでもいいことだが……駒が減ると、それだけ勇者の暴走を止められなくなる……)

咄嗟にその判断をした闇人が、オールラウンダー目掛けて跳びあ

がった。

身動きとれぬ空中で、しかも貴族令嬢へ意識を向けていただけに、オールラウンダーは迫りくる闇人に気付くのに少し遅れた。

そのまま、彼は闇人に組み付かれる形で地へ落ちる。

しばらくもみ合った後、蹴飛ばされたのは闇人であった。

なんとか立ち上がるうとする闇人へ、素早く迫ったオールラウンダーは、その腹に蹴りを入れた。

「ぐふっ……」

鈍い音ともに、彼の体は崩壊寸前の城壁へと叩きつけられ、力なく地面へと落ちる。

(いけない……！)

悟った貴族令嬢が、

「私が囿に……！」

提案しようと剣士の方を向いた時だ。

大きく掌を広げ、これを前へと突き出した剣士は、

「伏せて！」

と叫んだ。

すぐさま意図を組んだ貴族令嬢が、頭を抱えてその場に倒れ伏す。

途端、彼女の頭上を、雷鳴が轟き、掠めた。

剣士最後の《稲妻》が、オールラウンダー目掛けて放たれたのである。

いかなオールラウンダーとて、瞬時に迫る雷を避けるのは不可能であった。

伸びる紫電が彼の体を捕らえ、

「あがあっ！」

眩い閃光の中で、少年は苦悶の声を上げた。

光が失せ、びりびりと火花が瞬く。

灰色の煙がもくもくと立ち込め、その中でオールラウンダーは……、

「ぐう……！」

こちらを睨み、立っている。雷を受けてなお、彼にとっては大した

ダメージではなかったのだ。

しかし……。

「う、うう……」

体が動かない。流石に、電撃による麻痺だけは、どうしようもなかったらしい。

「さあ、早く！」

剣士の声を受け、最後の力を振り絞って駆けた貴族令嬢は、

「これで、終わり……！」

逆立つオールラウンダーの尻尾を、力強く握りしめた。
途端。

「あ、ああ……！」

情けない声を上げたオールラウンダーが、へなへなとその場に崩れ落ちた。

逆立った黒髪も、それにともなつて垂れ下がり、それまで黄金色に輝いていた瞳の色も、平時の黒へと戻ったのである。

「はれひろはれ……」

言葉にならぬ言葉を放ち、やがて少年は目を閉じた。

「し、死んでしまったのですか……？」

恐る恐る剣士が問うのへ、答えたのはオールラウンダーだ。

「ぐぐおおおお！　ぐがあああああ！」

まさに「廃墟」となった砦の敷地内に、まるで洞穴の奥に潜む竜の如き軀が木霊したのである。

夜が明けて

一

新年を迎え、辺境の街の冒険者ギルドは一層の賑わいを見せていた。

受付嬢が乾杯の音頭を上げると、酒場スペースに集った冒険者どもが一齐に杯を上げ、

「おめでとーっ！」

と祝杯の声を上げる。

かくして貴族令嬢一党も、隅つこの円卓を囲み、仲間たちと新年の幕開けを祝っていた。

仲間というのは、なにも一党内のことだけではない。

今やすっかり町娘風の出で立ちとなった令嬢剣士もいるし、そんな彼女へあれやこれやと話しかける妖精弓手の姿もある。

「耳長娘。あまり矢継ぎ早に話しかけるなや。娘が混乱しておろうが」

右手に火酒の杯、左手に骨付きの肉を持った鉦人道士が諫める横で、

「いや、術師殿。新たな友が出来た喜びというのは、どれほど歳を重ねても変わらぬものでありましようや」

チーズを齧った蜥蜴僧侶が、にこやかに娘たちを見守っていた。

この中に、ゴブリンスレイヤーと女神官の姿はなかった。

「あの娘なら、受付の娘に何か言われて出てったわよ。オルクボルグは、相変わらずさーっぱり」

妖精弓手曰く、そう言うことらしい。

ま、あの風変わりな冒険者が賑わいの場にはいないことなど、それほど特異なことでもなし。冒険者たちは談笑しつつ、酒に料理に舌鼓を打った。

そんな席で着となるのは、やはり貴族令嬢たちが経験した、雪山の

砦における一件であろう。

「ふむ。なあ……」

話を聞き終え、鉦人道士は火酒をぐいと呷った後で、

「いつしか助けた盗賊が、これまたいつしか戦った闇人と組んでいたとは……こいつは厄介になるやもしれぬな」

蜥蜴僧侶へと視線を向けた。

当の本人は、舌をチロチロと出し入れし、

「なあに。あのご老人ならば、心配ありませんまい」

呑気に答える。

あの後……なんとか生き延びていた闇人は、貴族令嬢たちとともに満身創痍ながら村へと降り、これまた無事に捕虜の娘たちと逃げおおせていた老爺と合流し、いずこかへと去っていった。

「勇者に伝えておけ」

闇人は、尻尾を握られ気を失っているオールラウンダーに代わり、去り際に貴族令嬢へ言伝を託してた。

「貴様はいつかきつとこの私が殺す。きつとな」

そう言つて、彼は老爺に引張られる形となって、雪原を後にしたのである。

「それより……拙僧が気になるのは、武闘家殿たちが遭遇した奇特な小鬼のことですなあ」

「……そうですね……」

それまで妖精弓手や剣士と談笑していた貴族令嬢が、すぐさま真剣な表情となり、

「今後、またあのようなゴブリンが出ないとも限りませんし……」

「極寒に加えて空腹の負担条件があったとはいえ、武術家殿が苦戦した相手ですしなあ。駆け出しの……いや、上級の冒険者として、斃すのいくらか犠牲は払わなければなりませんな」

するとそこへ、妖精弓手も身を乗り出してきて、

「だったら、私たちもあの……なんてったつけ？ カメハメハ？ を覚えればいいじゃない」

言うや、向かいの席でひたすらに飯をかつ込んでいるオールラウン

ダーを見た。

少年は、リスのように頬を膨らませつつ小首を傾げ、
「もまむもまみんまめめまま。もまもまめめんみんもみいまままめ
まめまももみめめもまつままめまめめみ」

どこの種の言葉だか分からぬ言語を発したものだから、

「なんて?」

妖精弓手が聞き返すのも当たり前のことである。

これを見て溜息を吐いた森人魔術師が、

「喋る時は口の中の物を呑み込んでからだ、と何度言わせる気だ」

行儀のなっていない子供と、それを叱る母親のようなやり取りを見
せた。

これを受け、きよとんとしつとも口に含んだものを全て胃に収めた
オールラウンダーは、

「そりや無理なんじゃねえかなあ。オラも亀仙人のじいちゃんからか
めはめ波をおしえてもらったわけじゃねえし」

「……カメセンニンって、あんたに修業つけてくれた、って人よね?」

「ああ」

「教えてくれなかった、って……。じゃあどうやってカメハメハ出来
るようになったのよ」

「じいちゃんがやったやつ見て、マネしただけだ」

あっけらかんと言いつ放つオールラウンダーに、妖精弓手はがくりと
膝をつく。

「あんたねえ……。そんな簡単に真似できるなら、私たちだつてやつ
てるわよ」

ねえ? 同意を求められ、貴族令嬢は苦く微笑んだ。

思い返すは、いつしかの水の街での戦い。

邪教の使徒が呼び寄せた岩巨人ゴレムを相手に、注意を引き付けようとし
た貴族令嬢は、只人僧侶と連携し、《かめはめ波》を撃つふりをしたこ
とがある。

あの時彼女は、

(もしかして、もしかすると……?)

心の奥底で、淡い期待を抱いていた。……勿論、その期待は儚く散ってしまつたが。

「そんな苦い思い出を掘り起こした貴族令嬢の返事は、
「え、ええ……」

なんとも歯切れの悪いものであつた。

二

「で？ あなたはこれからどうするの？」

顔を赤らめた妖精弓手に問われ、

「えっと……」

令嬢剣士は、戸惑つたように俯いてしまった。

「こりゃ。だからお前は少し他人との距離を置くことを……」

鉦人道士が説教にかかり、これでは同じやり取りの繰り返し。見かねた貴族令嬢が、

「まずはお仲間の御弔い……ですかね？」

助け舟を出してやると、剣士の娘はこくりと頷いた。

彼女とて、これから先の事を全く考えていなかったわけではない。ただ、良くも悪くも遠慮なしに距離を詰める妖精弓手に驚いただけの事であつた。

「彼女も……故郷に送り届けなければなりませんし……」

そう言つて、剣士の娘は天を……いや、酒場の天井を仰いだ。

上階。宿泊のためのスペースとなつている一室に、剣士の仲間である半森人がいる。

小鬼どもの根城で凌辱の限りを受けた彼女は、なんとか身体的な傷は癒えたのだが、心の傷の方は年が明けた今もなおさつぱり。

「故郷には戻りたくない」

とすっかりふさぎ込んでしまい、今もなお冒険者ギルドの宿泊施設を、剣士の娘と共に利用しているのであつた。

「オルクなんかによられたなんて知られたら、笑いものになる……」
のである。

「しかしながら……不謹慎ではありませんが、それだけ体面を気にすることが出来れば、もう少しでしような」

蜥蜴僧侶が、剣士の憂いを悟り、にこやかに微笑む。

小鬼によつて辱めを受けた娘は、そのまま食料としての末路を辿るか。はたまた運よくやってきた冒険者たちに救出されるか、だ。

しかし、命が助かったからといって、そう簡単に第二の人生を歩めるものではない。

陰惨な仕打ちを受け、仲間たちの末路を見せつけられた彼女たちは、茫然自失。虚ろな目をしたまま荷車に乗せられ、他の者の呼びかけにも、

「う………」

とか、

「あ………」

とか言うのみで、まともな返事も出来ない。

そうこうしているうちに、訳も分からないまま故郷へと送還され、そして……家に引きこもり、寂しく最期を迎えるのである。

そこをいくと、半森人はちっぽけながらも意地を張っている。

意地を張っているということは、

「氣力がしつかりしている」

ということなのであった。

「仲間のお墓を作つて……それから、両親ともちゃんと話し合つて………」

ぽつりぽつりと剣士の娘が語る傍で、一瞬だが貴族令嬢の表情が曇る。

先に故郷に戻つた時の、父親の様を思い出したからである。

「頼む。どうか家に帰つて来ておくれ」

土下座までして懇願する父に、

「ごめんなさい………」

貴族令嬢はそう言つて頭を下げたのみである。

(いつか……私もお父様に、ちゃんと向き合つてお話ししなければ……)

旅の仲間に、自分の冒険者としての矜持を語るのは容易い。だが、いかんせん父親には、それが出来ないでいた貴族令嬢であった。

果たして、そんな彼女の鬨りに気付いたのだろうか。妖精弓手が、

「ほおらー！ 折角の年明けなんだからー！ 暗い顔しないのー！」

杯を片手に、絡んできた。

妖精弓手には、貴族令嬢の胸の内など分からない。分からないが、しかし。友達が沈んでいるのを黙って見過ごせるわけもない。

そんな彼女の無作法な明るさに、しかし貴族令嬢は胸を撫でおろした。

この様子を眺めていた鉦人道士は、

「金床の察せなさも、ちったあ役に立つってこったな」

その長耳の威力を知らぬわけでもないが、わざと聞こえるように呟いたものだが、すでに出来上がってしまった妖精弓手は、貴族令嬢と剣士の娘へ交互に何かを話しかけている。

「全く……」

苦々しく、しかし朗らかな笑みを、彼は浮かべた。

三

翌日の昼過ぎとなつて、令嬢剣士は仲間の半森人を伴つて、故郷への帰路についた。

辺境の街の街門で、これを見送るのは昨夜の面々……それに加え、

ゴブリンスレイヤーと女神官の姿もある。

「スツチャンはきのうなにしてたんだ？」

今朝方、冒険者ギルドにやって来たゴブリンスレイヤーへオールラウンダーが問いかけると、

「見張りだ」

淡々と、彼はそう答えたものである。

「なんだ。いってくれればやったのに」

頭の後ろで腕を組んだオールラウンダーへ、

「武道家殿。時に思いやりは無粋となりましようや」

優しく言った蜥蜴僧侶が、女神官へと向き、ぱちりと片眼を閉じた。俄に、彼女の白い面が紅潮していく。

この両者に交わされたやり取りの意味を解せぬオールラウンダーは、

「？」

頭上に疑問符を浮かべていた。

やがて、馬車が来た。

未だためらいがちな半森人を、半ば強引に幌へと押しやった後で、令嬢剣士は友人たちにひらひらと、遠慮がちに手を振った。

これへ、ぶんぶんと遠慮なく手を振るのは妖精弓手である。

「餓鬼か」

言いつつ、鉋人道士も手を振り、その横では蜥蜴僧侶が奇妙な合掌を組んでいる。

「どうか、お元気で」

呟くそうに言ったのは、女神官……ではなく貴族令嬢だ。

どうか、無事に彼女たちが故郷へ戻れるように。

どうか、彼女が両親との仲を修繕できるように。

段々と遠くなつていく馬車を見送りつつ、貴族令嬢はそう願わずにはいられなかった。

かくして、馬車がすっかり見えなくなると、冒険者たちはそれぞれの仕事をするべく、ギルドへと足を運んでいく。

その中で、最後に残ったゴブリンスレイヤーが、仲間たちの後を追おうとするオールラウンダーを、

「ちよつといいか」

呼び止めた。

無論、少年はこれを無視するものではない。

「なに？」

足を止め、向き直ったオールラウンダーへ、

「お前たちが雪山で遭遇した、特異なゴブリンの事だ」

「ああ……」

「詳しく話せ」

ぶつきらぼうな彼の態度に、しかしオールラウンダーは不快感を感じない。

スツチャンは良い奴だ。それがオールラウンダーの、ゴブリンスレイヤーへの評価であった。

して……。

話を聞いているうちに、ゴブリンスレイヤーの兜が徐々にはあるが下がっていくのを、オールラウンダーが気付いたものかどうか。

話を聞き終えたゴブリンスレイヤーは、

「そうか」

と呟くように言った後で、

「全く……一人では出来ないことが増えた」

この独り言を耳ざとく聞いたオールラウンダーが、

「また手伝うことがあるのか」

尋ねた。

ゴブリンスレイヤーは、じろりと兜を少年へ向けると、

「……いや」

首を振り、

「今は、な」

と付け加えた。

「そっか」

少年もまた、短く頷き、

「いつでも言えよ。手かすから」

この二人が、横に並び、同じ歩調でギルドへ向かうのは、決して意識したことではない。

ふと、少年が横手のゴブリンスレイヤーへ顔を上げた。

「そうだ。いいわすれてた」

少年が言うのへ、

「なんだ」

ゴブリンスレイヤーも足を止める。

「今年も、よろしくな」

少年の、少し遅れた新年の挨拶であった。

これを受けたゴブリンスレイヤーは、

「今年も、この世界にいるつもりか」

彼の事情を少しは知っている見え、至極真面目にそう返したものである。

冒険者の流儀　　く黒曜級冒険者・孫悟空く
奇妙な一党

一

辺境の街に、春が来た。

ふわりとそよぐ暖気に中てられてか、街の人々の気もどこか緩んでいる様に思える。

かくしてその中を、泥まみれになりながら歩いている者がいた。橙の袖なし道着に身を包み、背に差したるは朱色の細棒。

「よう。今日も朝から仕事かい」

道脇で果実の店を営む男が、その少年へ声をかけた。

少年……オールラウンダーは力こぶを作ってみせ、

「うん。バッチリだ」

元氣よく答えた。

彼は、日課である牛乳配達とドブ掃除を終え、今しも冒険者ギルドへ仕事完了の報告をするところであった。

報告を終えれば、ギルドの酒場で待っているであろう他の仲間と合流し、今日も今日とて《転移^{ゲート}》の呪文が記された巻物を求めての冒険が始まる。

……いや、始まるはずであった。

「……？」

冒険者ギルドの羽根扉を開けようとして、屋内が騒がしいことに気が付いた。

三つの声が、やんややんやと弾き合っている。そのうちの二つは、オールラウンダーがよく知っている声であった。

だからこそ彼は、

「おい。ケンカか」

入るなり、いるであろう二人の声の主へと呼びかけた。故に、注目

を浴びた。

春となり、新たに冒険者生活を送ろうと受付に並ぶ者。依頼を託そうとギルドにやって来た者。

冬に蓄えを消費したので、もう一山当てようと依頼をこなそうとする者。

して、その人混みの中央で、やはりこちらを見る三人の冒険者。

ゴブリンスレイヤーと行動を共にする女神官と、初めて依頼を請けた時に一党を組んだ女魔術師。そして、そんな彼女によく似た風貌の、眼鏡をかけた赤髪の少年魔術師。

「んだよ。チビ助」

そして、赤髪少年がオールラウンダーへ声をかけた。

別に、こんなことで腹を立てるオールラウンダーではない。

「オッス」

挨拶。それは他人とのコミュニケーションを図るうえで何より重要なことだ。初対面ならなおさら。

だが、赤髪少年はこれを挑発と受け取ったらしい。

「ふざけんなー！」

鋭い目つきの、いかにも勝気そうな風貌だが、事実その通りであるらしい。

オールラウンダーからしてみれば、挨拶をして怒鳴られるなど、訳が分からなかった。

「なんだよ」

唇を尖らせたオールラウンダーは、それでも赤髪少年へ喧嘩を吹っ掛けるような事はせず、列をなす受付へ向かおうとする。

「なんだ、お前。冒険者だったのかよ」

ここへ来てオールラウンダーの首から下がった黒曜の認識票を見て、赤髪少年が笑い交じりの声をかけた。

「冗談だろ。お前みたいなのはチビでも昇級できるのかよ」

明らかに挑発の籠った発言。だが、当の本人は気にも留めないし、周囲の人間もくすりくすり笑うのみ。

赤髪は、この笑いが道着の少年へ向けられたものだと思っていた。

だが、知らないというのは恐ろしきかな。ここにいる同業者は、今春初舞台というのを除き、その実力を目にしている。

故に彼らの笑いは、赤髪の少年へ向けられたものであった。

それと気付かないまま、赤髪少年が勝ち誇った笑みを浮かべた時である。

「どうやら、役者は揃ったようだな！」

凜とした声が、ギルド内に響いた。

声の主は、麗美なる女騎士。傍らにいる重戦士は、これから始まるであろう彼女の暴走を予期し、すでに天を仰いでいる。

彼女は、列に並んだばかりであるオールラウンダーの腕を強引に掴むや、これを赤髪少年たちのもとへと引き寄せ、一人満足気に頷いた。

「うむー！」

そうしておいて彼女は、呆然とする四人の冒険者を順繰りに見た後で、

「黒曜三人に白磁一人！ 良いではないか！」

何が「良い」のか。それは女騎士にしか分からない。

「しかし……駆け出しを面倒見るにはもう少し戦力があるなあ……」

腕を組み沈思した女騎士は、脳裏に光明差したが如く表情を明るくし、

「そうだ！」

手を打ち、叫んだ。

輝きを宿したその瞳が、女魔術師へと向けられる。

「お前の友も、黒曜の冒険者だったな」

「……え、ええ……」

赤い鉢巻がトレードマークの剣士と、彼と同郷の女武道家。丁度彼らは、宿舍裏の広場で模擬戦闘をしていたらしく、

「おーい。終わったぞー」

などと、間の抜けた声を上げてギルドへと入って来た。

女騎士の目が、すぐさまそちらへ向けられた。

「へ？」

またしても、間の抜けた剣士の声であった。

事の始まりは、女神官が昇級に失敗し、それを仲間たちが慰めていたところからであった。

姉御肌を気取って、その黄金色の髪を撫でてやる妖精弓手。

「銀等級の中に黒曜一人。それだけで、わしらにおんぶにだつこと思ってる奴がいるのかねえ」

納得いかぬという感じの鉱人道士。

「仕方ありますまい。感情を持つ限り、こういった組織の中でも見る目は様々ということでしょうや」

ギルドへ不満を募らせるでもなく、かといって過度に女神官を慰めるでもなく。ただ事の成り行きを受け止めている蜥蜴僧侶。

そして……。

「……」

傍らで、黙然と立ち尽くすだけのゴブリンスレイヤー。

そのうち、自分の事で思いを詰めてくれている仲間たちを見かねた女神官が、

「あの……そんなに気にしないでください……」

気丈に笑って見せ、

「きつと、頑張れば……認めて認めてもらえるし……」

そう言った。

仲間たちも、当の本人がそう言うのであれば、納得するより他にない。

漸く一同が思案を止め、では今日の依頼を請けようか……とした時だった。

「へっ。後衛職にかまけて、そんなおっかなびつくりしてる奴が昇級なんかできるかよ」

女神官へ、悪態をつく者がいた。

赤髪の、眼鏡をかけた少年魔術師である。

女神官は、首を傾げた。

(彼女にそっくり……)

果たして、その「彼女」が後からやって来た。

「こらー！ 何やってるのよー！」

女神官が初めて一党を組んだうちの一人。女魔術師である。

息せき切って二階から駆けてきた彼女は、なるほど少年魔術師と並んでみると、面影が濃い。

「ご兄弟、ですか……？」

問うのへ、

「ご、ごめん……」

このところは冷たい目つきそのままに、態度は幾ばくか軟化した女魔術師が、ぺこりと頭を下げた。

黒曜の魔女は次いで、

「弟」

簡素に述べた。

果たして弟魔術師の抱える杖には、学院卒業の証である宝玉が埋まっではないか。学院を飛び出したか。あるいは追い出されたか。

勝気そうな見た目と、先ほど自分に浴びせられた言葉を受け、どちらの可能性もあると見た女神官へ、

「だいたい神官職なんか、戦士が戦ってる後ろでカミサマにお願いしてるだけなんだろう？」

これを受け、珍しく女神官が怒気を露わにした。

「そつ、そんなこと、ありませんー！」

しかし、少年はそれに臆することなく、

「どーだか」

と肩をすくめてみせる。

この時。ギルド内の冒険者たち……殊に彼の言う「後ろでカミサマにお願いしてるだけ」の連中の視線が集まっていることに、彼は気付かなかった。

しかし、姉の方はすぐさま気付いた。

気付くや否や、

「あんだ、いい加減にしなさいよ……！」

少年の口を塞ごうとする。

「なんだよ！ 姉ちゃんも姉ちゃんだ！ あんだけ才能あるのに、どうしていつまでもゴブリンとか鼠ばっか相手してるんだよ！」

少年の怒号の中に、侮蔑と憧れとが入り混じったものがあつた。

これを受けた女魔術師は、「うっ」と呻き、黙りこくつてしまう。

ギルドの羽根扉が開かれ、オールラウンダーが顔を出したのは、丁度その時であつた。

三

「んで、こうして六名の一党が出来上がった、と」

美丈夫たる槍使いの言葉である。

ギルド内酒場の区画の端っこ。三つの円卓を占領し、話し合っている冒険者たち。役職や種族、属する一党も様々な彼らは、しかし一つの目標の下に集まっていた。

それはすなわち、女神官昇級のため。そして、白磁の駆け出しである少年魔術師を納得させるために、女騎士が半ば強引に発足させた冒険者一党についてを話し合うためである。

「とりま、そんなにゴブリン退治がしたいってんなら、させてみればいいじゃねえか」

槍使いは、エールをあまりながら提案した。

「神官ちゃんの頭目っぷりも確かめなきゃいけねえんだろ？ だって、てめえと一年やってきたことをさせればいい」

次いで彼は、円卓の席にどかりと座ったゴブリンスレイヤーを見た。

彼は、

「む」

短く答え、兜を傾けた。

「じゃあ、私たちは手を出さないってこと？」

妖精弓手が、つまらなそうに………というのではなく、心底心配そうに、別の円卓で夕餉にありつきながら、やはり今後どうするかを話し

合っている六名の冒険者たちへと視線を向ける。

黒曜五名と、白磁一名の一党。それが、ゴブリンどもの巢穴へ飛び込んで行く。よくある話だ。……そうした者どもの大半は、見くびっていたゴブリンどもによつて悲惨な末路を遂げることも。

別に、女神官を頼りなく思っているわけではない。

彼女に付き添う、剣士と武道家と魔術師の三人組が、一年前とは比べ物にならないほど経験を積んでいることも知っている。

そしてなにより。彼女はオールラウンダーの実力を知っている。

だが……。

「いくら強くても、皆を守りながら、つてなれば話は別よ」

相手はゴブリン。数が取り柄の怪物。故に一体一体は大したことはないが、津波のように押し寄せられれば、いかなオールラウンダーといえ、その処理にはてこずる。その隙をつき、他の仲間がやられることにでもなれば……。

一党の内でも一人二人の犠牲は、冒険にはつきものだ。しかし、

「やるからには、みんな無事に生還しなくっちゃ」

なのである。

「気持ちには分かんなくてもないがな」

果たして横槍を入れたのは、重戦士である。

彼は、すでに泥酔し、己の肩にもたれかかっている女騎士を無下にも出来ず困りながらも、

「ギルドの職員へ本気を示したいってなら、いつかはやらなきゃいけねえことだ。これが最後と見守っちゃえば、それが癖になっちゃうこともある」

きつぱりと言い放った。

妖精弓手は味方を求め、視線を彷徨わせる。

しかし、鉦人道士は酒に肉にと夢中であるし、蜥蜴僧侶はチーズを齧りつつ、

「拙僧も、戦士殿に賛同ですな。ここは心を鬼……いや、竜にしてかからねばなりませんまい」

柔和な笑みを浮かべて、そう言ったものである。

いよいよ味方がいなくなつた。

「うう……」

呻くしかない妖精弓手へ、

「お前の完敗だ、耳長娘。観念しろい」

焼き串を頬張つた鉞人道士が、けらけらと笑いながら肩を叩いた。

さて、その一方。

女神官をはじめとした、等級で言えば駆け出しの六人は、一人を除いて葡萄酒を舐めつつ、明日の事について話し合っていた。

「昼間、受付の人からいくつか依頼書を貰つたのですが……そのうちの一つで、これなんかはどうでしょうか？」

そう言つて彼女が円卓の上に置いたのは、さるゴブリン退治の依頼書だつた。

場所は、この辺境の街から歩いて半日ほどしたところにある、近く冒険者のための訓練場が設けられる地点。

依頼主は、その建設を請け負う大工職業組合ギルドの頭であつた。

依頼は、こうだ。

このところ、建設現場にて大工の道具がゴブリンに盗まれる被害が多発している。

盗まれた大工の一人が、激怒して小鬼を追いかけ、奴らの巣穴が建設現場より少し北に行った所にある、陵墓であることが判明した。

今はまだ道具だけだが、これが人足にまで被害が及ぶと厄介だ。

これを憂慮した頭は、すでに一度、黒曜と白磁の混成一党に依頼を託したのだが、これがいつまで経つても戻つてこないらしい。

「ゴブリンの殲滅と、それから……」

少しばかり戸惑つたように言葉を切らせた女神官に続いて、
「その、先行した冒険者たちの救出だな」

赤髪少年が、胸を張つて応えた。

これに、女神官はもとより、剣士一党も黙つて俯いてしまう。

(恐らく、先行の冒険者たちは生きていまい)

これが共通認識であつた。その結論に至るまでに、彼らは経験を積んでいたので。

よしんば命があつたとして、それは一党の中の女性。それでも、傷一つないというのはあり得まい。

女神官は、おずおずと後方の円卓を見た。

子供を見守る大人たちの中の、貴族令嬢と目が合った。

彼女は優しい笑みと共にこちらへ手を振ってくれている。

そんな令嬢の項に、痛々しい焼き印があることを女神官は知っていた。

数か月前。雪山でゴブリンどもに捕らえられた貴族令嬢は、仲間である只人僧侶と共に根城へと引き込まれ、そして件の焼き印を刻まれたらしい。

運がいいことに、彼女たちは「それだけ」で済んだのだ。

(そう。運がいいだけ……)

女神官が、膝の上に置いた拳を強く握りしめた。

「で？ 手はずはどうする？」

かくして、奇妙な沈黙を破ったのは女武道家であった。

彼女は、オールラウンダーばかりが手を付けていた腸詰料理へ手を伸ばしつつ、女神官へ作戦を訊く。

これで我に返った彼女は、

「あつ……そうですな」

おどおどとしながらも、

「まずは……依頼主である頭目さんにお会いしましょう。それで詳しいことを聞いて、単に潜入するのはそれから……」

「話聞いてどうすんだよ？ 内容は依頼書に書いてあるだろう？」

鋭い目つきを向ける少年魔術師に、女神官はたじろぎそうになる。彼女は少年へ、初めて会った時の女魔術師のような……とっつき辛さを感じていた。

無論、今の女神官は女魔術師と良好な関係を築いている。……いるはずだ。

かくして、戸惑う女神官の代わりに応えたのは、

「馬鹿ね。紙に書いてあることが全てじゃないわ。その陵墓って奴の規模がどれくらいなのかとか、見張り役がいるかないかとか……直

に依頼者に会ってみたいと分からないことはたくさんあるわ」

女魔術師である。

彼女は、横に座った女神官の膝を、軽く二回たたいた。

(落ち着いて)

彼女なりの思いやりである。

これに少しばかり勇気をもたらした女神官は、

「明日の朝いちばんにここを出発して、現地に向かいますよう。水薬の購入も、忘れずに……！」

各々へ、そう呼びかけた。

巨人

一

小さな冒険者一党が、冒険者訓練場の建設現場へと辿り着いたのは、その日の昼を少し過ぎた頃であった。

一面野原の一郭に、丸太を組んだ建設物……になる予定のものや、白砂を敷き詰めた……恐らくは運動場と思わしき空間も出来ている。果たしてその区画の端つこに張られた天幕に、大工職業組合ギルドの頭目である鉱人の男は座っていた。

彼は冒険者たちを天幕へ招くや、

「ま、飲めや」

そう言つて、彼らに冷えた葡萄酒を振舞つた。

春先の暖気を含む道中を、半日もかけて歩いてきた冒険者たちにとって、乾いた喉を潤すのにこれほど適したものもあるまい。

「うめえー」

一気に杯を干したオールラウンダーが叫ぶのをにんまりと見つつ、
「さて……」

一党を凝視した鉱人の人足長は、やがて女神官に目星を付けたらし
く、

「ここからは仕事の話だが……」

彼女に視線を向け、話を切り出した。

女神官もまた、真剣な面持ちで、鉱人と視線を合わせるために身を
屈める。

一党の最後尾では、両腕を頭の後ろで組んだ少年魔術師が、退屈そ
うに欠伸をかみ殺していた。

人足長が話した内容は、大方依頼書で確認したものと同じだった。

(ほら見ろ。時間の無駄だ)

そう言わんばかりの少年魔術師であったが、さてここからが一党の

頭目の腕の見せ所。

女神官は、

「その……お墓の入り口には、何か特徴を示すものはありませんでした？」

とか、

「先にお墓へ向かった冒険者たちの内訳は？」

とか、

「余っているのがあればいいのですが……水薬を。それから……できればお医者様を待たせておいてくださると、助かります」

など、てきぱきと訊き、頼んだものである。

「へえ……」

舌を巻く女武闘家の後ろで、やはり少年魔術師は面白くなさそうに、手にした杖で地面を突いたり、掘ったりしていた。

やがて、訊くことも尽くし、人足長から人数分の水薬を貨幣と交換した一党は、早速にゴブリンドもの罫へと向かう。

建設現場を北へ向かって少しのところ。小高い丘と同化するようにして、その陵墓は口を広げていた。

一党は、充分に距離を取った所から、陵墓全体の様子を確かめている。

「どれ……」

視力に自信のある女武闘家が、目を凝らして陵墓の入り口を見た。「入り口の広さ的には、三人並んでいけそうだよ」

おおよその幅を読み取った彼女の言葉へ、女神官はこっくりと頷き、

「では、二人並びを三列でいきましょう」

迷いなく言った。

「……？ 三人並びじゃないのかよ？」

少年魔術師が首を傾げるのへ、

「飽くまで三人並べるってだけのことよ。もしも挟み撃ちにあった時、幅に余裕のある隊列の方が替えが利くでしょ」

女魔術師が、かみ砕いて教えてやる。

どうにも実の姉には頭が上がらないようで、少年魔術師はバツが悪そうに俯いてしまった。

「じゃあ、列の順番はどうする？俺かゴクウ……どっちかが先頭と最後尾にいた方がいいよな？」

赤い鉢巻に代わり、多少傷のある鉢金を巻いた剣士が提案するのへ、またしても女神官は頷く。

かくして彼女が提案した隊列は、以下のようなものであった。

まず先頭。これはオールラウンダーと女武闘家。

次いで中列が、女神官と少年魔術師。

そして最後尾を、剣士と女魔術師が続く。

前方からの襲撃があれば隊列はそのままだが、後方からの奇襲を受けた時は、女魔術師とオールラウンダーが入れ替わるはずだ。

「これで、大丈夫……」

のはず。でかかったその言葉を、女神官はなんとか飲み込んだ。冒険に確実性はないとしても、曖昧を思わせる言葉は、仲間に不安を抱かせるからである。

不確定な言葉をなんとか心内で消化した彼女は、順繰りに一党を見つめ、

「では、皆さん。次に装備の確認を」

これを合図に、各々は武器、防具、道具一式の確認をする。

女武闘家は、二度、三度と虚空に正拳を付き、技のキレを見る。

剣士は、鞘から長剣を引き抜き、異常が無いかを確認する。

女魔術師は、ザクロ石の杖を振るって頷き、女神官は神官衣の下に着こんだ鎖帷子の調子や、雑嚢に入った「冒険者ツール」が揃っていることを今一度確認していた。

この中で、オールラウンダーと少年魔術師だけは、衣服と武器の目視だけで点検を済ませている。

「それじゃあ、最後に」

皆が点検を終えるのを認めた女神官が、雑嚢から香袋を取り出した。

女性陣が、

「げえ……」

苦い顔をしながらも、続いて同じように香袋を取り出す。

剣士もまた同じで、隣にいたオールラウンダーは、

「オラはいいだろ？ ドブ掃除してきたし」

自身の匂いをすんすんと嗅ぎながら、そんなことを言うものだ。

「なんの話だよ？」

自分だけ訳の分からぬままに話が進むことほど、不安を駆られるものはない。

一人戸惑う少年魔術師へ、

「臭い消し。しませんと」

にこやかに。飽くまでもにこやかに、女神官が詰め寄った。

二

「うん。大丈夫みたい」

扉に耳を寄せた女武闘家が、一党の仲間へ振り返り、こくりと頷く。

常日頃から、体の動きだけでなく勘働きも鍛えている彼女は、今や

こうして迷宮に潜む罫の感知役をも担っていた。

「では、いきましよう」

女神官が、そう言ってオールラウンダーを見る。

「よし」

扉を開けるは、彼の役目だ。女武闘家の技量を信頼していないわけ

ではないが、万が一を考えることは悪いことではない。事実、女武闘

家に不満は無いし、

(私の見落として一党が全滅する方が嫌だもん)

なのである。

万が一にも扉に罫が仕掛けられていたとして、それを受けるのがオールラウンダーであるとすれば、危険は皆無とっていいだろう。盾役ではない。そもそもこの盾には、傷がつく心配すらないのだから。

「ORAGU!?!」

「GYAGAGYA！」

して、サイコロの如き整った四方の玄室にいたのは、五匹のゴブリ

ン。
彼らは突如侵入してきた冒険者たちに驚き、しかしすぐさま卑下た
笑みを浮かべた。

なんと幸運か！　メスが三匹もいる！　どいつもこいつも小さく
てすぐに壊れてしまいそうだが、むしろ好都合。自分たちの縄張りに
無断で侵入してきたのだ。到底許せるものではない。オスは、食つて
も不味そうだから殺してしまおう。それを見ると、メスが途端に大人
しくなるからだ。

勝利を確信し、宴の妄想膨らませる一匹へ、何かが瞬時に間を詰め
た。オールラウンダーである。

「えっ……っ？」

ゴブリンばかりでなく、少年魔術師も目を丸くしていた。先ほども
で傍らにいた少年が、《転移^{ゲート}》の魔法よろしく、いつの間にもやら敵の懐
に移動しているのだ。見慣れぬ者にとっては、無理もないことであ
る。

しかし、剣士はしっかりと隊列の前へきて長剣を構えているし、女
武闘家は今さつき入って来た扉の向こうを見つめ、後方からの奇襲に
備えている。

女魔術師はいつでも呪文が放てるように杖を構え、女神官も、錫杖
を引き寄せて戦士の戦いを見守っていた。

言つて、女神官もオールラウンダーが本格的に戦う姿を見るのは初
めてであった。

最初に一党を組んで冒険した時は、ゴブリンどもの奇襲が続いて、
碌に視界に入る情報が整理できていなかったからだ。

その後も、牧場を守る戦いや水の街で共にゴブリン退治を請け負つ
た機会があったが、同じ戦場に立つことはなかったのである。

だが、彼女の驚きは少年魔術師ほどではなかった。

驚けば、それだけ隙が生まれる。その隙に乗じて、ゴブリンから思
わぬ奇襲を受けかねない。

(ゴブリンスレイヤーさんだったら、きっとそう思うはず……)

随分と自分が、あの風変わりな冒険者に毒されていることを自覚し、女神官は苦笑を漏らした。

そうしているうちに、瞬く間に五匹のゴブリンたちは白亜の石壁に叩きつけられ、絶命してしまった。

「ほら。いつまで驚いてるの」

姉に背中を押され、少年魔術師は我に返る。

見てみると、彼女や剣士たちは、斃れたゴブリンから石斧や短剣を回収し、これを大きめの巾着へと入れていた。

「……なにやってんの?」

弟の呑気な質問に、

「あいつらが、死んだ仲間の武器を使わないとも限らないでしょ?」

姉が、深い溜息を吐きながら答える。

その一方で、女神官と女武闘家は地図を広げてみせ、

「次はどつちに進む?」

「ええと……」

と、進むべき道を吟味していた。

ただ一人。手持無沙汰のオールラウンダーは、ぐるりと玄室を一周し、

「おい、あれ」

仲間へ呼びかけた。

そうして彼が指さしたのは、室内左手の、まだ手を付けていない扉。

それが微かに開いており、そこから白い腕が突き出しているのだ。

「捕まった人だ!」

そう言って駆けだしたのが、少年魔術師であった。

他の者たちが、静止の言葉をかけるより早く、彼は扉を開け、向こうで倒れているはずの捕虜の安否を確認しようとし……。

「……え?」

短く呟いた。

そこにあつたのは、腕のみ。

扉にはもたれかかるようにして、スタボロになった只人の娘の全裸

死体があり、これが開いた拍子に少年魔術師へと倒れ掛からんとする。

「わっ……！」

赤髪少年が情けない声を上げたのは、死体を見たショックからというだけではなかった。娘の死体に、なにやらドロリとして黒々と艶を放つ粘液が塗りたくられていたからだ。

刹那。

「あぶねえっ！」

電光石火の速さで迫ったオールラウンダーが、少年魔術師を突き飛ばした。

死体が、オールラウンダーに倒れ込む。

「うわっ！」

玄室に、オールラウンダーの悲鳴が響いた。

彼は骸を跳ね除け、両目をきつく閉じ、

「ぎゃっ……！」

と、静かながらに叫んでいる。

「毒！」

叫んだのは剣士であった。

「目から入ったんだ！」

いかに彼が体を鍛えているからと言え、目に直接毒液を浴びせられ、無事でいられるわけがない。

「ソンさん！」

堪りかねた女神官が叫んで、「はっ」とした。

声響く玄室で、叫び声を上げたらどうなるか。

その答えはすぐに返って来た。

一つか二つ部屋を離れたところから、悲鳴が上がった。

只人の、女の悲鳴である。

化け物に遭遇した時の、ある種可愛らしいものではない。直接自身に外傷が与えられた時の、響の中に濁りのある声なのである。

それと同時に、反対側の扉からゴブリンどもの鳴き声もした。群れが押し寄せてくる合図だ。

女神官は、自分が取り返しのつかないことをしたと自覚し、顔面蒼白となった。

果たしてそれは、少年魔術師も同じであった。しかし、重みは女神官のものと比べられるものではない。

(俺が……焦ったから……)

一党の中で、唯一経験が浅く、故に仲間たちの動きについていけず。しかし冒険者となった自尊心がそれを許すわけもなく。

(何か、俺にもできることを……)

と焦ったが故の過ちであった。

「ご、ごめ……」

誰に向けてのものか。謝罪の言葉を紡ごうとするのへ、

「お……おめえたちは、さっきの悲鳴あげたねえちゃんのとこへ……」

力なく呟いたオールラウンダーが、よろよろと起き上がった。

「ソ、ソンさん……」

女神官が支えようとするのへ、

「なあ……。どうせバレちまったんだ。もう、大きな音だしてもいいよな？」

目を閉じたままのオールラウンダーが、無理をして作った笑顔を女神官に向けた。

向けて彼は、迫りくるゴブリンたちの鳴き声のする方へと向く。

黒々とした玄室の扉が、どんと向こう側から叩かれ始めた。

「はやくしねえと、あいっらくるぞー！」

珍しく怒号を飛ばしたオールラウンダーに、一同は驚きつつも体を動かす。

「頭目！^{リーダー} 行こうー！」

女武闘家が強引に女神官の腕を掴み、毒液に塗れた骸が出てきた扉の向こうへと走り去る。それに少し遅れ、

「ゴクウー！ すぐ来るからなー！」

剣士が、女魔術師へこくりと頷き、後に行く。

女魔術師は剣士に頷き返し、

「あんたもさっさと行ってー！」

半ば突き飛ばすようにして、弟に剣士たちの後を追わせた。

「おめえ……」

視覚を奪われたオールラウンダーが、しかし嗅覚で女魔術師の位置を特定し、

「のこつてくれるんか」

「流石のソンも、目が見えないんじゃないや不便でしょ。サポート位するわよ。……私じゃ頼りないかもしれないけど」

「んなことねえさ」

今度は無理してではなく、自然と笑った後で、

「…よし。いっちょようかましてみつか！」

いよいよ打ち破られた扉から溢れ出したゴブリンどもの気配を察知し、呟いた。

三

そこは、先の骸の罫から二つほど玄室を過ぎたところであつた。

例によつて整つた四方をしたその室内には、むせかえるほどの臭気が漂っている。

排泄物の類ではない。血と、吐しゃ物によるものだ。

果たしてそれらの主は……。

「……あつ……あつ……」

室内の中央にいた。

椅子に座らされ、手足を針金で縛りつけられたその女性は、侍祭アコライトの恰好をしている。

彼女の手から、血が滴り落ちていた。

その、床に出来た血の溜まりに浮かぶ、白い十本の……。

「う、うわあああああつ！」

そして、そんな侍祭の傍にいたゴブリンが鋸のようなものを手にしたのを見て、少年魔術師が悲鳴のような声を上げた。

「い、いけません……！」

女神官の言葉も、恐怖と正義感と先の失態の後ろめたさにいっぱい

いっぱいとなった少年魔術師には届かない。

彼は杖をゴブリンへと杖先を向け、

「《カリブ^火ンクルス^石……クレ^成ス^長クント……ヤク^投タ^射！》」

尾を引く火球を放った。

一日に一度。これが彼の、今日最後の呪文発動である。

これに直撃し、頭部を爆散させたゴブリンがどさりとその場に倒れた。

(助けないと……！)

まるで先の失態の贖罪をするかのように、少年魔術師が駆けだした時。椅子に縛り付けられていた侍祭が、力なく首を振った……ように女神官には見えた。

「こちらに来るな」

ということか。いや、彼女には何か見えている……？

そこまで考えを巡らせたところで、背後に不穏な気配を感じた女神官は、

「逃げてくださいー！」

叫んだ。

女武闘家と剣士も、やはり邪な気配を察知し、右と左に分かれて跳ぶ。

果たして、先ほどまで彼らが立っていた場所に、白亜の石床を叩き割る棍棒の一撃が振り下ろされた。

侍祭のすぐ傍まで来ていた少年魔術師が、足を止めて後方を見た。

見て、戦慄した。

いつの間に入り口に立ったのだろうか。そこには、浮腫み上がり、灰色の肌をした巨体の化け物。

馬鹿のように笑い、涎を垂らし、しかし手には、釘がびっしりと打ち付けられた棍棒を握っている。殺意は明らかだ。

「さっきの群れは囹か！」

剣士が、舌を打って怒鳴った。

それと同時に、彼へ顔を向けた化け物……巨人^{トロル}が、今一度棍棒を振り上げた。

と、そこへ。

「このっ！」

跳びあがった女武闘家が、トロルの締まらない馬鹿笑い面へ蹴りを打ち込んだのである。

首の曲がったトロルが、しかし強引に顔の向きを戻そうとしているうちに、

「二人で協力して、あの女の人を！」

剣士へ声をかけた。

「分かった！」

そこは同郷の出の強みか。打てば響くように返答した剣士が、

「おい！ 椅子ごとこの女の人を運ぶぞ！」

言うが早いのか、椅子の左下側に手をかけた。

遅れて、

「お、おう……」

少年魔術師も右手の下側に手を入れ、

『せええの！』

掛声と共に、椅子ごと侍祭を持ち上げた。

しかし、入り口近くはトロルが占領している。

万事休すか。思われた時、

「みなさん！ 目を瞑ってください！」

錫杖を掲げた女神官が、叫んだ。

剣士と女武闘家が、何かを察してきつく目を閉じる。

それに倣った少年魔術師も、訳が分からないながらも目を閉じた。

「《いと慈悲深き地母神よ、闇に迷える私どもに、聖なる光をお恵みください》！」

天におわす神への、奇跡の懇願。かくしてそれは無事に届いたらしく、女神官の手にする錫杖の先から、眩い光があふれた。

「!？」

薄暗い室内に慣れていたためか。トロルは目を焼かれ、棍棒も振り落として顔を覆う。

「今のうちに！」

女神官の合図を契機に、冒険者たちは一室を飛び出した。

「とにかくソンさんたちと合流を！」

光源を放つ女神官が先行し、その次に椅子を抱えた男二人。そして最後に女武闘家が駆ける。

戦いの音が、近くなつた。

背後から、どしどしとこちらへ向かって来る足音も。

四

視覚を封じられても、ある程度オールラウンダーは戦えていた。

彼には他に鋭い嗅覚もあることだし、何より雪崩のように押し寄せ
るゴブリンどもは、適当に腕を振るっていても、必ず誰かに当たるも
のだからだ。

「あともうちよつと……」

学院卒業の証もなんのその。ゴブリンどもの穢れた血に塗れた杖
を振るい、女魔術師は荒い息を上げる。

……と。

こちらへどたとたと駆けてくる複数の足を音を、二人は聴いた。

「あいつら、こつちにくるぞ！」

「どうやら、悲鳴あげてた人を救出したみたいね」

そうしているうちに、女神官たちが玄室に戻って来た。

男どもが抱える椅子を見て、ゴブリンどもは一層怒りの色を強くす
る。

あいつら、俺たちの孕み袋を奪いやがった！

殺せ！ 奪い返せ！ そして、犯せ！

ゴブリンたちの土気が上昇するのを感じ、

「疲れてるとこ悪いけど、こつち手伝つてくれる？」

女魔術師は声をかける中で、気が付いた。

他にもう一つ。この玄室を目掛けて駆けてくる一つの足音がある
のを。それは、ゴブリンどもはもとより只人である女神官たちのもの
と比べても、ずっしりと重みを感じさせるものだ。

「……………」

迫る一匹のゴブリンを杖で殴り飛ばした女魔術師は、ちらと後方の扉を見た。

今しがた女神官たちが出てきたそこから、今度は灰色の表皮をした、醜悪で巨大な化け物が出てきた。

「なっ……………!?!」

驚き、手の止まってしまった女魔術師へ、ゴブリンどもが一斉に詰め寄る。

そこへ、

「ていつー!」

すでに如意棒を背中から引き抜いていたオールラウンダーが、これを「伸びろ」の号令に伴って伸ばし、一網打尽に払い除けた。

「おい！ なんかもう一匹ふえたぞ!」

「ごめん！ 俺たちが連れてきた!」

謝罪と同時に、先の中着から石斧を取り出した剣士が、これでゴブリンの一匹の頭蓋を砕いた。

残るは、十一匹。

「ゴクウ！ 後ろにでっかい化け物がいる！ そいつをやってくれ!」

「わかった!」

それまでゴブリンどもに対峙していたオールラウンダーが、踵を返してトロールに体を向けた。

「あなたは、ここで休んでて」

奇跡の懇願をしながら全力疾走をし、大幅に体力を削ってしまった女神官へ、女武闘家は劳いの声をかけると同時に、剣士たちの加勢に向かった。

壁にもたれかかり、肩で息をしながら、女神官は雑囊から強壮の水薬の入った小瓶を取り出し、これを一気に呷った。

空になった瓶を乱暴に捨て、やはりまだ粗い呼吸のまま戦闘に参加しようとする女神官へ、

「お、おい!」

さすがに少年魔術師が、止めに入った。

最早彼は、女神官へ軽蔑の感情を抱いてはいない。

(何が、後ろに控えてカミサマをお願いしてるだけ、だよ)

トロルの視界を塞ぎ、退路を作ったのは誰だ。

精神力をすり減らし、まして体力もごっそりと削つてまで光源を確保してくれたのは誰か。

そして、

「大丈夫、です……」

気丈に笑みを作り、自分から戦場に向かおうとしているのは誰だ。

対して自分はどうか。 実力に伴わない正義感からつまらない罠を発動させ、一党の危機を招いた。 その巻き返しにとさらに暴走を繰り返し、一日一度の呪文を、どうでもいいタイミングで使った。そのザマがこれだ。

(それに……)

彼は、トロルと対峙するオールラウンダーを見た。

チビだから、昇級ができないって？

彼は、毒で目をやられてなお、今までゴブリンたちと奮闘していたばかりか、これからトロルと一戦交えようとしているではないか。

まして、彼の目がそうなのは、自分の軽はずみな正義感が原因なのである。

「あれだけ偉そうな態度しといて……」

少年魔導士がそう呟いて俯いたのを、女神官は静かに見つめた。

「なんだよ。やっぱり俺が一番……間抜けでよわっちいんじゃねえか……」

そんな彼の肩を、女神官が優しく叩いた。

恐る恐る顔を上げる少年へ、

「あの人を、安心させてあげてください……」

椅子に縛り付けられた侍祭を、女神官は指した。

虚ろな目を向けた彼女は、ゴブリンの群れとトロルを見て、かたかたと身を震わせている。

「お願いします……」

頭を下げる女神官を見て、

「……わ、わかった」

素直に頷いた彼は、侍祭へ駆け寄ると、

「だ、大丈夫。大丈夫だから」

部屋に響き渡る戦いの音に、自分こそが一番震えているのを隠して、侍祭へ声をかけた。

ゴブリンどもの数は、連携の取れた三人の冒険者たちによって瞬く間に減っていき、遂に最後の一匹を剣士が斬り捨てた。

一方でトロールは、対峙した「チビ」が目の見えないことを悟り……いや、元からかもしれないが、にたりにたりと笑みを浮かべ、棍棒を振り上げた。

これへ、

「ソンさん！ 敵が棍棒を振り上げました！」

女神官が、大きく声を出す。

「わかった！」

返事をするや、オールラウンダーは瞬時にトロールの腹部へ迫り、これへ思い切り拳を突き入れた。

思わぬ一撃に、トロールは陵墓の廊下の壁へと吹き飛ばされ、くらくらとその禿頭を回す。

そこへ、

「か……め……は……め……波ッ！」

戦いの終わりを告げる、オールラウンダーの気合声が響いた。

先生の名は「ソングクウ」

「誰も死んでねえんだからよかったじゃねえか」

オールラウンダーにそう励まされても……いや、オールラウンダーにそう言われたからこそ、少年は気落ちするばかりであった。

夜。辺境の街の冒険者ギルト……その内の酒場において、依頼を達成した小さな冒険者一党は祝杯をあげていた。しかし、その中で女神官と少年魔術師の二名は、どこか浮かない顔つきなのである。

二人の意気消沈の理由は、能天気な態度ながら目元を包帯ですっかり隠してしまっているオールラウンダーにあった。

戦場において小鬼の卑劣な罠にかかったオールラウンダーは、街医者の見立てで完治するまでにひと月の後遺症を目に受けてしまったのである。冒険者にとってこれはかなりの痛手ではあるのだが、

「いやいや。普通なら失明してもおかしくはないですよ。ゴブリンの使う毒は調合が滅茶苦茶なのだが、それ故に厄介なところもありますからね」

と、診察した医者 はむしろオールラウンダーが完全に視力を失っていないことに驚いていた。

実際のところ、このさき一生の失明を避けられたことは幸運なことであるのだが、オールラウンダーの姿を見るたびに女神官は、

（もっと皆の行動を把握できていれば……そして、もっと的確に指示を出せていれば……）

己の不甲斐なさを終わりなく悔いてしまうし、本来毒を浴びるはずであった少年魔術師も、

（俺があの時、勝手に動いてなければ……）

最初の頃とは打って変わり、勝気な態度は鳴りを潜め、言葉数も少なくなっていた。

妖精弓手をはじめとした熟練の冒険者たちも、まさかに初めから完璧に依頼をこなせるとは思っていなかったのだが、よりによって一大戦力であるオールラウンダーだけが傷を負ってしまったことが意外であったし、それがしばらくの日常生活に支障をきたすものであっただけに、下手に励ますこともできなかつた。

「ねえ、ゴクウ。無理しなくてもいいんだよ……?」

圃人野伏がオールラウンダーの傍に来て、そう囁いた。

しかし、オールラウンダーにそのつもりはなかつた。事実、今回の依頼では誰も死んではないことだし、自分の目にしても一生光を奪われたわけではないのだ。いや、仮にそうなってしまったとしても、多少なりとも悔しがったり残念がったりはするだろうが、

「ま、いつか」

の一言で後腐れなく済ませそうなのがオールラウンダーであった。

「べつにオラ、ムリなんかしてねえ。目だっていつかなおるんだし」

匂いを頼りに料理を引き寄せては手づかみで頬張るオールラウンダーが楽天的にそういった時、対面にいた少年魔術師が手元のテーブルをぐいと飲み干し、

「なんでだよー!」

そう叫ぶや、いきなり円卓を叩いて立ち上がった。

その目は鋭いが、どこか悲しそうにオールラウンダーを見つめてい

る。

「いつそ強く言ってくれればいいじゃねえか! 『お前のせいで目が見えなくなった』って! ……なのに……なんでそんなに明るいんだよ!」

そこまで言った後、少年は荒い呼吸をそのままに、逃げるように酒場を後にしてしまう。

「ちよっと!」

姉である女魔術師がその後を追いかけていき、残された一同には重い沈黙がのしかかってきた。

(まあ、若いうちはそんなもんじやろうて)

経験豊富な鉦人道士は、なにとなく少年の胸の内を察していた。罪悪感にとらわれている彼は、いつか来るかもしれない、

「お前のせいだ」

という非難の声を恐れ、びくつき、しかし誰も自分を責めない現状に焦らされ、しびれを切らせてしまったのだ。

己の過失が目に見えていて、なおかつそれが誰かを傷つけたものであったのならば、彼の胸中も少しは理解できようというものであった。

しかし、

「……なんであいつ怒ってんだ?」

オールラウンダーは心底不思議そうに首を傾げるより他になかつ

た。

先生の名は「ソングクウ」 其の二

それから一週間の時が経ち……。

未だ建設途中ではあるが、試験的に訓練場が運用されることになった。

「辺境最強」である槍使いや、「辺境最高」のパーティ一党に属する重戦士と女騎士は、すでに容赦のない攻撃の手を、駆け出しの冒険者たちへと加えている。

意外なことに、訓練場にはゴブリンスレイヤーの姿もあった。

彼は、特に非力な神官職や魔法使いといった役職の娘たちへ、スリッパ投石紐のこしらえ方や用途の説明などを行っている。

そんな上級の戦士たちに混じり、他の冒険者へと稽古をつけている者が一人。オールラウンダーである。

彼は、同じく武道を志す女武闘家と、己が与する一党の頭である貴族令嬢から「かめはめ波」の撃ち方を教わりたいと懇願され、一度は断ろうとも思っただが、

「小僧。他人に技を教えることも立派な修行よ」

ふと歩み寄ってきた鉾人道士にそう諭され、漸くに首を縦に振ったのである。

……と、ここまではよかったのだが。

そもそもオールラウンダー、かめはめ波を呼吸するがごとの意識で放っている節があり、技発生のプロセスをうまく言語化することが出来ないのである。

「……ゴクウの師匠は、どうやって教えてくれたの？」

女武闘家が助け舟を出してみたが、

「亀仙人のじっちゃん、べっにかめはめ波を教えてくれたわけじゃ

ねえからなあ……。じつちゃんが山の火を消したときに、見よう見まねでやったらできるようになっただけで……」

見事に船は沈没してしまった。

感覚派天才の悲しき定めか。これでは修行も何も無い。

そこに、再び鉞人道士が現れた。

「なんじやい。早くも行き詰まりかい」

日も高くから酒瓶を飲み明かしている彼は、赤ら顔でオールラウンダーに歩み寄る。

「じつちゃん。オラ、教えるついても、どうやって教えればいいのかわからねえんだ」

「……？ わからねえつて……そのカメなんちやらを出してる時の感覚を教えてやるだけじゃねえか」

「それがわかんねえ」

「……」

さすがに閉口してしまう鉞人道士であったが、そこで次の提案が浮かぶのが年の功といったところか。

「だったら、やることは一つだな」

「……なにすりやいいんだ？」

「決まってるなあ。説明できるまで、カメなんちやらを撃ち続けるんだよ」

「ええつ?!」

「単に撃ちまくるんじゃないぞ。一発一発、ちゃんと自分の中身を見つめて、意識して撃つんだ。そうすりゃ、嫌でも言葉にして話したくなるさ」

「そんなことやってたら日が暮れちゃうよー」

「バツキヤロウ。人に教えるための基本が出来てねえんだ。一からやるしかねえだろ。日が暮れるだけなら可愛い方だ。一生出来ねえかもしれないねえんだからな」

素晴らしい終わると、鉦人道士はまたふらふらと別の場所へと歩いて行ってしまう。

オールラウンダーはぼかんと口を開けてその様子を眺めていたが、

「……ま、やるしかねえか」

いつものようにケロリと表情を変えると、

「わるいけど、かめはめ波を教えるのはまた今度な。オラ、一から鍛えなおす」

言うや、

「波あつー！」

手始めに一発、かめはめ波を空に向かって放ち始めた。周囲に撃てば他の冒険者に支障が出る……という考えのものである。

取り残された女武闘家と貴族令嬢は、

「……ゴクウが教えられるようになるまで、誰か他の人に別のこと教えてもらった方が良さそうですね……」

「……そ、そうですね……」

時間を無駄にするわけにもいかず、未だ駆け出しの冒険者たちを相手に怒涛の勢いで「指導」をしている、辺境の「最もたる」者たちへと歩を向けていった。

……それから、どれくらいの時間が経ったのだろう。

空はすっかり夕焼けに染まり、他の冒険者たちは帰りの身支度を整えている。

「はあっ……はあっ……！」

オールラウンダーは息を切らし、それでもなおかめはめ波を撃とうと構える。最早、これまでに放った数は優に百を超えるだろう。

「こ、こんな修行……亀仙人のじつちやんのとこじやしたことなかつたや……」

その時。両の足が急にがくがくと震えたかと思うに、オールラウンダーはその場に倒れ込んでしまったのである。

「り、力が……からっぽになっちまった……」

これまでにしたことのない力の使い方をし続けていた故に、自分の気力が枯れてしまったことに気が付かなかつたらしい。気が付いたときにはもう遅く、指の一本も動かせないでいた。

(ま、まいったな……)

内心で苦笑を浮かべた……その様子を、少し離れたところから見つめている人影があつた。

彼は、しばし何事か躊躇っていたようであつたが、やがて覚悟を決めたらしく、オールラウンダーへ歩み寄ると、そのまま彼を担ぎ込んだ。

慣れないような、おっかなびつくりの動きだ。

かくして彼は、危なげな足取りで辺境の街へと続く道を歩いて行く。

「へへっ……。すまねえ……」

背中越しに、オールラウンダーが礼を述べる。

大人の背中にしては小さく、足取りもどこかゆったりとしていて、不安定。

彼は息を切らしており、どことなく汗臭く、

「……ったく。なんで俺が……」

悪態をついたものだが、その頃にはすでにオールラウンダーは眠りの中に落ちてしまっていた。

先生の名は「ソングクウ」 其の三

鉦^ド人道士^ワより試練を課せられて三日目。未だオールラウンダーは《かめはめ波》の仕組みを他人に説明するには至っていない。しかし、思わぬ収穫はあった。

朝から夕までひっきりなしに《かめはめ波》を撃ち続けているものだから、体内を巡り流れる気力とも言おうか、その容量が少しばかり増えたのを実感したのである。

「これなら力^{リキ}満々のかめはめ波も、あと一回くらいはできるな」

四方世界において、魔術や奇跡の類が一回多く使用できることほど心強いものはない。オールラウンダーが扱う《かめはめ波》なら尚更だ。

「だけど、これじゃダメなんだよなあ……」

自分が今すべきことは、《かめはめ波》を肌で感じ、誰かに教えられるまでに言語化出来るようにすること。自分だけが強くなったのは、今回の目標には到達できないのだ。

「まいったな……」

腕を組み、さすがに弱音を吐いたところで、オールラウンダーはこちらへ近づいてくる微かな足音を耳にした。

未だ目の見えない彼が周囲の情報を確認する術は、聴覚と嗅覚のみである。

やがて、足音の後にいいニオイを感じた彼は、

「スツチャンか？」

足音のする方へと体を向けた。

足音の正体。《スツチャン》ことゴブリンスレイヤーは、僅かにその足を止めたようであったが、また何でもない風に歩き始めつつ、

「目が治ったのか？」

彼にしては珍しく、オールラウンダーを気遣うような言葉をかけた。

「そんなんじゃないけどさ。スツチャンはヘンテコだけどいいニオイがするから」

「いいニオイ？」

「あのゴブリンってバケモンとにってるんだけど……でもいいニオイなんだ」

「……ふむ」

ゴブリンスレイヤーは顔をこくんと落とし、「改良の余地があるか」と独り言ちたあとで再びオールラウンダーを見た。

「ここに来てから随分と派手なことをしているが……それは何の特訓だ」

「かめはめ波をさ。ほかのやつに教えようと思って」

「カメハメハ……。ゴブリンどもが使えるようになったという術のことか」

「あのバケモンたちがみんなできるかはわかんねえけど……」

「……一匹でも使えるなら、それは全員が使えると思った方がいい。奴らが何かを学ぶ速度は、時として俺たちの先に行く」

「ふうん……」

そこで一旦は区切られてしまった話を、ゴブリンスレイヤーが再び切り出す。

「詳しく話せ」

しかしその突拍子もない切り出し方に、オールラウンダーは首を傾げた。

「なにを？」

「発生の際の特徴。体の動かし方。その他なんでもいい。術に関することを逐一詳しく話せ」

「スツチャンもかめはめ波をやりてえのか？」

「いや……」

ゴブリンスレイヤーは一度空を仰ぎ、

「俺には向いていないだろう。だが、術の本質を知っておけば、奴らが放とうとした時の対策もとれる。手札は多いに越したことはない」
「ふうん……。そっか」

オールラウンダーは頷き、しかし、

「でも、今すぐにはできねえとおもう。オラ、だれかにおしえるのへたくソみてえだから」

「構わん」

ゴブリンスレイヤーはその場にどっしりと胡坐をかき、

「動作一つ一つを俺が見て、聞きたいことを聞く。お前は思ったことを言葉にするだけでいい」

「……そんなに大丈夫か？」

「お前がよっぽどに口下手でなかったらな」

こうしてオールラウンダーの修行は再開された。しかしそれは少年にとっては今まで以上にじれったく、しんどいものとなった。

彼はいつものように《かめはめ波》を撃つべく、最初に、

「か……」

掛け声とともに両手を伸ばし、前方で合わせる。この時、

「声は出さないといけないのか」

とか、

「両手を合わせないと出せないのか」

とか、横からゴブリンスレイヤーが確認してくるのだ。

その度に集中を切らせてしまいながらも、

「声はべつに……そっちのが力が入るし……」

とか、

「亀仙人のじっちゃんはどうやってやってたからなあ……。口とか足からもできるんじゃないか?」

とか、オールラウンダーは律儀に返答していく。

そうして次の段階へ行こうとすると、

「リキ……とはなんだ?」

またしても質問が飛んでくるのだ。

「なんだ、つて……。ほら、こう……。体に力入れた時にさ……」

「そうした時に生じるのは、筋肉の強張りだけだ」

「いや、そうじゃなくて……」

「それ以外に別の力が生じるということか」

「うん。なんだろうな。ハラからわいてくるみたいな感じだ」

「腹から……」

そういつてゴブリンスレイヤーは顔を落とす。まるで己の腹部を確認しているかのようだ。

これにて質問が終わったと思い、次こそはと《かめはめ波》の準備に取り掛かると、

「そのリキとやらが《カメハメハ》を放てるようになるまで溜まるには、どれだけかかる？」

またしても質問。さすがに呆れたオールラウンダーが、

「スツチャンさあ。そんなにいちいち聞かれたら、かめはめ波うつの日に日が暮れちゃうよ」

「こうでもしないと、お前は説明できそうにないからな」

「……へ？」

「お前は術を放てるが、今まで感覚的にそれをやってきたから上手く言葉にはできない。こちらはそもそも何をどうしていいのか、お前に何を聞けばいいのか分からない」

「うん」

「だからこうして、動作一つ一つに感じた些細な疑問をお前にぶつける。それが手掛かりになる時があるからな。現にこうして、俺はリキとやらの概念を知ることが出来た」

「……」

オールラウンダーはぽかんとゴブリンスレイヤーを見つめている。

さっきの不満そうな顔つきはどこへやら。その眼差しは、武術の師を見るかの如くだ。

「では、リキとは何か？ さすがにそれを解明するまではできなかつたが、どうやら単に体に入れただけでは湧き上がってこない力だということが分かる。それだけでも、リキを引き出すための余分な選択肢が削れたわけだ」

「そうか……」

「お前は今まで《カメハメハ》を撃つときに何の疑問も感じなかっただろうが……そもそも最初にそれを撃つたり見たりした時は、お前だつて不思議に思ったはずだ。何故、人の掌から炎が飛び出したのか……とかな」

「……言われてみれば、そうかもしれないねえ」

「疑問は、生まれた時に答えへと昇華するべきだ。そうしないと、今のようになんか教えるときに四苦八苦する」

その言葉を最後に、ゴブリンスレイヤーはすつくと立ちあがり、その場を後にしようとする。

「もういいのか？」

「仕組みは分かった。その術を使うには溜めの時間がある。やろうと思えば、口や足からでも放てる。ということは、だ。奴らがそれをやろうとする時、手足やら口やらをこちらに向けて、それなりの動作を見せるはずだ。溜めの最中は無防備。そこを狙う」

身を翻したゴブリンスレイヤーの視線の先には、どこでこしらえたものか、藁編みの案山子を的に投石紐スリングの実践を行っている娘たちの姿があった。

「どんなに手札が増えようが、ゴブリンどもは皆殺しだ」

去り際に放ったその眩きが、果たしてオールラウンダーの耳に入っ
たかどうか……。